仙台市文化財調査報告書第115集

下ノ内浦遺跡

——みやぎ生活協同組合店舗建設に伴う
発掘調査報告書——

1988年3月

仙台市教育委員会
みやぎ生活協同組合

仙台市文化財調査報告書第115集

下ノ内浦遺跡

——みやぎ生活協同組合店舗建設に伴う
発掘調査報告書——

1988年3月

仙台市教育委員会
みやぎ生活協同組合

序　　文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして多大のご協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては、誠に感謝にたえません。

富沢地区および笊川の流域は、区画整理の完了や昨年７月の高速鉄道（地下鉄）の開通により、急速に開発、市街化が進んでおり、仙台市南部の副都心として生まれ変わろうとしております。こうした動きのなかで、開発に伴う発掘調査が頻繁に行われ、さまざまな先人文化が解明されてきております。その反面、遺跡の保存に関する諸々の問題が露呈していることも事実であり、文化財保護の課題となっていることも否めないところであります。

さて、この度発掘調査いたしました下ノ内浦遺跡は、その周辺も含めてこれまでにも縄文時代以来の先人の生活の痕跡が、重層的に残されてきた地域であります。今回の調査におきましても、縄文時代から近世にいたる生活の痕跡が発見され、笊川流域における人間の営みの歴史を解明するための一助となる成果が得られました。こうした文化遺産を後世に継承し活用していくことは、新時代を迎えようとしている仙台市の「まちづくり」に欠かせない大切なことであります。今後とも市民の皆様のご支援とご協力をお願い申し上げまして、刊行のご挨拶といたします。

最後になりましたが、調査と整理に参加された皆様と、本書の作成にあたりご助言、ご指導くださいました各位に心から感謝いたします。

昭和63年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は、みやぎ生活協同組合の店舗建設に伴う下ノ浦遺跡の第３次発掘調査報告書である。

2．本書の執筆・編集には渡部　紀があたり、小川淳一が補佐した。

3．植物遺体の同定を星川清親氏・庄司駒男氏（東北大学農学部作物学教室）、人骨の鑑定を高橋　理氏（東北大学考古学研究室）、石器の石材鑑定を佐々木　隆氏（仙台市科学館）に依頼した。

4．本書の第１図の地形図は、国土地理院発行５万分の１「仙台」を使用した。

5．本書に収録した記録・遺物は仙台市教育委員会が保管している。

6．発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々の助言を得た。

豊島正幸（東北大学理学部地理学教室）　斎藤吉弘　阿部　恵　相原淳一　古川一明（宮城県文化財保護課）　藤沼邦彦（東北歴史資料館）　丹羽　茂（多賀城跡調査研究所）　次山　淳（京都大学文学部）　高橋勝也

凡　　例

1．方位は真北を示す。磁北は真北から7°20′西偏する。

2．基本層位はＬⅠ・Ⅱ・Ⅲ……、遺構内堆積土はℓ１・２・３……と略称する。

3．土色の記載にあたっては、「新版標準土色帳」（小山・竹原　1973）を使用した。

4．遺構の焼け面・土師器の黒色処理・礫石器の磨面・石器の焼けはじけはスクリーン・トーンで示した。

5．土層断面図の数値は標高を示す。

6．遺物登録にあたっては以下の記号を使用した。

Ａ．縄文土器　　Ｂ．弥生土器　　Ｃ．土師器（非ロクロ）　　Ｄ．土師器（ロクロ）

Ｅ．須恵器　　Ｆ．平瓦　　Ｉ．陶器　　Ｊ．磁器

Ｋ．石器・石製品　　Ｐ．土製品

本　文　目　次

Ⅰ章　調査の概要……1
1．調査に至る経過……1
2．調査要項……1
3．遺跡の位置と自然的環境……1
4．歴史的環境……2
5．前回の調査……5
6．調査の方法と経過……6
Ⅱ章　調査の成果……8
1．基本層序……8
2．河川跡とその出土遺物……11
3．中世以降の遺構と遺物……27
4．平安時代以降の遺構と遺物……31
5．奈良時代の遺構と遺物……33
6．縄文時代の遺構と遺物……38
7．時期不明の遺構と遺物……46
8．各層の出土遺物……51
下ノ内浦遺跡より出土の植物種子の鑑定報告……85
Ⅲ章　考察……86
1．奈良時代の遺構と遺物……86
2．縄文早期の遺構と遺物……87
まとめ……92

図　表　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……3
第2図　区画整理前の地形図……4
第3図　調査区の位置とグリッド配置図…7
第4図　基本層序……9
第5図　1号河川跡平面図……12
第6図　1号河川跡堆積土……13
第7図　1号河川跡出土遺物(1)……17
第8図　1号河川跡出土遺物(2)……18
第9図　1号河川跡出土遺物(3)……19
第10図　1号河川跡出土遺物(4)……20
第11図　1号河川跡出土遺物(5)……21
第12図　2号河川跡出土遺物……22
第13図　Ⅲ層上面検出遺構配置図……25
第14図　Ⅴ層上面検出遺構配置図……26
第15図　2号建物跡P_{17}出土遺物……28
第16図　掘立柱建物跡平面図……29
第17図　2号土坑……31
第18図　蔵骨器出土状況……32
第19図　蔵骨器……32
第20図　2号溝跡……33
第21図　1号住居跡……35
第22図　1号住居跡出土遺物……36
第23図　Ⅻ・Ⅻ層上面検出遺構配置図……39
第24図　12・13・14・15号土坑……42
第25図　16・17・18・19号土坑……43
第26図　20・21・22号土坑……44
第27図　Ⅻ層上面礫平面分布図……45
第28図　B4グリッド集石……45
第29図　1・3～11号土坑……46
第30図　1・3・5号溝跡……48
第31図　6号溝跡……49
第32図　溝跡出土遺物……50
第33図　1次調査Ⅳ層出土須恵器……51
第34図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層出土遺物……53

第35図　VI層出土土器(1)……54
第36図　VI層出土土器(2)……55
第37図　VI層出土土器(3)……56
第38図　VI層出土土製品……57
第39図　VI・VII層出土石器……57
第40図　VI層出土礫石器……58
第41図　VII層出土土器……59
第42図　XII層出土土器(1)……61
第43図　XII層出土土器(2)……62
第44図　XII層出土土器(3)……63
第45図　XIII層出土土器(1)……64
第46図　XIII層出土土器(2)……65
第47図　土器平面分布図……65
第48図　石器の計測方法……66
第49図　XII層出土剝片石器(1)……68
第50図　XII層出土剝片石器(2)……69
第51図　XII層出土剝片石器(3)……70
第52図　XII層出土剝片石器(4)……71
第53図　XII層出土剝片石器(5)……72
第54図　XII層出土剝片石器(6)……73
第55図　XII層出土剝片石器(7)……74
第56図　XIII層出土剝片石器(1)……75
第57図　XIII層出土剝片石器(2)……76
第58図　XIII層出土剝片石器(3)……77
第59図　XIII層出土剝片石器(4)・石核(1)……78
第60図　石核(2)……79
第61図　石核(3)……80
第62図　礫石器(1)……82
第63図　礫石器(2)……82
第64図　石器のグリッド別出土状況……83
第65図　土偶……84
第66図　石鏃長幅関係図……88
第67図　他遺跡との比較……88
第68図　土坑群の長軸・短軸・深さの関係……90
第69図　土坑群の分類……90

挿　表　目　次

第１表　遺跡地名表……３
第２表　１号河川跡土師器・須恵器破片集計表……23
第３表　１号河川跡縄文土器破片集計表……24
第４表　２号河川跡縄文土器破片集計表……24
第５表　柱穴計測表……30
第６表　住居跡出土遺物破片集計表……37
第７表　柱穴出土遺物……38
第８表　土坑計測表……44
第９表　XIII層上面礫集計表……45
第10表　３～11号土坑計測表……47
第11表　５・６号溝跡出土遺物破片集計表……50
第12表　III層出土土器破片集計表……59
第13表　VI層出土土器破片集計表……59
第14表　石器組成表(1)……88
第15表　石器組成表(2)……89
第16表　剝片・チップにおける受熱資料…89

Ⅰ章　調査の概要

1．調査に至る経過

昭和57年12月９日、みやぎ生活協同組合より仙台市教育委員会に店舗建設にともなう発掘通知が出された。場所は下ノ内浦遺跡地内であり、昭和57年に仙台市教育委員会の調査した地点の南にあたる。協議の結果、記録保存のための発掘調査を昭和62年４月より行なうこととした。

2．調査要項

遺　跡　名　下ノ内浦遺跡（しものうちうらいせき）（Ｃ－300）

所　在　地　仙台市長町南４丁目32

調査面積　1000m²

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会文化財課調査係

担当職員　小川淳一　渡部　紀

調査期間　野外調査　昭和62年４月18日～10月２日

整理作業　昭和62年12月14日～昭和63年３月26日

調査参加者　菅井君子　斎藤とき子　森節子　竹森永源　清水昭子　小林英子　浅野とく子　川地モトヨ　井上福子　今福三良子　相原明　八津尾勝正　板橋実　伊藤秀男　森常治　阿部高子　阿部ミノル　佐藤よし江　嶺岸光子　阿部幸夫　菊地旭　武田萬　村井二郎松　菅井妙子　鈴木よしゑ　板橋みつよ　小野ヒサコ　大沼勇　渡辺節子　阿部あき子　加藤けい子　佐藤静子　佐藤久恵　鈴木和佳子　森谷いずみ　佐野弘　山内昌弘　須藤一　岩渕信博　吾妻俊典　高木晃

整理参加者　吾妻俊典　森忠一　二瓶憲生　松崎博　坂本康裕　佐々木晃子　桜井美枝　佐藤知里

3．遺跡の位置と自然的環境

(1)　遺跡の位置

下ノ内浦遺跡は、国鉄長町駅の南西約1.5km、地下鉄富沢駅の北東約500mの地点に位置している。従来、畑・水田であったが、昭和48年以降の土地区画整理の際に盛土され整地された。周辺は畑・水田が若干残るものの大部分は住宅地となっている。

(2)　自然的環境

仙台市域の地形は北部から西部にかけての丘陵と東部の海岸平野とに大別される。丘陵部か

ら海にむかい、七北田・広瀬・名取の河川が東流している。中でも、広瀬川と名取川にはさまれた地域は郡山低地と呼ばれ、その中央部を太白山に起源をもつ笊川が曲流している。郡山低地の基盤は広瀬・名取川の供給した礫層であるが、その後の堆積状況は場所により異なっている。両河川から遠い富沢付近では泥炭層の発達がみられているが、河川に近づくと砂・シルトが主体となる堆積状況である。下ノ内浦遺跡の立地している地形は、笊川の自然堤防上にあたり、その堆積物は名取川・笊川の洪水堆積物である砂・シルトを主体としている。現標高は11～12ｍである。

参考：豊島正幸（1987）「富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」仙台市文化財調査報告書第98集『富沢』P.4～8

4．歴史的環境

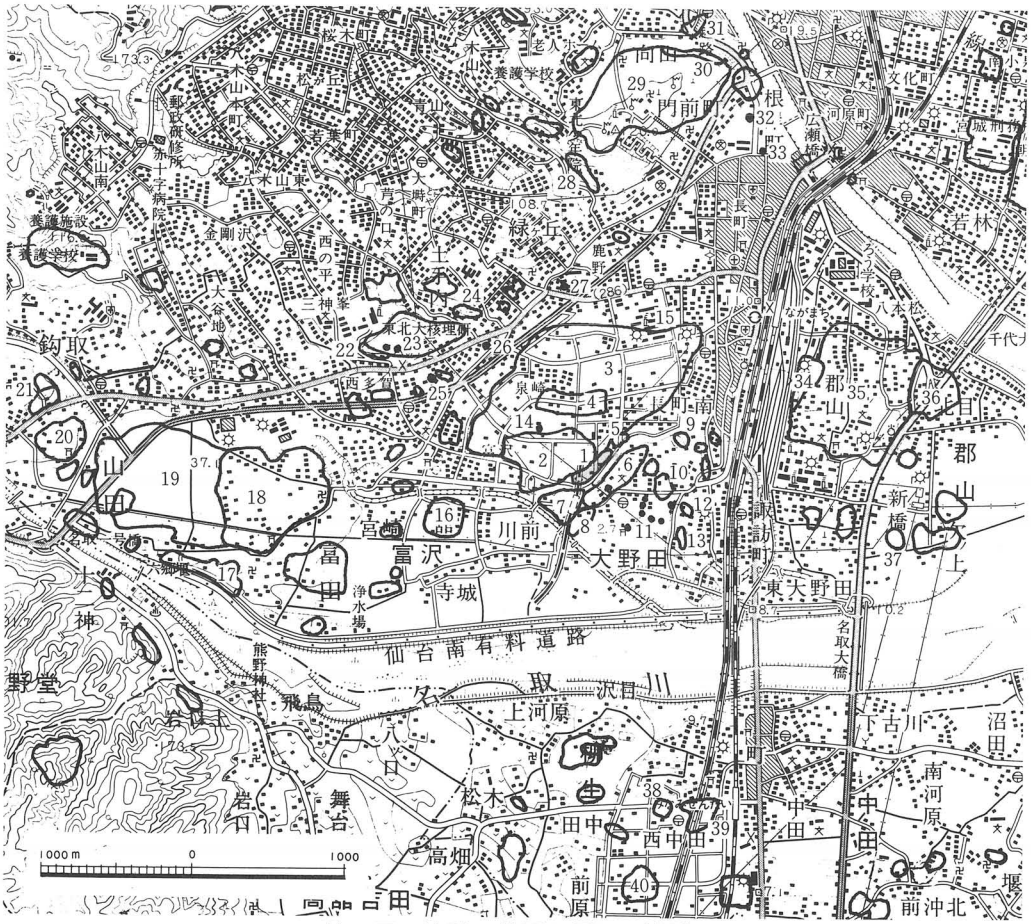
当遺跡周辺には数多くの遺跡があり、それぞれからは各時代の遺構・遺物が重層的に発見されている。当遺跡を中心とする地域の歴史を概観してみる。

生活のはじまり

仙台市内で最も古い人間生活の痕跡は、丘陵部に近い段丘上の山田上ノ台⑳・北前遺跡㉑から発見された旧石器であり、３万年以前の前期旧石器時代にさかのぼる。当遺跡周辺では下ノ内浦遺跡（昭和58年度）で縄文時代早期の、日計式押型文の時期の陥し穴と竪穴遺構が見つかっており、最も古い人間活動の痕跡である。早期後葉は、山口遺跡(2)で土器が出土している。前期には丘陵の三神峯遺跡㉓が前期初頭の集落跡と考えられるものの、沖積地では遺構は検出されていない。下ノ内浦遺跡（昭和58年度）で大木5b 式の土器片が出土している。中期初頭には上野遺跡⑱に集落が営まれ、続いて大木8b 式期に六反田遺跡(6)に住居がつくられる。以後、後期中葉宝ヶ峯式期まで、六反田・下ノ内(7)・下ノ内浦・山口・伊古田(8)遺跡といった、笊川の自然堤防上に立地する遺跡で多量の遺構・遺物が残されている。しかし、その後は、遺物の量も減り、遺構も発見されなくなる。

稲作の導入

当遺跡周辺に稲作が導入された時期については不明であるが、桝形囲式期以前にさかのぼることが富沢遺跡(3)の調査成果により明らかにされている。また、富沢遺跡では弥生時代以降現代に至るまで水田が作られ続けてきたことが確かめられている。だが、弥生時代に稲作を行なった人々の日常生活の痕跡は少ない。下ノ内浦遺跡（昭和57年度）での十三塚式期あるいは天王山式期の墓壙の発見や、下ノ内・六反田・山口遺跡での土器の出土があげられる程度である。古墳時代には、六反田・下ノ内・伊古田・泉崎浦(4)遺跡に住居跡がみとめられる。また、当遺跡の南東部の六反田遺跡を含めた地域には大野田古墳群⑪があり、現在まで９基の円墳が確認さ



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第１表　遺跡地名表

番号	遺跡名	立地	時代	番号	遺跡名	立地	時代
1	**下ノ内浦遺跡**	**自然堤防**	**縄文～平安**	21	北前遺跡	段丘	旧石器(前・後)・縄文(早・中)・古墳・平安
2	山口遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文(早～晩)・弥生・古墳・奈良・平安・中世	22	富沢窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良・平安
3	富沢遺跡	後背湿地	縄文～近世	23	三神峯遺跡	段丘	縄文(早・前)
4	泉崎浦遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・古墳・平安・近世	24	土手内窯跡	丘陵斜面	古墳末～奈良
5	袋東遺跡	自然堤防	古墳・平安	25	裏町古墳	段丘	古墳
6	六反田遺跡	自然堤防	縄文(中・後・晩)・弥生・古墳・奈良・平安	26	金洗沢古墳	段丘	古墳
7	下ノ内遺跡	自然堤防	縄文(中・後)・弥生・平安	27	二塚古墳	後背湿地	古墳
8	伊古田遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	28	二ツ沢横穴群	丘陵	古墳
9	元袋Ⅲ遺跡	自然堤防	奈良・平安	29	茂ケ崎城跡	丘陵頂部及び斜面	南北朝～室町
10	大野田遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文(後期)・弥生	30	大年寺横穴群	丘陵斜面	古墳末～奈良
11	大野田古墳群	自然堤防	古墳	31	愛宕山横穴群	丘陵斜面	古墳末～奈良
12	北屋敷遺跡	自然堤防・後背湿地	奈良・平安	32	兜塚古墳	自然堤防	古墳
13	長町清水遺跡	自然堤防	古墳？	33	小兜塚古墳	自然堤防	古墳
14	教塚古墳	後背湿地	古墳	34	西台畑古墳	自然堤防	弥生・古墳
15	金岡八幡古墳	後背湿地	古墳	35	郡山遺跡	自然堤防・後背湿地	古墳・奈良
16	富沢館跡	自然堤防・後背湿地	室町	36	北目城跡	自然堤防	室町・江戸
17	船渡前遺跡	段丘	縄文・弥生・奈良・平安	37	欠ノ上Ⅰ遺跡	自然堤防・後背湿地	古墳・奈良・平安
18	上野遺跡	段丘	縄文(中)・奈良・平安	38	安久遺跡	自然堤防	弥生～中世
19	山田条里遺跡	段丘	奈良～平安	39	安久東遺跡	自然堤防	弥生～中世
20	山田上ノ台遺跡	段丘	旧石器(前・後)・縄文(早・中・後)・平安・近世	40	栗遺跡	自然堤防	古墳

第２図　区画整理前の地形図（トーン部が調査区）

れている。さらに山口遺跡北方に教塚古墳(14)、富沢遺跡北方に金岡八幡古墳(15)が存在し、さらに沖積地との境界に沿った丘陵上に一塚・二塚(27)・金洗沢古墳(26)等、数基の古墳が点在する。大年山周辺の斜面には横穴墓（28・30・31）が群をなしている。

政治的転機

当地域における画期的なできごととして郡山遺跡(35)の成立がある。これは、7世紀後半から8世紀初めにかけての官衙跡であり、中央政権の体制に当地域が組み込まれたことを示すものである。民衆の生活にも変化が生じたものと考えられる。奈良・平安時代には遺跡数も多くなり、下ノ内・下ノ内浦・伊古田・山口・六反田遺跡においては住居跡が見つかっており、山口遺跡では居住域と水田がセットで見つかっている。また、富沢遺跡の平安時代の水田跡では、真北方向の大畔がみとめられ、一定の企画性を読み取れる。中世以降は遺跡の調査例が少なく不明な点が多い。富沢館跡(16)、茂ケ崎城跡(29)、北目城跡(36)等の遺跡があるが詳細は不明である。富沢遺跡では水田跡の他に中世の屋敷跡や溝跡が発見されている。近世にはいると当遺跡は富沢村に含まれる。

以上のように見てくると、稲作の導入以降、富沢遺跡では水田がつくられ、本遺跡を含む笊川の自然堤防上には集落が営まれるという土地利用が近年まで続けられてきたといえよう。このような景観が変化したのは昭和48年以降の土地区画整理による宅地化の開始であり、今後は仙台市の副都心として都市化が進んでいくと考えられる。

5．前回の調査

下ノ内浦遺跡ではこれまで二度にわたる調査が行なわれている。（第3図）

1次調査　みやぎ生活協同組合の倉庫建設に先立ち、昭和57年7月から9月にかけて調査が行なわれた。Ⅰ区からは平安時代以降の土坑・ピット、平安時代以前の河川跡が検出され、土師器・須恵器・中世陶器・青磁が出土している。Ⅱ区からは、奈良時代の住居跡・溝跡・掘立柱建物跡、平安時代以降の溝跡・掘立柱建物跡・土坑、時期不明の溝跡・土坑・竪穴遺構・ピット・河川跡が検出されている。出土遺物には、石器・縄文土器・弥生土器・土師器（塩釜式・国分寺下層式・表杉ノ入式）・須恵器・赤焼土器・土錘がある。Ⅱ区は今回の調査区の北側に位置するが、基準杭の位置を確認できず、正確につなげることができなかった。今回の調査では、Ⅱ区に連続すると考えられる遺構も確認されている。

2次調査　高速鉄道南北線の建設に先立ち、昭和58年4月～12月、昭和59年4月～12月の2ヶ年にわたる調査が行なわれた。検出された遺構は、平安時代の水田跡・住居跡・掘立柱建物跡・柱列・溝跡・小溝状遺構群、平安～弥生時代の小溝状遺構群・ピット、奈良時代の住居跡、弥生時代の竪穴遺構・土坑・墓壙（石包丁副葬）・溝跡・ピット、縄文時代後期（南境式）の配石

墓、縄文時代早期（日計式）の陥し穴、奈良時代以降の河川跡がある。遺物には、石器・縄文土器（日計式・大木5b式・南境式）・弥生土器（十三塚式・天王山式）・土師器（国分寺下層式・表杉ノ入式）・須恵器・炭化米等がある。

註）１次調査：仙台市文化財調査報告書第59集『下ノ内浦遺跡』(1983)
　　２次調査：仙台市文化財調査報告書第69集『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』(1984)
　　仙台市文化財調査報告書第82集『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ』(1985)
　　仙台市文化財調査報告書第89集『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ』(1986)

６．調査の方法と経過

調査区は店舗設計図に合わせ、東西40m・南北25mの広さに設置した。北側隣地との境界杭を基準とし、南に18mの地点をグリット基準点とし、３m方眼のグリッドを設定した。また、グリッド基準点を０とし東にＥ１・２……、南にＳ１・２……と水糸番号をつけた。ベンチマークは千刈田公園内にある測量水準点№76、12.0212m（仙台市環境公害部設置）から移動した。遺構の掘り込みにあたっては二分法・四分法を用い掘り下げた。図化にあたっては原則として1/20で実測し、一部1/40・1/100で実測した。写真は35mm・６×７版白黒・カラーリバーサルで撮影した。

調査には４月18日より入ったが、盛土とアスファルト舗装があったため重機を用いてそれらを除去した。４月27日より作業員を導入し遺構の確認・掘り込みを行なった。１号河川跡とＬⅧ～ＬⅪの除去にあたっては土量が多いため重機を用いたが、それ以外の層は人力で掘り下げた。調査の間、６月25日に大野田小学校６年生３クラスの見学会、７月15日に同校歴史地理クラブの発掘体験学習を行なった。

調査区を国土座標に位置づけるため測量を行なった結果は以下の通りである。

平面直角座標系Ｘ

ＮＯＳ	Ｘ＝－198251.63	Ｅ３－Ｓ12	Ｘ＝－198263.65
	Ｙ＝　＋3677.80		Ｙ＝　＋3680.63
Ｅ９－Ｓ９	Ｘ＝－198260.70	Ｅ15－Ｓ９	Ｘ＝－198260.85
	Ｙ＝　＋3686.65		Ｙ＝　＋3692.70

調査区のグリッド南北軸は、国土座標Ｘ軸から約１度東偏する。

第3図　調査区の位置とグリッド配置図

Ⅱ章　調査の成果

1．基本層序（第４図）

調査区南半は厚さ50cm程の盛土がされ、北半は１ｍ程削られている。盛土下の基本層序について説明する。

Ⅰ層　明オリーブ灰色シルト。酸化鉄粒が点々と混じる。層厚約30cm。旧水田耕作土。

Ⅱ層　淡黄橙色砂質シルト。酸化鉄・マンガンの集積層。層厚15～20cm。

Ⅲ層　暗灰黄色シルト。マンガン粒が混じる。層厚約30cm。上面より住居跡、掘立柱建物跡、１号河川跡が検出される。層中からはロクロ不使用土師器、須恵器が出土している。

Ⅳ層　黄褐色シルト。Ⅲ層に比べ砂粒が多い。層厚約50cm。層中より弥生土器、縄文土器が出土している。

Ⅴ層　黒褐色粘土。上層は暗灰黄色である。層厚15～30cm。上面より柱穴、溝跡が検出される。また、小ピットが多数検出されたがいずれも不整形で柱痕跡なく、人為的なものではないと判断した。層中より弥生土器、縄文土器（晩期）が出土している。

Ⅵ層　にぶい黄色シルト。層厚約10cm。層中より縄文土器（後期）、石器が出土している。

Ⅶ層　黄褐色シルト。層厚20～30cm。層中より縄文土器（後期）、石器が少量出土している。

Ⅷ層　明黄褐色砂質シルト。やや明るい土が斑状に混じる。層厚30～40cm。上面より２号河川跡が検出される。

Ⅸ層　明黄褐色砂質シルト。層厚30～50cmで、南にむかい厚くなる。

Ⅹ層　にぶい黄色砂質シルト。層厚約30cmで、北半部にのみ分布する。

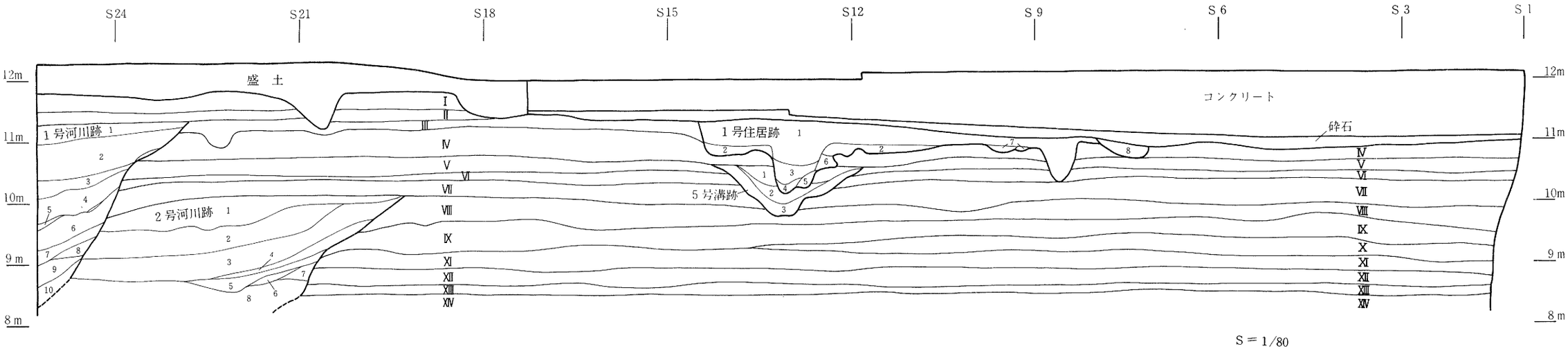
Ⅺ層　明黄褐色砂質シルト。層厚約30cm。

Ⅻ層　南部はオリーブ褐色、北にむかうにつれ次第に灰オリーブ色になる粘土。粘りは強い。層厚約30cm。上面より土坑が検出される。層中より縄文土器(早期)、石器が出土している。

XIII層　緑灰色および暗オリーブ色粘土。Ⅻ層に比べたいへん堅くしまっている。層厚10～15cm。上面より土坑、集石が検出される。層中より縄文土器（早期)、石器が出土している。

XIV層　緑灰色砂。たいへん堅くしまる。上から約20cmまでは細砂、その下は粗砂である。

XIV層以下については、次第に砂の粒径が大きくなり、標高７ｍ前後で砂礫層となる。



S＝1/80

基 本 層 序

層位	色調		土性	備考
Ⅰ	明オリーブ灰色	2.5GY7/1	シルト	酸化鉄が混じる
Ⅱ	淡黄橙色	10YR8/8	砂質シルト	酸化鉄層
Ⅲ	暗灰黄色	2.5Y5/2	シルト	マンガン粒わずかに含む
Ⅳ	黄褐色	2.5Y6/4	砂質シルト	砂粒多くジャリジャリする
Ⅴ	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	粘りつよい
Ⅵ	にぶい黄色	2.5Y6/4	シルト	
Ⅶ	黄褐色	2.5Y5/4	シルト	
Ⅷ	明黄褐色	10YR6/8	砂質シルト	2.5Y7／6と混在
Ⅸ	明黄褐色	2.5Y7/6	砂質シルト	
Ⅹ	にぶい黄色	2.5Y6/4	砂質シルト	
Ⅺ	明黄褐色	2.5Y7/6	シルト質砂	
Ⅻ	オリーブ褐色	2.5Y4/4	粘土	(南側)
	灰オリーブ色	5Y4/2	粘土	(北側)
XIII	緑灰色	10GY5/1	粘土	堅くしまる
	暗オリーブ色	5Y4/3	粘土	
XIV	緑灰色	7.5GY6/1	砂	堅くしまる

1号河川跡土層観察表

層位	色調		土性	備考
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	
2	浅黄色	2.5Y7/4	シルト	
3	浅黄色	2.5Y7/4	砂	
4	浅黄色	2.5Y7/4	砂	
5	白色		火山灰	灰白色火山灰層
6	にぶい黄褐色	10YR7/4	砂	
7	浅黄色	2.5Y7/4	砂	
8	灰オリーブ色	5Y5/2	砂	灰色粘土ブロック混じる
9	青灰色	5BG5/1	砂	灰色粘土ブロック混じる
10			砂礫	灰色粘土ブロック混じる

1号住居跡他土層観察表

層位	色調		土性	備考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化物、焼土粒混じる
2	住居跡掘り方埋土、LⅥとLⅤの混在層			
3	明黄褐色	2.5Y7/4	シルト	混在層
	灰色	5Y4/1	シルト	
4			焼土＋灰	
5	灰オリーブ色	5Y5/2	シルト	焼土、灰と混在
	灰色	5Y4/1	シルト	
6	明黄褐色	2.5Y7/4	シルト	混在
	灰色	5Y4/1	シルト	
7	暗灰黄色	2.5Y5/2	シルト	焼土・灰と混在
	黄褐色	2.5Y5/3	シルト	
	明黄褐色	2.5Y7/6	シルト	
8	灰黄色褐色	2.5Y4/2	シルト	焼土・灰と混在
	黄褐色	2.5Y5/4	シルト	

2号河川跡土層観察表

層位	色調		土性	備考
1	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト	
2	明黄褐色	10YR6/6	砂	
3	明黄褐色	10YR6/6	砂	
4	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂	
5	明黄褐色	10YR7/6	砂	粒径が最大
6	黒色	10YR1.7/1	粘土	乱れている
7	明黄褐色	10YR7/6	砂	ℓ5と同じ
8			砂礫	

5号溝土層観察表

層位	色調		土性	備考
1	にぶい黄色	2.5Y6/4	シルト	
2	暗灰黄色	2.5Y5/2	シルト質粘土	
3	黄灰色	2.5Y4/1	粘土	底部はグライ化

第4図 基 本 層 序

2．河川跡とその出土遺物

調査区の南東隅に改修前の笊川が検出された他に、Ⅲ層上面で１号河川跡、Ⅷ層上面で２号河川跡が検出された。

(1)　**１号河川跡**（第５～11図、第２・３表）

〔検出〕Ⅲ層上面

〔形状〕（第５図）　調査区の南東2/3を占める。北西岸は検出されたが、対岸は調査区外である。岸は44mにわたり検出され、河川の最大幅は26mである。調査では堆積している砂層を除去し、礫層を検出し一部掘り込んだ。礫は中央部が高まり、両脇が深くなる。礫層までの深さは、中央部で平均1.6m、南側で平均２m、北側で平均2.3mである。

〔堆積土〕（第６図）　堆積土は58層に細分されたが、火山灰層の存在や切り合い関係をもとに６層に大別される。

Ａ層　１～５層の砂層である。河川跡のほぼ全体を覆う。

Ｂ層　６～12層の砂層である。火山灰層とＣ層を切る。

灰白色火山灰層　13・14層。13層は火山灰と砂が混じっており、14層は火山灰が主体である。10世紀前半に降下した火山灰と考えられる。[註)]

Ｃ層　13～40層の砂層である。岸に近い部分で、えぐり込むように深くなっている。

Ｄ層　41～54層の礫層である。径５cm以下の礫が主体を占める。

Ｅ層　55～58層の礫層である。径10cm程の礫が主体を占める。

これらの大別層のうち、Ｄ・Ｅ層（礫層）は河川が機能していた時期の河床礫と考えられる。Ａ～Ｃ層（砂層）は河川が機能を停止した（河道が移動した）後の堆積土であり、その中でもＢ層の存在は埋没途中で一時的な小河道ができたことを示すと考えられる。Ｄ層のうち、Ｂ層直下の礫については、この一時的な小河道に伴う礫とみられる。まとめると大別層を古い方から並べると以下のように考えられる。

（河道の存在）　（　埋　没　）　（小河道）　（　埋　没　）

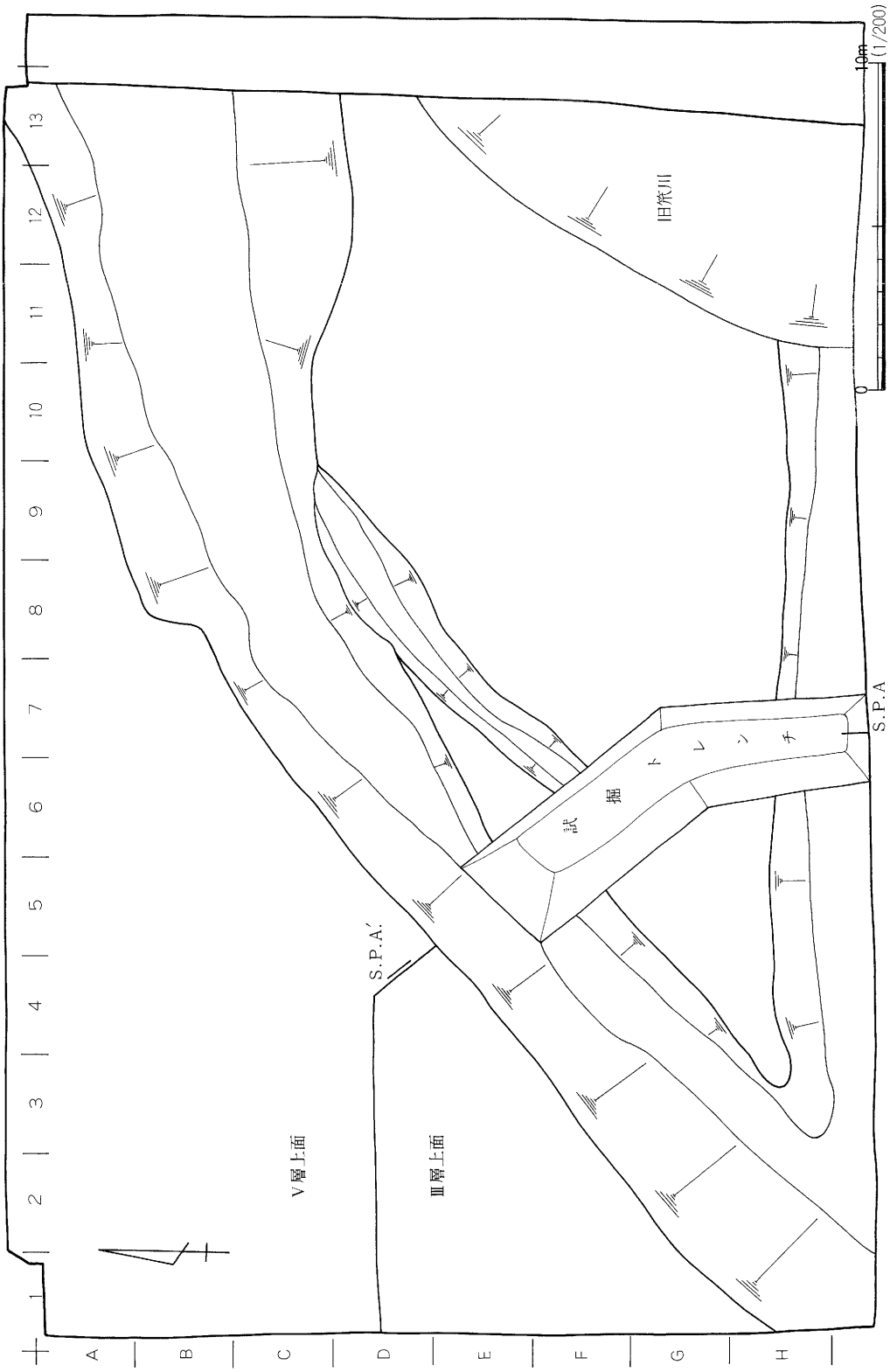
Ｅ層⟶Ｃ層下Ｄ層⟶Ｃ層⟶火山灰層⟶Ｂ層下Ｄ層⟶Ｂ層⟶Ａ層

註）山田一郎・庄子貞雄（1980）「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』P.97～102

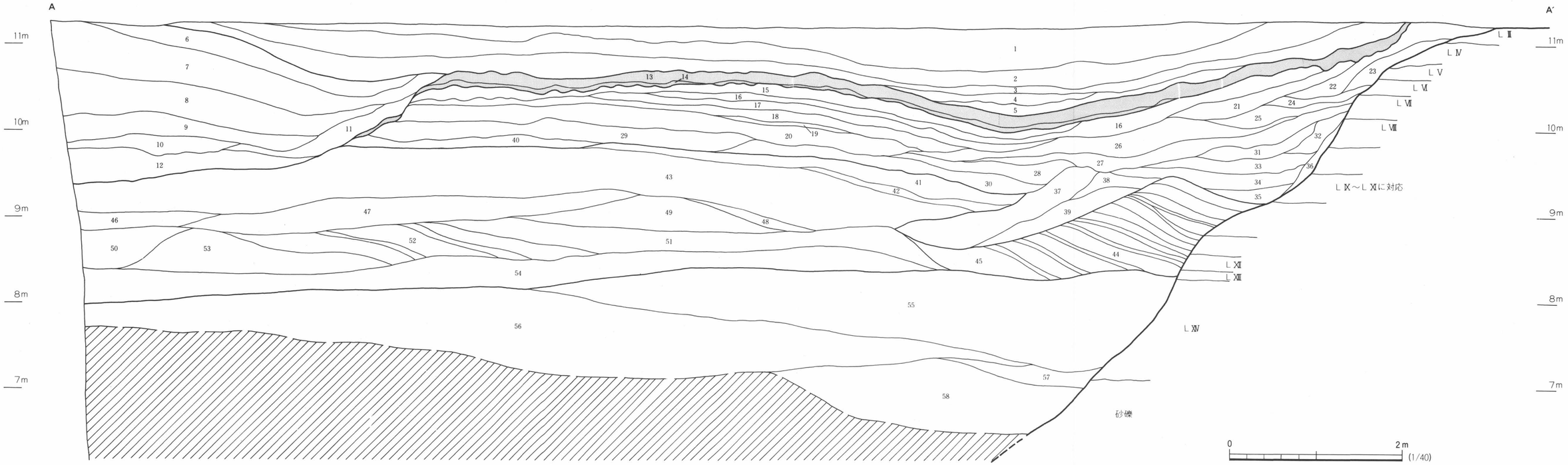
白鳥良一（1980）「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所紀要Ⅶ』P.１～38

〔出土遺物〕

縄文土器・弥生土器・石器については一括して、土師器・須恵器・陶磁器については層ごとに記述する。



第５図　１号河川跡平面図



	層位	色調	土性	備考
A	1	褐色	10YR4/4	細砂	
	2	にぶい黄褐色	10YR4/3	細砂	
	3	灰黄褐色	10YR4/2	細砂	
	4	灰黄褐色	10YR5/2	細砂	
	5	灰黄褐色	10YR5/2	細砂	灰白色火山灰がわずかに混じる
B	6	灰黄褐色	10YR5/2	細砂	
	7	にぶい黄褐色	10YR4/3	細砂	
	8	にぶい黄褐色	10YR4/3	細砂	粗砂が縞状に混じる
	9	褐色	10YR4/4	細砂	粗砂が縞状に混じる
	10	灰黄褐色	10YR5/2	細砂	
	11	にぶい黄褐色	10YR5/3	細砂	
	12	にぶい黄褐色	10YR5/3	粗砂	径1～2cmの小礫が混じる
	13	褐灰色	10YR5/2	細砂	灰白色火山灰が多量に混じる
C	14	灰黄褐色	10YR6/2		灰白色火山灰
	15	灰黄褐色	10YR5/2	細砂	
	16	にぶい黄褐色	10YR4/3	細砂	
	17	にぶい黄褐色	10YR4/3	細砂	
	18	褐色	10YR4/4	細砂	
	19	にぶい黄褐色	10YR4/3	粗砂	
	20	灰黄褐色	10YR5/2	細砂	
	21	灰黄褐色	10YR5/2	細砂	
	22	にぶい黄褐色	10YR4/3	細砂	
	23	灰黄褐色	10YR4/2	細砂	
	24	にぶい黄褐色	10YR4/3	細砂	
	25	褐色	10YR4/4	細砂	
	26	にぶい黄褐色	10YR5/4	細砂	
	27	暗灰黄色	2.5Y5/2	シルト質砂	
C	28	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	粘土	
	29	にぶい黄褐色	10YR5/3	細砂	
	30	にぶい黄橙色	10YR6/3	粗砂	
	31	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	シルト質砂	
	32	黒褐色	2.5Y3/1	シルト質粘土	
	33	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	粗砂	
	34	灰オリーブ色	5Y4/2		細砂と粗砂が縞状
	35	灰オリーブ色	5Y5/2	粗砂	
	36	灰オリーブ色	7.5Y4/2	粘土	
	37	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	シルト質粘土	
	38	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	
	39	灰色	5Y4/1	シルト質粘土	砂が斑状に混じる
	40	灰黄褐色	10YR5/2	細砂	

	層位	土性	礫径(cm)	備考
D	41	砂礫	2～5	
	42	細砂		灰オリーブ色(7.5Y5/2)
	43	砂礫	1～5	
	44	砂礫	1～5	砂層が縞状に入る
	45	粘土		
	46	砂礫	1～5	
	47	粗砂		
	48	粗砂		
	49	砂礫	1～5	
	50	砂礫	1～5	
	51	砂礫	1～10	
	52	砂礫	1～5	砂層が縞状に入る
	53	粗砂		
D	54	細砂		
E	55	砂礫	5～15	
	56	砂礫	5～15	
	57	細砂		
	58	砂礫	1～10	

第6図　1号河川跡堆積土

縄文土器（第７図１～25）　１～24はＤ層、25はＡ層出土のものである。全体に摩滅が著しい。１・25は外面に条痕が施されており、縄文早期に位置づけられよう。２は波状口縁で、鎖状隆線が貼付される。３は口縁部が「く」字状に屈曲し、沈線文・盲孔が施される。４は刺突文、５・６は沈線文が施される。７・８は口縁部に縄文原体圧痕文をもつ。11～14は内面に格子状の沈線文をもつ。16～19は沈線文が施される。23は薄手で小突起をもち、内外面に沈線文をもつ。24は小形の壺状かと推定される。２～22は、縄文後期前・中葉に、23は晩期に位置づけられよう。24は不明である。

弥生土器（第７図26～28）　26は口唇部に刻目が施され、地文上に沈線文が施される。27は有段の口縁部であり、28も口縁部で刻目をもつ段を有する。いずれも、弥生時代後期に位置づけられよう。

石器（第８図）　１は有茎石鏃、２は無茎石鏃であり、２は裏面にアスファルトが付着する。３は石錐、４は石匙破損品である。５～８は不定形石器で、５は縦長剝片の両縁部と先端部にパティナの異なる二次加工が施される。６・８は剝片の先端部、７は縁部に二次加工を施す。図示資料の他に微細剝離痕をもつ剝片が存在しているが、自然営力による可能性も高いためとりあげなかった。

Ｃ層下Ｄ層出土遺物

土師器（第９図１～４）　１は甕の上半部破片である。体部はあまり膨らまず、撫で肩の肩部から直線的に外傾して開く広口のものである。外面は口唇部を横ナデした後全面に縦のヘラケズリを施し、内面はナデが体部では縦位に、口縁から頸部では横位に施される。２は丸底の坏で口縁部がやや外反する。外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。３・４はロクロ使用の坏である。３は底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリが施されており、切り離しは不明である。体部に墨書「及」を持つ。４は回転糸切り後底部周縁と体部下端に手持ちヘラケズリが施される。３・４とも内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。

須恵器（第９図５～７）　いずれも坏である。５は器高の高いものである。底部は手持ちヘラケズリがされており、切り離しは不明である。６は底部全面から体部下端にかけ回転ヘラケズリが施される。７は底部のみであるが、回転糸切り痕を持ち、墨書「東」とヘラ記号「×」がある。

遺物の年代　２は国分寺下層式（奈良時代）にあたる。ロクロ使用土師器および須恵器は、底部および体部下端に再調整が施されるという特徴をもつ。このことから、２～７の土器は奈良時代からの平安時代初頭（９世紀中頃まで）に位置づけられる。１は県内での類例を知らない。器形の類似するものとしては、北関東地方の弥生時代後期の甕があり、同器形の甕は古墳時代前期五領式期の甕の中にも存在している（例として、茨城県曲松遺跡[註)]出土のものがあげられる）。

註）佐藤次男（1974）「曲松集落遺跡」『茨城県史料考古資料編古墳時代』

Ｃ層出土遺物

土師器（第９図８）　ロクロ使用の高台付坏である。内外面ともヘラミガキ、黒色処理が施される。底部の切り離しは回転糸切りである。

須恵器（第９図９～12・第10図１～６・第11図）　第９図９～12、第10図１～３は底部の切り離しが回転ヘラ切りの坏である。器形は底部から直線的に外傾するものが大部分である。第10図４は切り離しが回転糸切りの坏で、底部からやや内側に入り込んだ後若干丸味をもって外傾する。３・４の底部には墨書があり、３は判読不明、４は「正」である。第10図５は蓋である。扁平な宝珠形のつまみを持ち、天井部からなだらかに口縁部に至り、口縁端部は下方に折り曲げられる。天井部外面上半には回転ヘラケズリが施される。６は高台付盤で、底部全面には回転ヘラケズリが施される。内面には沈線が１条巡る。第11図は甕であり、第10図１・３の坏と共に出土した。最大径は体部上半にあり、器高より大きい。体部外面には平行タタキの後５条の沈線が巡り、内面には青海波文（同心円状アテ目）が認められる。

土器の年代　Ｃ層出土土器は、切り離し技法、器形等の特徴より、奈良時代から平安時代初頭（９世紀中頃まで）に位置づけられる。

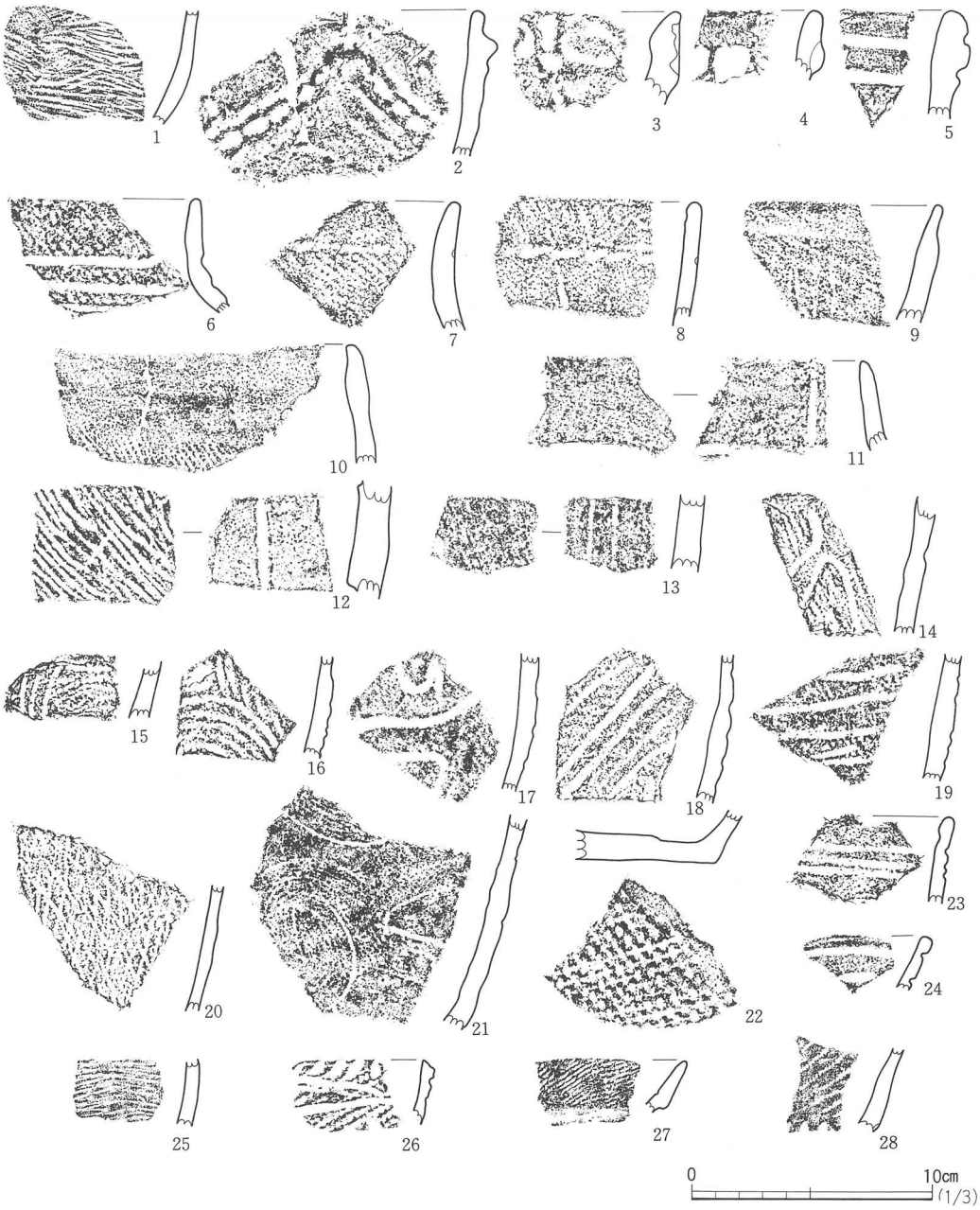
Ｂ層下Ｄ層出土遺物（第10図７・８）　ロクロ使用の土師器坏で、底部の切り離し技法は回転糸切りで再調整は施されない。器形は底部からやや内側に入った後丸味をもって立ち上がり、口縁部は７は内弯気味であり、８はやや外反する。内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。

これら坏は表杉ノ入式（平安時代）のものである。

Ａ層出土遺物（第10図９～12）　９は須恵器坏で、切り離し技法は回転糸切りである。10は赤焼土器坏である。切り離しは回転糸切り後無調整であり、器形は口縁部が大きく外反し全体に小ぶりのものである。これらは平安時代に位置づけられる。11は青磁碗である。厚手の底部で、高台は剝落しており、高台内は露胎である。全体にオリーブ灰色の釉がかかり、見込みには「金玉満堂」のスタンプ文がある。これは龍泉窯系の青磁とみられ、13世紀から14世紀前半に位置づけられる。12は陶器片であるが、後述する２号建物跡出土の常滑焼三筋壺と同一個体の可能性が高い。沈線が２条引かれており、三筋壺の最下段の沈線部分であろう。沈線幅は、上が１㎜、下が２㎜、沈線の間隔は３㎜である。時期は12世紀頃とみられる。図示できなかったが他に、瀬戸灰釉瓶子片（14世紀頃）と志野焼皿片が出土している。志野焼皿は底部に近い部分の小破片で、白色の釉がかかる。時期は16世紀末～17世紀前半頃である。

〔まとめ〕１号河川跡の機能していた時期は、Ｃ層下Ｄ層出土遺物の年代から平安時代初頭かそれ以前と考えられる。そして、Ｃ層の遺物と灰白色火山灰の存在から平安時代の前半代にはほぼ埋まっていたとみられる。完全に埋没し平坦になった時期は、Ａ層から志野焼皿片が出土していることから、中世末～近世頃と考えられる。

（陶磁器については、文化財課佐藤　洋の教示による）



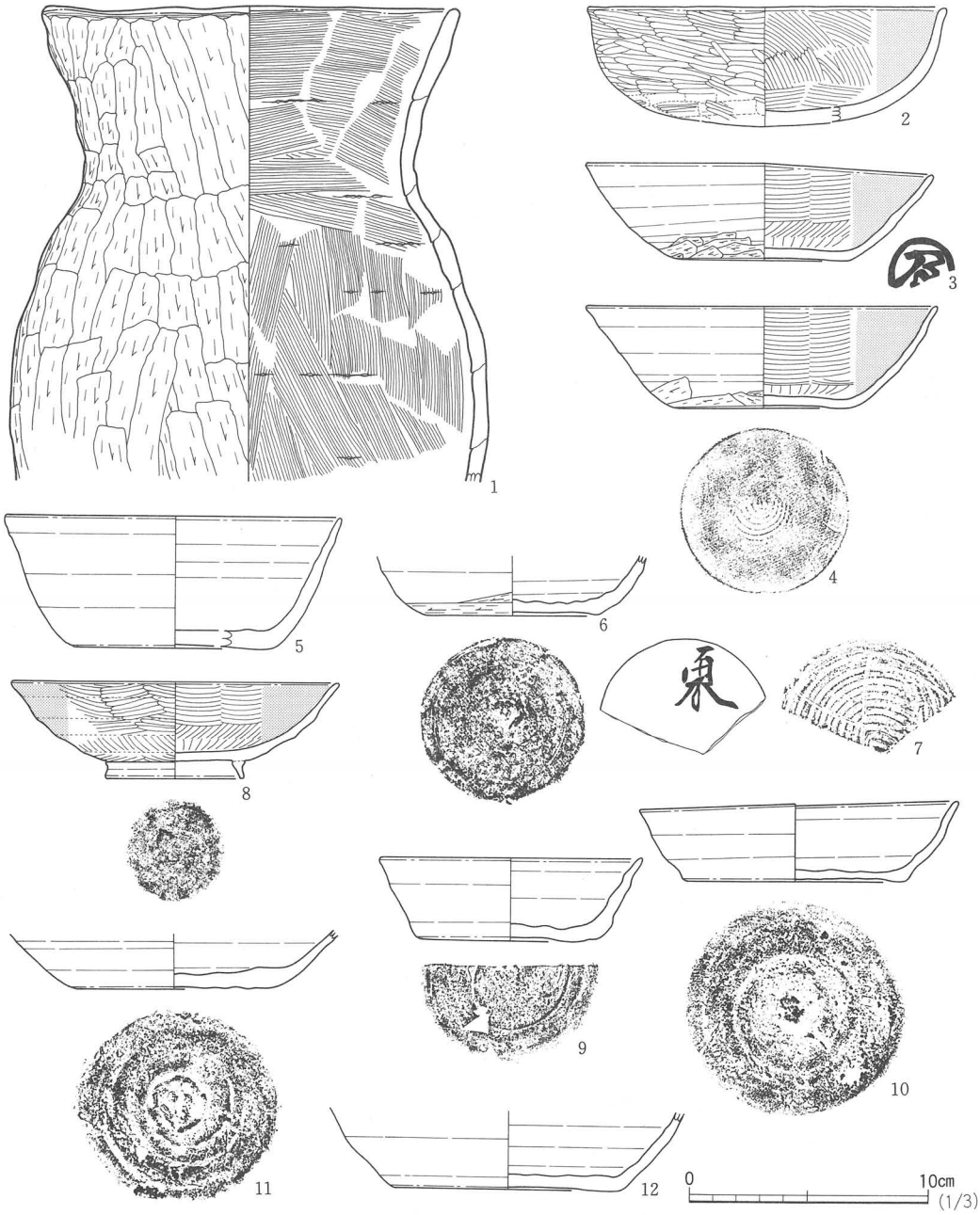
番号	層位	文様・調整	備考	登録	番号	層位	文様・調整	備考	登録
1	D 層	条痕か（幅1㎜）		A248	15	D 層	縄文（LR）、沈線		A14
2	D 層	隆線→刺突	波状口縁	A 1	16	D 層	沈線		A15
3	D 層	沈線・刺突		A 2	17	D 層	沈線		A16
4	D 層	口唇縄文（LR）、刺突		A 3	18	D 層	沈線		A17
5	D 層	沈線		A 4	19	D 層	沈線、縄文か		A18
6	D 層	縄文（?）→沈線		A 5	20	D 層	網目状撚糸文（R）		A19
7	D 層	原体圧痕（RL）、縄文（RL）		A 6	21	D 層	沈線、縄文か		A20
8	D 層	原体圧痕（?）、縄文（RL）		A 7	22	D 層	網代痕		A21
9	D 層	網目状撚糸文（?）		A 8	23	D 層	沈線	内面沈線	A22
10	D 層	撚糸文（L）		A 9	24	D 層	沈線		A23
11	D 層	縄文か	内面沈線	A10	25	A 層	条痕か（幅1㎜）		A249
12	D 層	撚糸文（R）	内面沈線	A11	26	A 層	口唇キザミ、縄文（LR）→沈線		B 1
13	D 層	縄文か	内面沈線	A12	27	A 層	縄文（Lr）		B 2
14	D 層	縄文（?）、沈線		A13	28	A 層	撚糸文（R）、キザミ		B 3

第7図　1号河川跡土出遺物（1）

番号	層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録	写真
1	D層	石鏃	チャート(?)	20	12	3.8	0.7	茎部欠損	K1	32−28
2	D層	石鏃	珪質頁岩	38	19.7	4.4	2.3	アスファルト付着	K2	32−29
3	D層	石錐	珪質頁岩	37.2	26	6.6	5.4		K3	32−30
4	D層	石匙	珪質頁岩	57.8	34.2	7.4	11.2	下半欠損	K4	32−31
5	D層	不定形	鉄石英	46.2	29.3	12.3	18.6	二次加工は全て新しい	K5	32−32
6	D層	不定形	珪質頁岩	42	43	9.9	14.4		K6	32−33
7	D層	不定形	珪質頁岩	49.2	36.7	12.1	21.0		K7	32−34
8	D層	不定形	珪質凝灰岩	24.0	36.0	10.0	8.9	m.f.あり	K8	32−35

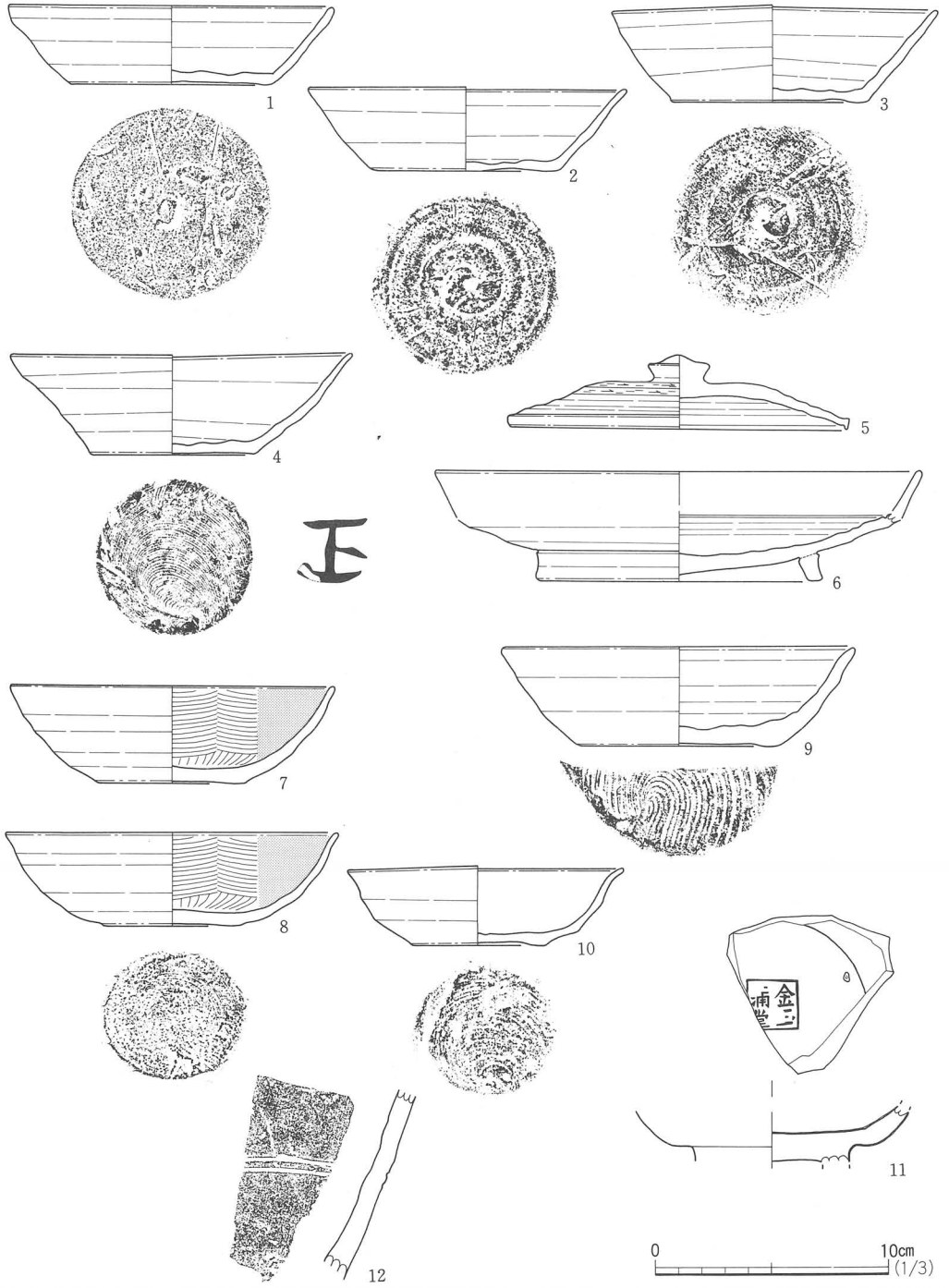
剝片は剝片長・幅、打面不明のものは最大長を示す

第8図　1号河川跡出土遺物(2)



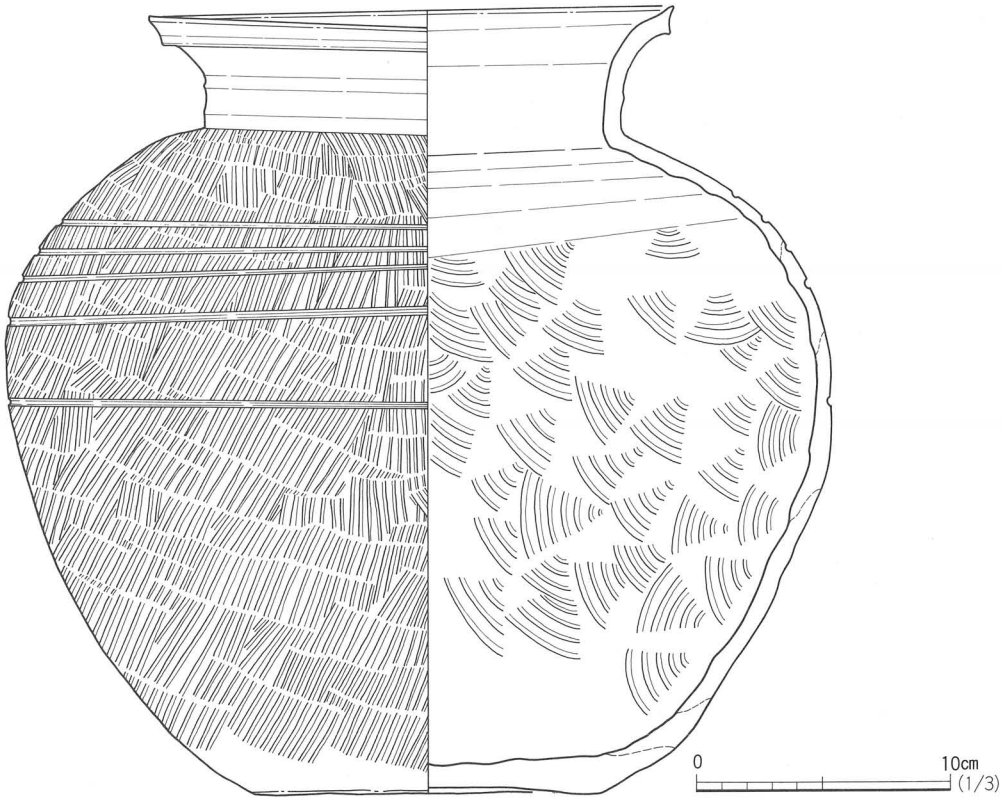
番号	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	登録	写真
1	C層下D層	土師器甕	17.4			ヨコナデ、ヘラケズリ	ナデ	C 1	33－9
2	C層下D層	土師器坏	15.0			ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	C 2	33－1
3	C層下D層	土師器坏	14.4	7.0	4.1	手持ちヘラケズリ、墨書「及」	ヘラミガキ、黒色処理	D 1	33-2・3
4	C層下D層	土師器坏	14.4	7.2	4.3	回転糸切り、手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	D 2	33－4
5	C層下D層	須恵器坏	14.6	9.0	5.6	手持ちヘラケズリ		E 1	33－5
6	C層下D層	須恵器坏		7.2		回転ヘラケズリ		E 2	
7	C層下D層	須恵器坏		7.2		回転糸切り、墨書「東」		E 3	33－6
8	C 層	土師器坏	13.6	5.8	4.1	回転糸切り、ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ、黒色処理	D 3	33－7
9	C 層	須恵器坏	10.6	6.2	3.5	回転ヘラ切り		E 4	33－8
10	C 層	須恵器坏	13.2	8.9	3.4	回転ヘラ切り		E 5	33－10
11	C 層	須恵器坏		8.6		回転ヘラ切り		E 6	
12	C 層	須恵器坏		9.6		回転ヘラ切り		E 7	

第９図　１号河川跡出土遺物（３）



番号	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	登録	写真
1	C 層	須恵器坏	(13.6)	(8.4)	3.4	回転ヘラ切り、ロクロナデ	ロクロナデ	E 8	33－11
2	C 層	須恵器坏	13.3	7.4	4.6	回転ヘラ切り、ロクロナデ	ロクロナデ	E 9	34－1
3	C 層	須恵器坏	13.6	8.3	4.2	回転ヘラ切り、ロクロナデ	ロクロナデ	E10	34－2
4	C 層	須恵器坏	14.4	6.9	4.3	回転糸切り、ロクロナデ、墨書「正」	ロクロナデ	E11	34-3・4
5	C 層	須恵器蓋	14.4		3.2	回転ケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ	E12	
6	C 層	須恵器盤		12.2		ヘラケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ	E13	
7	B層下D層	土師器坏	(13.6)	(6.2)	4.2	回転糸切り、ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	D 4	
8	B層下D層	土師器坏	14.0	5.8	4.0	回転糸切り、ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	D 5	34－5
9	A 層	須恵器坏	14.8	8.6	4.3	回転糸切り、ロクロナデ	ロクロナデ	E14	34－6
10	A 層	赤焼土器坏	11.5	2.8	3.4	回転糸切り		D 6	34－7
11	A 層	青磁碗		6.6		オリーブ灰色(2.5GY5／1) 釉、貫入あり、高台内露胎		J 1	34－9
12	A 層	陶器壺				ナデ、平行沈線	ナデ	I 1	34－10

第10図　1号河川跡出土遺物(4)



番号	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	登録	写真
1	C 層	須恵器甕	25.0	13.6	31.4	ロクロナデ、平行タタキ→沈線	ロクロナデ、青海波文	E15	34－8

第11図　1号河川跡出土遺物（5）

(2)　2号河川跡

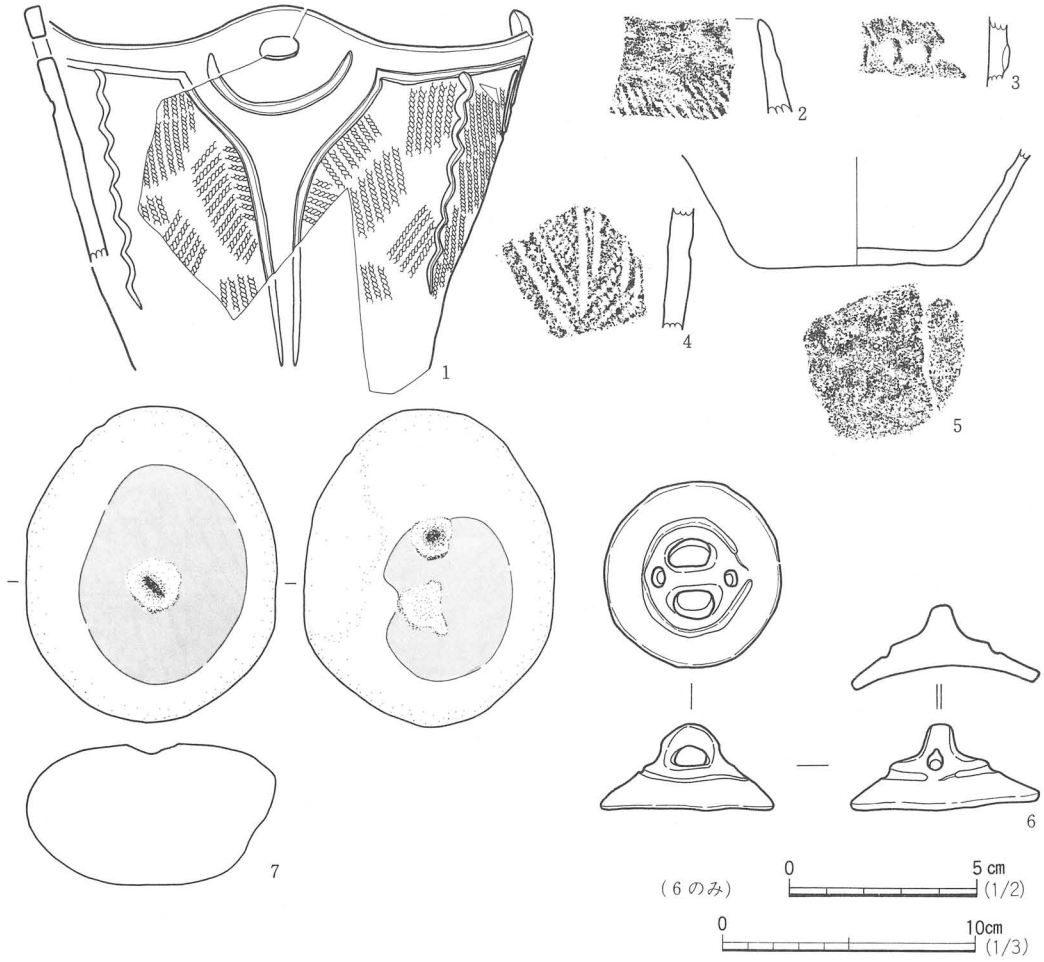
〔位置・形状〕 Ⅷ層上面で検出された。G・H1グリッドに位置する。大部分は1号河川跡により破壊されている。西壁部分での残存幅4.7m、深さは1.6m以上である。

〔堆積土〕 8層確認された。明黄褐色の砂が主体で、ℓ8以下は砂礫層である。

〔出土遺物〕（第12図・第3表）　ℓ1より縄文土器、石器が少量出土している。1は深鉢形土器の上半部であり、4単位の波状口縁とみられる。波頂部に円孔を持ち、口縁部は沈線で区画され無文、体部は縄文が施文された後沈線により区画された磨消部による「Y」字状が波頂部に合わせて描かれ、その間に蛇行沈線が引かれる。2は撚糸文の施文される口縁部、3は刺突文、4は地文上に沈線が施される。6は土製蓋である。石器は磨凹石が1点出土しており、磨凹面を2面持つ。

これらの土器は、縄文時代後期前葉の南境式に位置づけられる。

〔まとめ〕 2号河川跡は縄文時代早期の遺物を出土するⅫ・Ⅷ層を切っており、堆積土最上層に縄文後期前葉の遺物を含んでいる。このことから河川の機能していた時期は、縄文早期以降、縄文後期以前と考えられる。



番号	層位	器種	文様・調整	登録	写真	番号	層位	器種	文様・調整	登録	写真
1	ℓ1	深鉢	縄文（LR）→沈線→ナデ、突起部円孔	A24	35－1	4	ℓ1	深鉢	縄文（LR）→沈線	A27	35－3
2	ℓ1	深鉢	撚糸文（R）	A25		5	ℓ1		体部内外面ミガキ、底部ナデ	A28	
3	ℓ1	深鉢	刺突	A26	35－2						

番号	層位	器種	長径（mm）	短径（mm）	高さ（mm）	文様・調整	登録	写真
6	ℓ1	蓋	49	46	23	つまみ部付け根に刺突、沈線、ナデ・ミガキ調整	P1	35－4

番号	層位	器種	石材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	特徴	登録	写真
7	ℓ1	磨凹石	安山岩	125	98	57	980	表裏とも磨凹面あり	K9	35－5

第12図　2号河川跡出土遺物

第2表　1号河川跡土師器・須恵器破片集計表

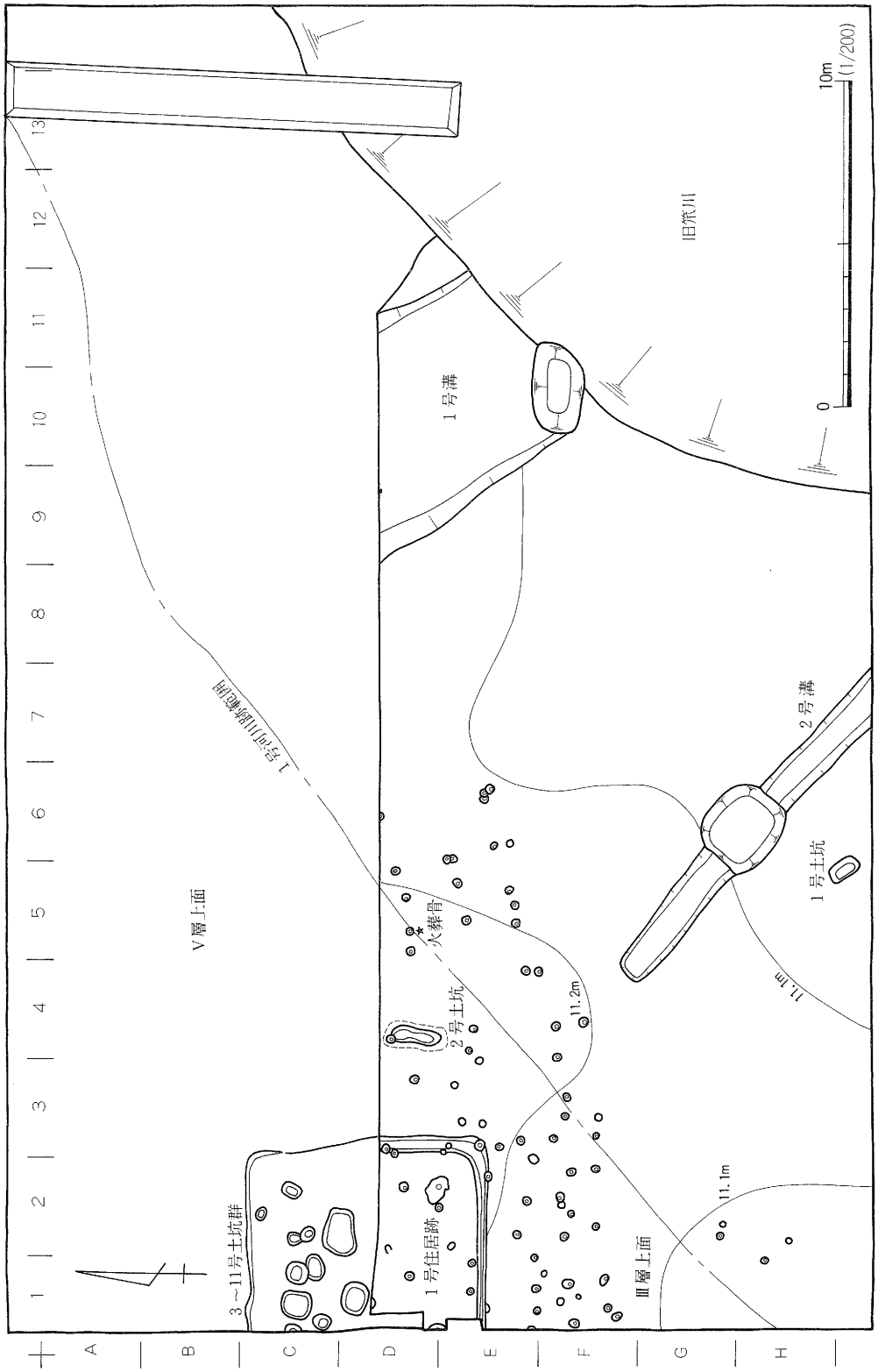
種別	器種	部位	器面調整	A層	C層	B層下D層	C層下D層	排土表採	計
土師器	坏	口縁部	ロクロ―ミガキ(黒色)	14		19	27	1	61
			ロクロ後ミガキ―ミガキ(黒色)	1					1
			ミガキ―ミガキ(黒色)	4			5	1	10
			ミガキ(黒色)―ミガキ(黒色)	2	1				2
			横ナデ―ミガキ(黒色)						1
			不明―ミガキ(黒色)	26					26
		体部	ロクロ―ミガキ(黒色)	28		41	13		82
			ミガキ―ミガキ(黒色)	22				2	24
			ミガキ(黒色)―ミガキ(黒色)	2					2
			不明―ミガキ(黒色)	20					20
			不明―不明	1	1				2
		底部	回転糸切り			14	7	1	22
			回転糸切り後回転ヘラケズリ	1		3	1		5
			回転糸切り後手持ちヘラケズリ			1			1
			全面手持ちヘラケズリのため不明				2		2
			手持ちヘラケズリ―ミガキ(黒色)	1			1		2
			不明―ミガキ(黒色)		3		8		11
	甕	口縁部	ロクロ―ロクロ	2	1	2	4		9
			横ナデ―横ナデ	11			5		16
		体部	ロクロ―ロクロ	25	1	12			38
			ロクロ―ナデ			6	2		8
			ロクロ―ミガキ(黒色)		1	2	1	1	5
			ナデ―ナデ	35	27			6	68
			ナデ―ヘラナデ		1	4	2		1
			刷毛目―刷毛目						6
			刷毛目―ナデ	1		9			10
			ミガキ―ナデ				2		2
			ヘラケズリ―ナデ	13		11	19		43
			不明―不明	338	15	38	42	21	454
		底部	回転糸切り			1			1
			木葉痕	6				1	7
			不明	7	1				8
	高台坏	高台	ロクロ―ロクロ	15		4	2		21
	椀	口縁	ミガキ―ナデ				1		1
	坩	底部	ミガキ―不明				1(塩釜)		1
	高坏	坏部	ミガキ―ミガキ				1(塩釜)		1
		脚部	ミガキ(朱彩)段―不明(朱彩)				1(塩釜)		1
小計				575	52	167	147	34	975
須恵器	坏	口縁	ロクロ―ロクロ	4	3	7	22		36
		体部	ロクロ―ロクロ	7	2	2	3	1	15
			ロクロ・手持ちケズリ―ロクロ			1			1
		底部	回転糸切り	3		1	8		12
			回転ヘラ切り	1	2	1	3		7
			手持ちヘラケズリのため不明			1			1
			回転ヘラケズリのため不明	1		1			2
			不明		1		4		5
	甕	口縁	ロクロ―ロクロ	1	1		2		4
		頸部	波状文―ナデ				1		1
		体部	ロクロ―ロクロ	2	1		10	1	14
			ロクロ―ナデ			2	8		10
			平行タタキ―ナデ	21	5	4	14	3	47
			平行タタキ―青海波文	7		3			10
			平行タタキ―オサエ				6		6
			格子タタキ―ナデ				2		2
			格子タタキ―青海波文				1		1
			手持ちケズリ―ナデ			1	3		4
			回転ケズリ―ナデ				1		1
		底部	ナデ―オサエ		2				2
			平行タタキ―オサエ		1				1
	壺	頸部	ロクロ―ロクロ	2				1	3
		体部	ロクロ―ロクロ	3		1		1	5
			平行タタキ―ロクロ				1	1	2
			回転刷毛目―ロクロ		1				1
	甑	底部	ロクロ―ロクロ	1					1
	蓋	口縁	ロクロ―ロクロ	1			2		3
赤焼土器	坏	口縁	ロクロ―ロクロ	6		5		1	12
		体部	ロクロ―ロクロ	1		12			13
		底部	回転糸切り	4		3			7
小計				65	19	45	91	9	229
合計				640	71	212	238	43	1204

第３表　１号河川跡出土縄文土器集計表

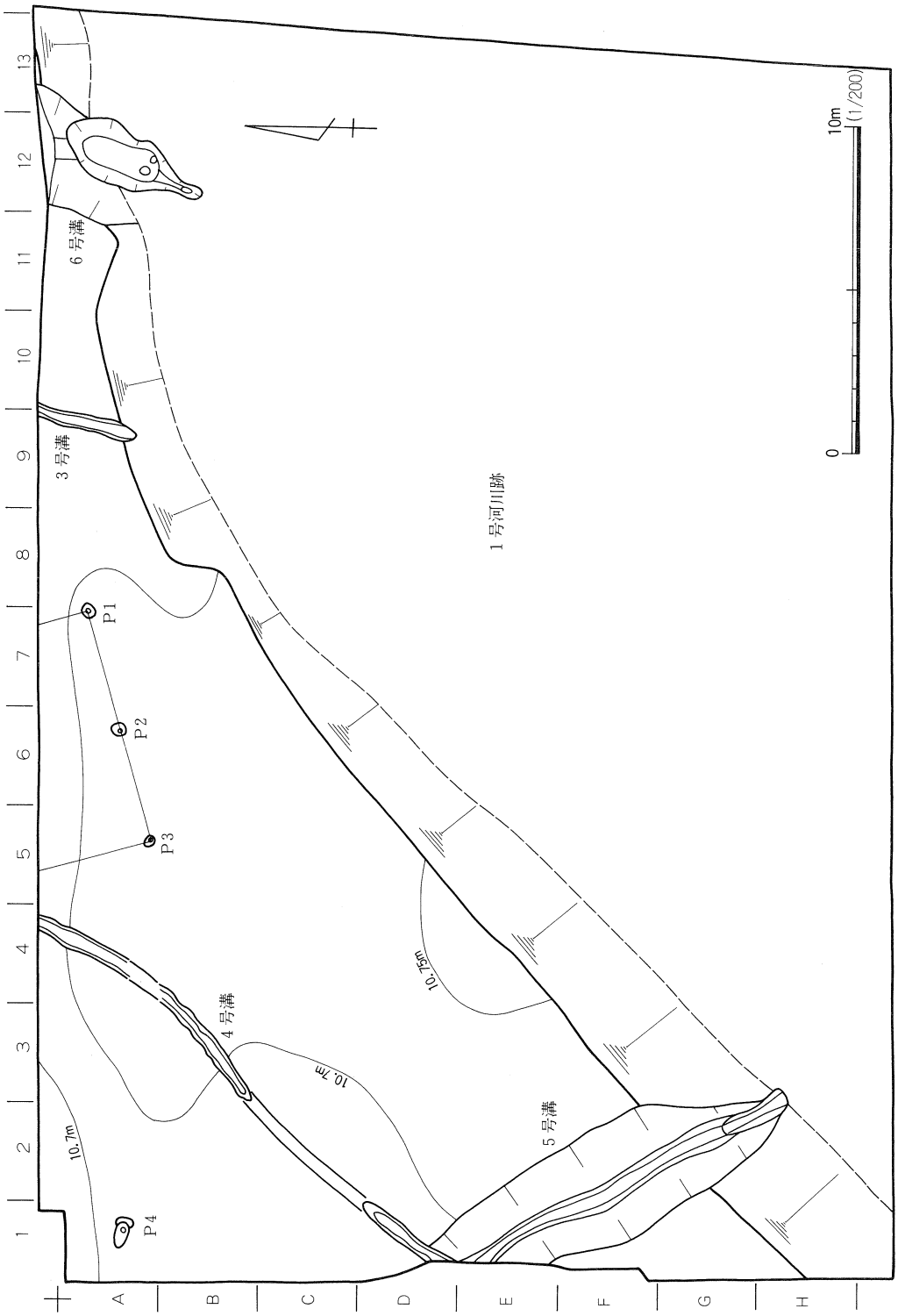
部位	文様・調整	A層	D層	排土表採	計
口縁部	斜行縄文（?）		3		3
	撚糸文（r）		2		2
	沈線文	1	1		2
	沈線文＋孔		1		1
	無文		11	2	13
	不明			1	1
体部	斜行縄文（LR）	3	13	1	17
	斜行縄文（RL）	5	25		30
	斜行縄文（Lr）		3		3
	斜行縄文（?）		28	2	30
	撚糸文（l）	5	6		11
	撚糸文（r）		14		14
	撚糸文（?）		8		8
	沈線文		9	1	10
	斜行縄文（LR）＋沈線文		2	1	3
	斜行縄文（RL）＋沈線文			1	1
	撚糸文（l）＋沈線文		1		1
	撚糸文（r）＋沈線文		1		1
	原体圧痕（RL）＋斜行縄文（RL）		1		1
	原体圧痕（RL）		1		1
	結束（?）		2		2
	隆線		1		1
	無文		96		96
	不明			5	5
底部	無文（ミガキ）		5		5
	無文（ナデ）	1			1
	無文（?）		9		9
	木葉痕		1		1
	棒状圧痕		1		1
計		15	245	14	274

第４表　２号河川跡第１層出土縄文土器破片集計表

部位	文様・調整	点数	計
口縁部	斜行縄文（LR）	1	2
	斜行縄文（RL）	1	
体部	斜行縄文（RL）	1	6
	斜行縄文（LRL）	1	
	斜行縄文（ℓ）	1	
	沈線文	1	
	無文	2	
計			8



第13図　Ⅲ層上面検出遺構配置図



第14図　Ⅴ層上面検出遺構配置図

3．中世以降の遺構と遺物（第15・16図、第5表）

D・E－1～6グリッドのⅢ層上面および1号河川跡堆積土上面に多数の柱穴が検出された。柱穴の径と堆積土はほぼ類似しているが、深さと柱痕跡を基準に検討した結果、3棟の建物跡を復元することができた。

1号掘立柱建物跡

〔位置〕D・E－5・6グリッド。

〔確認面〕P_6・P_8はⅢ層上面、他は1号河川跡上面。

〔規模〕北側は削られており不明だが、残存部分で梁行2間（3.57m：約12尺）、桁行2間以上（4.22m以上）の南北棟で、西側に廂（0.55m）を持つ。内部にも柱穴があり、間仕切りがなされていたとみられる。桁行方向はN－15°－Wである。また、建物南側のP_{13}とP_{14}を結んだ線は梁行に平行しており、塀が存在していた可能性がある。

〔柱間寸法〕梁行の平均は1.78m（5尺8寸7分）、桁行の平均は1.61m（5尺3寸1分）。

〔出土遺物〕P_{10}掘り方埋土より、土師器甕体部破片（調整不明）が1点出土している。

2号掘立柱建物跡

〔位置〕D～F－2～4グリッド。

〔確認面〕P_{17}・P_{18}・P_{22}・P_{26}・P_{42}・P_{57}は1号河川跡上面、他はⅢ層上面である。

〔重複〕1号住居跡、2号土坑より新しい。

〔規模〕北側は削られており不明だが、残存部分は梁行2間（4.38m：約14.5尺）、桁行2間以上（5.98m以上）の南北棟と考えられる。内部にも柱穴があり、間仕切りされていた可能性がある。桁行方向はN－6°－Wである。建物跡の南側のP_{26}・P_{27}は桁行の延長上にあり、径は小さいが30cmの深さがあることから塀等の施設の可能性がある。

〔柱間寸法〕梁行の平均は2.19m（7尺2寸3分）、桁行の平均は2.53m（8尺3寸5分）。

〔出土遺物〕P_{22}掘り方埋土より弥生土器片（天王山式）、P_{19}掘り方埋土より土師器甕底部片（不明－ナデ）、P_{17}掘り方埋土より土師器甕口縁部片（横ナデ－横ナデ）、体部片（調整不明）各1点ずつ出土している。建物南東隅にあたるP_{17}掘り方底面からは常滑窯産三筋壺片が出土している（第15図）。体部片2点が内面を上にして重ねられ、礎板のように置かれていた。三筋壺は肩部から体部にかけてのみ残存している。体部には3段にわたり沈線が施文されている。本来幅約6㎜の半截竹管状の工具で2本同時に引こうとしたようだが、場所によって1本しか引かれなかったり、一巡しても線が一致せず3本引かれたりしている。調整は外面上半が横方向のナデ、下半が縦方向のナデ、内面は横・斜めの方向のナデである。内面には巻き上げ痕跡が部分的に見られる。肩部には自然釉がかかっている。編年位置については、口頸部を欠く資料のため沈線が複線であることしか決め手にならないが、赤羽編年[註1)]の第Ⅰ・Ⅱ段階、楢崎

編年[註2)]の第１～３段階のものとみられる。時期としては12世紀に位置づけられよう。

註1)　赤羽一郎（1984）『常滑焼――中世窯の様相――』ニュー・サイエンス社

註2)　楢崎彰一（1974）「初期中世陶における三筋文の系譜」『名古屋大学文学部研究論集ＬＸⅣ』 P.99～145

また、P_{26}柱痕からオオムギ穀粒が出土している（P.85 参照）。

３号掘立柱建物跡

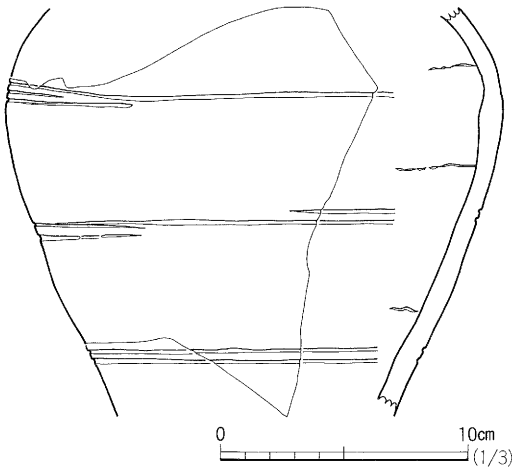
〔位置〕Ｄ～Ｆ－１～３グリッド。

〔確認面〕Ⅲ層上面。

〔規模〕北側は削られており不明だが、残存部分は梁行２間（3.63m：約12尺）、桁行２間以上（4.86m以上）の南北棟と考えられる。内部にも柱穴があり、間仕切りされていた可能性がある。桁行方向はＮ－７°－Ｗである。また、柱穴の並びからみて１m南と0.9m西に廂のつく可能性があるが、柱間が身舎と合致せず疑問が残る。P_{42}とP_{43}は桁行の延長上にあり、１・２号建物跡同様に塀等の施設の可能性がある。

〔柱間寸法〕梁行の平均は1.82m（５尺９寸９分）、桁行の平均は1.87m（６尺１寸７分）。

〔出土遺物〕P_{32}・P_{43}柱痕より土師器坏口縁部片（ロクロ－ミガキ・黒色処理）各１点、P_{33}柱痕より赤焼土器坏口縁部片１点、P_{39}掘り方埋土より土師器坏体部片（不明－ミガキ・黒色処理）１点、甕体部片（ヘラケズリ－ナデ）１点、須恵器甕体部片（平行タタキ－青海波文）２点が出土している。



出土地点	器種	最大径	残存高	産地	登録	写真
pit17	無釉陶器壺	19.8cm	16.5cm	常滑	Ｉ２	35－６
外面色調	内面色調	釉色調		胎土		
暗褐色7.5ＹＲ3／4	黒褐色10ＹＲ3／1	灰オリーブ色5Ｙ4／2		黒褐色10ＹＲ3/1、砂粒ふくむ		

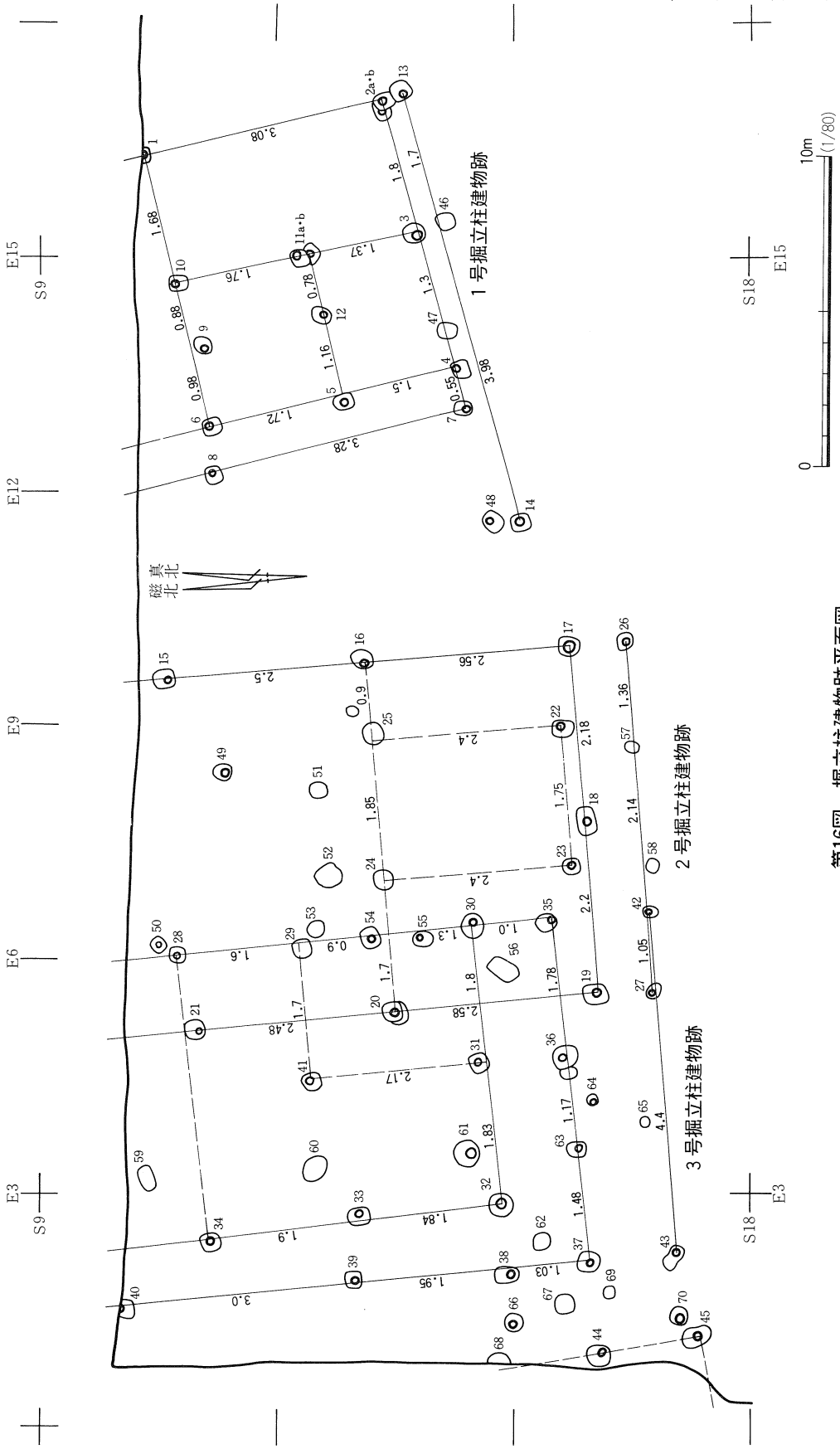
第15図　２号建物Ｐ17出土遺物

組み合わない柱穴

P_{44}・P_{45}・P_{68}は調査区西側にのびる建物跡になる可能性がある。P_{44}柱痕より土師器甕体部片１点が出土している。他の柱穴からは、P_{61}柱痕より木炭、P_{66}柱痕より土師器甕体部片（ヘラケズリ－ナデ）１点、P_{64}柱痕からオオムギ穀粒、米粒が出土している（P.85 参照）。

まとめ

３棟建物跡はいずれも南北棟と考えられ、桁行方向より１号建物跡と２・３号建物跡に２分される。２・３号建物跡は建て替えを示していると考えられる。建物跡の時期は、２号建物跡P_{17}より12世紀の常滑三筋壺が出土しているが、柱穴の検出される１号河川跡Ａ層の堆積年代からみて、近世頃と考えたい。



第16図　掘立柱建物跡平面図

第5表　ピット計測表

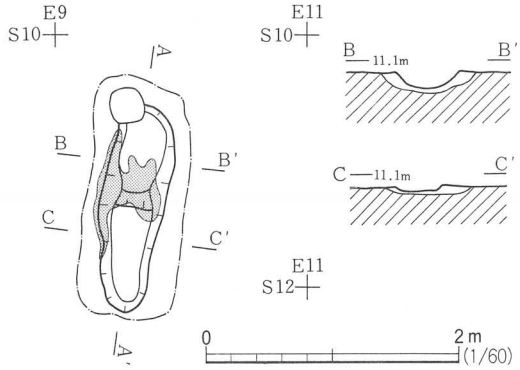
ピット番号		I－P_1	I－P_2	I－P_3	I－P_4	I－P_5	I－P_6	I－P_7
掘り方	平面形	方形	長方形	円形	方形	長方形	長方形	長方形
	径・辺長	22cm	20×24cm	25cm	23cm	22×28cm	22×25cm	18×22cm
	深さ	19.6cm	22.1cm	30.5cm	27.6cm	32.1cm	22.8cm	41.7cm
	土色・土性	10YR5/4・砂	10YR3/2・砂	10YR5/4・砂	10YR5/4・砂	10YR5/4・砂	10YR5/4・砂	10YR5/4・砂
柱痕跡	径	10cm	12cm	12cm	8cm	10cm	10cm	10cm
	土色・土性	10YR2/2・シルト	10YR2/3・シルト	10YR3/2・シルト	10YR3/3・シルト	10YR2/3・シルト	10YR4/3・シルト	10YR2/3・シルト
ピット番号		I－P_8	I－P_9	I－P_{10}	I－P_{11}	I－P_{12}	I－P_{13}	I－P_{14}
掘り方	平面形	方形	円形	長方形	方形	長方形	方形	長方形
	径・辺長	25cm	22cm	22×25cm	22cm	20×28cm	22cm	22×25cm
	深さ	23.6cm	16.8cm	15.7cm	44.8cm	43.5cm	19.1cm	35.3cm
	土色・土性	10YR5/4・砂	10YR5/4・砂	10YR5/4・砂	10YR3/2・砂	10YR5/4・砂	10YR3/2・砂	10YR4/3・砂
柱痕跡	径	10cm	8cm	10cm	10cm	10cm	10cm	12cm
	土色・土性	10YR4/3・シルト	10YR3/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR2/2・シルト	10YR2/3・シルト	10YR2/3・砂	10YR2/2・シルト
ピット番号		II－P_{15}	II－P_{16}	II－P_{17}	II－P_{18}	II－P_{19}	II－P_{20}	II－P_{21}
掘り方	平面形	長方形	円形	楕円形	長方形	長方形	円形	長方形
	径・辺長	26×29cm	26cm	26×32cm	28×39cm	26×30cm	28cm	25×29cm
	深さ	38.4cm	34.5cm	52.0cm	20.1cm	30.7cm	34.6cm	33.4cm
	土色・土性	10YR5/4・砂	10YR5/4・砂	10YR5/2・砂	10YR5/4・砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂
柱痕跡	径	15cm	12cm	18cm	12cm	12cm	16cm	12cm
	土色・土性	10YR3/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR2/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR2/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR3/2・シルト
ピット番号		II－P_{22}	II－P_{23}	II－P_{24}	II－P_{25}	II－P_{26}	II－P_{27}	III－P_{28}
掘り方	平面形	長方形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	方形
	径・辺長	22×28cm	22cm	27cm	27cm	20×23cm	18×22cm	22cm
	深さ	27.1cm	34.6cm	13.8cm	15.2cm	33.9cm	51.5cm	15.5cm
	土色・土性	10YR4/3・砂	10YR5/4・砂	10YR3/2・シルト	10YR2/2・シルト	10YR5/4・砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂
柱痕跡	径	10cm	12cm	なし	なし	12cm	8cm	12cm
	土色・土性	10YR3/3・シルト	10YR3/2・シルト			10YR3/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR2/2・シルト
ピット番号		III－P_{29}	III－P_{30}	III－P_{31}	III－P_{32}	III－P_{33}	III－P_{34}	III－P_{35}
掘り方	平面形	方形	円形	円形	円形	長方形	方形	円形
	径・辺長	22cm	32cm	27cm	30cm	22×28cm	23cm	24cm
	深さ	22.0cm	39.6cm	28.2cm	27.2cm	20.5cm	17.4cm	24.1cm
	土色・土性	10YR3/3・シルト	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂
柱痕跡	径	不明	10cm	10cm	14cm	12cm	10cm	10cm
	土色・土性		10YR3/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR2/2・シルト	10YR2/2・シルト	10YR3/2・シルト
ピット番号		III－P_{36}	III－P_{37}	III－P_{38}	III－P_{39}	III－P_{40}	III－P_{41}	III－P_{42}
掘り方	平面形	円形	楕円形	長方形	方形	方形	円形	楕円形
	径・辺長	32cm	28×30cm	22×32cm	22cm	30cm	25cm	15×19cm
	深さ	34.9cm	41.0cm	11.7cm	27.0cm	31.9cm	41.4cm	13.7cm
	土色・土性	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR5/4・砂
柱痕跡	径	10cm	12cm	10cm	10cm	12cm	12cm	10cm
	土色・土性	10YR3/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR2/2・シルト	10YR2/2・シルト	10YR2/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR3/3・シルト
ピット番号		III－P_{43}	(IV)－P_{44}	(IV)－P_{45}	P_{46}	P_{47}	P_{48}	P_{49}
掘り方	平面形	楕円形	方形	楕円形	方形	方形	楕円形	楕円形
	径・辺長	19×32cm	26cm	24×38cm	22cm	23cm	23×28cm	21×24cm
	深さ	10.9cm	26.9cm	37.8cm	10.4cm	21.8cm	31.0cm	26.7cm
	土色・土性	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/4・シルト質砂	10YR3/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR4/3・砂	10YR4/4・シルト質砂
柱痕跡	径	10cm	8cm	16cm	なし	なし	10cm	10cm
	土色・土性	10YR3/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR2/2・シルト			10YR2/2・シルト	10YR3/2・シルト
ピット番号		P_{50}	P_{51}	P_{52}	P_{53}	P_{54}	P_{55}	P_{56}
掘り方	平面形	方形	円形	楕円形	円形	方形	楕円形	長方形
	径・辺長	20cm	22cm	30×33cm	22cm	22cm	20×28cm	24×39cm
	深さ	19.9cm	8.6cm	12.3cm	17.7cm	21.7cm	20.8cm	18.2cm
	土色・土性	10YR4/4・シルト質砂	10YR3/2・シルト	10YR3/3・シルト	10YR2/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR4/3・シルト質砂	10YR3/3・シルト
柱痕跡	径	8cm	なし	なし	なし	10cm	10cm	なし
	土色・土性	10YR3/2・シルト				10YR2/2・シルト	10YR3/3・シルト	
ピット番号		P_{57}	P_{58}	P_{59}	P_{60}	P_{61}	P_{62}	P_{63}
掘り方	平面形	楕円形	円形	長方形	楕円形	円形	円形	楕円形
	径・辺長	14×16cm	22cm	24×36cm	30×38cm	36cm	24cm	22×25cm
	深さ	5.6cm	23.1cm	16.7cm	15.6cm	19.9cm	6.5cm	17.2cm
	土色・土性	10YR3/3・シルト	10YR3/3・シルト	10YR3/2・シルト	10YR3/2・シルト	10YR4/4・シルト質砂	10YR3/3・シルト	10YR4/4・シルト質砂
柱痕跡	径	なし	なし	なし	なし	14cm	なし	10cm
	土色・土性					10YR3/2・シルト		10YR3/3・シルト
ピット番号		P_{64}	P_{65}	P_{66}	P_{67}	P_{68}	P_{69}	P_{70}
掘り方	平面形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形
	径・辺長	16cm	18×24cm	24cm	28cm	26cm	16cm	26cm
	深さ	14.6cm	5.6cm	23.0cm	5.8cm	11.4cm	11.0cm	10.7cm
	土色・土性	10YR4/4・シルト質砂	10YR4/3・シルト	10YR4/4・シルト質砂	10YR3/3・シルト	10YR2/2・シルト	10YR3/3・シルト	10YR4/4・シルト質砂
柱痕跡	径	12cm	なし	8cm	なし	なし	なし	12cm
	土色・土性	10YR3/3・シルト		10YR3/2・シルト				10YR2/2・シルト

4．平安時代以降の遺構と遺物

2号土坑（第17図）

D・E－4グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認された。2号掘立柱建物跡のP_{15}に切られる。長軸163m、短軸54cmの不整長楕円形で、深さは南半で8cm、北半で13cmと北半が一段下がる。長軸方向はN－6°－Eである。土坑はひとまわり大きな掘り方をもち、掘り方埋土を壁、底としている。掘り方の長軸190cm、短軸80cm、最深16cmである。土坑の壁はゆるやかに立ち上がり、中央部の底面と壁に焼け面が認められ、木炭が付着している。堆積土は4層に分けられる。ℓ1～3は焼土・木炭・灰を多く含むシルトである。ℓ4は中央部から南部の底面を覆う灰層で、繊維質のものが層状にみられ骨粉が混じっている。掘り方埋土には灰白色火山灰が多量に混入している。遺物は出土しなかった。

2号土坑の時期は、掘り方埋土に灰白色火山灰が存在することから、平安時代(10世紀前半)以降と考えられる。



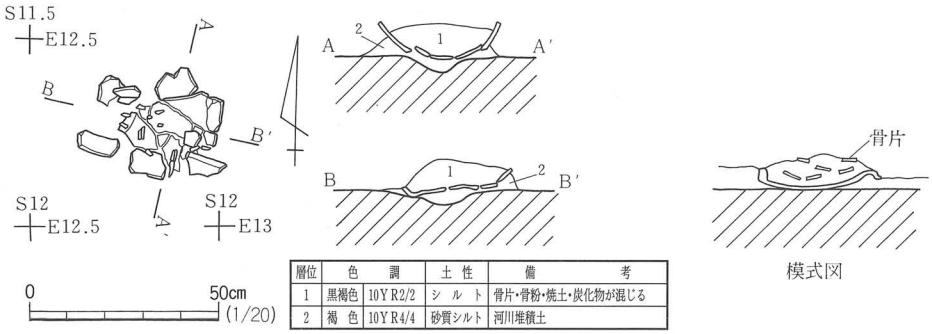
層位	色調		土性	備考
1	暗褐色	7.5YR3/3	砂質シルト	焼土粒、灰混じる
2	灰褐色	7.5YR4/2	砂質シルト	焼土粒、木炭混じる
3	褐色	7.5YR4/3	砂質シルト	焼土粒、灰多量に混じる
4	褐灰色	10YR4/1	シルト	灰多量に混じる、骨片含有
5	褐色	7.5YR4/3	シルト	混在、灰白色火山灰含有
	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	

第17図　2号土坑

蔵骨器と火葬骨（第18・19図）

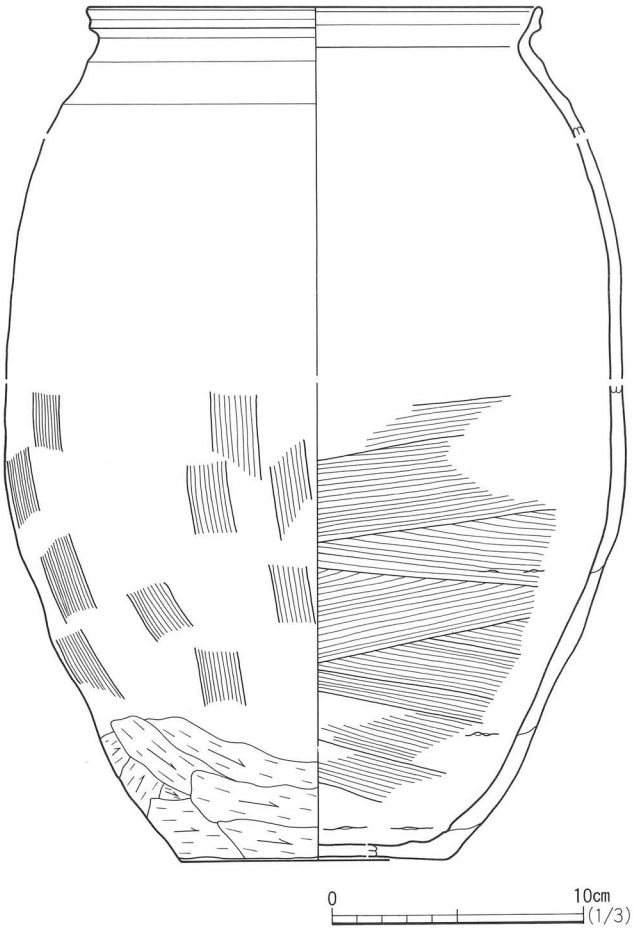
D－5グリッドの1号河川跡堆積土を精査中、横倒しとなった土師器甕を検出した。甕内部の土中には焼骨片が混じっていた。甕は大部分が欠損しており、掘り方等の施設は認められず、周辺にも骨粉が散乱していたことから、本来の位置から動いていると考えられる。

蔵骨器（第19図）土師器甕である。体部下半と口縁部が残存しており、図上で復元した。口径18cm、底径10.5cm、最大径は胴中央部にあり24.5cm、復元器高34cmである。口径は底径よりやや大きく、体部上半は大きく内弯し壺に近い器形である。口縁部は短く、「く」の字状に開いている。全体に摩滅が著しいが、口縁部～体部上端の内外面はロクロナデ、体部下半の外面にはナデとヘラケズリ、内面にはナデが施される。底部はヘラケズリである。所属時期は平安時代である。



層位	色調		土性	備考
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	骨片・骨粉・焼土・炭化物が混じる
2	褐色	10YR4/4	砂質シルト	河川堆積土

第18図　蔵骨器出土状況



器種	外面調整	内面調整	底部	登録	写真
土師器甕	ロ：ロクロナデ、胴下：ナデ、ヘラケズリ	ロ：ロクロナデ、胴下：ナデ	ヘラケズリ	D7	35−7

第19図　蔵　骨　器

2号土坑および蔵骨器出土の焼骨について

焼骨について高橋　理氏（東北大学文学部考古学研究室）に鑑定を依頼した。

2号土坑出土焼骨　火を受けて白色化しているが、人骨であるとは断定できない。

蔵骨器内焼骨　全て人骨であり、熱を受けて割れ、変形が見られるので、火葬後土器内に納めたものと推定される。

○椎骨片・上腕骨片（右側・遠位端）・肋骨片・四肢骨の一部・大腿骨（or上腕骨）の骨頭部破片が出土している。全て白色化して変形が著しい。

○骨自体は決して小さくはないが、上腕骨の骨端部の一部に癒着の未了の線が残っているので、完全に成長しきった人間ではない（十代）と思われる。

○性別は不明。

○丈夫であるはずの歯や頭骨が見つけられない。また、指骨、中手・中足骨の肢端部も見つけ

られない。出土状況からするとある程度の骨は紛失していると思われる。しかし、骨片は細片化し混在しているのだから、見つけられないものがあるということは、それらの骨が甕に納める以前の段階で失われていたものと考えたい。人骨そのものの性格（罪人？）によるものか？

２号土坑について

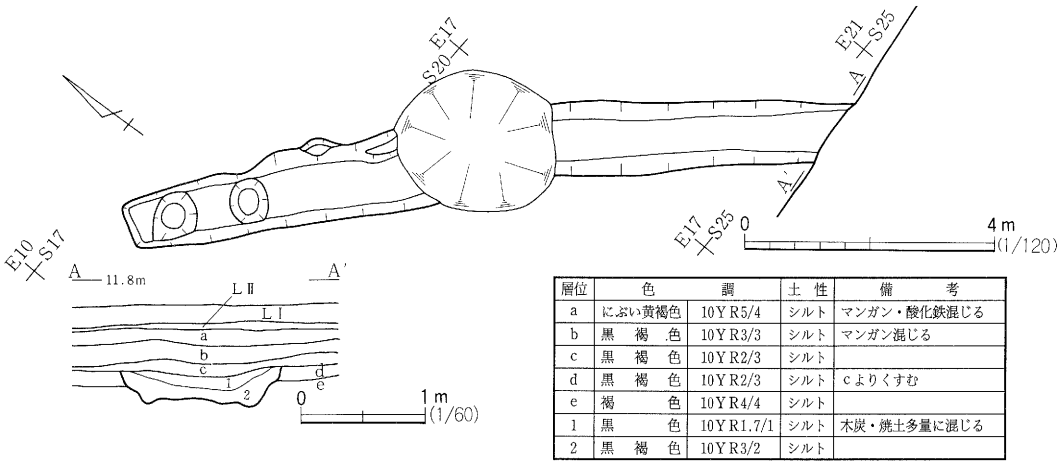
２号土坑の機能については、掘り方をもち、人間が入るくらいの大きさである他に、周辺から火葬骨を納めた蔵骨器が出土したという状況から、火葬施設であった可能性が高い。類似する遺構は松木遺跡（工藤1986）、後河原遺跡（佐藤・兼田1985）から発見されている。

２号溝跡（第20図）

Ｆ－４、Ｇ－４～６、Ｈ－６・７グリッドに位置する。検出面は１号河川跡Ａ層上面から約30cm下がった面である。Ｆ－４グリッドから南東方向へ向かい、調査区外に延びる。長さ約11ｍ、上端幅約1.1ｍ、下端幅約0.8ｍ、深さ約20cmである。壁はやや急に立ち上がり、底面はほぼ平坦だが、小さな凹凸がみられる。堆積土は２層に分けられ、ℓ１には木炭、焼土が多く混じる。

出土遺物は、土師器坏口縁部片（ロクロ－ミガキ・黒色処理）、甕体部片（ロクロ－ロクロ）（不明－ナデ）各１点が出土している。

２号溝跡は、検出層位と出土遺物から平安時代かそれ以降に位置づけられる。



層位	色調		土性	備考
a	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	マンガン・酸化鉄混じる
b	黒褐色	10YR3/3	シルト	マンガン混じる
c	黒褐色	10YR2/3	シルト	
d	黒褐色	10YR2/3	シルト	cよりくすむ
e	褐色	10YR4/4	シルト	
1	黒色	10YR1.7/1	シルト	木炭・焼土多量に混じる
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	

第20図　2号溝跡

５．奈良時代の遺構と遺物

竪穴住居跡（第21・22図）

〔位置と確認面〕Ｃ・Ｄ・Ｅ－１・２・３グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認されたが、北

半は削平されており、Ⅳ層上面で掘り方のみ確認された。

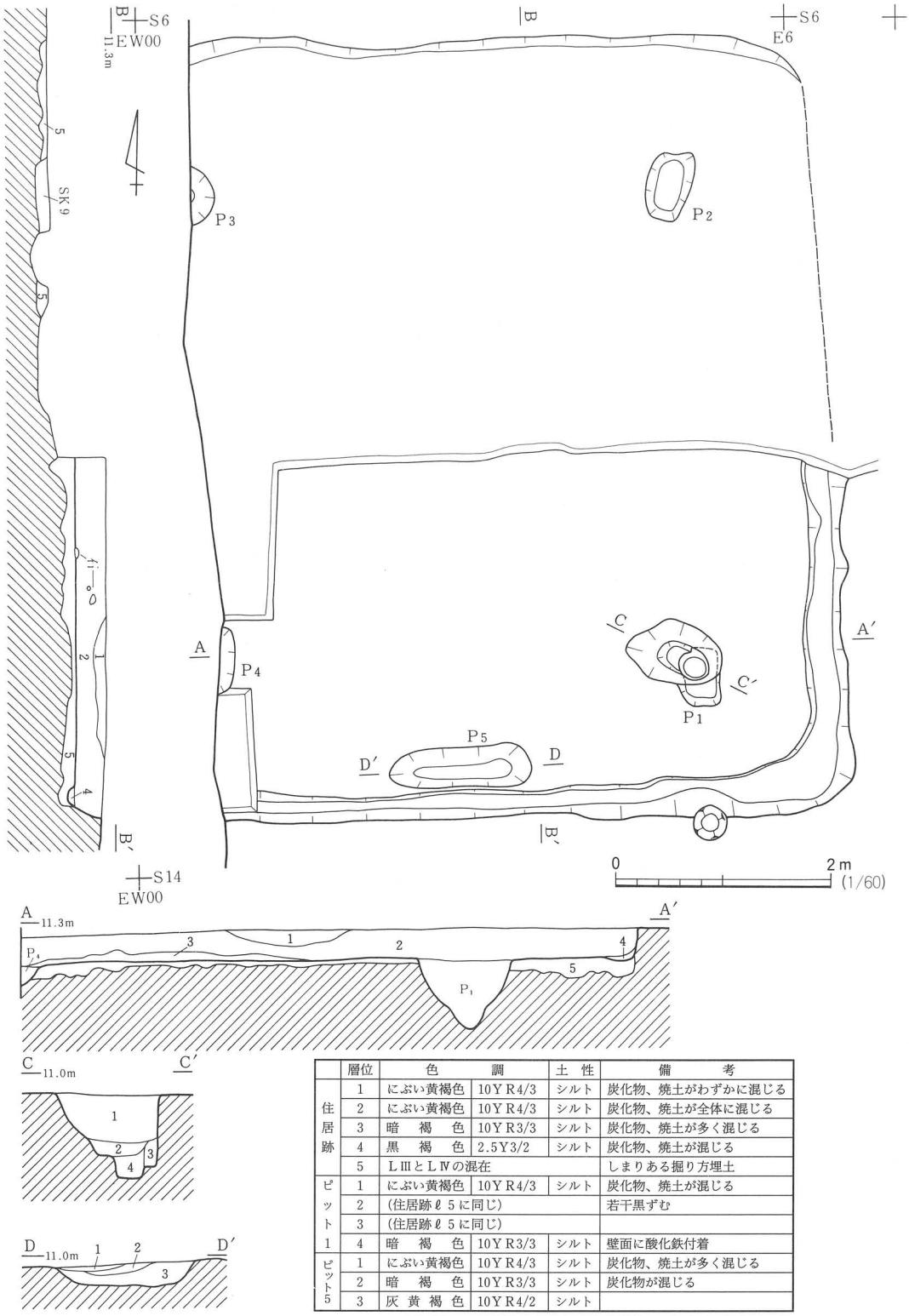
〔**重複**〕南半は２・３号掘立柱建物跡に切られ、北半は３～11号土坑に切られる。

〔**形状**〕削平された部分があるが、一辺約7.3mの正方形であったと考えられる。Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は約25cmである。床面は掘り方埋土上面であり、堅くしまって平坦である。南壁と東壁の直下には周溝が巡る。幅20～60cm、深さ４～７cmである。床面および掘り方埋土中より４個のピットを検出した。柱痕跡を確認できたのはP_1のみであるが、４個のピットは対角線上に位置しているため、これらは柱穴であったと考えられる。カマドは調査部分に認められないこと、床面の南西部に焼土・木炭が散布していた点からみて、西壁南寄りにあった可能性が高い。他に、南壁中央部の周溝に接するように長楕円形の落ち込みが確認された。長軸132cm、短軸37cm、深さ24cmをはかる。出土遺物はない。

〔**堆積土**〕４層に細分された。ℓ１は中央部にのみ、ℓ２は南西部を除き南半全面の床面を覆う。ℓ３は南西部床面上にのみ認められ生活層と考えられる。ℓ４は周溝内堆積土である。これらは自然流入土による堆積層と考えられ、２層が床面まで厚く均一に堆積していることからみて、堆積速度は非常に速かったと推定される。住居跡掘り方底面は凹凸があり、全体に北に向って傾斜する。埋土は厚さ８～20cmで、堅くしまっている。

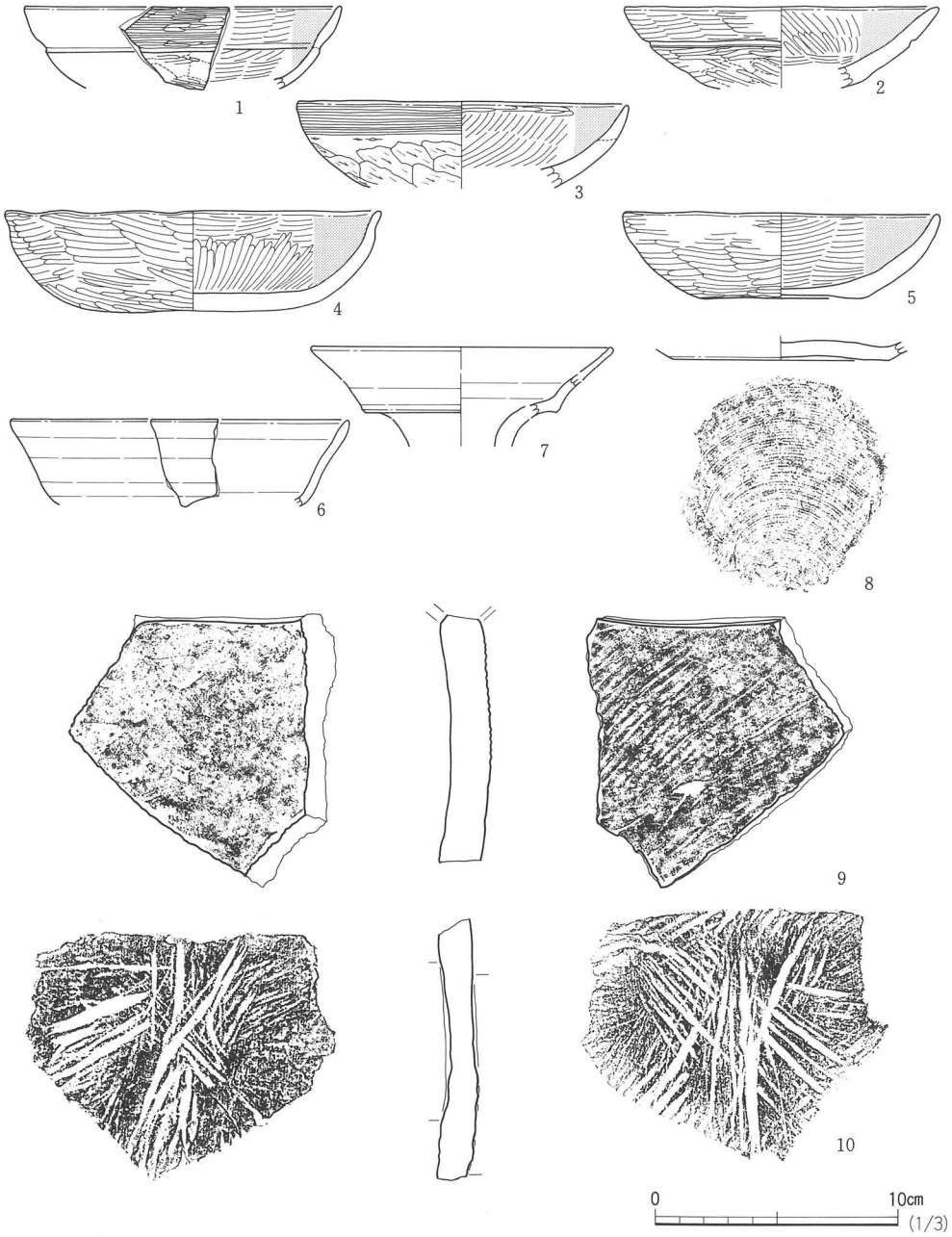
〔**出土遺物**〕（第22図）　床面上の出土は少なく、大部分は床面直上の２層下部から出土している。遺物には、土師器坏・甕・埦・須恵器坏・甕などがあるが、破片が多く図示できたものは少ない。

土師器坏　１は体部外面の中央部に段を有するもので、内面にも外面に対応した軽い段が認められる。段の上は内弯気味に立ち上がる。調整は、段の下がヘラケズリ後ヘラミガキ、段の上が横ナデの後ヘラミガキで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。２は体部外面の中央部に沈線をもつもので、内面に対応する段等はみられない。丸味をもつ体部から、そのまま内弯気味に立ち上がるが、沈線を境として上下の傾きの変化はない。調整は、外面は沈線の下がヘラケズリ後ヘラミガキ、沈線の上がヘラミガキで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。坏としたが、高坏となる可能性もある。３は体部から丸味をもって立ち上がり、口縁部が内弯気味のものである。調整は、外面は口縁部が横ナデ、体部がヘラケズリで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。４は平底風の丸底のもので、底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部が小さく外反している。外面は、口縁部～体部上半がヘラミガキ、体部下半～底部がヘラケズリ後ヘラミガキで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。５は丸底風の平底のもので、底部はヘラケズリにより意識的に作っている。底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部が内弯気味である。調整は、外面は口縁部がヘラミガキ、体部～底部がヘラケズリ後ヘラミガキで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。



	層位	色調		土性	備考
住居跡	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化物、焼土がわずかに混じる
	2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化物、焼土が全体に混じる
	3	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物、焼土が多く混じる
	4	黒褐色	2.5Y3/2	シルト	炭化物、焼土が混じる
	5	LⅢとLⅣの混在			しまりある掘り方埋土
ピット1	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化物、焼土が混じる
	2	(住居跡ℓ5に同じ)			若干黒ずむ
	3	(住居跡ℓ5に同じ)			
	4	暗褐色	10YR3/3	シルト	壁面に酸化鉄付着
ピット5	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化物、焼土が多く混じる
	2	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物が混じる
	3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	

第21図　1号住居跡



番号	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	登録	写真
1	2層	土師器坏	(13.0)			ヨコナデ→ヘラミガキ、ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	C3	36－3
2	2層+床面	土師器坏	(12.9)			ヘラミガキ、ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	C4	36－4
3	床面	土師器坏	(13.5)			ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	C5	36－1
4	床面	土師器坏	(15.4)		4.2	ヘラミガキ、ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	C6	36－2
5	床面	土師器坏	(13.0)	(6.7)	3.5	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	C7	36－5
6	2層	須恵器坏	(13.9)			ロクロナデ、ヘラケズリ？	ロクロナデ	E16	36－5
7	2層	須恵器瓶?						E17	36－7
8	2層	須恵器坏		8.8		回転糸切り無調整		E18	36－8
9	2層	須恵器甕				平行タタキ目、稜に磨痕	ナデ、稜に磨痕	E19	36－9
10	2層	須恵器甕				平行タタキ目、擦痕	ナデ、擦痕	E20	36－10

第22図　1号住居跡出土遺物

須恵器　6は坏の破片である。丸味をもつ体部下端から、ほぼ直線的に外傾している。8は坏の底部で、径8.8cmである。回転糸切り痕(「前引き糸切り」[註]) が認められる。7は有段口縁の甕の一部と推定したが、高台付壺の高台部分の可能性もある。

研磨痕跡のある須恵器片　9・10は須恵器甕の体部破片に研磨痕の認めれるものである。9は平坦な割れ口の両側縁端部に研磨痕がある。10は内外面に線状の研磨痕が走り、切り込まれ薄くなっている。金属器の砥石として転用したものと考えられる。

註）小川貴司（1979）「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』101　P.21～41

第6表　住居跡出土遺物破片集計表

種別	器種	部位	器面調整	1層	2層	周溝	ピット1(柱痕)	ピット2(柱痕)	床面	計
土師器	坏	口縁部	横ナデ―ミガキ(黒色)		1					1
			ミガキ―ミガキ(黒色)		4					4
			ミガキ(黒色)―ミガキ(黒色)		3					3
		体部	ミガキ―ミガキ(黒色)	1	7	2	1			11
			ミガキ(黒色)―ミガキ(黒色)		1	1		2		4
			不明―ミガキ(黒色)		3					3
		底部	手持ヘラケズリ―ミガキ(黒色)	2	4					6
			不明―ミガキ(黒色)		2				1	3
	埦	体部	ナデ―ミガキ	1	1	1				3
	甕	体部	ナデ―ナデ		24	1	2			27
			ナデ―刷毛目		3					3
			ナデ―ヘラナデ		1					1
			不明―ナデ		17					17
			不明―不明		8			4		12
		底部	ナデ―ヘラナデ		1					1
			木葉痕		3					3
	小計			4	83	5	3	6	1	102
須恵器	坏	口縁部	ロクロ―ロクロ		2					2
	甕	口縁部	ロクロ―ロクロ		1					1
		頸部	ロクロ―ロクロ						1	1
		体部	平行タタキ―青海波文	1	4				1	6
			平行タタキ―ナデ		8	2				10
			回転ケズリ―ロクロ		1					1
	小計			1	16	2	0	0	2	21
合計				5	99	7	3	6	3	123

掘立柱建物跡（第14図）

V層上面まで削平されているグリッドA列の部分でピットが4個検出された。掘り込み面はさらに上層である可能性が高い。P_1～P_3はA－5・6・7グリッドに位置し、東西方向に並んでいることより、調査区外に伸びる掘立柱建物跡の一部であると考えられる。柱間はP_1－P_2が3.75m、P_2－P_3が3.50mである。各ピットの形状は、P_1（掘り方：径40cmの円形・柱痕跡：径17cmの円形、深さ35cm）P_2（掘り方：38×45cm楕円形・柱痕跡：径20cm円形、深さ35cm）P_3（掘り方：30×44cm楕円形・柱痕跡：径20cm円形、深さ20cm）である。P_4はA－1グリッドに位置し、周辺にはピットがないことより調査区外へ伸びる建物跡の南東隅柱と考えられる。掘り方：40×60cm楕円形、柱痕跡：径20cm円形、深さ60cmであり、抜き取り痕跡がある。

遺物は第7表に示すとおりP_1・P_2より出土している。遺物の中にロクロ使用の土師器が出土していないこと、周辺から古墳時代遺構・遺物がみられないことから、P_1～P_3で示される

建物跡は奈良時代のものと考えたい。

第７表　柱穴出土遺物

ピット１出土遺物		ピット２出土遺物	
柱痕跡	土師器(坏)――体部破片(ミガキ―ミガキ黒)１点	柱痕跡	土師器(坏)――体部破片(不明―不明)　３点 土師器(甕)――底部破片(不明―ナデ)　１点
掘り方埋土	須恵器(坏)――体部破片(ロクロ―ロクロ)　２点	掘り方埋土	土師器(甕)――体部破片(不明―不明)　１点 須恵器(坏)――口縁部片(ロクロ―ロクロ)　１点 須恵器(甕)――体部破片(平行タタキ―ナデ)１点

６．縄文時代の遺構と遺物

(1)　Ⅻ層上面検出の土坑

12号土坑（第24図）

Ｅ・Ｆ－２グリッドに位置する。長さ155cm、幅95cmの長方形である。深さは最大37cmで、壁面の立ち上がりは急である。底面は平坦で、長さ125cm、幅65cmの長方形で中央部にピットがある。堆積土は８層に分けられ、砂が主体であり壁近くに粘土が混じる。

底面のピットは20×15cmの楕円形で深さ60cmである。中央部には径７cm、長さ43cmの棒状の痕跡が認められる。

13号土坑（第24図）

Ｅ・Ｆ－３グリッドに位置する。長さ145cm、幅80cmの中央がくびれた長方形である。深さは最大78cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、北東壁はオーバーハングする。底面は長さ130cm、幅70cmの長方形で中央部が盛り上がり３個のピットがある。堆積土は６層に分けられ、砂主体であり、壁と底面の近くに粘土が混じる。

底面盛り上がり部を截ち割ったところピットに対応して棒状痕跡が認められた。№１は径９cm、長さ38cm、№２・３は径６cm、長さ50cmである。掘り方は認められなかった。

14号土坑（第24図）

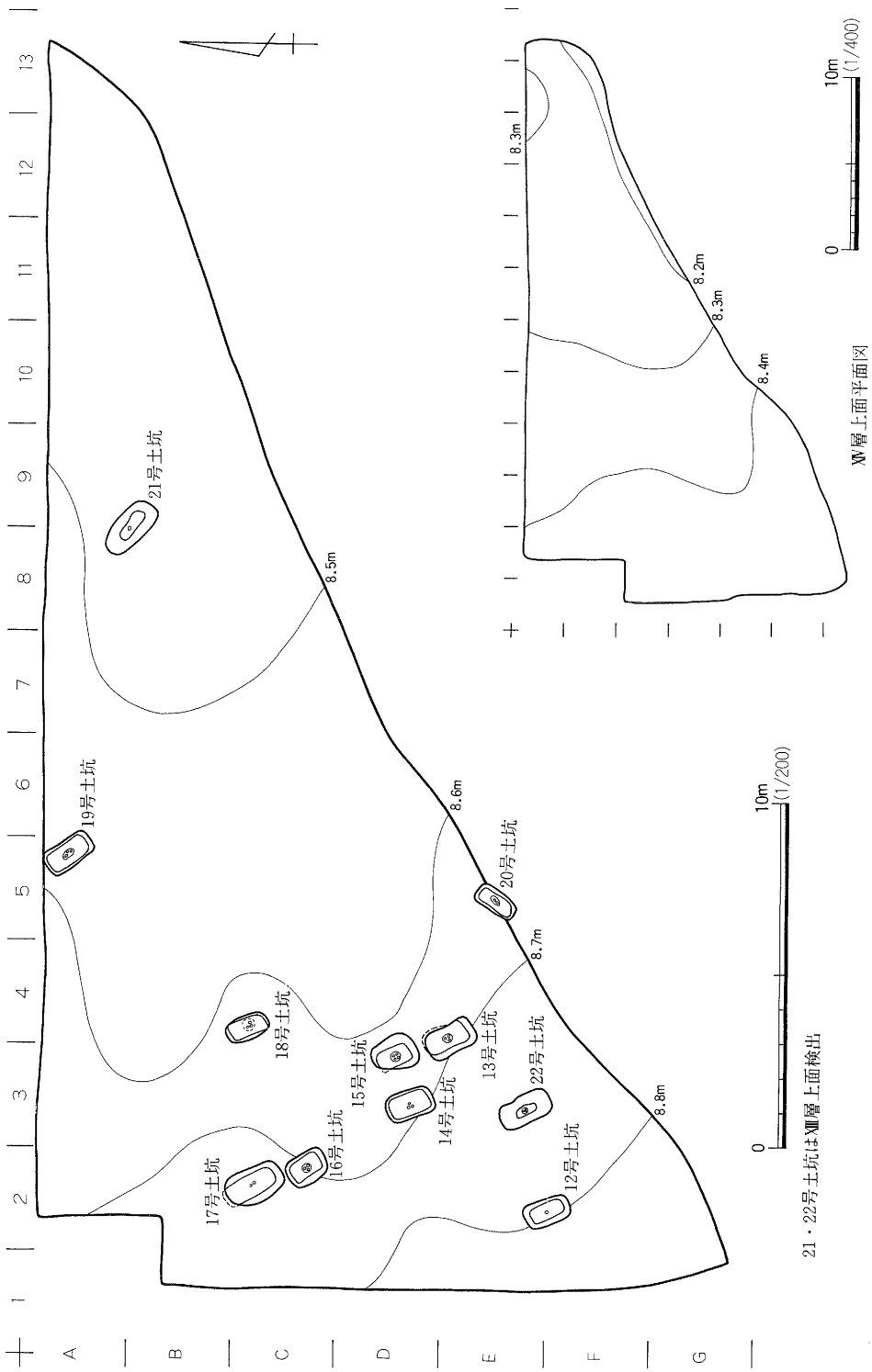
Ｄ－３グリッドに位置する。長さ140cm、幅80cmの長方形である。深さは最大45cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は長さ130cm、幅70cmの長方形で中央部が盛り上がり３個のピットがある。堆積土は６層に分けられ、壁近くと底面上に粘土と砂の混在層がある。

底面の盛り上がり部を截ち切ったところ、ピットに対応して棒状痕跡とそれらの掘り方が認められた。№１は径５cm、長さ25cm、№２は径５cm、長さ45cmであり、№３は棒状痕跡が認められなかった。

出土遺物は、ℓ３より剝片が１点出土している。石材は珪質頁岩で、焼けはじけが著しい。

15号土坑（第24図）

Ｄ－３・４グリッドに位置する。長さ130cm、最大幅105cmのダルマ形である。深さは最大32cmで、壁は急に立ち上がり上端部はながらかになる。底面は長さ115cm、幅55cmの長方形で中央



第23図　Ⅻ・ⅩⅢ層上面遺構配置図

部が5cm程盛り上がり、ピットが4個ある。堆積土は6層に分けられ、ℓ1～3は砂層、ℓ4は砂と粘土の混在層、ℓ5は堅く締まった粘土層、ℓ6が砂層である。土坑上端が大きく広がっていることからみて、ℓ5は壁が崩落した際の層と考えられる。

底面盛り上がり部を截ち割ったところ、ピットに対応した棒状痕跡とそれらの掘り方が認められた。棒状痕跡は、No.1は径3cm、長さ48cm、No.2は径3cm、長さ55cmで、No.3・4には認められなかった。No.1は東に傾く。掘り方は径32cmの円形で深さ55cmをはかる。

16号土坑（第25図）

C－2グリッドに位置する。長さ130cm、幅110cmの長方形である。深さは最大42cmで、壁面は急に立ち上がる。底面は長さ110cm、幅65cmの長方形で、中央部がわずかに盛り上がりピットが3個ある。堆積土は5層に分けられ、上層が砂、底面近くが砂と粘土の混在層である。

底面盛り上がり部を截ち割ったところ、ピットに対応して棒状痕跡とそれらの掘り方が認められた。棒状痕跡はNo.1が径5cm、長さ30cmでやや東に傾き、No.2は径4cm、長さ40cmでやや南に傾き、No.3は径6cm、長さ40cmでやや西に傾く。掘り方は径20cmの円形で深さ40cmである。

出土遺物は、ℓ5より剝片が4点出土している。いずれも焼けはじけが著しい。うち1点はD－2グリッドⅫ層出土剝片と焼けはじけ面で接合する。石材は珪質頁岩である。

17号土坑（第25図）

B・C－1グリッドに位置する。長さ175cm、幅115cmの楕円形である。深さは最大120cmであり、壁面はほぼ垂直に立ち上がり北壁はオーバーハングする。底面は長さ160cm、幅75cmの長方形で、中央部にピットがある。堆積土は15層に分けられ、砂が主体で壁近くや底面上には砂と粘土の混在層がある。

底面のピットは径25cmの円形で深さ50cmである。検出面に小孔が2個あり、截ち割ったところ小孔に対応して棒状痕跡が認められた。No.1は径4cm、長さ45cmでやや東に傾き、No.2は径6cm、長さ43cmである。

出土遺物は、ℓ12より土器片1点、剝片3点が出土している。土器は文様不明の細片で、厚さ約7mmである。剝片はいずれも焼けはじけがある。石材は珪質頁岩である。

18号土坑（第25図）

B・C－4グリッドに位置する。長さ140cm、幅110cmの楕円形である。深さは最大55cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、北東隅と南西隅がオーバーハングする。底面は長さ130cm、幅70cmの長方形で、中央部が盛り上がりピットが3個ある。堆積土は7層に分けられ、砂が主体で壁近くに粘土が混じる。

底部盛り上がり部を截ち割ったところ、ピットに対応して棒状痕跡が認められ、それらの掘り方が認められた。棒状痕跡はNo.1が径4cm、長さ35cm、No.2が径5cm、長さ36cm、No.3が径

6㎝、長さ38㎝である。いずれもほぼ垂直に立つ。掘り方は径20㎝の円形で、深さ40㎝である。

第19号土坑（第25図）

A－5・6グリッドに位置する。長さ125㎝、幅9㎝の長方形である。深さは最大27㎝で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は長さ120㎝、幅85㎝の長方形で、中央部がわずかに盛り上がり、ピットが3個ある。堆積土は6層に分けられ、砂が主体となる。

底面盛り上がり部を截ち割ったところ、ピットに対応した棒状痕跡と、それらの掘り方が認められた。棒状痕跡は、№1が径7㎝、長さ65㎝でやや北に傾いており、№2・3は径4㎝、長さ20㎝前後である。掘り方は径25㎝の円形で、深さ65㎝である。

出土遺物は、ℓ4より土器片が1点出土している。文様不明で、厚さ約4㎜である。

第20号土坑（第26図）

E－5グリッドに位置する。南東部が1号河川跡に切られているが、長さ120㎝、幅55㎝の長方形と考えられる。深さは最大38㎝で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は、長さ105㎝、幅40㎝の長方形で、中央部でわずかに盛り上がり、ピットが2個ある。堆積土は4層に分けられ、砂が主体である。

底部盛り上がり部を截ち割ったところ、ピットに対応する棒状痕跡とそれらが掘り方が認められた。棒状痕跡は残存状況が悪く、径2㎝、長さ30㎝程度と推定される。掘り方は径18㎝の円形で深さ34㎝である。

(2) Ⅷ層上面検出の土坑

21号土坑（第26図）

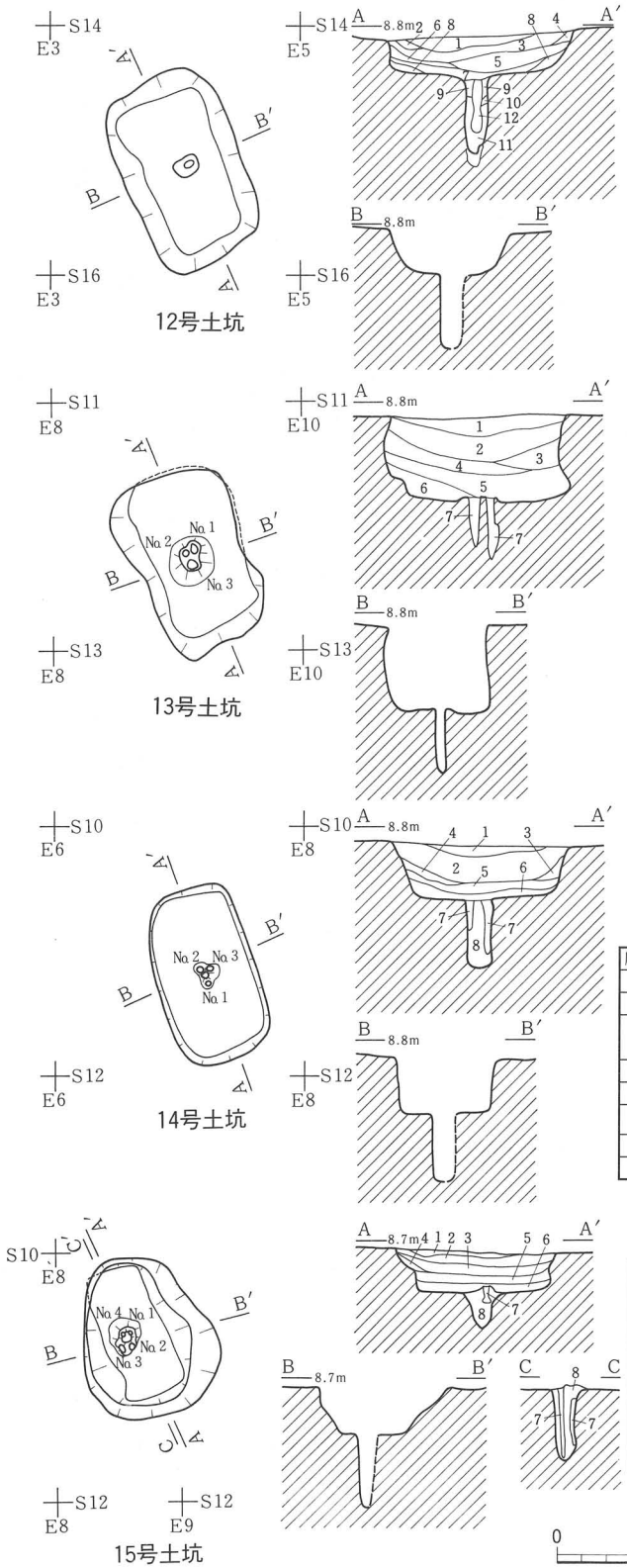
A・B－8・9グリッドに位置する。長さ160㎝、幅90㎝の長楕円形である。深さは最大78㎝で、壁面は急に立ち上がる。底面は、長さ100㎝、幅30㎝の長方形で、中央部にピットがある。堆積土は7層に分けられ、粘土が主体でわずかに砂層がはさまる。

底面のピットは27×20㎝の楕円形で、深さ15㎝である。ピット内には石が埋まっており、棒状痕跡の有無は確認できないが、ピット底面には径4㎝、深さ15㎝の小孔がある。

22号土坑（第26図）

E・F－3グリッドに位置する。長さ160㎝、幅80㎝の長楕円形である。深さは最大88㎝で壁面は急に立ち上がる。底面は長さ70㎝、最大幅30㎝の不整形で、北側が一段下がりピットがある。堆積土は9層に分けられ、粘土が主体でわずかに砂層がはさまる。

底面のピットは径20㎝の円形で深さ20㎝である。ピット上面に小孔が3個あり、そのうち2個はピット底面まで続く。1つは径3㎝、深さ30㎝、もう1つは径3㎝、深さ26㎝である。



層位	色調		土性	備考
1	黄褐色	2.5Y5/4	砂	
2	オリーブ褐色	2.5Y4/4	砂	
3	暗オリーブ色	5Y4/3	砂	
4	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘土	ℓ3と粘土の混在
5	暗オリーブ色	5Y4/3	砂	
6	黄褐色	2.5Y5/4	砂	黄色粘土粒が混じる
7	暗オリーブ色	5Y4/3	砂	
8	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	粘土	
9	暗オリーブ色	5Y4/3	砂	LⅧが混じる
10	暗オリーブ色	5Y4/3	粘土	LⅢのブロック
11	オリーブ褐色	2.5Y4/6		砂と粘土の混在
12	オリーブ褐色	2.5Y4/4	粘土	

12号土坑堆積土

層位	色調		土性	備考
1	オリーブ褐色	2.5Y4/4	砂	黄色シルトが混じる
2	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂	
3	灰オリーブ色	5Y4/2	粘土	
4	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂	ℓ2と混在
5	黄褐色	2.5Y5/4	砂	混在
	緑灰色	7.5GY6/1	砂	
6	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	粘土	ℓ5と混在
	明黄褐色	2.5Y7/6	粘土	
7	暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	粘土	LⅣ混入、ベタベタする

13号土坑堆積土

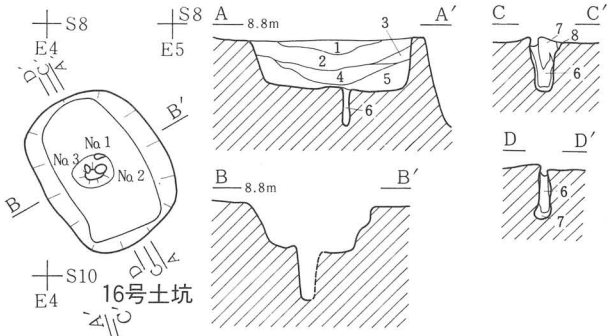
層位	色調		土性	備考
1	暗緑灰色	10GY4/1	砂	
2	暗緑灰色	7.5GY4/1	砂	黄色粘土ブロック混じる
3	暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	粘土	混在、フレイク出土
	緑灰色	7.5GY4/1	砂	
4	暗緑灰色	10GY4/1	砂	
5	緑灰色	10GY5/1	砂	ℓ2、4より粒径大
6	暗緑灰色	7.5GY4/1	粘土混じり砂	しまっている
7	オリーブ褐色	2.5Y4/4	粘土	ベタベタしている
8	暗オリーブ色	7.5Y4/3	砂	オリーブ黒色(5Y3/1)粘土が混入

14号土坑堆積土

層位	色調		土性	備考
1	暗オリーブ色	7.5Y4/3	砂	酸化鉄が混じる
2	暗オリーブ色	2.5GY4/1	砂	酸化鉄が混じる
3	灰オリーブ色	7.5Y4/2	砂	
4	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂中に粘土が混入	
5	暗オリーブ灰色	5GY3/1	粘土	堅くしまる
6	暗緑灰色	10GY4/1	砂	
7	暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	粘土	ベタベタする
8	暗オリーブ色	7.5Y4/3	砂	オリーブ黒色(5Y2/2)粘土混入

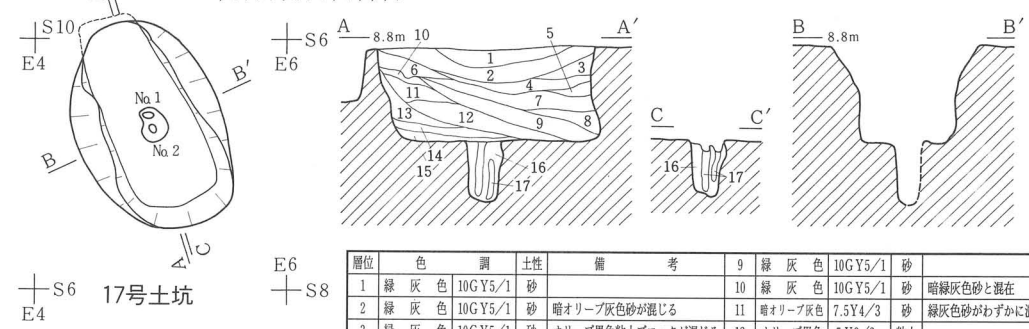
15号土坑堆積土

第24図　12・13・14・15号土坑



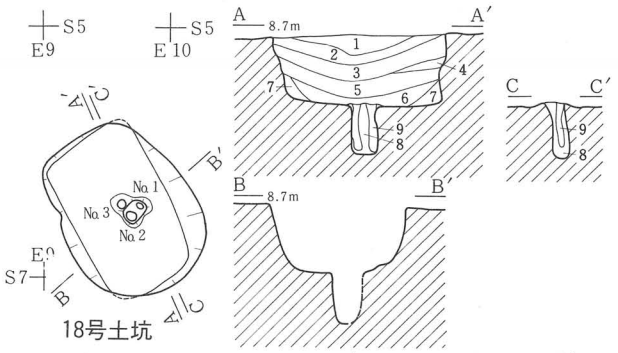
層位	色調		土性	備考
1	暗緑灰色	7.5GY4/1	砂質シルト	緑灰砂、黄褐シルトなど混じる
2	緑灰色	10GY5/1	砂	黄褐シルトが混じる
3	緑灰色	10GY5/1	砂	混在
	暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	粘土	
4	緑灰色	10GY5/1	砂	
5	緑灰色	10GY5/1	砂	混在
	暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	粘土	
6	暗オリーブ灰色	5GY3/1	粘土	ベタベタする
7	緑灰色	7.5GY6/1	砂	
8	暗緑灰色	7.5GY3/1	シルト	

16号土坑堆積土



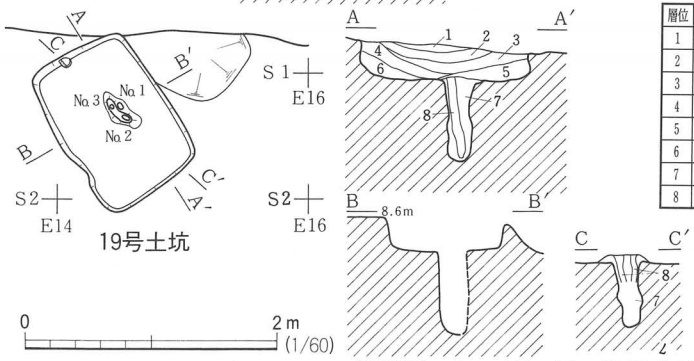
層位	色調		土性	備考
1	緑灰色	10GY5/1	砂	
2	緑灰色	10GY5/1	砂	暗オリーブ灰色砂が混じる
3	緑灰色	10GY5/1	砂	オリーブ黒色粘土ブロックが混じる
4	緑灰色	10GY5/1	砂	暗オリーブ灰色砂が混じる
5	緑灰色	10GY5/1	砂	オリーブ黒色粘土ブロックが混じる
6	緑灰色	10GY5/1	砂	暗オリーブ灰色砂が混じる
7	緑灰色	10GY5/1	砂	オリーブ黒色粘土がわずかに混じる
8	オリーブ黒色	5Y3/2	粘土	混在
	緑灰色	10GY4/1	砂	
9	緑灰色	10GY5/1	砂	
10	緑灰色	10GY5/1	砂	暗緑灰色砂と混在
11	暗オリーブ灰色	7.5Y4/3	砂	緑灰色砂がわずかに混じる
12	オリーブ黒色	5Y3/2	粘土	
13	緑灰色	7.5GY5/1	砂	暗オリーブ灰色砂ブロック混じり、堅くしまる
14	緑灰色	7.5GY5/1	砂	堅くしまる
15	暗緑灰色	7.5GY4/1	粘土	
16	緑灰色	7.5GY5/1	砂	
17	暗オリーブ灰色	5GY3/1	粘土	ベタベタする

17号土坑堆積土



層位	色調		土性	備考
1	オリーブ色	5Y5/4	砂質シルト	
2	暗緑灰色	10GY4/1	砂	
3	暗緑灰色	10GY4/1	砂	
4	暗緑灰色	10GY3/1	粘土	暗緑灰色砂混じる
5	暗緑灰色	10GY4/1	砂	ℓ3に比べ、粒径が大
6	暗緑灰色	10GY4/1	砂	暗緑灰色粘土ブロックが混じる
7	暗緑灰色	10GY4/1	砂	混在
	暗緑灰色	10GY3/1	粘土	
8	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	砂	暗緑灰色粘土が混じる
9	暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	粘土	ベタベタする

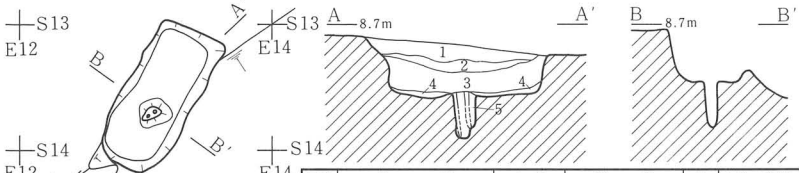
18号土坑堆積土



層位	色調		土性	備考
1	オリーブ黒色	5Y3/2	砂	
2	オリーブ黒色	7.5Y3/2	砂	
3	暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	砂	
4	暗緑灰色	7.5GY4/1	砂	
5	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	砂	
6	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	
7	オリーブ灰色	10Y4/2	砂	オリーブ黒色粘土が混じる
8	オリーブ黒色	10Y3/1	粘土	ベタベタする

19号土坑堆積土

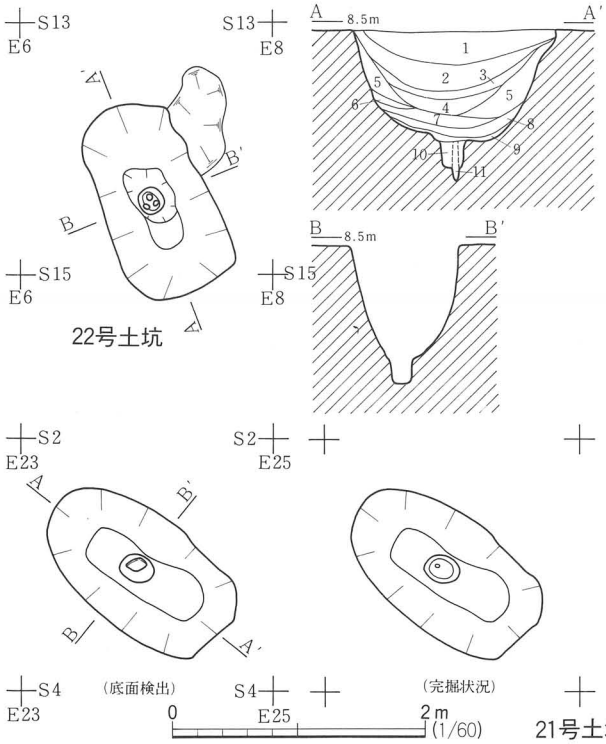
第25図　16・17・18・19号土坑



20号土坑

層位	色調		土性	備考
1	黄褐色	2.5Y5/4	砂質シルト	
2	黄褐色	2.5Y5/4	砂	混在
	暗緑灰色	10GY4/1	粘土	
3	オリーブ灰色	2.5GY5/1	砂	ℓ2より粒径大
4	オリーブ灰色	2.5GY5/1	砂	にぶい黄色粘土が混じる
5	暗緑灰色	7.5GY3/1	シルト	粘性あり

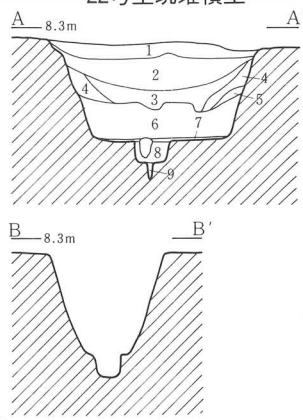
20号土坑堆積土



22号土坑

層位	色調		土性	備考
1	暗緑灰色	10GY4/1	粘土	混在
	灰オリーブ色	7.5Y5/3	粘土	
2	暗緑灰色	10GY4/1	粘土	
3	暗緑灰色	10GY4/1	粘土	緑灰色砂が混じる、堅い
4	緑灰色	5G6/1	砂	暗緑灰色粘土がわずかに混じる、堅い
5	暗緑灰色	7.5GY3/1	粘土	
6	緑灰色	5G6/1	砂	混在
	暗緑灰色	7.5GY3/1	粘土	
7	緑灰色	5G4/1	粘土	
8	暗緑灰色	10GY3/1	粘土	混在
	暗黄褐色	2.5Y6/8	砂	
9	緑黒色	10GY2/1	粘土	ベタベタする

22号土坑堆積土



21号土坑

層位	色調		土性	備考
1	暗オリーブ色	5Y4/3	粘土	黄褐色砂粒がわずかに混じる
2	オリーブ黒色	5Y3/2	粘土	黄褐色砂粒がわずかに混じる
3	オリーブ黒色	7.5Y3/2	粘土	黄褐色砂粒が混じる
4	オリーブ黒色	7.5Y3/2	粘土	混在
	明黄褐色	2.5Y7/6	砂	
5	明黄褐色	2.5Y7/6	砂	オリーブ黒色粘土が混じる
6	オリーブ黒色	7.5Y2/2	粘土	
7	明黄褐色	2.5Y7/6	砂	オリーブ黒色粘土がわずかに混じる
8	オリーブ黒色	7.5Y2/2	粘土	
9	明黄褐色	2.5Y7/6	砂	
10	灰オリーブ色	7.5Y5/2	砂	粘土と混在
11	灰オリーブ色	7.5Y4/2	粘土	

21号土坑堆積土

第26図　20・21・22号土坑

第8表　土坑計測表

No.	平面形	長軸	短軸	底面形	長軸	短軸	深さ	掘り方の形	径	深さ	柱痕跡	長軸方向
12	長方形	155	95	長方形	125	65	37	楕円形	20×15	60	1	N23°W
13	長方形	145	80	長方形	130	70	78				3	N22°W
14	長方形	140	80	長方形	130	70	45	円形？	24	55	3	N14°W
15	ダルマ形	130	105	長方形	115	55	32	円形？	32	55	2～4	N24°W
16	長楕円形	130	110	長方形	110	65	42	円形？	20	40	3	N28°W
17	楕円形	175	115	長方形	160	75	120	楕円形？	26	50	2	N21°W
18	楕円形	140	110	長方形	130	70	55	円形？	20	40	3	N28°W
19	長方形	125	90	長方形	120	85	27	円形？	25	65	3	N33°W
20	長方形	120	55	長方形	105	40	38	円形？	18	34	2？	N28°E
21	楕円形	160	80	不整楕円形	70	30	88	円形？	20	20	2or3	N21°W
22	長楕円形	160	90	長方形	100	30	78	楕円形	27×20	15	1	N56°W

註1）センチメートル単位
註2）方向は真北を基準とする。

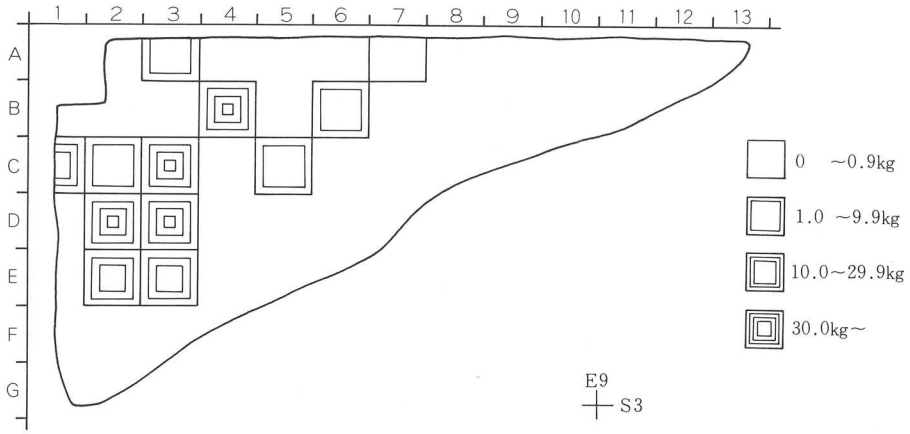
(3) XIII層上面の集石

XII層を掘り下げたところ、XIII層上面において礫が多量に出土した。しかし調査員の不手際により、記録をとる以前に礫が移動してしまった。そのため、グリッド単位で礫を採集したのみである。分布範囲は調査区の西半分で、特にC・D・E－2・3グリッドに集中する。礫は亜角礫、亜円礫が主で、重さは1～5kgにわたる。焼けた痕跡の明瞭なものはない。

集石には石核および礫石器が混じっている。第61図2は石核である。自然礫の平坦面を打面とし連続的な剝離を行っている。石材は砂岩である。第62図3・4は磨石であり、いずれも稜に磨面を持つ。第62図5、第63図1・2も磨石である。

まとめ

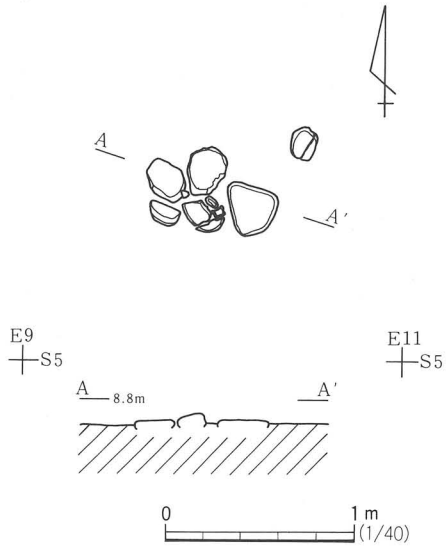
XII・XIII層は縄文早期の土器を包含する層である。XIII層上面の遺構は縄文早期のものと考えられる。XII層上面の遺構は、縄文早期かそれ以降、後期前葉までのものと考えられる。



第27図　XIII層上面礫平面分布図

第9表　L XIII上面検出礫集計表(礫石器を含む)

グリッド	0～499g	500～999g	1,000～4,999g	5,000g～	計	総重量(kg)
A3	3		3		6	6.1
A7		1			1	0.5
B4	2	1	5	2	10	35.6
B6			1		1	1.2
C1		2	3	1	6	16.7
C2	1		2		3	4.4
C3	2		2	3	7	30.7
C5			1		1	4.7
D2		1	7	4	12	45.0
D3		1	15	2	18	47.6
E2			3	2	5	18.1
E3		1	5		6	14.4
計	7	7	47	14	75	225.0



第28図　B4グリッド集石

7．時期不明の遺構と遺物

ここでは、検出された遺構のうち所属時期に幅をもつものをとりあげた。

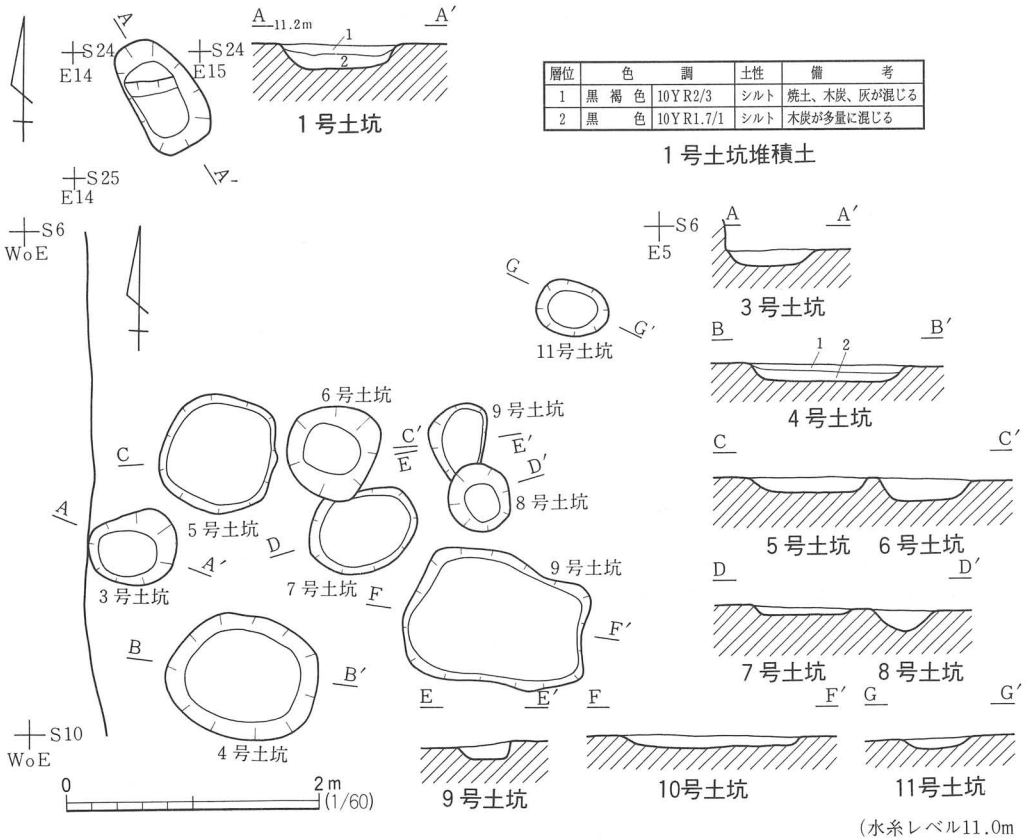
(1)　土坑

1号土坑（第29図）

Ⅰ－5・6グリッドの1号河川跡A層上面で検出された。長さ92cm、幅52cmの隅丸長方形である。深さは25cmで壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸が多く、北半が高まる。堆積土は2層に分けられ、ℓ2には木炭が多量に混じる。出土遺物はない。

3～11号土坑（第29図）

C・D－1・2グリッドのV層上面まで削られている部分で、1号住居跡掘り方を切って検出された。平面形、規模は下表に示す。堆積土は焼土・木炭を多く含んでいる。



層位	色調		土性	備考
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	焼土、木炭、灰が混じる
2	黒色	10YR1.7/1	シルト	木炭が多量に混じる

1号土坑堆積土

土坑№	色調		土性	備考
3号土坑	褐灰色	7.5YR4/1	シルト	焼土が多く混じる
4号土坑ℓ1	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	木炭・焼土が多く混じる
4号土坑ℓ2	灰褐色	7.5YR4/2	シルト	木炭・焼土がわずかに混じる
5号土坑	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	木炭・焼土が混じる
6号土坑	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	焼土が多く混じる
7号土坑	黒褐色	10YR3/1	シルト	焼土が混じる
8号土坑	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	木炭・焼土が多く混じる
9号土坑	黒褐色	10YR3/1	シルト	焼土がわずかに混じる
10号土坑	褐灰色	7.5YR4/1	シルト	焼土が多く混じる
11号土坑	褐灰色	10YR4/1	シルト	焼土が混じる

3～11号土坑堆積土

第29図　1・3～11号土坑

第10表　3～11号土坑計測表

土坑	位置	平面形	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	遺物	備考
3号土坑	C1	不整楕円形	70	60	13		
4号土坑	D1	隅丸長方形	120	97	14	ℓ1：土師器甕体部（ナデーナデ）	
5号土坑	C1	隅丸長方形	95	88	12	土師器甕体部(ナデ－ナデ)・底部(木葉痕)・鉢口縁部(ヨコナデ―ヨコナデ)	
6号土坑	C1	円形	75	－	18		7号を切る
7号土坑	C1	楕円形	89	63	6		
8号土坑	C2	楕円形	56	51	16		9号を切る
9号土坑	C2	楕円形	(54)	45	11		
10号土坑	C・D2	不整隅丸長方形	137	107	10	土師器坏底部（ヘラケズリ―ミガキ：黒色処理）	
11号土坑	C2	楕円形	55	44	9		

まとめ

1号土坑は、河川が埋没し終った近世以降のものである。3～11号土坑は1号住居跡を切っていることから、奈良時代以降のものである。

(2)　溝跡

1号溝跡（第30・32図）

D・E－9～11グリッドの1号河川跡A層上面で検出された。北西－南東北向に延び、北西部を倉庫工事により、南東部を旧笊川により削られている。残存長8.2m、幅6m、深さ40cmで底面は平坦である。壁の立ち上がりはゆるやかである。西壁部分に、長さ7m、幅1.5m、深さ約20cmにわたり溝状に落ち込む部分があり、一時期古い溝の可能性がある。堆積土は2層に分かれており、ℓ2が落ち込み部分の堆積土である。

出土遺物は、ℓ2より須恵器壺底部片（第30図1）、燻し瓦片（2）が出土している。

3号溝跡（第30図）

A－9・10グリッドのV層上面で検出された。南北方向にのび、南部は1号河川跡に切られ北部は調査区外に延びる。残存長3m、幅55cm、深さ50cmで、壁の立ち上がりは急である。堆積土は2層に分けられる。出土遺物はない。1次調査における4号溝跡に連続する可能性がある。

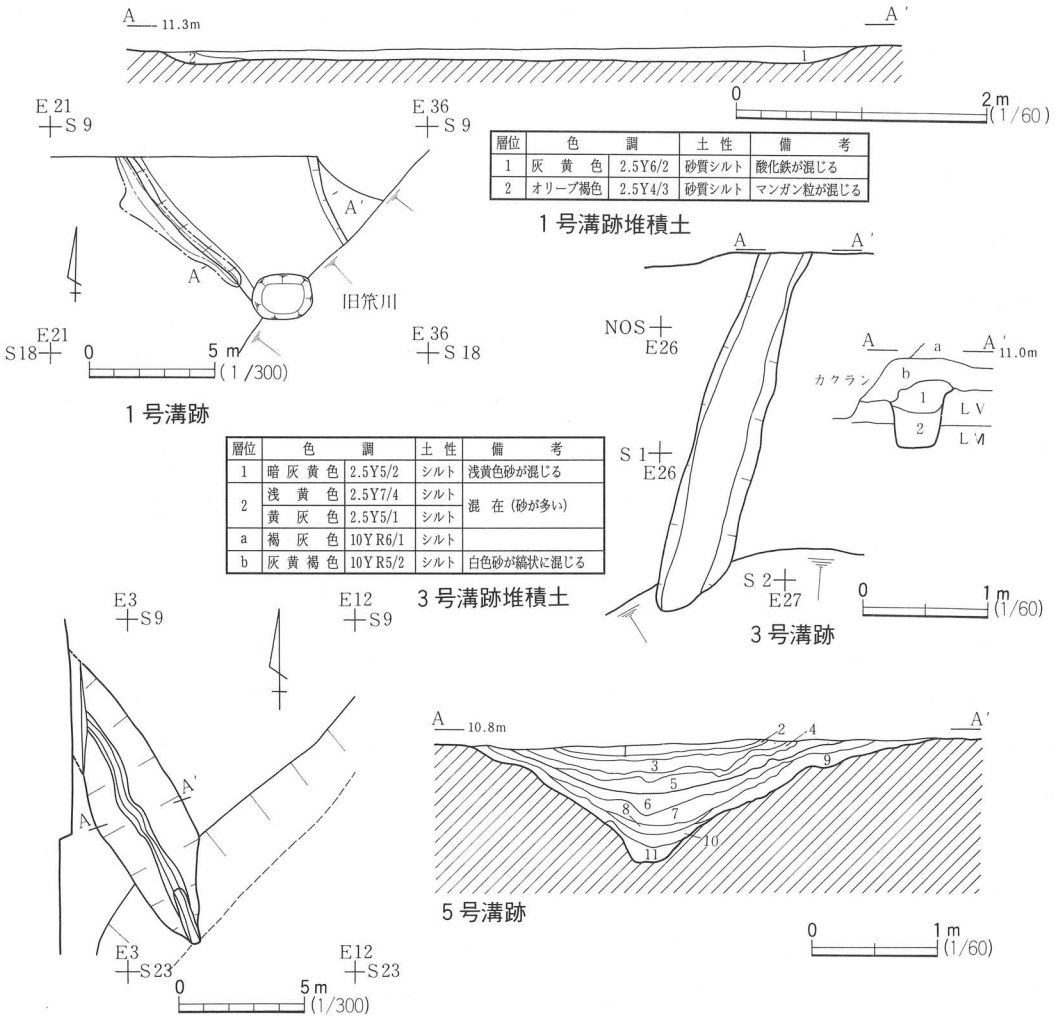
4号溝跡（第14図）

A－4・B－3・C－2・D－1グリッドのV層上面で検出された。北東－南西方向であり、両端とも調査区外に延びる。1号住居跡掘り方より古く、5号溝より新しい。残存長約15m、最大幅50cm、深さ約15cmで、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層のみである（土色・土性不明)。出土遺物は縄文土器の細片4点である。

5号溝跡（第30・32図）

D－1、E・F・G－1・2、H－2グリッドのV層上面で検出された。北西－南東方向で、南東部は1号河川跡に切られ、北西部は調査区外に延びる。4号溝跡より古い。残存長約10.5m、上端幅3.5m。断面形はV字形に掘った後さらに掘り下げた形で、掘り下げ部上端幅50cm、下

端幅30cmである。底面は北から南へ傾斜しており、北端の深さは87cm、南部で120cm、南端は一段掘り下げられ、深さは140cmである。堆積土は11層に分けられ、ℓ１～５がシルトと砂の互層、ℓ６～11がシルト質粘土である。底面には草状の植物遺体が貼り付いていた。出土遺物は、底面・壁面より縄文土器が出土している（第32図３～10）。文様の特徴から、縄文時代後期南境式にあたると考えられる。



層位	色調		土性	備考
1	灰黄色	2.5Y6/2	砂質シルト	酸化鉄が混じる
2	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂質シルト	マンガン粒が混じる

1号溝跡堆積土

1号溝跡

層位	色調		土性	備考
1	暗灰黄色	2.5Y5/2	シルト	浅黄色砂が混じる
2	浅黄色	2.5Y7/4	シルト	混在（砂が多い）
	黄灰色	2.5Y5/1	シルト	
a	褐灰色	10YR6/1	シルト	
b	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	白色砂が縞状に混じる

3号溝跡堆積土

3号溝跡

5号溝跡

層位	色調		土性	備考	6	暗褐色	10YR3/3	シルト質粘土	マンガン粒が混じる
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂		7	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト質粘土	マンガン粒が多く混じる
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト質砂	マンガン粒、植物遺体が混じる	8	暗褐色	10YR3/4	シルト質粘土	
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂		9	黒褐色	10YR2/3	シルト質粘土	
4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト質砂		10	黒褐色	10YR2/3	シルト質粘土	LⅥ土混入、中央部グライ化
5	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂		11	暗オリーブ灰色	5GY4/1	シルト質粘土	グライ化、底面に草状の植物遺体

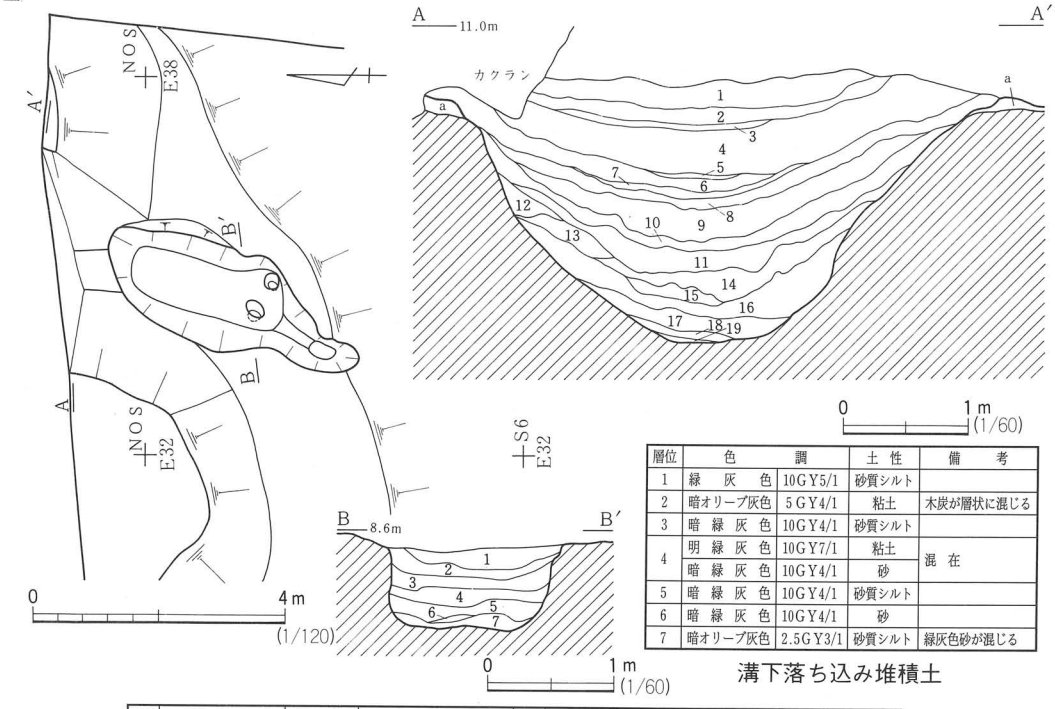
5号溝跡堆積土

第30図　１・３・５号溝跡

6号溝跡（第31・32図）

A・B－12グリッドに位置する。検出層位はV層より上の層であるが、撹乱を受けており基本層序と対応できない。ほぼ南北方向で、南部は1号河川跡に切られ、北部は調査区外である。残存長2m、上端幅3.5m、下端幅60cm、深さ2mである。堆積土は19層に分かれ、砂・シルト・シルト質粘土が細かく重なり合った状況である。底面の南部には長さ1.6m、幅1.6m、深さ60cmの楕円形の落ち込みがある。底面には2個のピットがあり、西が深さ60cm、東が30cmである。また、落ち込みから南へ溝状に延びる部分がある。堆積土は砂とシルトの互層で、7層に分けられる。

出土遺物は、溝の底面および落ち込み部より縄文土器が出土している（第32図11・12）。いずれも摩滅が著しい。縄文時代後期に所属すると考えられる。



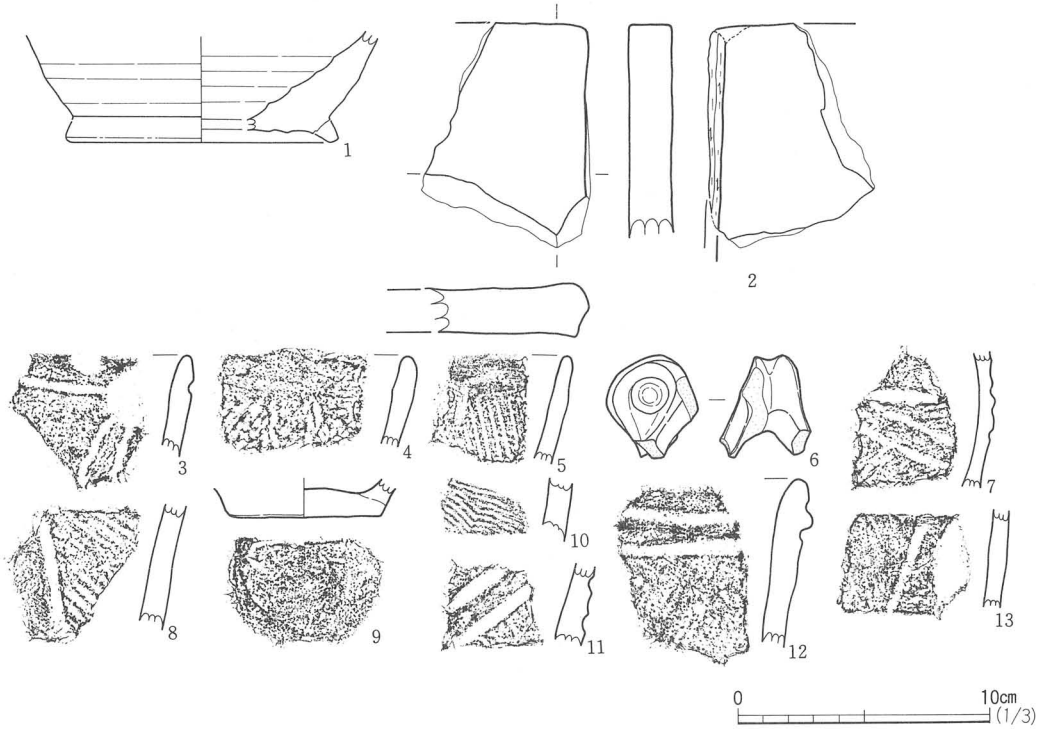
層位	色調		土性	備考
1	緑灰色	10GY5/1	砂質シルト	
2	暗オリーブ灰色	5GY4/1	粘土	木炭が層状に混じる
3	暗緑灰色	10GY4/1	砂質シルト	
4	明緑灰色	10GY7/1	粘土	混在
	暗緑灰色	10GY4/1	砂	
5	暗緑灰色	10GY4/1	砂質シルト	
6	暗緑灰色	10GY4/1	砂	
7	暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	砂質シルト	緑灰色砂が混じる

溝下落ち込み堆積土

層位	色調		土性	備考
1	黄褐色	2.5Y5/3	砂質シルト	ボロボロする
2	黄褐色	2.5Y5/4	シルト	
3	黄褐色	2.5Y5/4	シルト	木炭粒がわずかに混じる
4	黄褐色	2.5Y5/4	シルト	
5	浅黄色	2.5Y7/4	砂	混在
	暗灰黄色	2.5Y5/2	シルト	
6	暗灰黄色	2.5Y5/2	シルト質粘土	
7	にぶい黄色	2.5Y6/4	砂	
8	黄灰色	2.5Y5/1	粘土	
9	明黄褐色	2.5Y6/6	砂	縞状にみられる、約0.5cmの厚さの黄灰色粘土がはさまる
	灰黄色	2.5Y6/2	砂	
10	黄灰色	2.5Y5/1	粘土	混在
	灰黄色	2.5Y7/2	砂	
11	（ℓ10に同じ）			
12	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	混在
	灰黄色	2.5Y7/2	シルト	
	明黄褐色	10YR7/6	シルト	
13	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	砂粒が混じる
14	暗緑灰色	7.5GY4/1	シルト質粘土	
15	暗緑灰色	7.5GY3/1	シルト質粘土	
16	緑灰色	10GY5/1	シルト質粘土	白色砂粒が縞状に混じる
17	暗緑灰色	7.5GY3/1	シルト質粘土	混在
	緑灰色	10GY5/1	シルト質粘土	
18	暗緑灰色	7.5GY3/1	シルト質粘土	
19	暗緑灰色	7.5GY4/1	砂	
a	にぶい黄色	2.5Y6/4	砂質シルト	混在
	黄灰色	2.5Y4/1	粘土	

6号溝堆積土

第31図　6号溝跡



番号	遺構	層位	器種	外面調整				内面調整			登録	図版
1	1号溝	2層	須恵器　壺	ロクロナデ				ロクロナデ			E21	
2	1号溝	2層	瓦	いぶし				いぶし			F1	
3	5号溝	壁・底	沈線		A29	35－8	9	5号溝	壁・底		A35	
4	5号溝	壁・底	結束をもつ縄文（RLorRLR）		A30	35－9	10	5号溝	壁・底	条痕か（巾1㎜）	A36	
5	5号溝	壁・底	撚糸文（L）		A31	35－10	11	6号溝	底	縄文か？、沈線	A37	35－14
6	5号溝	壁・底	ナデ		A32	35－11	12	6号溝下落ちこみ		隆線上下に沈線	A38	35－15
7	5号溝	壁・底	縄文？、沈線		A33	35－12	13	6号溝下落ちこみ		縄文（LR）、沈線	A39	
8	5号溝	壁・底	縄文（RL）→沈線→ミガキ		A34	35－13						

第32号　溝跡出土遺物

まとめ

1号溝跡は1号河川跡埋没後のものであり、近世以降のものである。3～5号溝跡の出土遺物の縄文土器であるが、検出層位が弥生時代以降の堆積層と考えられることから、弥生～奈良時代の幅におさまると考えられる。6号溝跡も出土遺物は縄文土器であるが、検出層位から弥生時代以降と考えられる。

なお、5号溝跡は断面形が「V」字形を呈する特徴を持っており、弥生時代の環濠集落の環濠の断面形に類似している。

第11表　5・6号溝出土遺物集計表

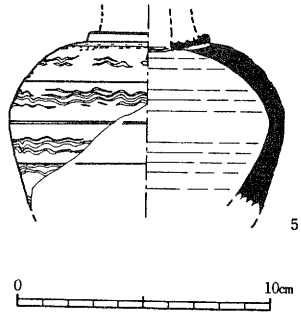
5号溝				6号溝			
部位	文様			部位	文様		
口縁部	無文、折り返し口縁	1	1	口縁部	沈線	1	1
体部	縄文（？）＋沈線	1	14	体部	斜行縄文（LR）	4	22
	沈線	1			斜行縄文（RL）	1	
	斜行縄文（LR）	3			羽状縄文（RL）	1	
	縄文（？）	1			縄文（？）	2	
	撚糸文	3			縄文（？）＋沈線	1	
	無文	4			無文	12	
	（不明）＋刺文	1			（不明）	1	
底部		1	1			計	23
		計	16				

8．各層の出土遺物

(1) Ⅲ層出土遺物（第34図１～３・第12表）

Ⅲ層からは土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器が出土している。細片が主で、図示できるものは３点のみである。第34図１は土師器甕である。丸味をもった胴部から外反する口縁部へ続く。調整は口縁部の内外面横ナデ、胴部外面へラケズリ、内面ナデである。２は須恵器の底部破片で、一次調査Ⅵ層出土の壺に類似する（第33図）。外面に平行する波状沈線が３段引かれる。底部には断面三角形の高台が付く。３は弥生土器片である。２の所属時期は底部のみであり判断しづらいが、１次調査の資料に似ることから、７世紀～８世紀前半の年代[註)]が与えられよう。１の土師器も、ほぼ同じ頃にあたると考えられる。他に出土している土師器は、ロクロ不使用のものである。

註）古川一明氏より８世紀代の可能性が高いとの御教示を得た。



第33図　一次調査Ⅵ層出土須恵器

(2) Ⅳ層出土遺物（第34図４・５）

Ⅳ層からは弥生土器片２点、縄文土器片５点が出土している。第34図４は外反する口縁部で口唇部が直立気味になる。外面に撚糸文（L）が施文される。縄文土器は撚糸文（R）のものと無文のものがある。

(3) Ⅴ層出土遺物（第34図６・７）

Ⅴ層からは弥生土器、縄文土器が出土している。第34図６は弥生土器甕の上半部である。丸味をもった胴部から口縁部が外反するものである。口唇部と胴部には縄文（ＲＬ）が施文される。頸部には楕円形の刺突文が施される。内面調整は横方向のミガキである。所属時期は弥生時代中期桝形囲式かそれ以前にあたると考えられる。７は縄文土器深鉢である。破片で出土したものを図上で復元している。復元口径20.2cm、器高18.1cm、最大径21.3cm、底径5.3cmをはかる。口唇部には刻みがある。胴部には縄文（ＬＲ）が５段にわたり施文される。内面はミガキ調整がなされ、炭化物が付着する。所属時期は縄文時代晩期と考えられる。

(4) Ⅵ層出土遺物（第35～40図・第13表）

Ⅵ層からは縄文土器454点、石器９点、土製品４点が出土している。

土器　小破片が大部分で器形がうかがえないため、文様に主眼をおき記述する。

口縁部資料：第35図１～６は主に沈線による文様をもつものである。１・２は口縁部が「く」の字に屈曲し、突起をもつ。突起には２個の盲孔があり、胴部には沈線によるワラビ手文が描

かれる。4は磨消し部をもつものである。

第35図7～14は隆線が施されるものである。8には逆「C」字状の貼付がされる。

第35図15～18、第36図1は撚糸文が施文されるものである。15は突起を有し、口縁部外面は粗く磨かれる。1は絡状体圧痕文と撚糸文が施文される。

第36図2・3は縄文が施文される。

第36図4～7は無文のもので、7は丁寧に磨かれており、胴部に細い沈線が見られる。

第36図8は縦の乱雑な沈線が引かれる。9は受け口状の特殊な器形のものである。10・11は渦巻状の貼付文である。

胴部資料：第36図12～18は縄文を地文とし沈線を施すものである。12・13には蛇行沈線が見られる。14～20は沈線間が磨消される。

第37図1～3は集合沈線が施される。

第37図4～7は隆線をもつものであり、いずれも横方向である。

第37図8・9は網目状撚糸文、10・11は撚糸文が施文される。

第37図12には条線文が見られる。

底部資料：第36図13は底径14cmをはかる大形のもので、木葉痕が残る。14には網代らしい痕跡が残る。

土製品　第38図1は小形の埦である。口縁部は小波状をなす。2～4は土製円盤である。

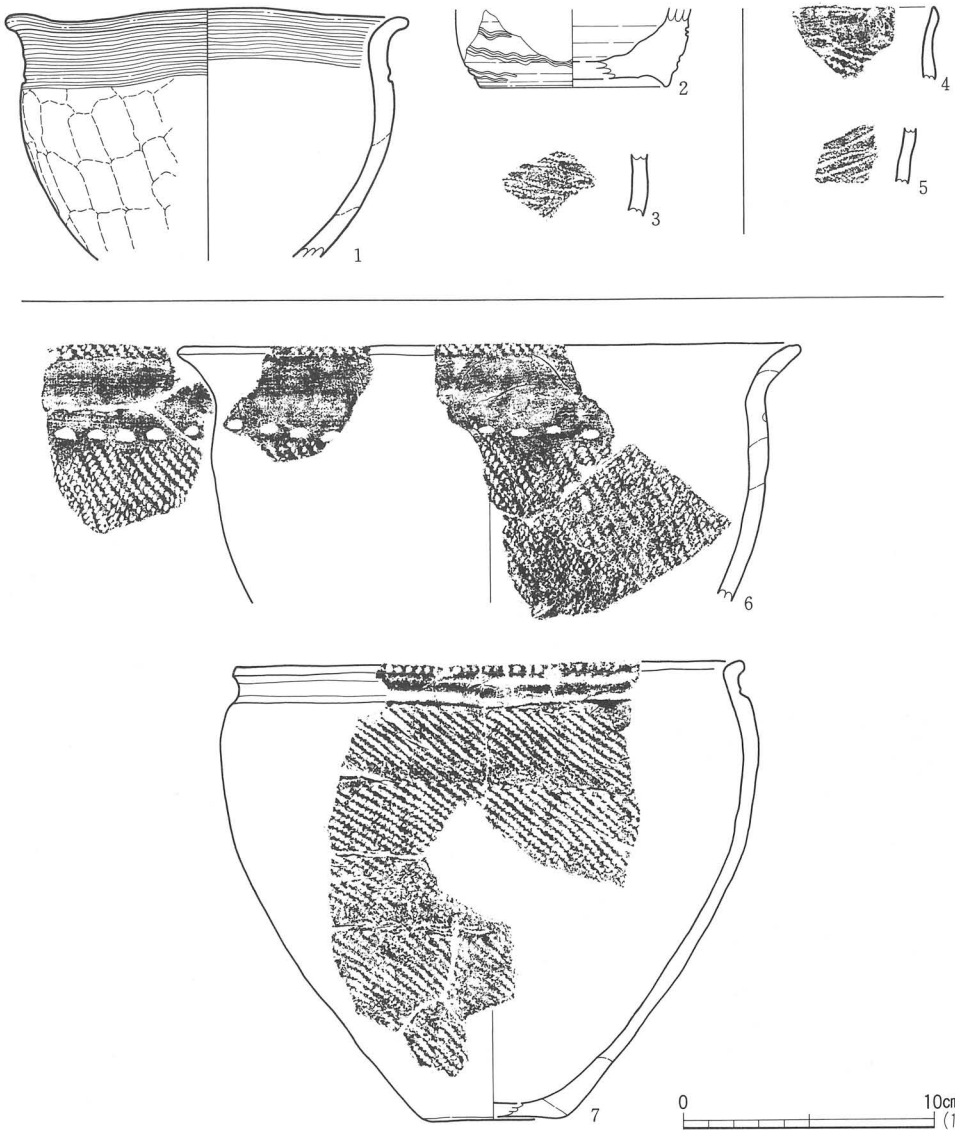
剝片石器　第39図1・2は石鏃であり、いずれも有茎である。3は不定形石器で、表面右縁に連続的な二次加工を施している。

礫石器　第39図4は扁平な礫の両端を打ち欠いたもので、石錘と考えられる。第40図1は凹石で、表裏に凹み部をもつ。2～4は磨石である。5は石皿の破片であり、多孔質の凝灰岩を用いている。

まとめ　Ⅵ層出土の土器は、「く」字状に屈曲する口縁部をもつものや、地文上に沈線によるワラビ手文、蛇行文などがあり、磨消縄文による文様が描かれる、といった特徴から、縄文時代後期前葉の南境式にあたると考えられる。同時期の資料は、当調査区の西の下ノ内浦2次調査区、山口遺跡、南の六反田遺跡で多量に出土していることから、笊川流域においても当時の人々が盛んに活動していたことがうかがわれる。土器に用いられる地文であるが、縄文と撚糸文の割合は点数ではほぼ1：1である。ただし、沈線が加えられたり磨消されたりする際の地文は縄文が大多数である。

⑸　Ⅶ層出土遺物（第39・41図）

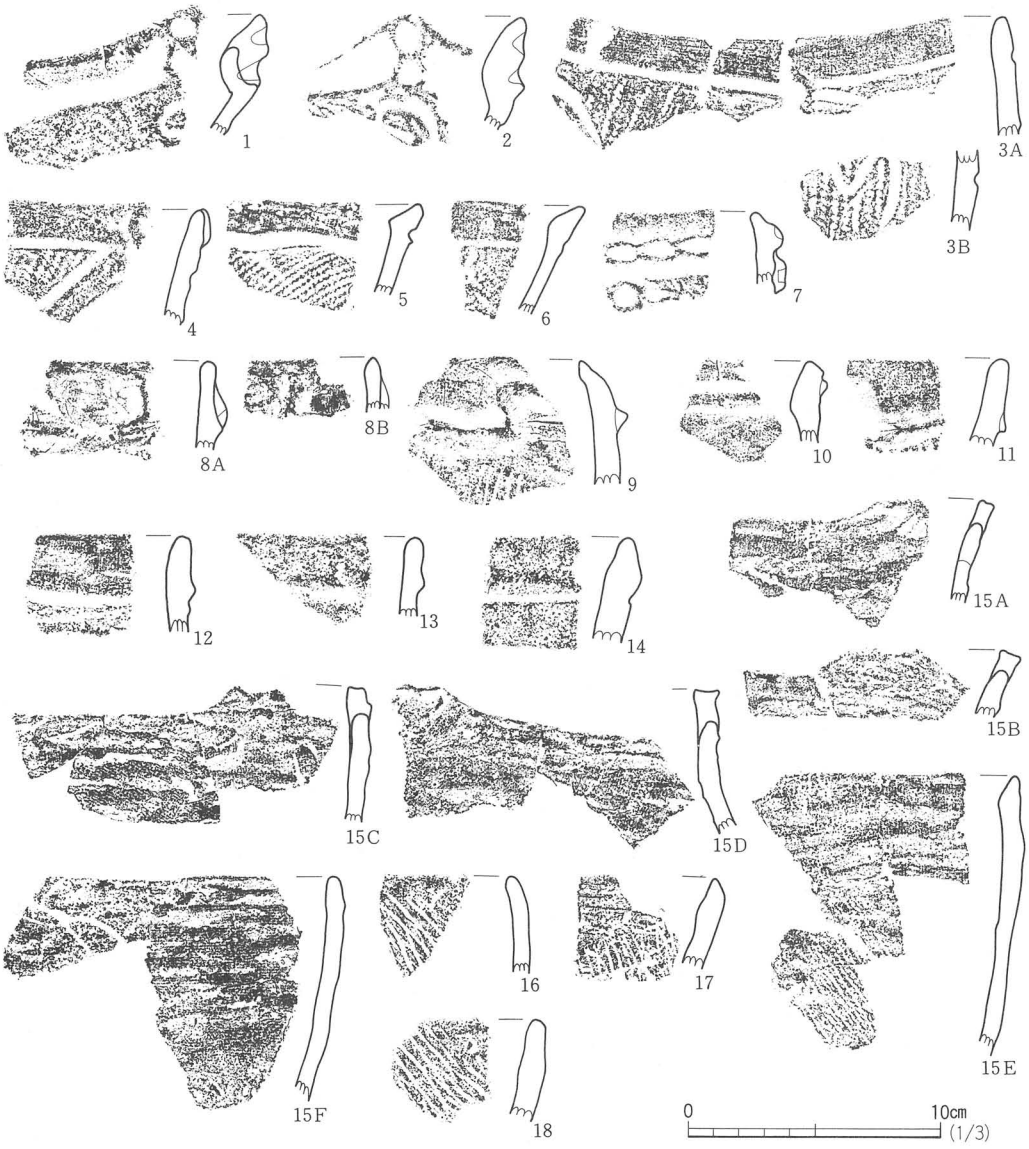
Ⅶ層からは縄文土器10点、剝片石器1点が出土している。土器は地文のみのものと、無文のものである（第41図）。第39図5は不定形石器で、表面右縁にわずかに二次加工が施される。



番号	層位	器種	法量	外面調整	内面調整	登録	写真
1	Ⅲ層	土師器甕	口径：15.9cm	ヘラケズリ→横ナデ	ナデ→横ナデ	C 8	36−12
2	Ⅲ層	須恵器壺？	底径： 3.7種類	波状沈線文、糸切りか？	ロクロナデ	E21	36−11

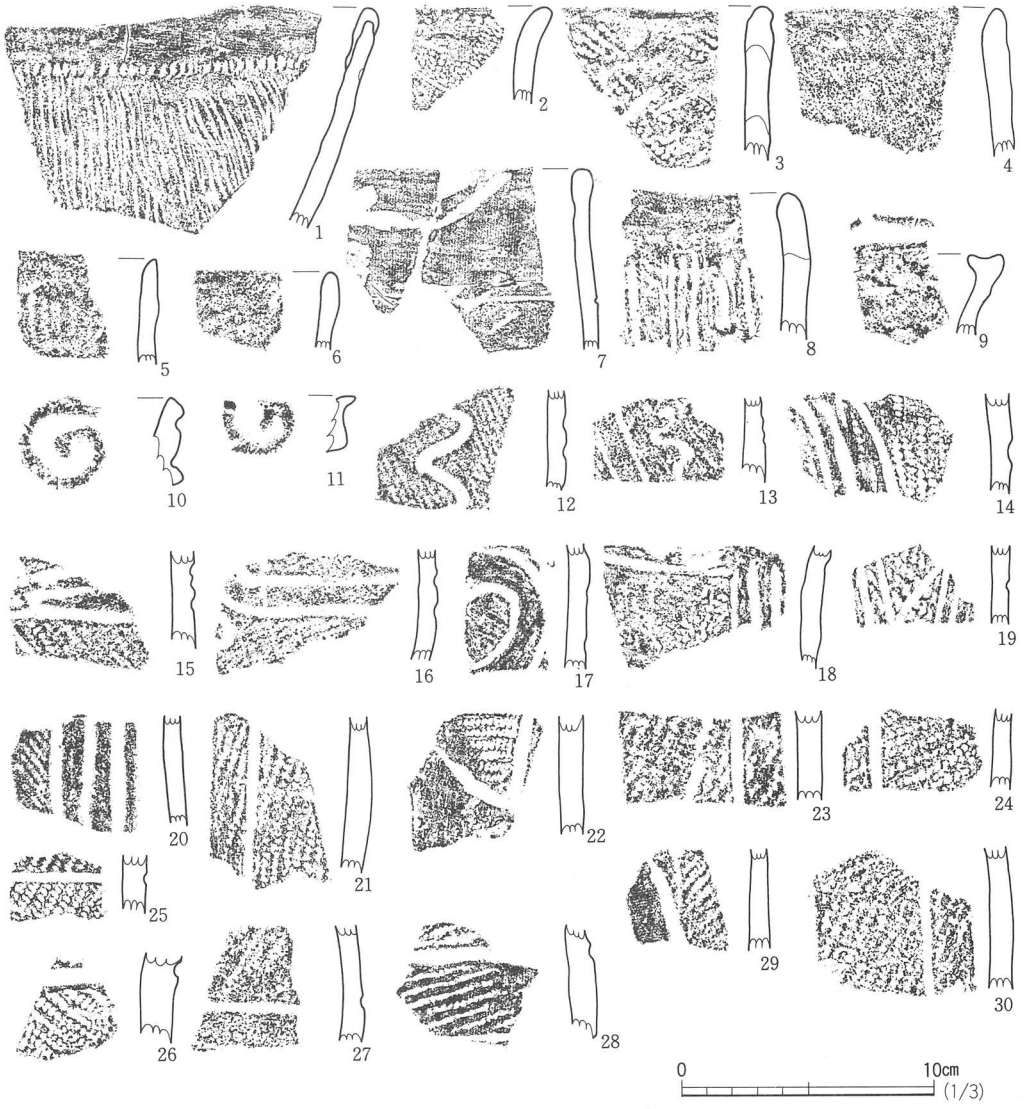
番号	層位	器種	文様・調整	登録	写真	番号	層位	器種	文様・調整	登録	写真
3	Ⅲ層		撚糸文（L）	B 7	36−13	6	Ⅴ層	甕	縄文（RL）、刺文	B10	36−16
4	Ⅳ層		撚糸文（L）	B 8	36−14	7	Ⅴ層	鉢	口唇キザミ、縄文（LR）	A40	37−1
5	Ⅳ層		撚糸文（R）	B 9	36−15						

第34図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層出土遺物



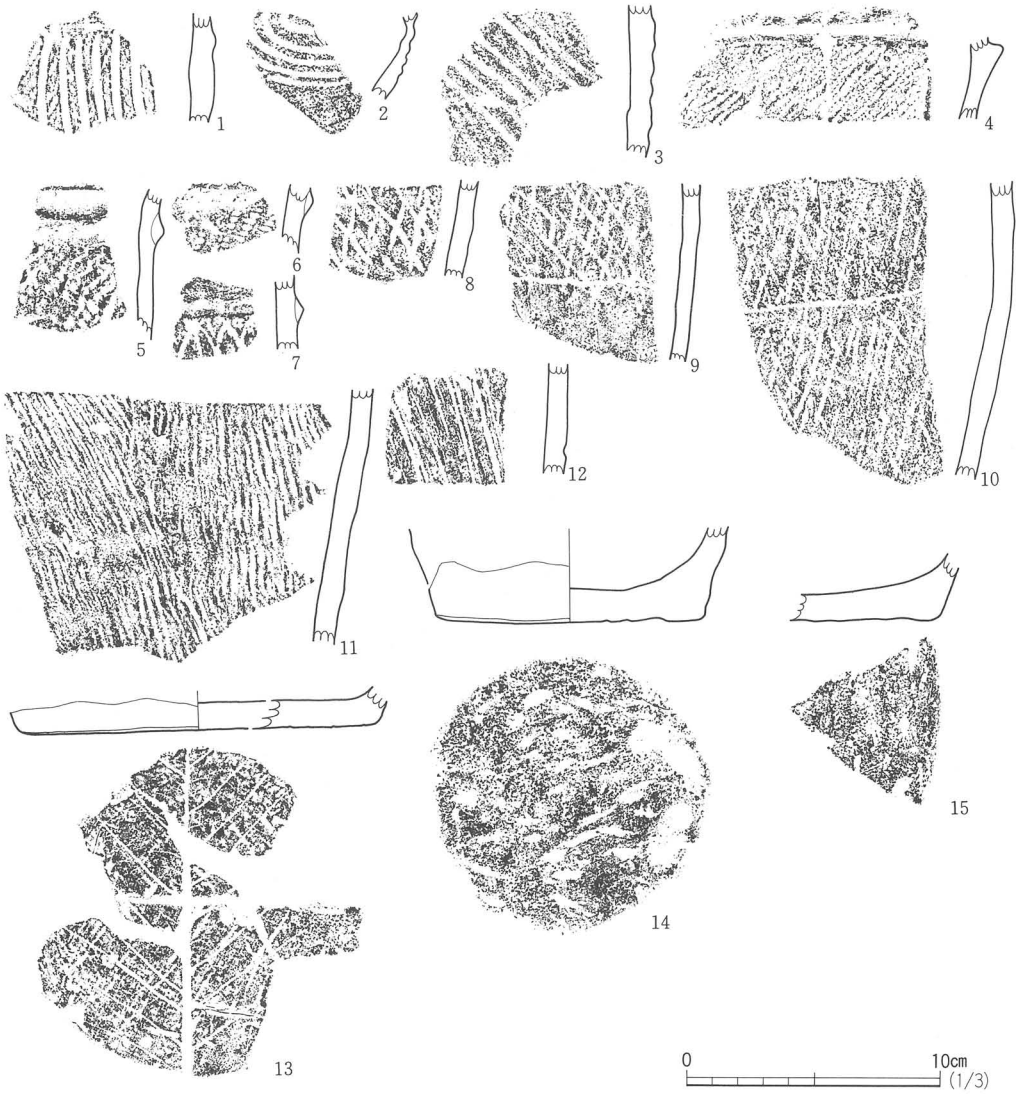
番号	器種	文様・調整	登録	写真	番号	器種	文様・調整	登録	写真
1	深鉢	突起部に盲孔、縄文→沈線	A41	37－2	10	深鉢	隆線上に沈線	A50	
2	深鉢	突起部に盲孔、沈線（ワラビ手文）	A42	37－3	11	深鉢	隆線、撚糸文	A51	37－12
3A	深鉢	縄文（LR？）→沈線	A43	37-4A	12	深鉢	隆線下に沈線	A52	37－13
3B	深鉢	縄文（LR）→沈線（V字状文）	A43	37-4B	13	深鉢	隆線	A53	
4	深鉢	円形貼付文、縄文（LR）→沈線	A44	37－5	14	深鉢	隆線下に沈線	A54	
5	深鉢	縄文（LR）→沈線	A45	37－6	15	深鉢	突起あり、体部撚糸文（R）	A55	37－14
6	深鉢	沈線（蛇行）	A46	37－7	16	深鉢	撚糸文（R）	A56	37－16
7	深鉢	隆線→刺突、円形貼付状、沈線	A47	37－8	17	深鉢	撚糸文	A57	
8	深鉢	隆線	A48	37-9・10	18	深鉢	撚糸文	A58	37－17
9	深鉢	隆線、撚糸文	A49	37－11					

第35図　Ⅵ層出土土器（1）



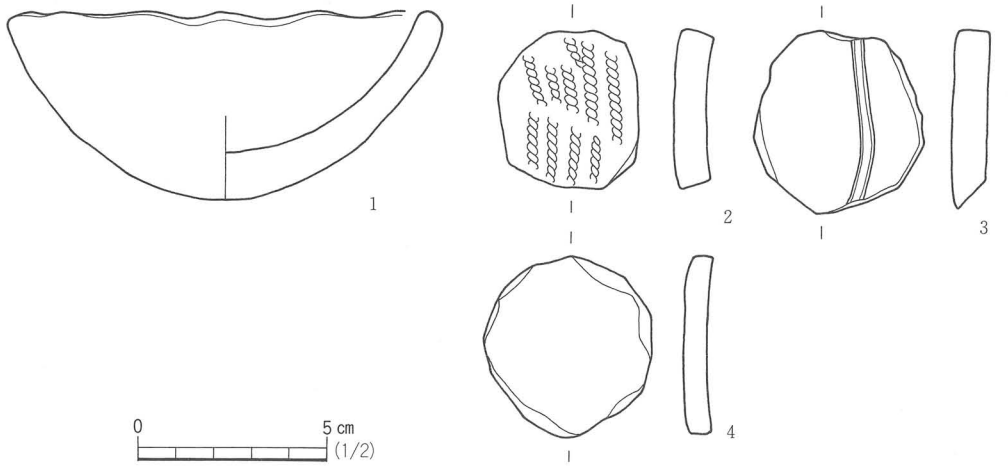
番号	器種	文様・調整	登録	写真	番号	器種	文様・調整	登録	写真
1	深鉢	絡状体圧痕、撚糸文（R）	A59	37－15	16	深鉢	沈線	A74	37－27
2	深鉢	縄文（LR）→沈線	A60	37－18	17	深鉢	沈線→ミガキ	A75	37－28
3	深鉢	縄文（LR）	A61	37－19	18	深鉢	沈線、縄文	A76	37－29
4	深鉢	無文	A62		19	深鉢	縄文（RL）→沈線	A77	37－30
5	深鉢	縄文か？	A63		20	深鉢	沈線、縄文	A78	37－31
6	深鉢	無文	A64		21	深鉢	縄文（LR）→沈線	A79	38－1
7	深鉢	ミガキ、沈線	A65	37－20	22	深鉢	縄文（LR）→沈線	A80	
8	深鉢	粗い沈線	A66	37－21	23	深鉢	縄文、沈線	A81	
9	鉢	無文、受け口状	A67		24	深鉢	縄文（LR）→沈線	A82	38－2
10		隆線（渦文）	A68	37－22	25	深鉢	縄文（LR）→沈線	A83	38－4
11		隆線（渦文）	A69	37－23	26	深鉢	縄文（LR）→沈線	A84	
12	深鉢	縄文（LR）→沈線（蛇行）	A70	37－24	27	深鉢	縄文、沈線	A85	
13	深鉢	縄文→沈線（蛇行）	A71	37－25	28	深鉢	縄文（LR）→沈線	A86	38－3
14	深鉢	縄文（LR）→沈線→ナデ	A72	37－26	29	深鉢	縄文（LR）、沈線→ミガキ	A87	
15	深鉢	沈線、縄文（LR）	A73		30	深鉢	縄文（LR）→沈線→ミガキ	A88	

第36図　Ⅵ層出土土器（2）



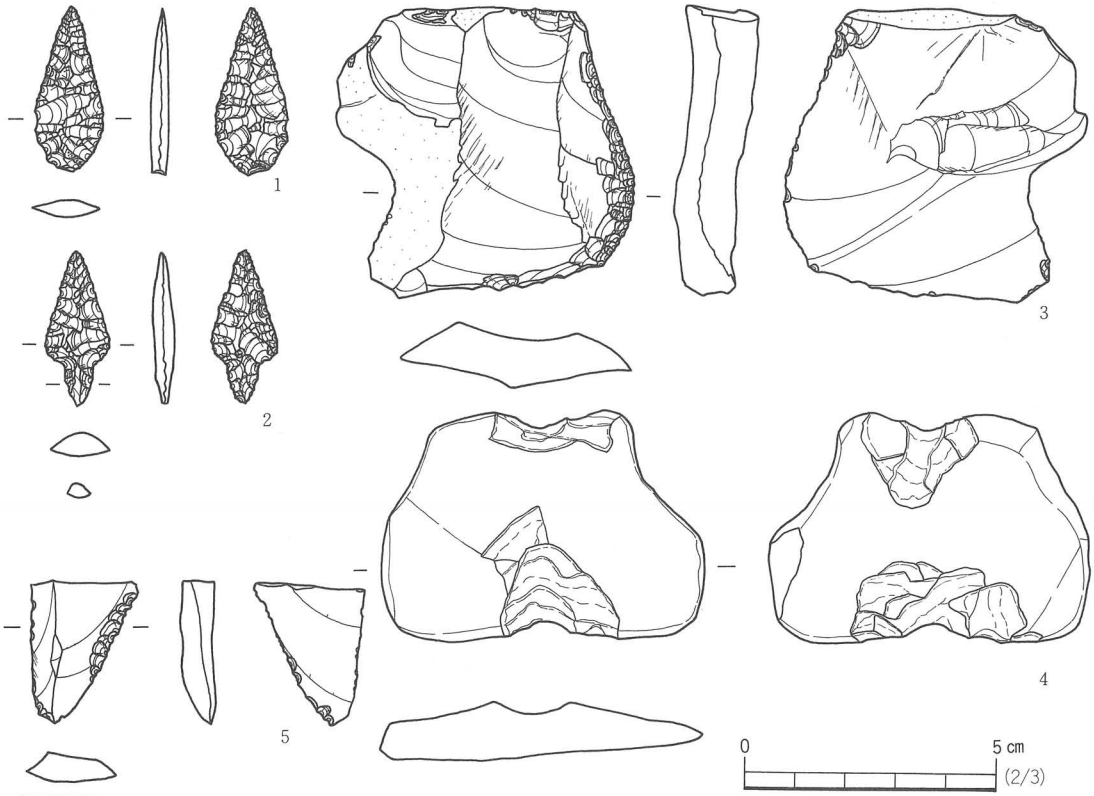
番号	器種	文様・調整	登録	写真	番号	器種	文様・調整	登録	写真
1	深鉢	縄文（LR）→沈線	A89	38－5	9	深鉢	網目状撚糸文（R）	A97	
2	鉢	沈線	A90		10	深鉢	網目状撚糸文か？	A98	38－10
3	深鉢	沈線	A91		11	深鉢	撚糸文（R）	A99	
4	深鉢	縄文（LR）	A92		12	深鉢	沈線（半蔵竹管か？）	A100	38－9
5	深鉢	隆線、縄文（LR）	A93	38－6	13		木葉痕	A101	
6	深鉢	隆線、縄文（LR）	A94		14		網代痕か？	A102	
7	深鉢	隆線→網目状撚糸文（R）	A95	38－7	15		ナデ	A103	
8	深鉢	網目状撚糸文（R）	A96	38－8					

第37図　Ⅵ層出土土器（3）



番号	器　種	口　径	器　高	文　様　・　調　整			登　録	写　真
1	埦	11.5cm	5cm	波状口縁、内外面ミガキ			P 2	38－11
番号	器　種	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	文　様　・　調　整	登　録	写　真
2	土製円盤	42	37	8	58.1	縄文（LR）	P 3	38－12
3	土製円盤	48.5	45	9.5	23.2	沈線、縄文の痕跡	P 4	38－13
4	土製円盤	48	44	6	15.4		P 5	38－14

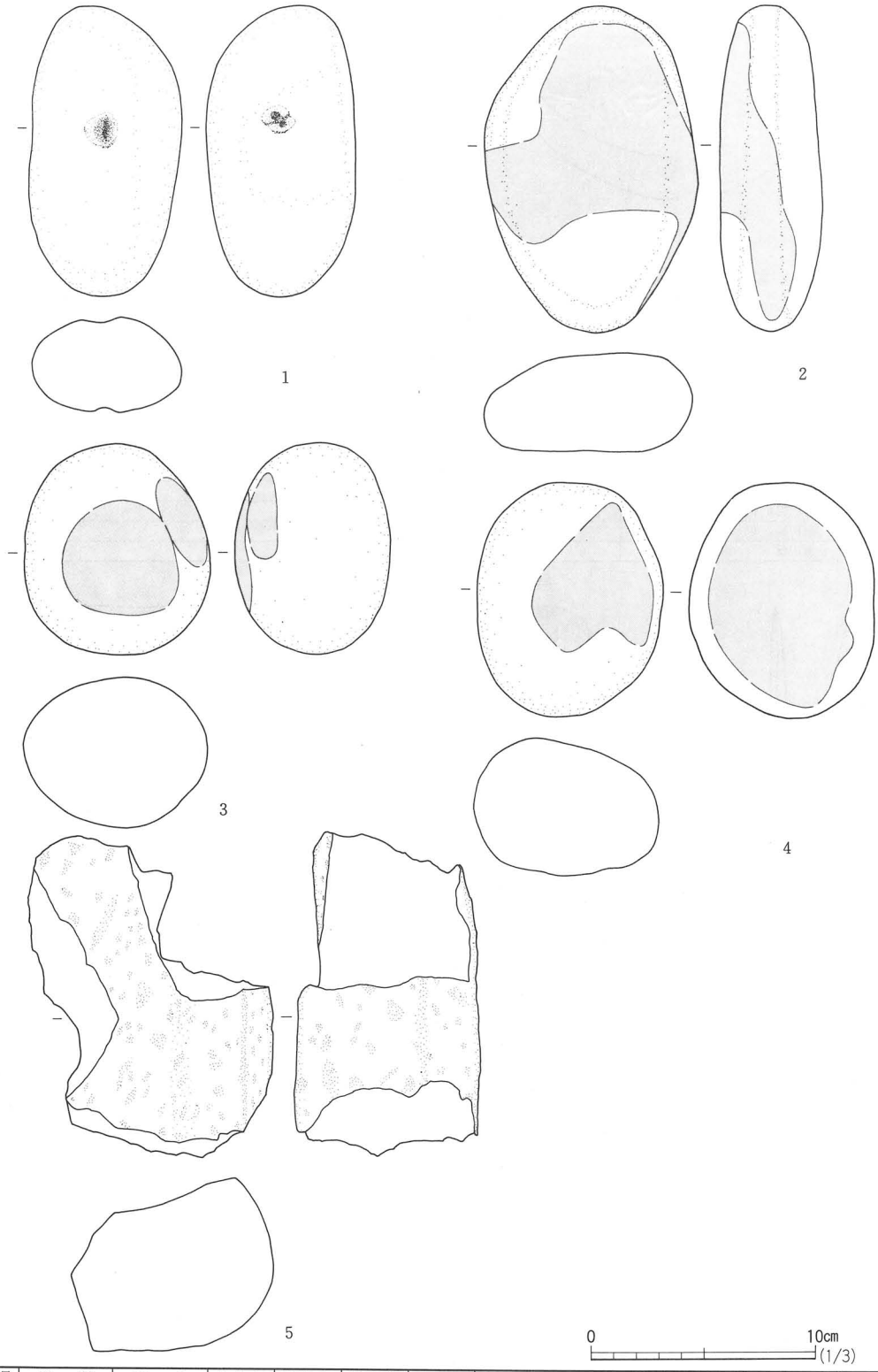
第38図　Ⅵ層出土土製品



番号	層　位	器　種	石　材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	備　考	登　録	写　真
1	Ⅵ　層	石　鏃	珪質頁岩	(33　)	13.5	3.7	1.4	茎部欠損、アスファルト付着	K10	38－20
2	Ⅵ　層	石　鏃	珪質頁岩	30.8	12.6	4.1	1.1		K11	38－21
3	Ⅵ　層	不定形	珪質頁岩	55.0	60.4	14.4	44.7	刃部角60°	K12	38－22
4	Ⅵ　層	石　錘	安山岩	44.7	64	12.2	41.8		K13	38－23
5	Ⅶ　層	不定形	珪質凝灰岩（一部オパール化）	31.2	19.5	6.8	2.5	上辺欠損、刃部角40°	K14	38－24

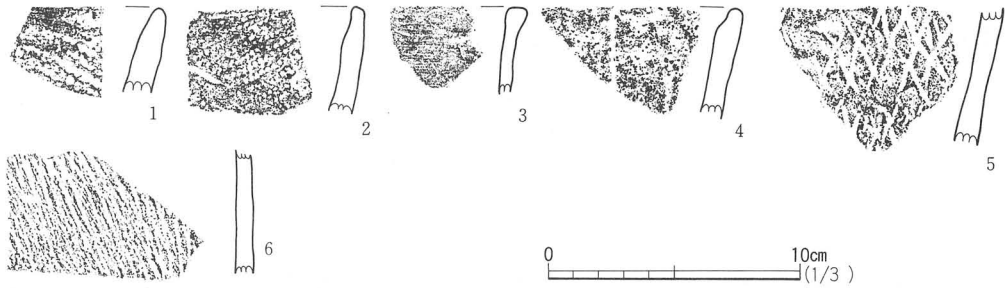
剥片は剥片長・幅、打面不明のものは最大長・幅を示す

第39図　Ⅵ・Ⅶ層出土剥片石器



番号	器　種	石　材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	備　考	登　録	写　真
1	凹　石	凝灰角礫岩	130	66	43	530	凹み２面	K15	38－25
2	磨　石	安　山　岩	146	94	45	800	磨面１面	K16	38－66
3	磨　石	花崗閃緑岩	95	82	67	740	磨面１面	K17	38－27
4	磨　石	安　山　岩	106	82	63	740	磨面２面	K18	38－28
5	石　皿	凝　灰　岩	(144)	(108)	(77)	1,040	破損品	K19	38－29

第40図　Ⅵ層出土礫石器



番号	器種	文様・調整	登録	写真	番号	器種	文様・調整	登録	写真
1	深鉢	縄文（LR）	A104	38−15	4	深鉢	無文	A107	38−16
2	深鉢	縄文（LR）	A105		5	深鉢	網目状撚糸文（R）	A108	38−18
3	深鉢	ナデ	A106	38−17	6	深鉢	撚糸文	A109	38−19

第41図　Ⅶ層出土土器

第12表　Ⅲ層出土土器集計表

土師器（外面——内面）					
坏	口縁部	横ナデ——ミガキ(黒色)	4	13	
		ミガキ——ミガキ(黒色)	2		
		ミガキ(黒色)——ミガキ(黒色)	5		
		不明——ミガキ(黒色)	2		
	体部	不明——ミガキ(黒色)	12	12	
	底部	手持ヘラケズリ——ミガキ(黒色)	1	5	
		ミガキ(黒色)——ミガキ(黒色)	1		
		不明——ミガキ(黒色)	3		
甕	口縁部	横ナデ——横ナデ	12	20	
		不明——不明	8		
	体部	ナデ——ナデ	3	277	
		ナデ——不明	25		
		ヘラケズリ——ナデ	8		
		不明——不明	213		
	底部	木葉痕	4	8	
		不明	4		
高坏	脚部	朱彩・「ハ」の字に大きく開く	1	1	
合計			336		

須恵器				
坏	口縁部	ロクロ——ロクロ	3	6
	体部	ロクロ——ロクロ	1	
	底部	回転糸切り後周縁手持ヘラケズリ	1	
		ヘラ切り	1	
高台坏	高台部	ロクロ——ロクロ	4	4
甕	口縁部	ロクロ——ロクロ	3	31
	体部	平行タタキ——ナデ	22	
		ロクロ——ロクロ	4	
	底部	不明	2	
合計			41	
弥生土器				
体部	撚糸文（L）		1	2
	撚糸文（R）		1	
縄文土器				
体部	縄文（LR）		1	9
	縄文（RL）		3	
	撚糸文（R）		1	
	不明		4	

第13表　Ⅳ層出土土器集計表

部位	文様・調整	点数	
口縁部	無文	17	17
体部	沈線文	14	427
	隆線文	7	
	刺突文	2	
	縄文（LR）＋沈線文	7	
	縄文（RL）＋沈線文	5	
	縄文（?）＋沈線文	1	
	撚糸文（?）＋沈線文	1	
	縄文（?）＋隆線文＋盲孔	1	
	隆線文＋盲孔	1	
	隆線文＋沈線	1	
	縄文（LR）	42	
	縄文（RL）	26	
	縄文（LRL）	2	
	縄文（RLR）	1	

部位	文様・調整	点数	
体部	縄文（?）	10	
	縄文（LR、結束あり）	3	
	撚糸文（L）	11	
	撚糸文（R）	76	
	撚糸文（?）	22	
	網目状撚糸文（R）	1	
	網目状撚糸文（?）	1	
	無文（ミガキ）	24	
	無文（ナデ）	10	
	無文（ケズリ）	2	
	無文（不明）	140	
	不明	16	
底部	ミガキ	2	8
	不明	6	

(6)　Ⅻ・ⅩⅢ層出土遺物（第42〜63図）

Ⅻ・ⅩⅢ層からは、縄文土器と石器が出土しているが、後述するように遺物は混在している可能性が高いため、両層あわせた分類規準を設けた。記述にあたってはとり上げ層位ごととする。

土器　Ⅻ層より122点、ⅩⅢ層より45点の計167点が出土している。いずれも破片で、器形をうかがえるものはない。また、摩滅しているものも少なくない。文様によりⅠ～Ⅳ類に分けた。

Ⅰ類　押型文の施文されるもの

Ⅱ類　沈線文のみ施文されるもの

Ⅲ類　条痕文の施文されるもの（沈線文もつものをⅢａ、条痕のみのものをⅢｂとする）

Ⅳ類　無文のもの

Ⅻ層出土土器（第42～44図）　第42図１はⅡ類土器で、平行沈線を境に斜位沈線が方向を変えて描かれる。２～５はⅢａ類土器である。２は口唇部に刻みをもち、内外面には条痕が施され、外面には細沈線が引かれる。３は外面には沈線による三角形状の区画内に平行する沈線が引かれる。内面には条痕がみられる。４・５は外面に太く粗い沈線が斜位に引かれ、内面には条痕がみられる。６～10は条痕のみ施文されるⅢｂ類である。13～22はⅣ類の口縁部資料である。13･14は口唇部が尖り、その下がわずかに肥厚する形態である。他の口唇形状は、15～17･20～22は外削ぎ状で、18・19は丸みをもつ。20～22は比較的厚手のもので、大形品であろう。

それ以外に無文および文様不明の胴部片を図示した（第43～44図）。胴部片の厚さは４㎜～14㎜の幅があり、平均器厚は９㎜である。第44図27・28は胴下部の破片とみられ、丸底が尖底を思わせるカーブを描く。29は平底の底部片である。

土器胎土はいずれも砂粒を含む。植物繊維は含むものもあるが、含有量はごく微量である。

ⅩⅢ層出土土器（第45・46図）　第45図１はⅠ類土器である。外面に平行線状文が横走し、２本一組の縦割文の間に重層山形文が描かれる。平行線状文と重層山形縦割文が同一原体上のものか別のもかは不明である。内面はナデ調整。器厚は約９㎜で、胎土は砂粒を多く含むが繊維は含まない。２～４はⅣ類土器である。口唇部形状は、２・４は丸みをもち、３は尖る。

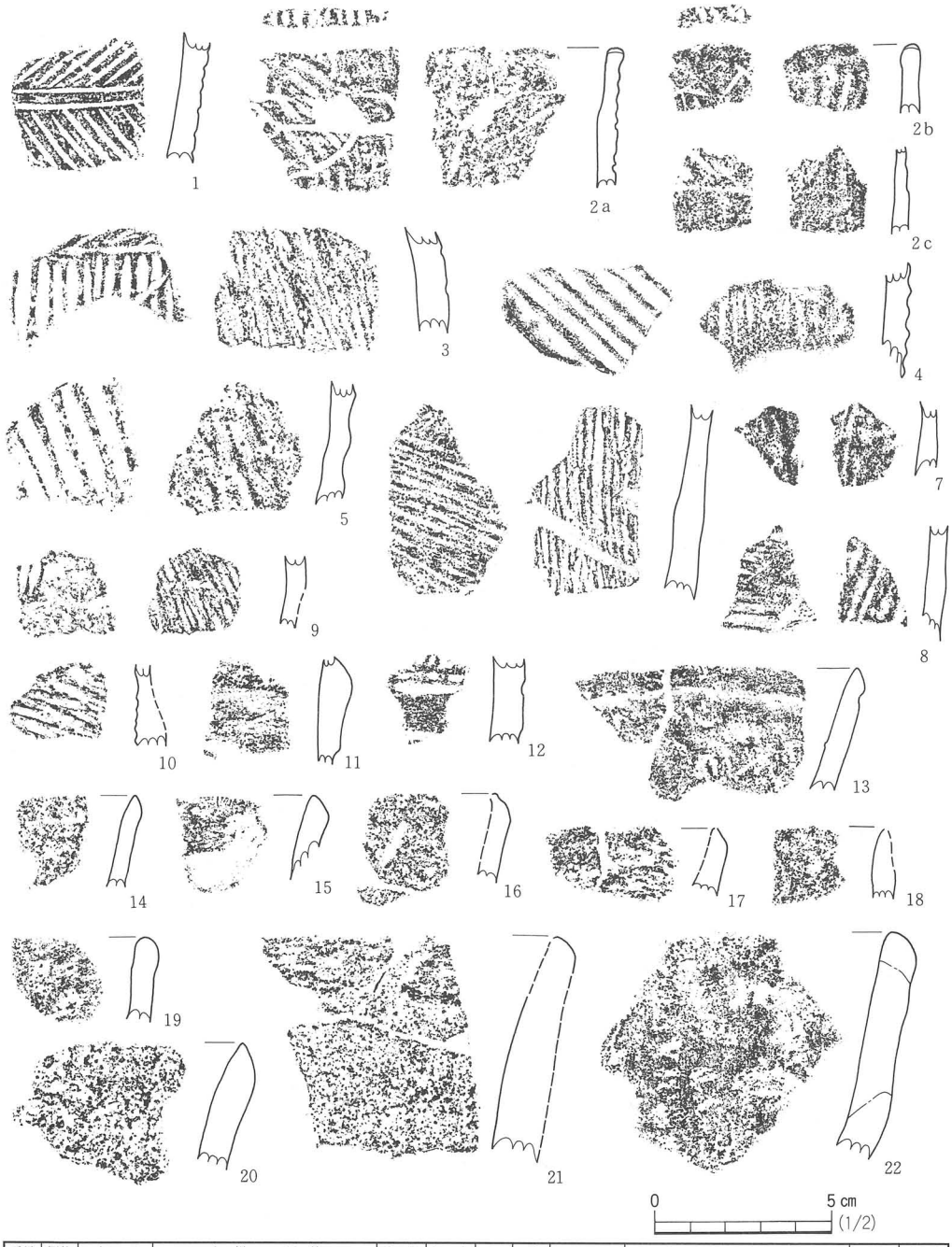
他に無文および文様不明の破片がある（第45図５～22、第46図）。胴部片の器厚は４㎜～14㎜の幅があり、平均は８㎜である。第45図22は器厚13㎜をはかる大形のものである。第46図５・６は平底の底部資料である。胎土、繊維についてはⅩⅡ層同様である。

石器　石器はⅩⅡ層より87点、ⅩⅢ層より44点、計131点が出土している。ここでは、まず分類規準、計測規準を明らかにし、次に層位ごとに記述する。

分類　石鏃・尖頭器・石匙を定形石器としてとり出し、それ以外のものを不定形石器として刃部の形状から細分した。

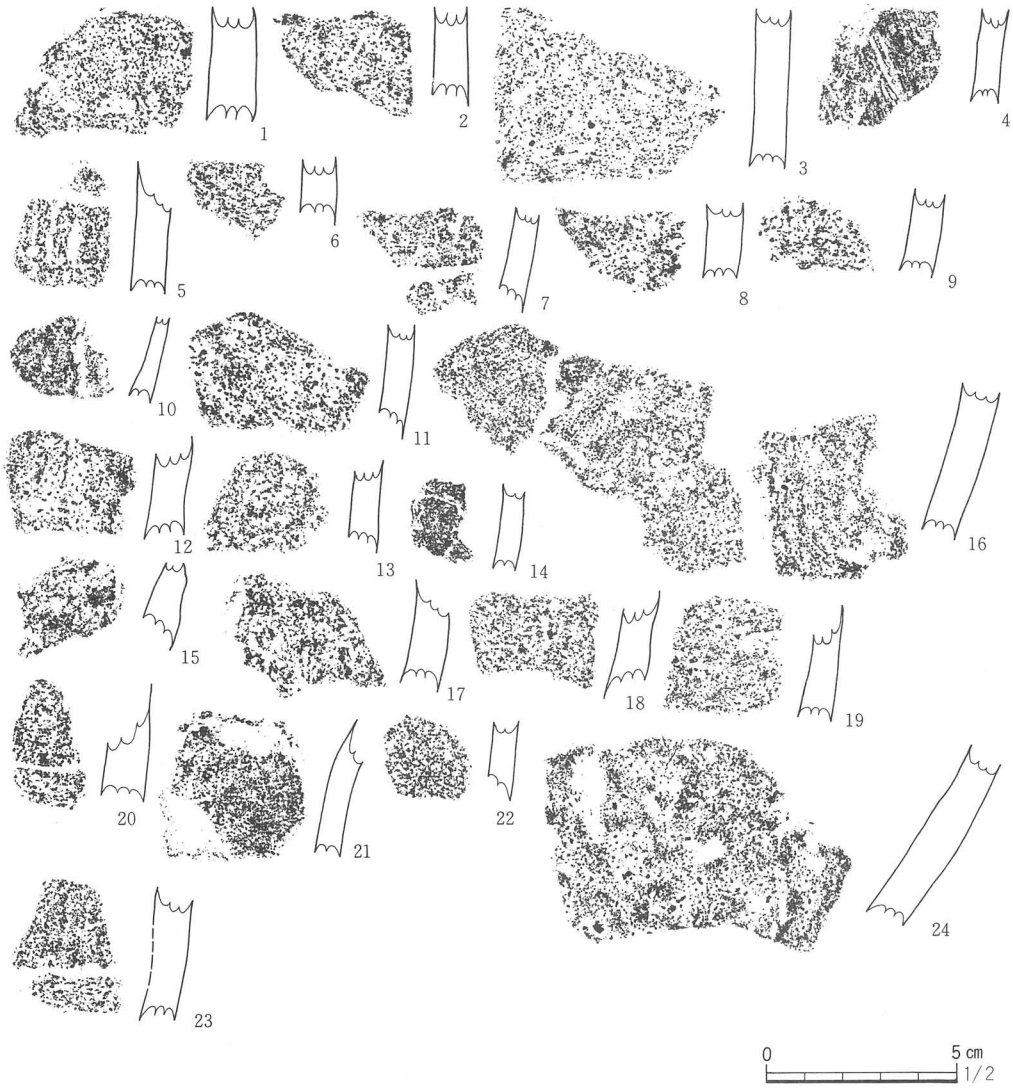
石鏃　尖端の作り出しが明瞭で、基部整形がなされており、かつ両縁が完全に整形されている剝片石器。その形態からⅠ類：凹基のもの、Ⅱ類：平基のもの、Ⅲ類：細長いもので基部が雁又状のもの、Ⅳ類：その他、に分類する。

尖頭器　石鏃と同様の調整を施すが、最大長が４cmをこえるもの



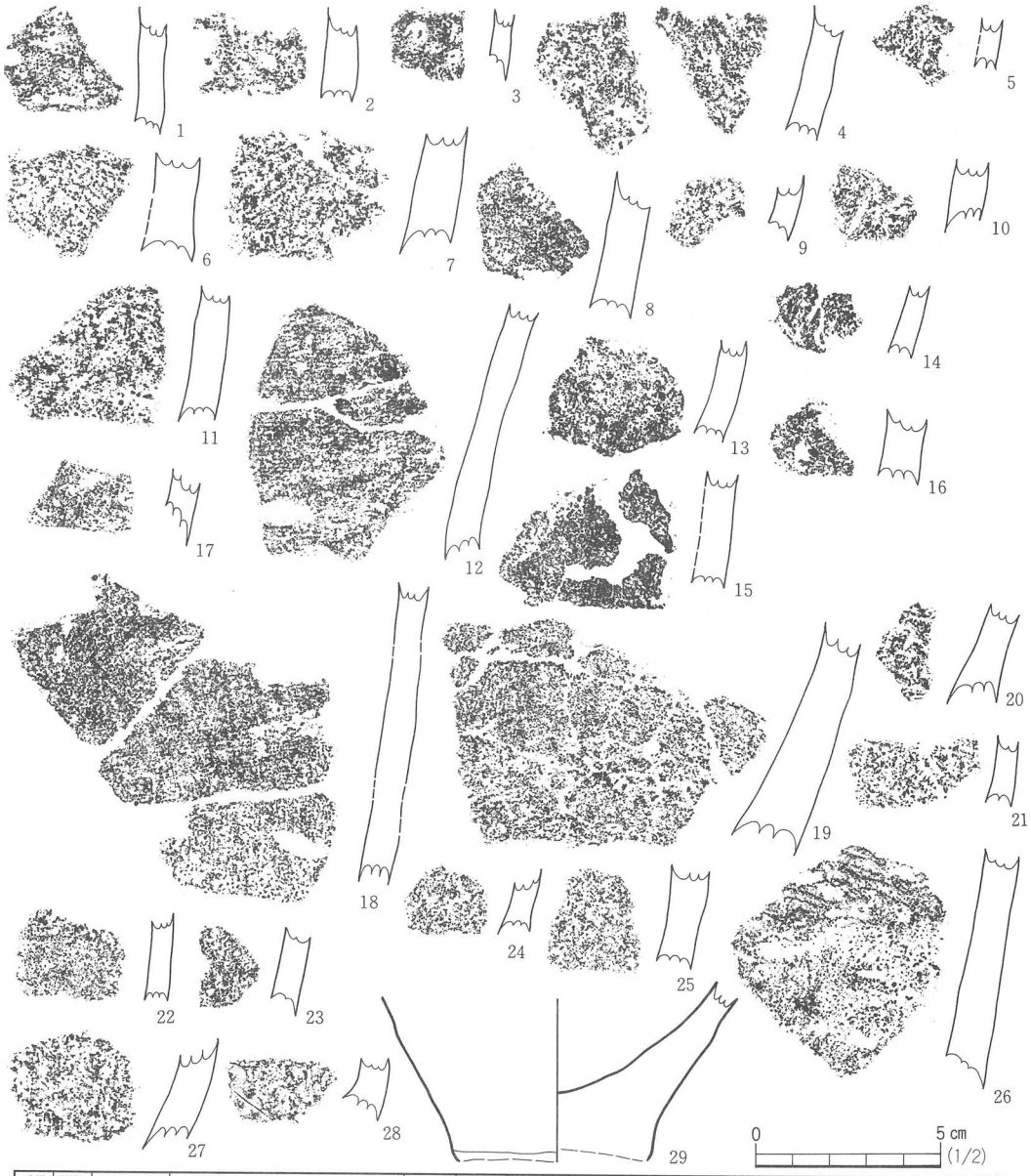
番号	層位	グリッド	文様・調整	登録	写真	番号	層位	グリッド	文様・調整	登録	写真
1	Ⅶ	B 2	(外)沈線、(内)ミガキ？	A162	39－1	11	Ⅶ	A11	(外)隆線？沈線（内）ミガキ	A156	39－13
2 a	Ⅶ	A11	口唇刻み、(外)条痕→沈線(内)条痕	A157	39－2	12	Ⅶ	B 2	(外)沈線（内）ナデ？	A160	39－12
2 b	Ⅶ	A11	口唇刻み、(外)条痕→沈線(内)条痕	A158	39－3	13	Ⅶ	D 2	(外)沈線、ケズリ	A209	39－14
2 c	Ⅶ	A11	(外)条痕→沈線（内）条痕	A159	39－4	14	Ⅶ	E 5	(外)沈線	A230	39－15
3	Ⅶ	B 6	(外)沈線（内）条痕	A163	39－5	15	Ⅶ	C 1		A183	
4	Ⅶ	A10	(外)沈線（内）ケズリor条痕	A155	39－6	16	Ⅶ	D 5		A215	
5	Ⅶ	B 9	(外)沈線（内）条痕	A176	39－7	17	Ⅶ	F 2	(外)ケズリ(内)ナデ？	A234	39－16
6	Ⅶ	C 8	(外)沈線（内）条痕	A203	39－8	18	Ⅶ	A 2	繊維微量	A151	39－17
7	Ⅶ	B10	(外)沈線（内）条痕	A179		19	Ⅶ	C 8		A199	39－18
8	Ⅶ	B10	(外)沈線（内）条痕	A178	39－9	20	Ⅶ	E 1		A224	39－19
9	Ⅶ	B 9	(外)沈線or条痕（内）条痕	A177	39－10	21	Ⅶ	C 8	(内)ナデ？	A205	39－20
10	Ⅶ	A 4	(内)条痕		39－11	22	Ⅶ	E 5	(外)ミガキタテ（内）ミガキ	A231	39－21

第42図　Ⅶ層出土土器（1）



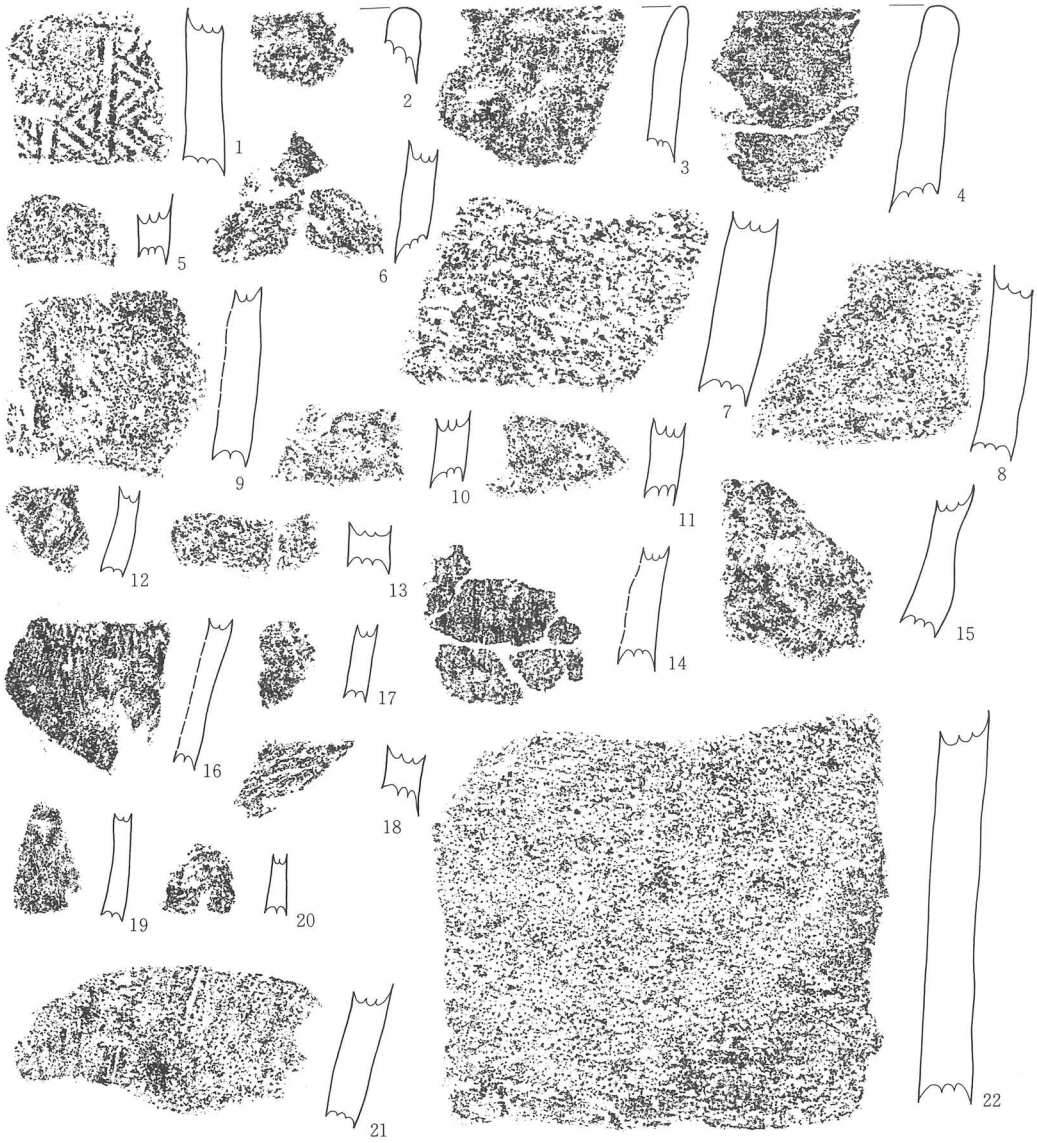
番号	層位	グリッド	文様・調整	登録	写真	番号	層位	グリッド	文様・調整	登録	写真
1	Ⅶ	A 6		A153		13	Ⅶ	C 1		A184	
2	Ⅶ	A 7		A154	39−23	14	Ⅶ	C 3	(外)ミガキ	A186	
3	Ⅶ	B 7		A164		15	Ⅶ	C 3	(外)ナデ？ (内) ナデ繊維微量	A187	
4	Ⅶ	B 7	(外) ミガキ	A166	39−22	16	Ⅶ	C 3＋D 3	(外)ナデ？ (内) ナデ？	A188	39−25
5	Ⅶ	B 7		A167		17	Ⅶ	C 5	(内)ミガキ	A190	
6	Ⅶ	B 7		A170		18	Ⅶ	C 5	(内)ミガキ？	A191	
7	Ⅶ	B 7	(内) ナデ？	A172		19	Ⅶ	C 6	(外)ナデ？	A192	
8	Ⅶ	B 8		A173		20	Ⅶ	C 6		A193	
9	Ⅶ	B 8		A174		21	Ⅶ	C 7	(外)ナデ？ (内) ナデ？	A194	39−24
10	Ⅶ	B 8	(外) ミガキ？	A175		22	Ⅶ	C 7	(外)ナデ？ (内) ナデ？	A195	39−26
11	Ⅶ	B11	(内) ミガキ	A180		23	Ⅶ	C 8	(内)ミガキ繊維微量	A196	
12	Ⅶ	B11		A181		24	Ⅶ	C 8	(外)ナデ？	A197	

第43図　Ⅶ層出土土器（2）



番号	層位	グリッド	文　様　・　調　整	登　録	写　真	番号	層位	グリッド	文　様　・　調　整	登　録	写　真
1	XII	C 8	(内)ナデ?	A198		16	XII	E 1		A221	
2	XII	C 8	(内)ナデ?	A200		17	XII	E 1	(外)ナデ?繊維微量	A222	
3	XII	C 8		A201		18	XII	E 1＋E 2	(外)ミガキ (内) ミガキ繊維微量	A223	40－1
4	XII	C 8	(内)ナデ	A202		19	XII	E 2	(外)ナデ? (内) ナデ?繊維微量	A226	39－28
5	XII	C 8		A204		20	XII	E 2		A227	
6	XII	D 1	繊維微量	A206		21	XII	E 4		A228	
7	XII	D 2	(外)ミガキ (内) ナデ	A207		22	XII	E 4	(内)ナデ?	A229	
8	XII	D 2		A211		23	XII	E 5		A232	
9	XII	D 3		A212		24	XII	F 3	(外)ミガキ (内) ミガキ	A236	
10	XII	D 4	(内)ナデ?	A213		25	XII	F 3	(外)ナデ? (内) ナデ?	A237	
11	XII	D 4	(内)ナデ?	A214		26	XII	F 3		A238	39－30
12	XII	D 5	(外)ミガキ (内) ナデ?繊維微量	A216	39－27	27	XII	B 2	(内)ミガキ	A161	40－2
13	XII	D 5	(外)ナデ? (内) ケズリ?	A217		28	XII	D 2		A210	40－3
14	XII	D 5	(外)ケズリ? (内) ナデ?繊維微量	A219		29	XII	E 2		A225	40－4
15	XII	D 7	(外)ミガキ	A220	39－29						

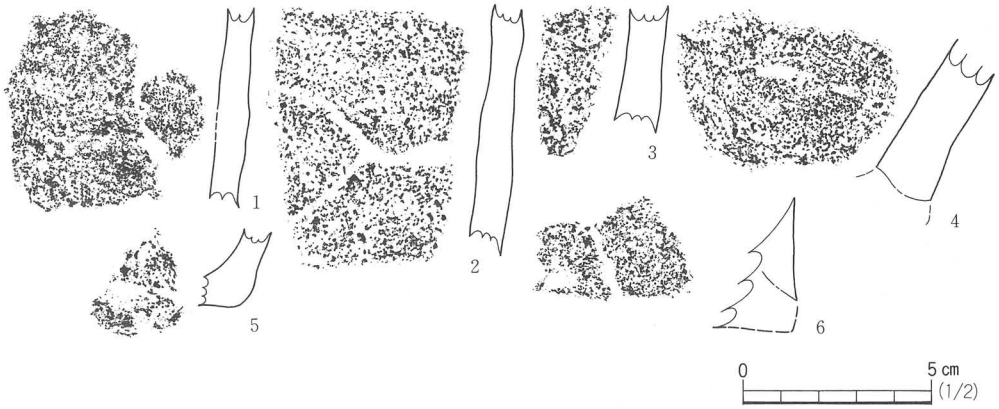
第44図　XII層出土土器(3)



0　5 cm (1/2)

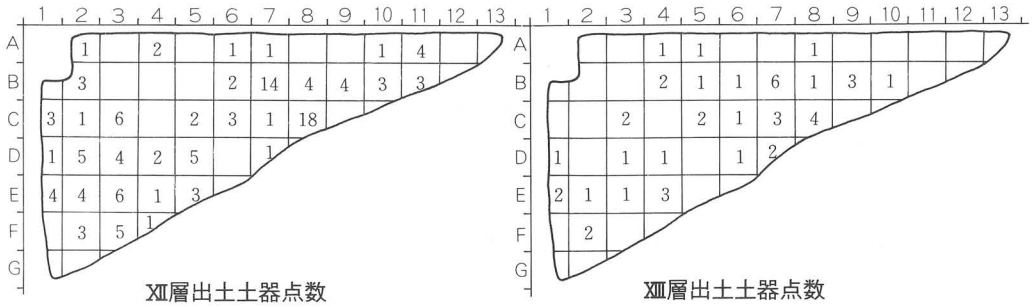
番号	層位	グリッド	文様・調整	登録	写真	番号	層位	グリッド	文様・調整	登録	写真
1	XIII	C 8	(外)押型文 (内) ナデ	A261	40－5	12	XIII	B 9		A253	
2	XIII	B 4	(外)ナデ? (内) ナデ	A243	40－6	13	XIII	C 5		A257	
3	XIII	B 9	(外)ナデ? (内) ナデ繊維微量	A252	40－7	14	XIII	C 6	(外)ケズリタテ→ミガキ?	A258	40－14
4	XIII	D 7	(外)ミガキ? (内) ミガキ?	A267	40－8	15	XIII	C 7	(外)ナデ? (内) ミガキ?	A259	40－13
5	XIII	A 4	(外)ナデ?	A240		16	XIII	C 7	(外)ケズリタテ→ミガキ	A260	40－12
6	XIII	A 5	(外)ミガキ? (内) ナデ?繊維微量	A241		17	XIII	C 8		A262	
7	XIII	A 8	(内)ミガキ	A242	40－9	18	XIII	D 1	(内)ミガキ?	A263	
8	XIII	B 5	(内)ナデ?	A245	40－11	19	XIII	D 3	(内)ナデ?	A264	
9	XIII	B 7	(内)ナデ? (内) ミガキ?	A248	40－10	20	XIII	D 4	(内)ナデ?繊維微量	A265	
10	XIII	B 7	(内)ミガキ? } 同一個体	A249		21	XIII	D 6	(内)ミガキ	A266	40－16
11	XIII	B 7		A250		22	XIII	E 1	(内)ケズリタテ	A268	40－15

第45図　XIII層出土土器(1)



番号	層位	グリッド	文　様　・　調　整	登　録	写　真	番号	層位	グリッド	文　様　・　調　整	登　録	写　真
1	XIII	E 3	(内)ミガキ？繊維微量	A269	40−17	4	XIII	E 4	(内)ミガキ？	A270	40−18
2	XIII	E 4		A271		5	XIII	B 6	(内)ナデ？	A246	40−19
3	XIII	F 2		A272		6	XIII	B 7	(内)ナデ？	A247	40−20

第46図　XII層出土土器（2）



第47図　土器平面分布図

石匙　両側縁から作出される凹部によりつまみ部を有するもの

不定形石器　主に長さ２㎜以上の二次加工が施されるもの

Ⅰ類　連続した規則的な二次加工により刃部が作出されるもの

ⅠA　表裏両面から二次加工が施されるもの

ⅠB　片面加工が全周に及ぶもの

ⅠC　片面加工が一〜二側縁に施されるもの

ⅠD　二次加工により尖頭部を作出するもの

ⅠE　折れ面に二次加工が施されるもの

II類　両極剥離痕をもつもの

III類　刃部の平面形が鋸歯状になるもの

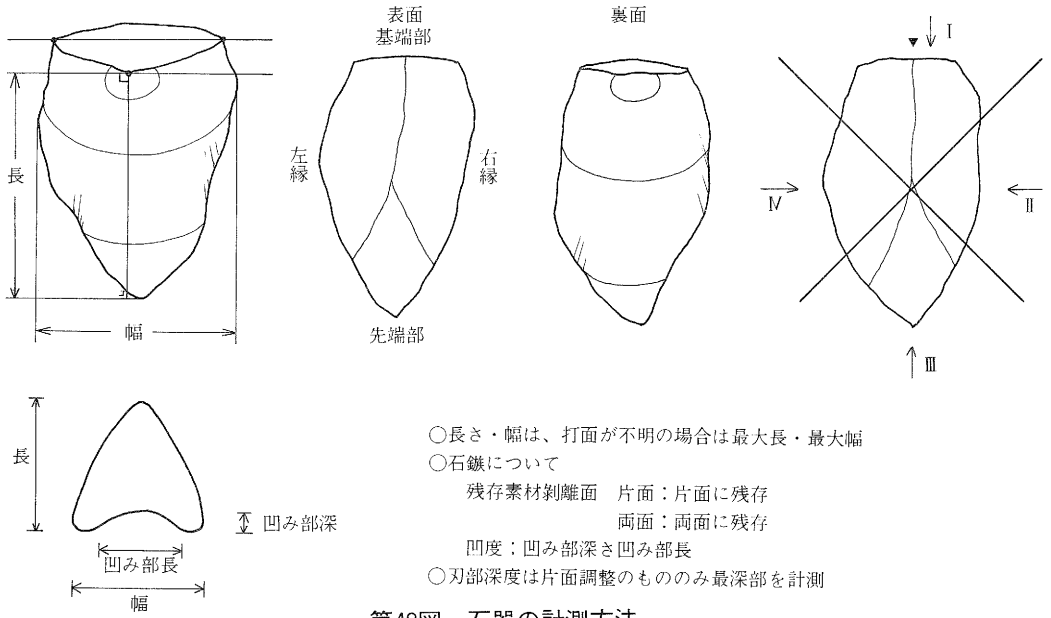
IV類　凹部を作出するもの

二次加工ある剥片　上記以外の二次加工をもつもの

不明石器　二次加工をもつもののうち、破損などによって本来の形を失っているもの

微細剝離痕ある剝片　連続した微細剝離痕（長さ２㎜未満）をもつもの

礫石器は、凹部あるものを凹石、磨面あるものを磨石、凹部と磨面をあわせもつものを磨凹石とする。



第48図　石器の計測方法

Ⅻ層出土石器（第49～55・59～62図）

石鏃（第49図１～12）　12点出土している。いずれも無茎で、１～５がⅠ類、６～９がⅡ類、10がⅢ類、11がⅣ類にあたる。

石匙（第49図13）　横長剝片を素材とし、側縁につまみを有する。表面端部、腹面基部に対照的な二次加工が施される。

不定形石器ⅠＡ類（第49図14・15）　14は裏面左縁に両面より、右縁に表面より二次加工が施される。15は大形の剝片を素材としており、表面右縁に両面加工、左縁な片面加工がされる。

不定形石器ⅠＢ類（第50図１）　表面全周に二次加工が施され、楕円形に成形される。刃部角は大きい。

不定形石器ⅠＣ類（第50図２～６、第51図１～10、第52図１～３）　第50図２・４～６は１側縁に、３は側縁から端部にかけ二次加工が施される。第51図１は１側縁に丸みをもつ刃部をもつ。２・３は端部を欠くが、直線的な刃部をもつ。４は火熱により破損しているが、９とともに丸みをもった刃部である。10は二側縁に小さな二次加工をもつ。第52図１～３は、裏面にも二次

加工が施されるもので、1は裏面端部、2は表裏の左縁に、3は裏面縁部に刃部をもつ。

不定形石器ⅠD類（第52図4・5）　4は表面の、5は裏面の二次加工により端部に尖頭部を作っている。

不定形石器ⅠE類（第52図6・7）　折れ面への加工方向は裏面からである。

不定形石器Ⅱ類（第52図8）　ピエス・エスキーユである。一端は欠損するが、直交する二対の刃部を有するとみられる。

二次加工ある剥片（第52図9～12、第53図1～16）　20点出土している。

不明石器（第54図1～5）　5は交互剥離が全周にめぐりそうであり、篦状石器とみられる。

微細剥離痕ある剥片（第54図6～13・第55図）　22点出土している。剥片の縁部、端部に使用によるものとみられる微細剥離痕をもつ。

礫石器（第62図1）　凹石が1点出土している。扁平な礫の片面に凹部をもつ。一部が黒変している。

石核（第59図6・7、第60図1）　6・7は剥片素材の石核である。1は自然礫の平坦面を打面とし、連続的な剥離を行っている。

Ⅻ層出土石器

石鏃（第56図1～7）　いずれも無茎である。1～6はⅠ類、7はⅡ類である。

尖頭器（第56図8）　他の石鏃に比べ特に大きいためとり出した器種である。表面には深い調整、裏面には浅い調整がされる。裏面に素材面を大きく残す。

不定形石器ⅠC類（第56図9～14、第57図1～3・6）　9・13・14は裏面の側縁に二次加工が施される。10・12・1・2は表面に刃部をもつ。11は二次加工後に破損したものである。3は表裏の左縁に対照的な刃部を有する。6は5と接合する資料だが、破損後に二次加工を施している。上半（5）には微細剥離痕がみられる。

不定形石器Ⅲ類（第57図4）　表面右縁に鋸歯状の刃部をもつ。打面部は除去されている。

不定形石器Ⅳ類（第57図8）　破損品であるが、裏面からの二次加工による凹部をもつ。

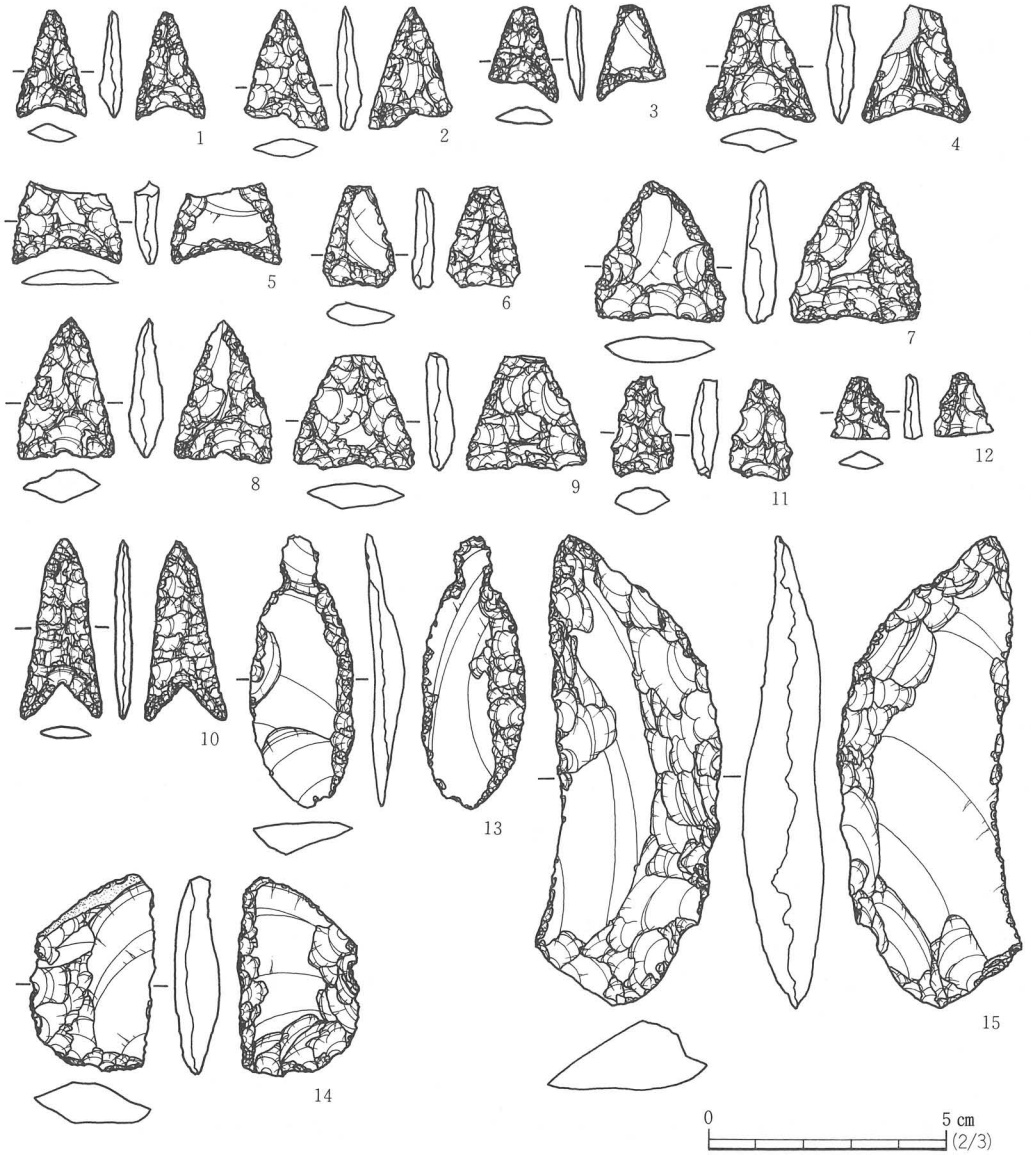
二次加工ある剥片（第57図9～12、第58図1～4）　8点出土している。

不明石器（第58図5～7）5・7は両面加工による立面観鋸歯状の刃部を有する。6は破損した石鏃であろう。

微細剥離痕ある剥片（第58図8～15、第59図1～5）　火熱痕のあるものが多い。15の大きい破片はⅫ層出土のものである。3は折れ面に微細剥痕跡がある。

礫石器（第62図2）　片面に磨面と凹部をもつ。一端は欠損している。

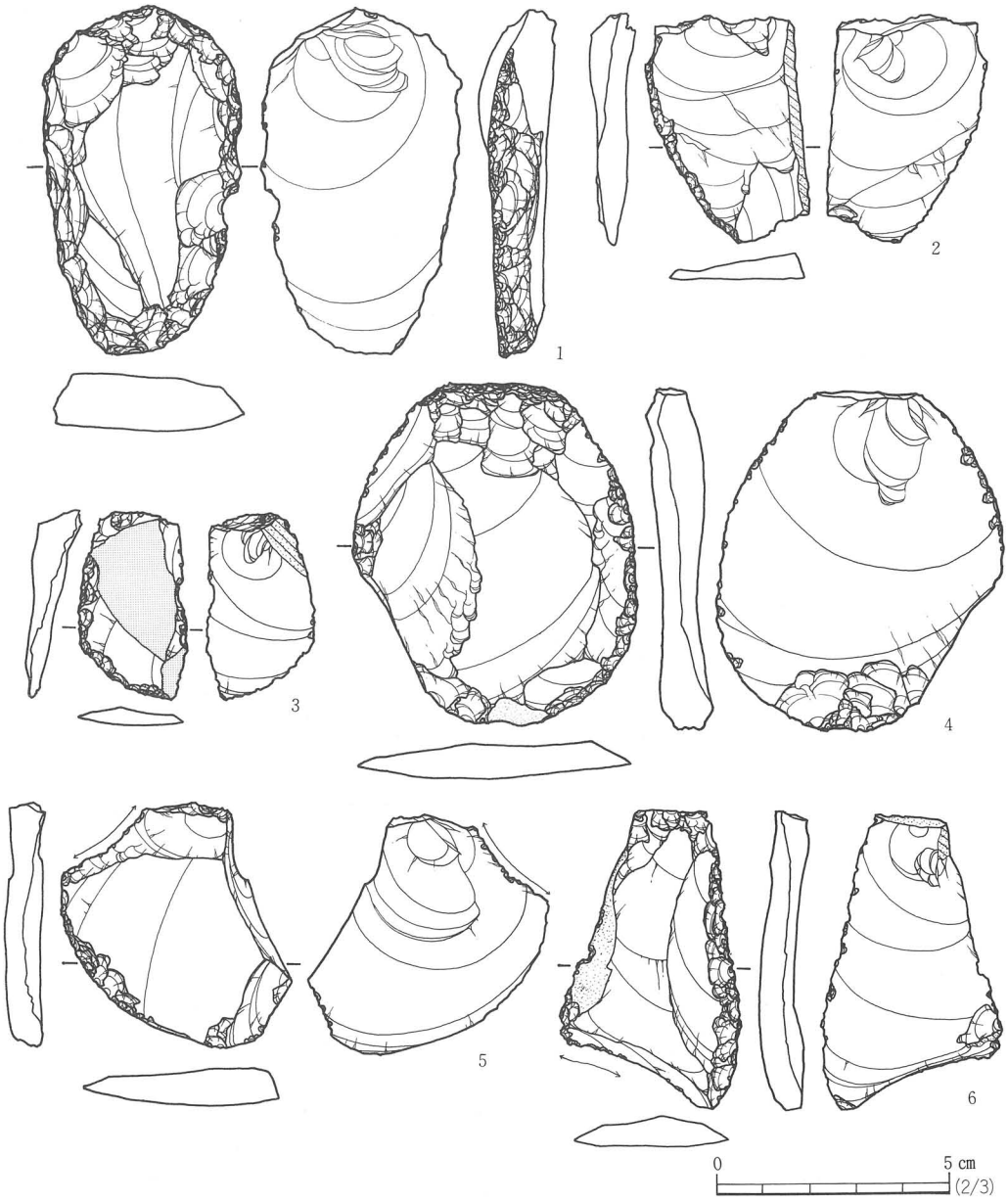
石核（第60図1・2）　1は作業面を2面もち、周辺から求心的な剥離が行われる。2は作業面を3面もち、表と裏では打面が90°転移する。いずれも珪質頁岩の剥片素材の石核である。



番号	グリッド	器種		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	調整	破損部位	残存素材剥離面	凹み部長	凹み部深	凹度	備考	登録	写真
1	B4	石鏃	I	22.2	14.5	4.9	0.8	珪質頁岩	両面	－	両面	14	2.4	0.171		K54	41－1
2	B8	石鏃	I	(25.4)	(17.4)	4.9	1.3	珪質頁岩	両面	基部	片面	－	－	－		K56	41－2
3	C3	石鏃	I	(19.9)	(13.9)	3.5	0.6	珪質頁岩	両面	先端、基部	片面	－	－	－		K73	41－3
4	C8	石鏃	I	(24.4)	(22.2)	5.3	1.8	珪質頁岩	両面	先端	両面	－	－	－	被熱、基部ガジリ	K89	41－4
5	F3	石鏃	I	(17.1)	22.4	4.4	1.5	チャート	両面	先端	両面	21.5	3.9	0.181		K135	41－5
6	A11	石鏃	II	(20.4)	15.3	4.5	1.1	珪質頁岩	両面	先端	両面	－	－	－		K49	41－6
7	D3	石鏃	II	28.9	27.1	6.2	4.3	珪質頁岩	両面	－	両面	－	－	－		K107	41－7
8	D4	石鏃	II	29.5	19.9	6.9	2.4	珪質頁岩	両面	－	両面	－	－	－		K108	41－8
9	D5	石鏃	II	(24.0)	25.1	5.3	2.9	珪質頁岩	両面	先端	両面	－	－	－		K122	41－9
10	A4	石鏃	III	37.4	17.0	3.7	1.4	珪質頁岩	両面	－	片面	15	8.0	0.533		K40	41－10
11	D4	石鏃	IV	(20.8)	13.0	5.3	1.0	石英安山岩	両面	先端	両面	－	－	－		K109	41－11
12	D3	石鏃		(12.8)	(12.1)	3.7	0.4	珪質頁岩	両面	基部	－	－	－	－		K105	41－12

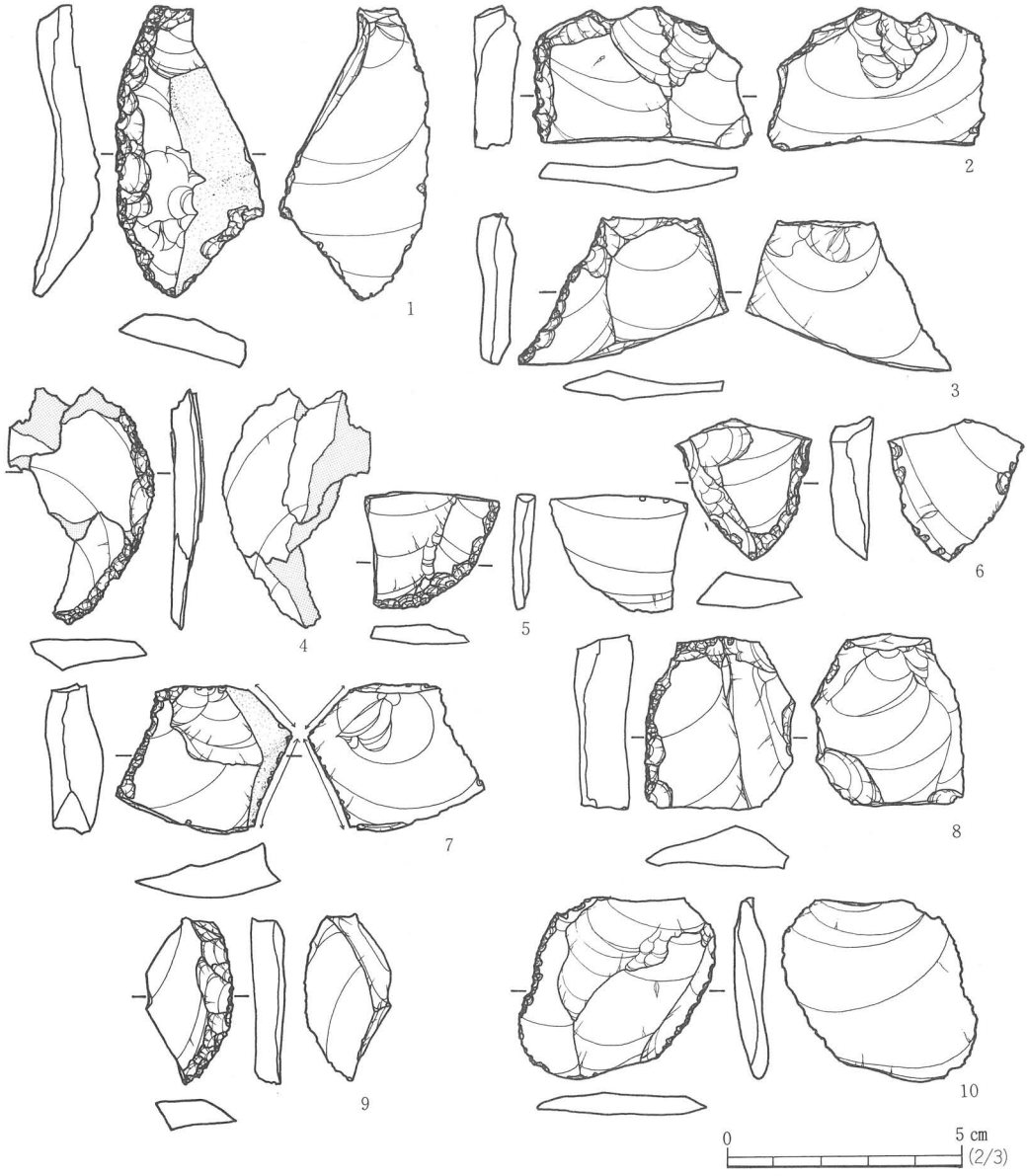
番号	グリッド	器種		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	打面	表面の面構成	破損部位	刃角	刃部深度	備考	登録	写真
13	C5	石匙		57.1	21.3	6.1	5.6	珪質頁岩	－			背35° 腹40°	背4 腹8		K83	41－13
14	D2	不定形	IA	40.9	25.1	8.9	9.2	珪質頁岩	－	I		片60° 両45°	5		K94	41－14
15	D6	不定形	IA	99.4	42.7	16.0	48.9	珪質頁岩	－	II		片45° 両55°	13		K114	41－15

第49図　XII層出土剥片石器（1）



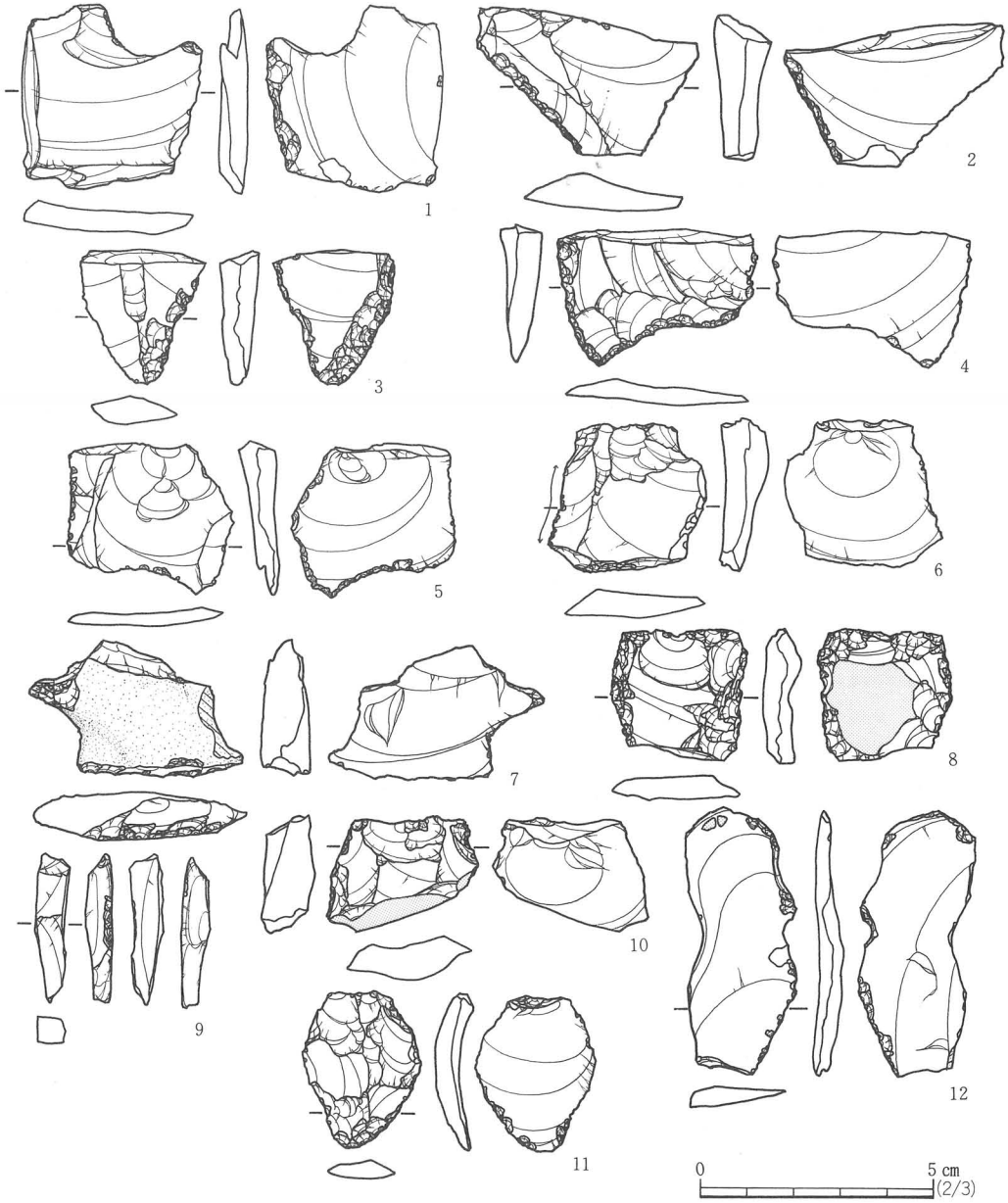
番号	グリッド	器　種		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	打面	表面の面構成	破損部位	刃　角	刃部深度	備　考	登　録	図　版
1	B11	不定形	ＩB	65.0	57.9	15.5	46.6	珪質頁岩	剝	Ｉ＋II		左・下65°、右50°	16		K60	41−17
2	A11	不定形	ＩC	44.3	36.8	7.5	11.2	珪質頁岩	剝	Ｉ＋IV		50°	4		K51	41−18
3	D 2	不定形	ＩC	34.8	23.8	8.1	5.2	珪質頁岩	調4	II	表　面	35°	3	表面被熱	K97	41−16
4	B11	不定形	ＩC	71.9	61.1	10.1	46.8	珪質頁岩	剝	Ｉ＋IV		40°	4		K59	41−20
5	D 2	不定形	ＩC	51.0	51.4	8.1	17.4	珪質頁岩	剝	Ｉ＋II		40°	5		K99	41−21
6	E 1	不定形	ＩC	62.0	39.0	7.2	18.7	珪質頁岩	自	自＋Ｉ＋II＋IV		45°	5	左縁m．f．	K118	41−19

第50図　XII層出土剝片石器（2）



番号	グリッド	器種		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	打面	表面の面構成	破損部位	刃角	刃部深度	備考	登録	図版
1	F 2	不定形	I C	59.0	31.6	10.2	15.6	珪質頁岩	剝	自＋I＋II	右縁	50°	6		K132	41−22
2	A 6	不定形	I C	35.6	48.9	7.7	11.2	珪質頁岩	調6？	I	先端	50°	3		K42	41−23
3	A 6	不定形	I C	29.9	43.7	7.0	6.1	珪質頁岩	剝	I	先端	30°	3		K43	41−25
4	A11	不定形	I C	50.5	31.5	6.5	6.9	珪質頁岩	−	I	基端	60°	4	被熱	K50	41−24
5	D 3	不定形	I C	34.1	26.7	4.1	3.0	珪質頁岩	−	I	基端・左縁	40°	4		K104	41−26
6	C 3	不定形	I C	30.1	28.4	8.1	6.8	珪質頁岩	−	I	基端	70°	3		K69	42−1
7	D 5	不定形	I C	29.5	36.5	10.2	10.8	珪質頁岩	剝	I＋IV	先端	45°	3		K110	42−2
8	E 4	不定形	I C	32.1	32.4	11.7	13.8	珪質頁岩	剝	I＋II	先端	60°	6		K126	42−3
9	F 3	不定形	I C	35.6	17.9	7.2	4.1	珪質頁岩	−	I	基端	50°	7		K137	42−4
10	C 1	不定形	I C	47.1	36.1	5.2	8.3	珪質頁岩	−	I	基端	左45°・右60°	左2・右1		K61	42−5

第51図　XII層出土剝片石器（3）



番号	グリッド	器種		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	打面	表面の面構成	破損部位	刃角	刃部深度	備考	登録	図版
1	A10	不定形	IC	45.5	44.0	5.5	8.7	珪質頁岩	−	Ⅳ	基端	40°	5		K48	42−6
2	B9	不定形	IC	46.3	28.6	8.7	10.4	珪質頁岩	−	Ⅰ+Ⅳ	基端・先端	表45°・裏50°	表2・裏2		K58	42−8
3	F3	不定形	IC	28.1	25.7	8.0	4.6	珪質頁岩	−	Ⅰ	基端	表40°・裏50°	表5・裏6		K134	42−7
4	C3	不定形	ID	42.0	28.9	6.7	7.1	珪質頁岩	−	Ⅱ	基端	45°	4		K68	42−9
5	E3	不定形	ID	31.6	35.2	6.4	5.0	珪質頁岩	調3?	Ⅰ+Ⅱ	−	45°	1		K124	42−11
6	B8	不定形	IE	28.9	33.8	7.6	8.2	珪質頁岩	剝	Ⅰ	−	80°	2	表右の調整は新	K55	42−10
7	D2	不定形	IE	47.6	27.7	9.8	10.1	珪質頁岩	−	原面	基端	80°	3		K98	42−12
8	F2	不定形	Ⅱ	28.0	27.7	7.1	6.3	珪質頁岩	−	−	下端	−	−	被熱	K128	42−13
9	A6	二次加工剝片		31.1	6.7	5.5	1.5	珪質頁岩	−						K46	42−14
10	C1	二次加工剝片		18.7	33.2	9.6	7.0	珪質頁岩	調2					被熱	K62	42−15
11	C2	二次加工剝片		30.4	25.8	4.7	3.8	珪質頁岩	調3						K64	42−16
12	C3	二次加工剝片		57.0	24.8	5.1	6.2	珪質頁岩	−					被熱	K65	42−17

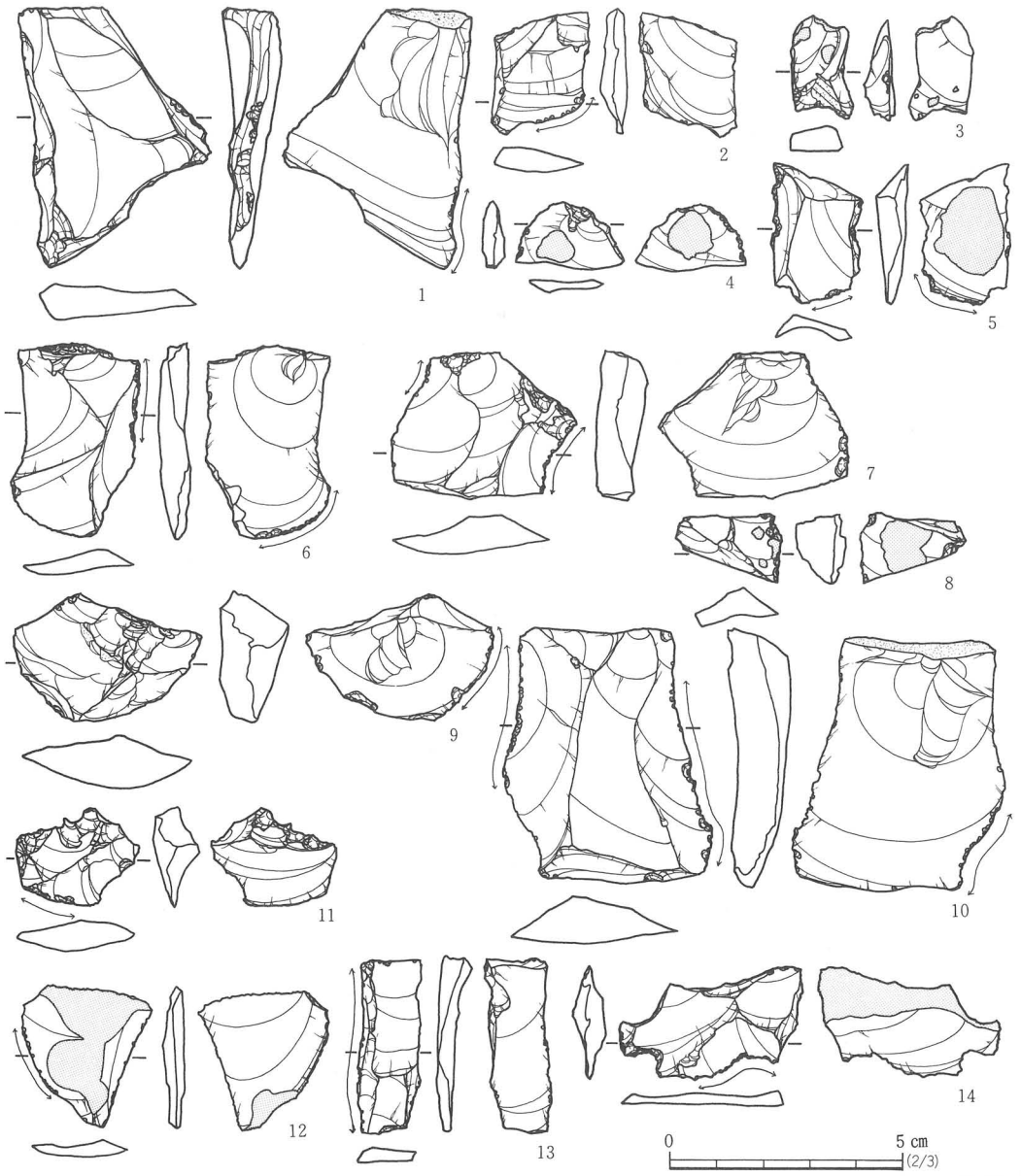
第52図　Ⅻ層出土剝片石器（4）

番号	グリッド	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	打面	調整部位	備考	登録	図版
1	C 3	二次加工剥片	39.8	24.8	9.4	6.7	珪質頁岩	−	端部	折れ面にm. f.	K66	42−18
2	C 3	二次加工剥片	53.3	35.4	8.3	10.5	珪質頁岩	−	縁部	表面右縁にm. f.	K74	42−22
5	E 3＋C 5	二次加工剥片	39.5	36.6	7.5	8.1	珪質頁岩	−	縁部	表面左縁上半の調整は新しい	K121+85	42−21
6	C 5	二次加工剥片	35.2	34.8	12.9	10.3	珪質頁岩	−	端部・縁部		K84	42−23
7	C 8	二次加工剥片	22.1	19.3	5.7	1.0	珪質頁岩	−			K87	42−24
8	C 8	二次加工剥片	41.6	19.5	7.9	5.4	珪質頁岩	−	縁部		K88	42−25
9	C 8	二次加工剥片	25.1	17.4	3.6	1.4	珪質頁岩	剝	縁部		K90	42−26
10	C 8	二次加工剥片	21.4	12.5	3.8	0.7	珪質頁岩	−	縁部		K91	42−27
11	C 9	二次加工剥片	31.8	22.0	6.1	2.5	珪質頁岩	−	縁部	被熱	K92	42−28
12	D 1	二次加工剥片	36.4	22.8	3.8	3.2	珪質頁岩	−	縁部	被熱	K93	42−29
13	D 2	二次加工剥片	36.0	33.7	5.6	5.3	珪質頁岩	点状	両縁部	基端部にm. f.	K96	42−30
14	D 5	二次加工剥片	40.6	23.2	9.5	6.8	珪質頁岩	−	端部・縁部		K112	42−31
15	E 5	二次加工剥片	28.5	18.4	4.2	1.9	珪質頁岩	−	縁部	先端部にm. f.	K127	42−32
16	E 3	二次加工剥片	36.5	29.6	3.7	4.0	珪質頁岩	調4	縁部		K123	42−33

第53図　XII層出土剥片石器（5）

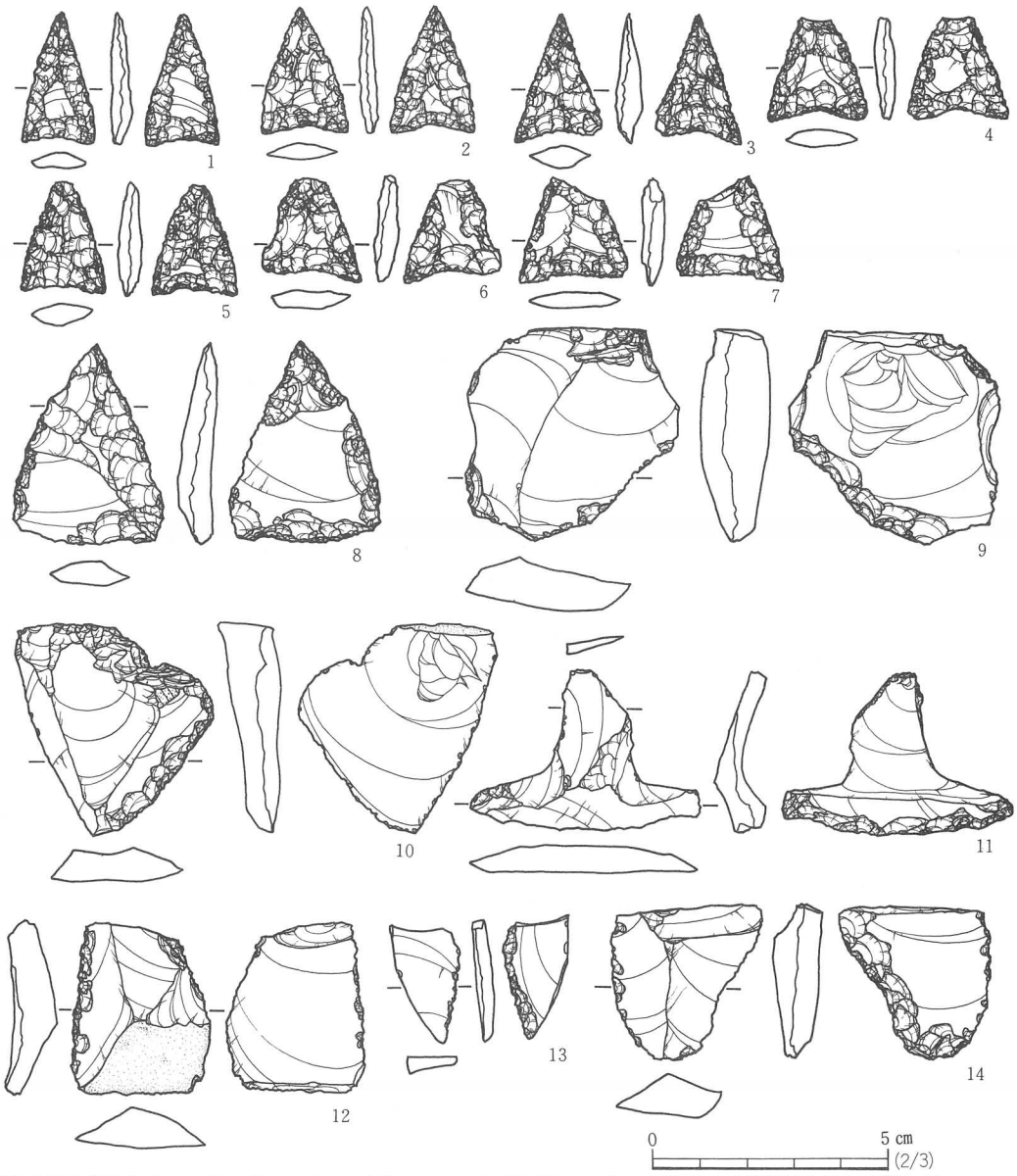
番号	グリッド	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	打面	調整部位	備考	登録	図版
1	A11	不明石器	19.7	14.6	7.5	1.5	珪質頁岩	－	縁部	刃角50°	K52	42－34
2	D3	不明石器	30.3	19.0	7.9	3.9	珪質頁岩	剝	縁部	刃角55°	K103	42－36
3	E1	不明石器	29.0	19.9	5.6	2.6	珪質頁岩	－	縁部	石鏃未製品か	K117	42－37
4	F2	不明石器	25.9	18.7	7.4	2.8	珪質頁岩	－	－		K130	42－38
5	F3	不明石器	45.0	35.4	13.0	18.7	珪質頁岩	－	周縁部	ヘラ状石器破損品か	K136	42－39
6	A6	微細剝離痕	39.9	41.2	12.1	17.4	珪質頁岩	調4	縁部		K44	
7	A5	微細剝離痕	28.8	18.0	2.9	1.3	珪質頁岩	－	縁部	被熱	K41	
8	A6	微細剝離痕	43.4	29.3	5.2	5.4	珪質頁岩	－	端部		K45	
9	A9	微細剝離痕	20.0	20.5	3.7	0.8	珪質頁岩	剝	端部・縁部		K47	
10	B2＋E2	微細剝離痕	45.0	42.3	13.3	24.9	珪質頁岩	剝	縁部	被熱により破損	K53+120	42－40
11	B9	微細剝離痕	21.8	44.8	8.5	9.2	珪質頁岩	調3	両縁部		K57	
12	C1	微細剝離痕	24.1	14.7	6.4	1.8	珪質頁岩	－	縁部		K63	
13	C3	微細剝離痕	33.1	46.9	13.3	18.4	珪質頁岩	調3	端部	被熱	K71	42－41

第54図　Ⅻ層出土剝片石器（6）



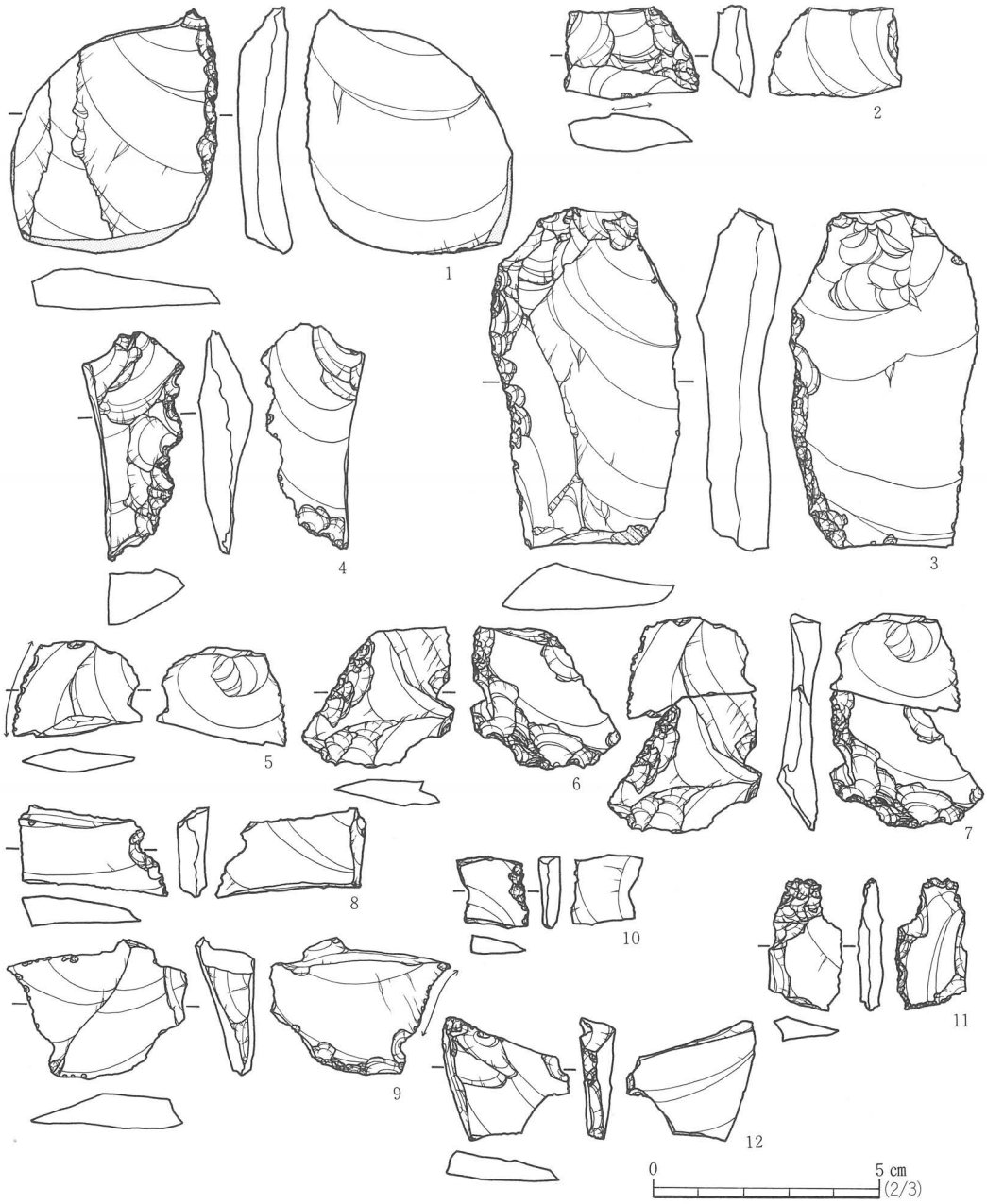
番号	グリッド	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	打面	調整部位	備　　考	登　録	図　版
1	C 3	微細剝離痕	52.2	37.9	10.1	17.0	珪質頁岩	原面	縁　部		K72	42－42
2	C 4	微細剝離痕	31.2	23.1	5.5	3.1	珪質頁岩	－	端　部		K81	
3	D 2	微細剝離痕	23.2	16.3	5.9	1.5	珪質頁岩	－	縁　部		K100	
4	D 3	微細剝離痕	23.4	13.7	3.5	0.8	珪質頁岩	－	縁　部	被熱	K106	
5	D 5	微細剝離痕	30.8	21.3	4.7	2.4	珪質頁岩	－	端　部	被熱	K111	
6	D 5	微細剝離痕	41.0	30.8	6.0	6.3	珪質頁岩	調 2	端部・縁部	裏面左縁の調整は新しい	K113	
7	D 6	微細剝離痕	29.6	40.3	7.8	10.0	珪質頁岩	剝	両縁部		K115	
8	D 7	微細剝離痕	21.9	39.8	12.9	10.8	珪質頁岩	調 2	縁　部		K116	
9	E 2	微細剝離痕	28.2	14.4	8.8	2.3	珪質頁岩	－	縁　部	被熱	K119	
10	E 4	微細剝離痕	50.6	45.0	12.7	27.7	珪質頁岩	原面	両縁部		K125	42－43
11	F 2	微細剝離痕	14.3	26.7	9.7	3.1	珪質頁岩	調 8	端　部		K129	
12	F 2	微細剝離痕	32.3	27.2	4.1	2.1	珪質頁岩	－	縁　部	被熱	K131	
13	F 3	微細剝離痕	36.2	14.1	3.8	2.2	珪質頁岩	剝	縁　部		K133	
14	C 3	微細剝離痕	41.4	24.0	5.9	3.5	珪質頁岩	－	端　部	被熱	K187	

第55図　Ⅻ層出土剝片石器（7）



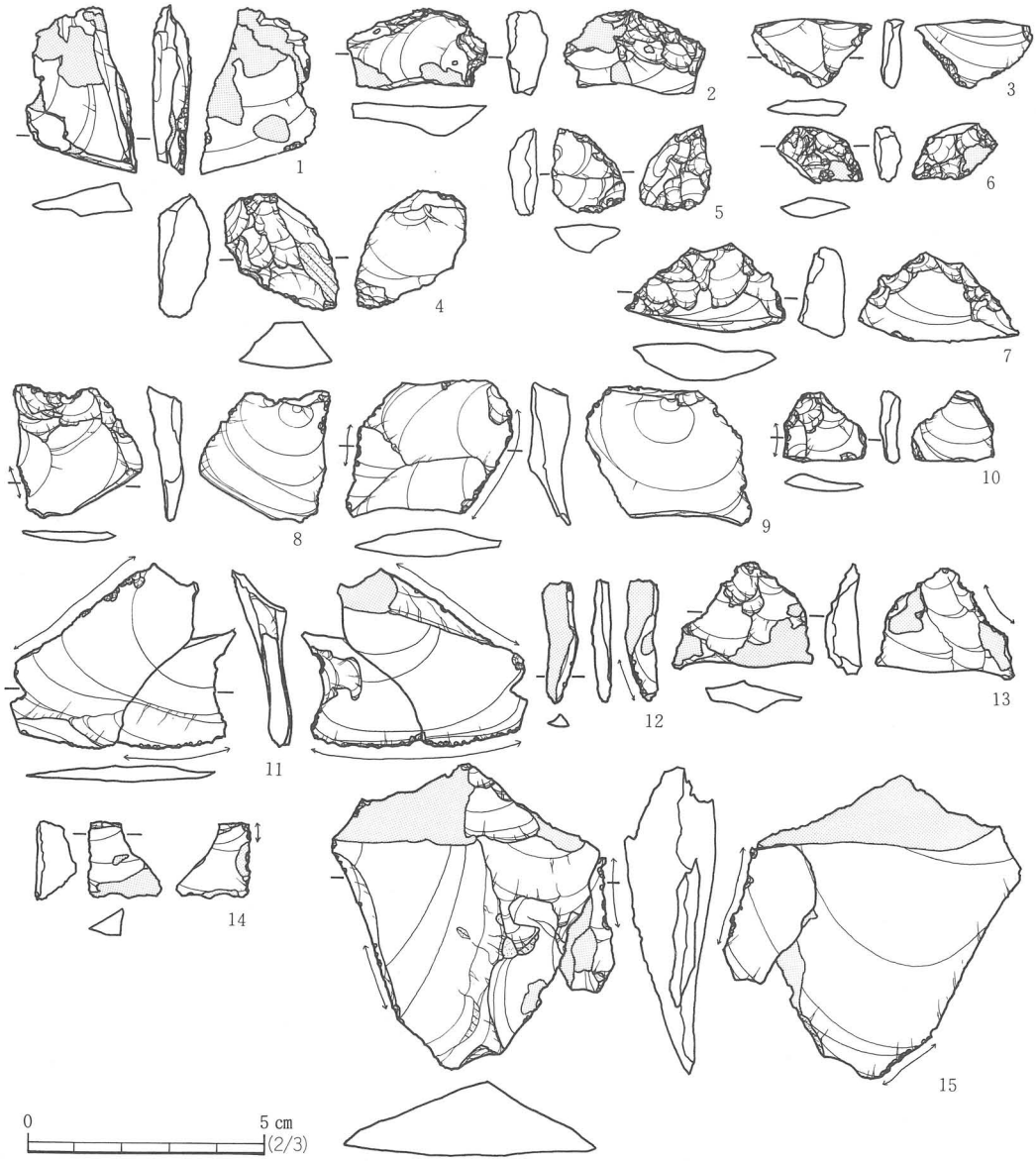
番号	グリッド	器種		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	調整	破損部位	残存素材面	凹長	凹深	凹度	備考	登録	写真
1	A4	石鏃	I	27.8	15.1	4.0	1.3	珪質頁岩	両面	−	両面	13	1.3	0.1	尖端角40°	K138	43−1
2	B11	石鏃	I	26.9	17.9	3.9	1.2	珪質シルト岩	両面	−	両面	14.3	1.6	0.112	尖端角50°	K149	43−2
3	C3	石鏃	I	(27.2)	(18.6)	5.5	1.2	珪質頁岩	両面	基部	−	−	−	−	尖端角40°	K152	43−3
4	D4	石鏃	I	(21.7)	20.9	4.0	1.5	珪質頁岩	両面	先端部	両面	19		0.110		K171	43−4
5	E5	石鏃	I	(23.4)	17.7	4.9	1.5	珪質頁岩	両面	先端部	両面	17	2.1	0.088		K180	43−5
6	F2	石鏃	I	(22.1)	(19.9)	4.3	1.6	珪質頁岩	両面	先端・基部	両面	−	1.5	−		K181	43−6
7	B4	石鏃	II	(22.8)	22.1	4.5	1.8	珪質頁岩	両面	先端部	両面	−	−	−		K144	43−7
8	F4	尖頭器		42.7	31.3	6.8	7.3	珪質頁岩	両面	−	両面	−	−	−	尖端角55°	K183	43−8
番号	グリッド	器種		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	打面	表面の面構成	破損部位	刃部角	刃部深度		備考	登録	写真
9	B5	不定形	IC	42.1	44.3	14.5	29.4	珪質頁岩	剝	I＋III	−	60°	6			K145	43−9
10	B5	不定形	IC	42.9	40.8	9.1	15.3	珪質頁岩	原面	I＋III	−	50°	5			K147	43−10
11	A4	不定形	IC	33.7	49.0	8.0	6.2	珪質頁岩	−	I	縁部	80°	4		調整後破損	K139	43−11
12	B5	不定形	IC	36.4	29.0	9.5	9.7	珪質頁岩	−	I＋II＋IV	基部・先端	40°	3			K146	43−13
13	C4	不定形	IC	27.5	13.6	3.7	1.3	珪質凝灰岩	−	II	基部	55°	3			K160	43−12
14	E4	不定形	IC	38.1	30.6	9.4	8.5	珪質頁岩	−	I	基部	50°	7			K179	43−14

第56図　XIII層出土剝片石器（1）



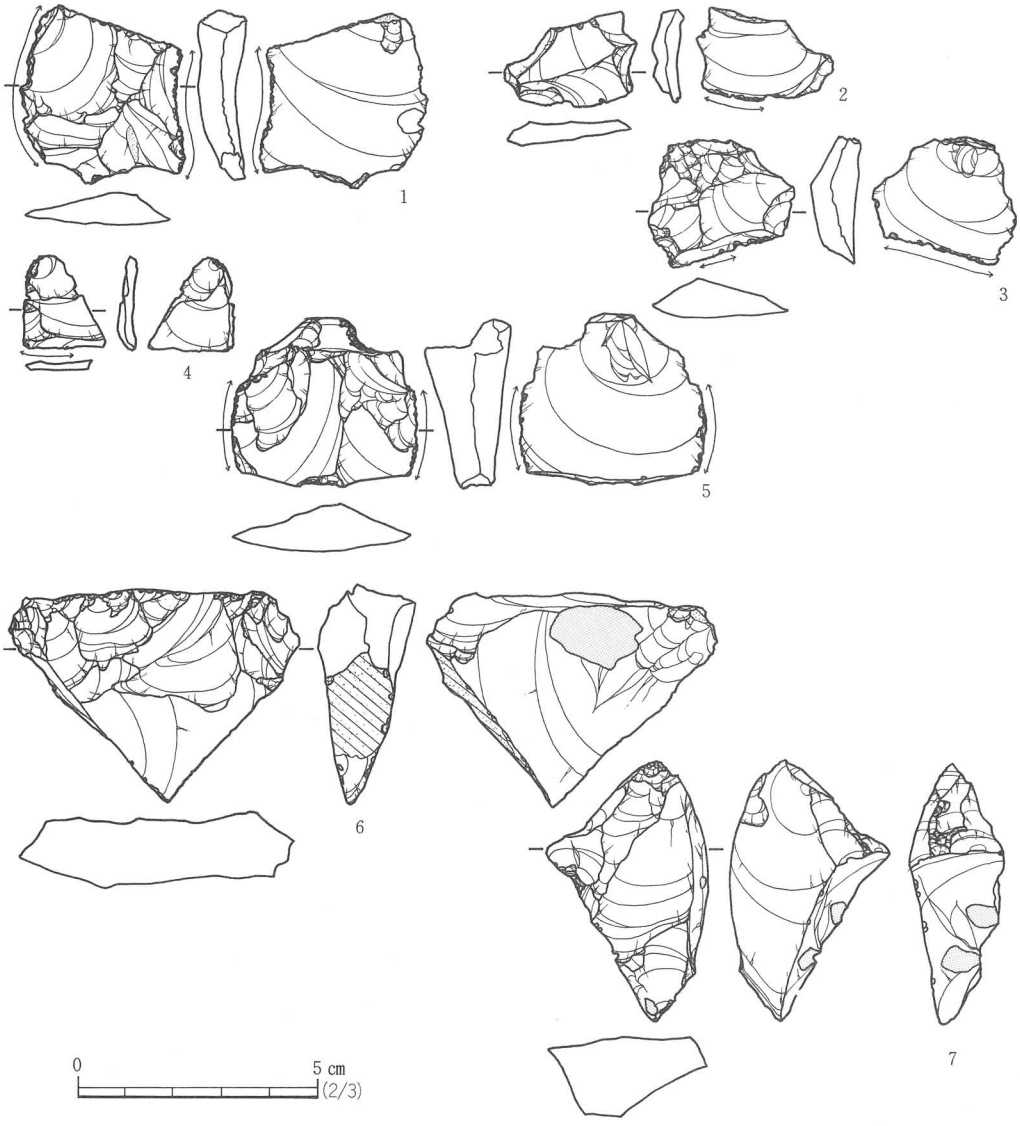
番号	グリッド	器種		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	打面	表面の面構成	破損部位	刃部角	刃物深度	備考	登録	写真
1	E 3	不定形	I C	63.3	44.1	9.8	25.4	珪質頁岩	−	I	基端	45°	3	被熱	K178	43−15
2	F 2	不定形	I C	32.6	26.6	8.8	5.3	珪質頁岩	−	I＋II＋III	基端	50°	11		K182	43−16
3	A 6	不定形	I D	72.3	41.7	12.1	9.7	珪質頁岩	剝	I＋IV	先端	表50°・裏60°	表6裏6		K142	43−18
4	D 6	不定形	III	50.5	23.1	11.6	9.1	珪質頁岩	−	I	基端・左縁	55°	10		K174	43−17
5	C 3	微細剝離痕		22.0	28.1	5.5	2.9							LXIII出土	K80	43−19
6	D 6	不定形	I C	39.7	26.6	7.7	5.6					表35°・裏40°	表7裏13		K175	43−20
7				45.0	33.1	7.7	8.5	珪質頁岩	剝	II					K80+175	43−21
8	D 3	不定形	IV	36.0	24.5	6.6	4.3	珪質頁岩	−	IV	基先端・左縁	45°	3	被熱	K169	43−22
番号	グリッド	器種		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	打面	調整部位	備考				登録	写真
9	B 7	二次加工剝片		40.5	29.6	11.3	9.6	珪質頁岩	−	端部	表面左縁にm. f.				K148	43−23
10	C 3	二次加工剝片		20.7	17.6	4.6	1.2	頁岩	−	端部					K156	43−24
11	C 7	二次加工剝片		30.2	18.7	5.5	2.2	珪質頁岩	−	端部・縁部					K164	43−25
12	D 2	二次加工剝片		31.5	25.7	6.5	4.4	凝灰岩		縁部					K167	43−26

第57図　XIII層出土剝片石器（2）



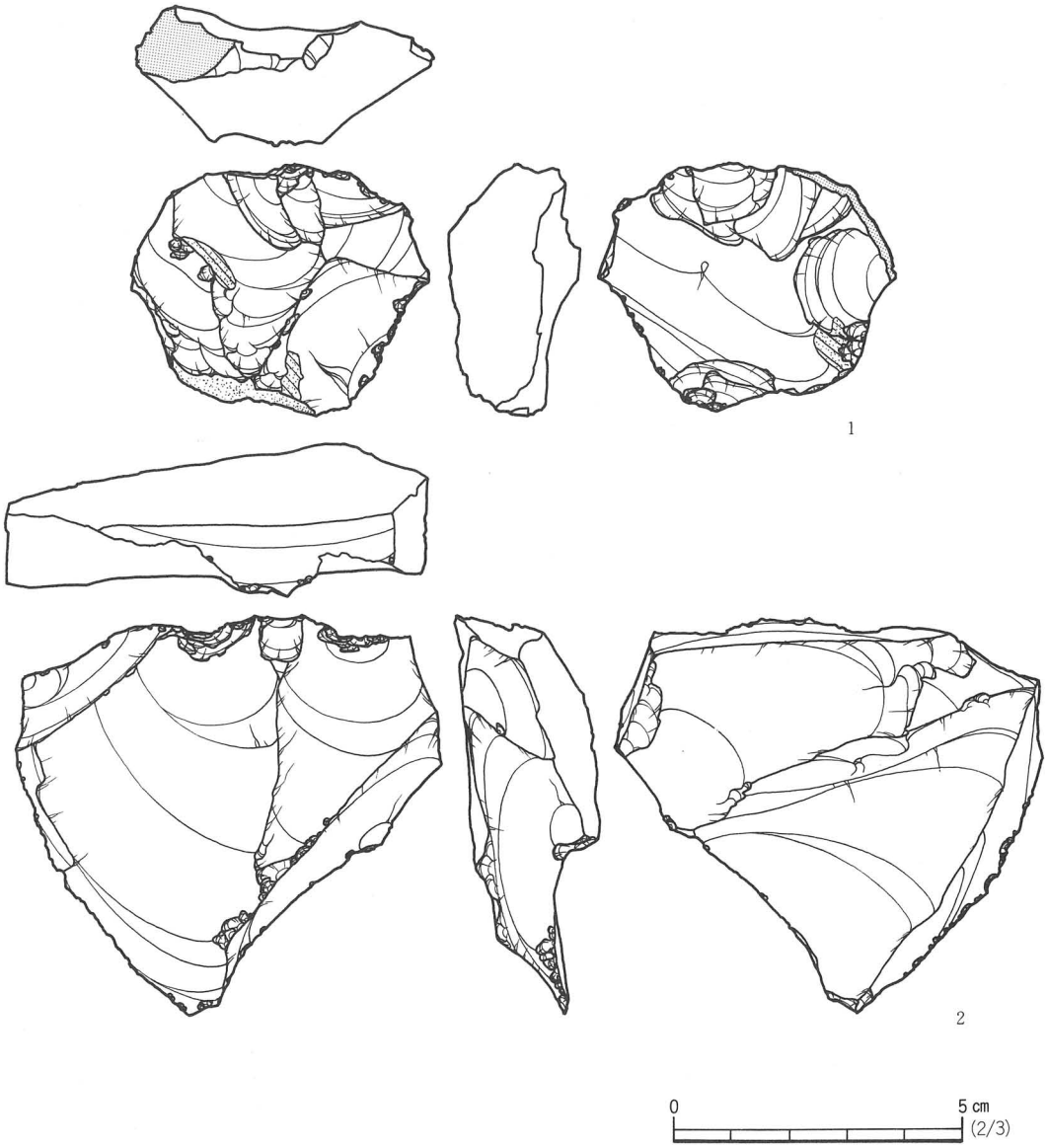
番号	グリッド	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	打面	調整部位	備考	登録	図版
1	D2＋D3	二次加工剥片	37.2	23.0	7.5	4.2	珪質頁岩	原面	縁部	熱により破損	K102+170	43－27
2	D4	二次加工剥片	29.1	18.5	7.3	3.2	珪質頁岩	調	端部・縁部	被熱	K172	43－28
3	F4	二次加工剥片	24.9	14.4	3.2	1.0	珪質頁岩	－	縁部		K184	43－29
4	C2	二次加工剥片	20.1	23.5	10.5	4.5	石英安山岩	剝	端部・縁部		K188	43－30
5	C2	不明石器	19.6	14.1	6.0	1.3	珪質頁岩	－			K150	43－31
6	C3	不明石器	18.8	10.7	5.3	0.7	珪質頁岩	－		被熱・石鏃の破片？	K158	43－32
7	C6	不明石器	33.4	18.6	8.4	4.5	珪質頁岩	－	端部		K163	43－33
8	A6	微細剝離痕	24.8	27.0	4.8	3.2	珪質頁岩	剝	縁部		K140	43－34
9	A6	微細剝離痕	26.3	34.9	6.6	5.9	珪質頁岩	剝	両縁部		K141	43－35
10	B3	微細剝離痕	13.3	17.1	3.6	0.6	黒曜石	剝	縁部		K143	43－37
11	C3	微細剝離痕	49.4	39.3	8.3	8.0	珪質頁岩	－	端部・縁部	被熱	K153	43－36
12	C3	微細剝離痕	25.0	5.9	3.3	0.4	珪質頁岩	－	端部	被熱	K154	
13	C3	微細剝離痕	29.0	21.9	7.3	3.2	珪質頁岩	－	縁部	被熱	K155	
14	C3	微細剝離痕	20.3	14.4	8.4	1.2	珪質頁岩	－	縁部	被熱	K157	
15	C3＋C4	微細剝離痕	64.5	63.0	18.5	39.4	珪質頁岩	－	両縁部	被熱、大がC3・LⅫ出土	K77+161	43－38

第58図　Ⅻ層出土剝片石器（3）



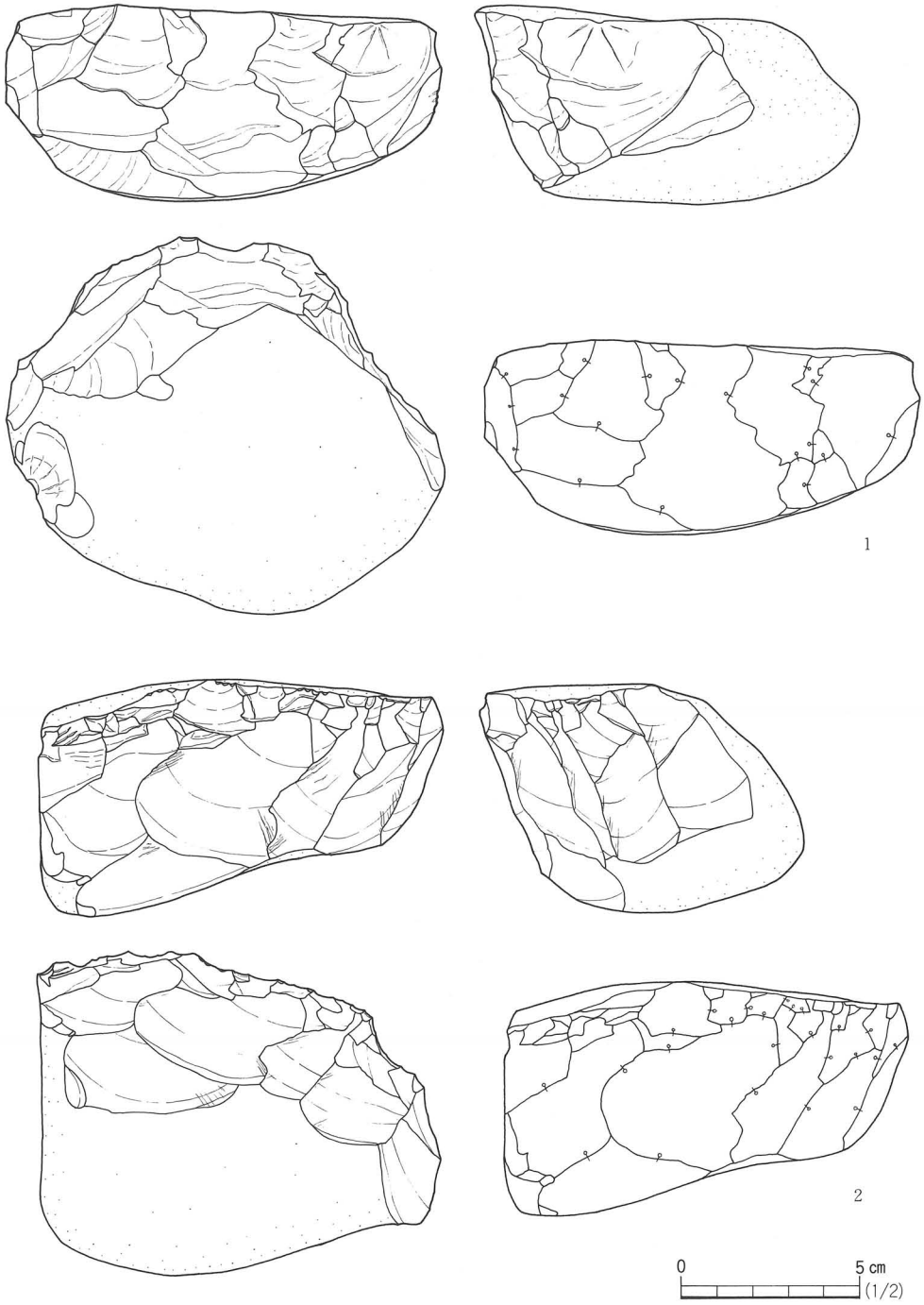
番号	グリッド	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	打面	調整部位	備　考	登　録	図　版
1	C 8	微細剥離痕	43.3	36.4	8.8	9.6	珪質頁岩	－	両端部	基端部は節理面での折れ	K166	43－39
2	D 2	微細剥離痕	28.3	17.8	4.4	1.8	珪質頁岩	－	端　部		K168	
3	D 5	微細剥離痕	23.2	30.5	9.4	6.1	珪質頁岩	調7	端　部	折れ面にm．f．	K173	43－40
4	E 2	微細剥離痕	22.8	16.4	2.4	0.8	珪質頁岩	－	端　部		K176	
5	E 3	微細剥離痕	33.5	39.0	16.3	15.5	珪質頁岩	調4	両端部		K177	43－41
6	C 3	石　核	60.0	44.4	16.6	37.1	珪質頁岩	－	L Ⅻ出土、被熱		K67	42－44
7	C 3	石　核	54.7	33.8	17.8	20.8	珪質頁岩	－	L Ⅻ出土、被熱		K75	42－45

第59図　Ⅻ層出土剥片石器（4），石核（1）



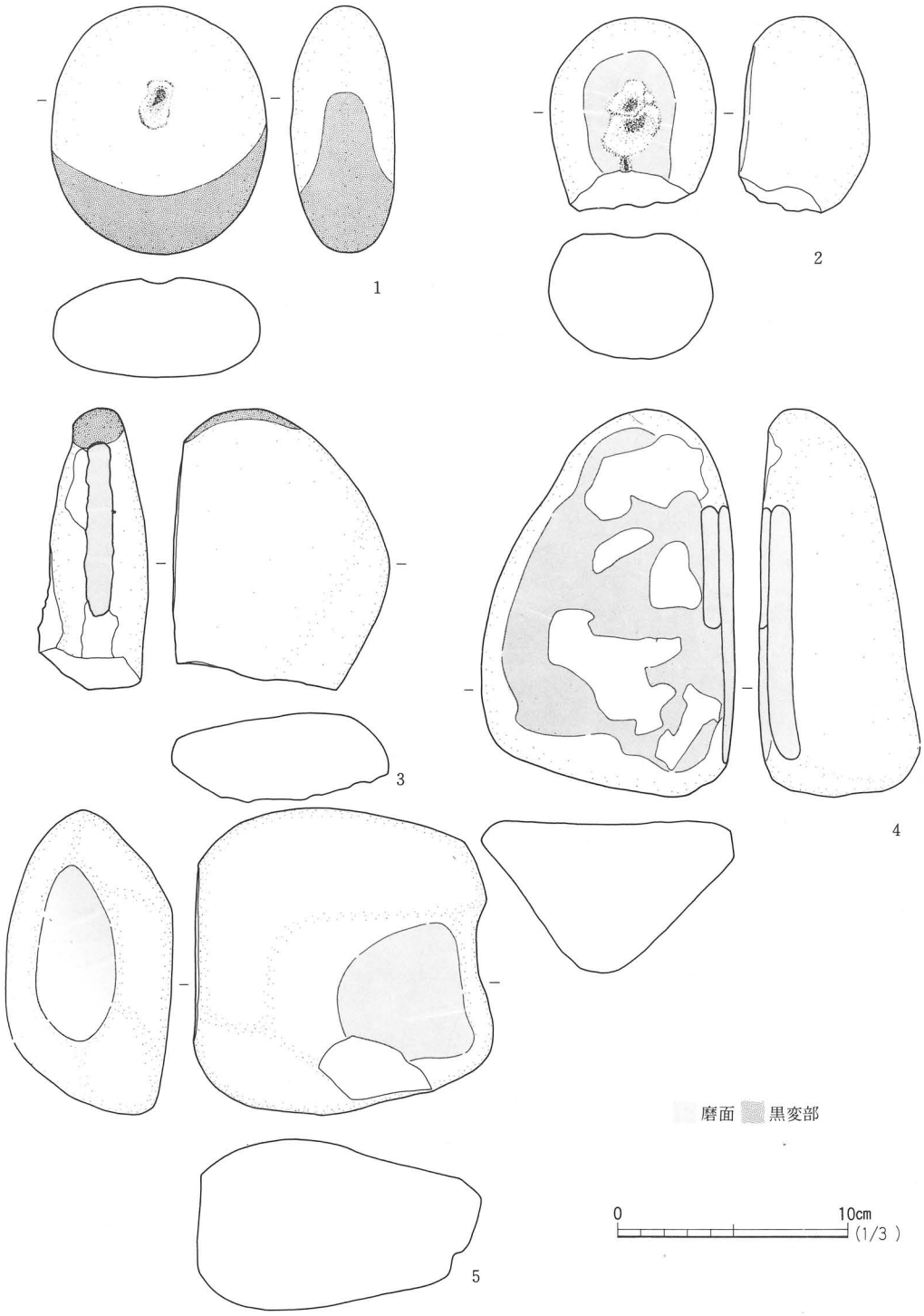
番号	グリッド	器　　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	備　　考	登　録	図　版
1	C3、LⅢ	石　　核	42.9	51.1	19.5	40.6	珪質頁岩	焼けはじけあり	K151	44－1
2	C3、LⅢ	石　　核	67.5	72.8	22.3	91.6	珪質頁岩		K159	44－2

第60図　ⅩⅢ層出土石核（2）



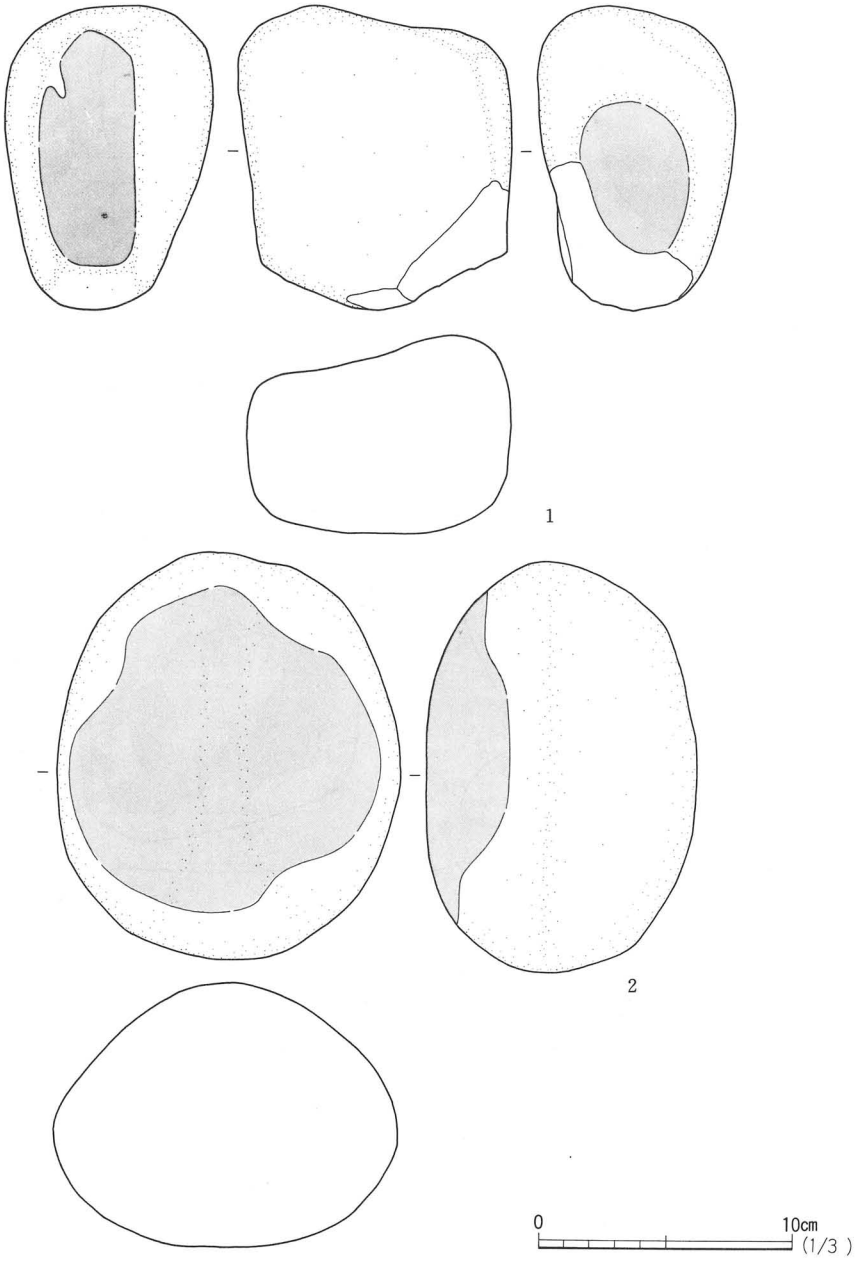
番号	グリッド	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	備　　考	登　録	図　版
1	A 9	Ⅻ	石　核	55	121	107	840	緑色凝灰岩		K189	44－3
2	C 3	Ⅻ上	石　核	67	112	90	650	砂　　岩		K190	44－4

第61図　石　　核(3)



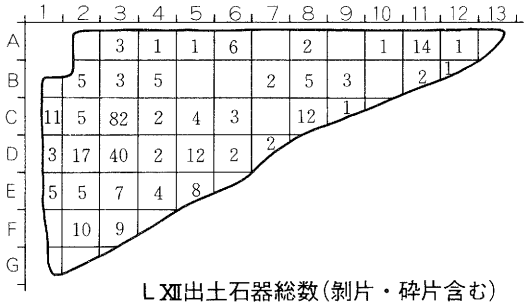
番号	グリッド	層位	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	備考	登録	図版
1	B 4	XII	凹石	108	93	53	660	安山岩	黒変部あり	K191	44－5
2	A 7	XIII	磨凹石	(88)	71	55	500	安山岩	破損	K192	44－6
3	D 3	XIII上	磨石	118	93	35	580	安山岩	破損、黒変部あり	K193	44－7
4	D 2	XIII上	磨石	168	109	70	1520	玢岩	剝落あり	K194	44－8
5	D 3	XIII上	磨石	134	130	75	2000	安山岩		K195	44－9

第62図　礫石器（1）

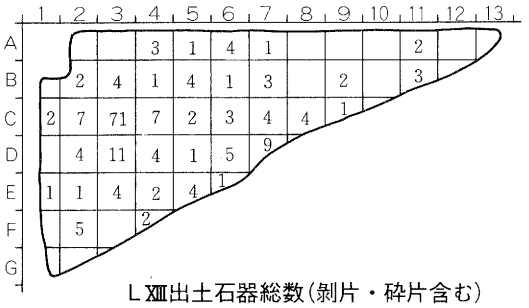


番号	グリッド	層位	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　材	備　　考	登　録	図　版
1	D 3	Ⅲ上	磨　石	114	104	74	1550	緑色凝灰岩		K196	
2	D 3	Ⅲ上	磨　石	162	135	105	2820	安　山　岩		K197	44－10

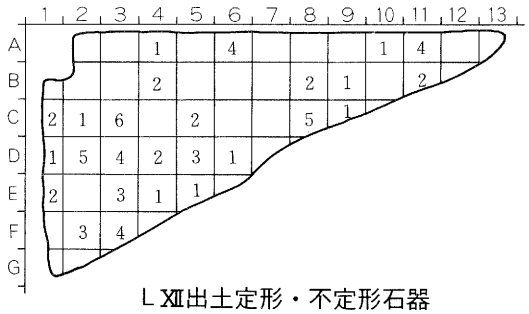
第63図　礫　石　器(2)



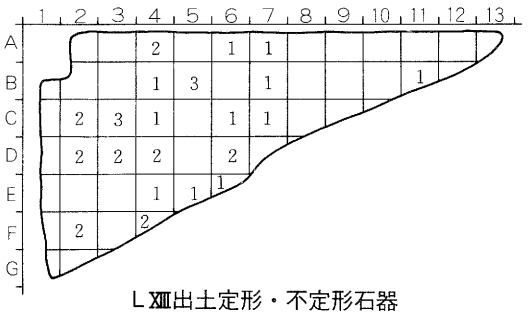
L XII出土石器総数(剝片・砕片含む)



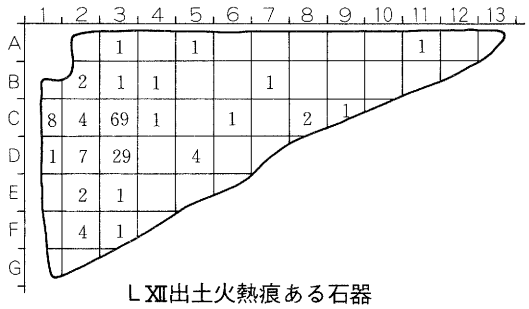
L XIII出土石器総数(剝片・砕片含む)



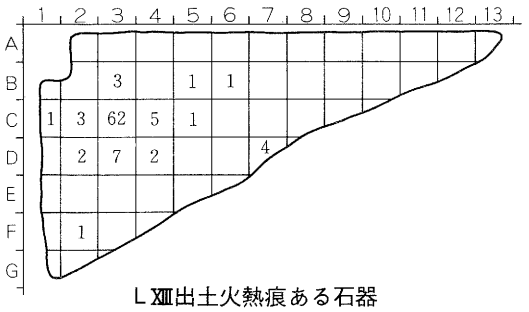
L XII出土定形・不定形石器



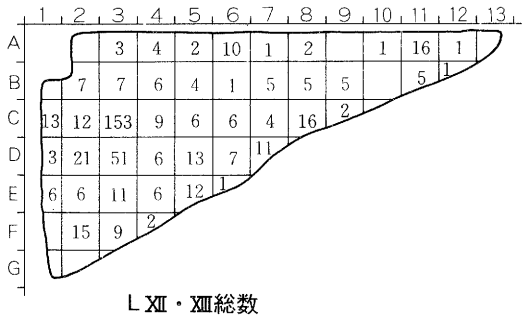
L XIII出土定形・不定形石器



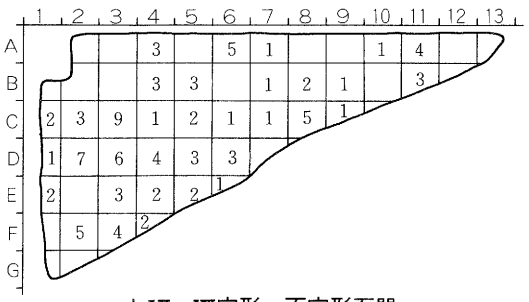
L XII出土火熱痕ある石器



L XIII出土火熱痕ある石器



L XII・XIII総数



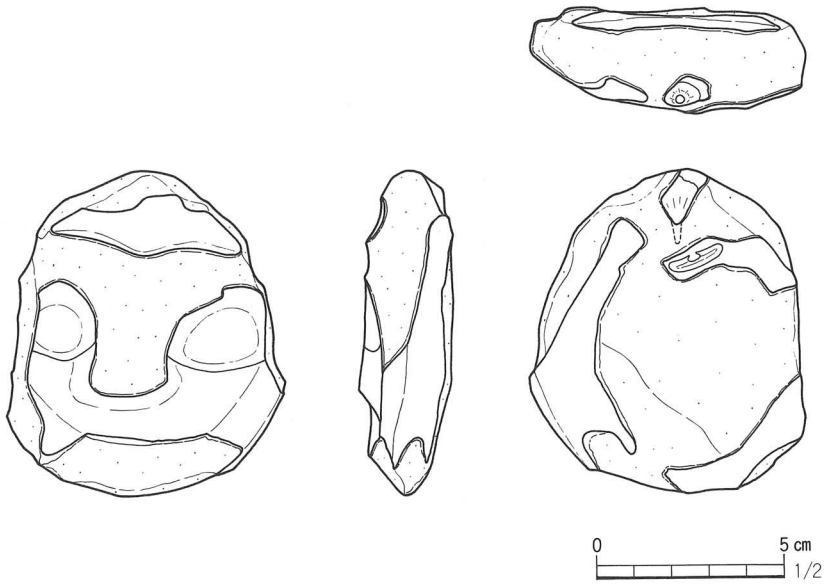
L XII・XIII定形・不定形石器

第64図　石器のグリッド別出土状況

⑻　層位不明の遺物（第65図）

西壁の一部が雨で崩れた際に出土した土偶頭部である。全体に破損が著しく、輪郭は不明である。表面は眼が浅くなでつけられて表現されており、剝落痕があることから眉・鼻は貼付けられて表現されていたであろう。口は沈線により表現されるようである。裏面も剝落著しいが胴部から顔面が飛び出すように接合されていたと推定される。頭頂部の後ろには深さ１㎝程度の穴が上からあけられている。

崩落土中のため伴出遺物はないが、Ⅵ層に含まれていた可能性は高い。縄文時代後期に所属するものであろう。



第65図　土　　偶

下ノ内浦遺跡より出土の植物種子の鑑定報告

東北大学　星　川　清　親

平安時代末期から鎌倉時代初期の間の遺構と考えられる掘立柱建築の柱痕跡より、17粒の植物種子炭化物が出土した。

鑑定の結果、それらのうち15粒はオオムギ（皮麦）の穀粒であり、１粒は米粒、１粒は不明（オオムギ破片か？）であった（写真１、２を参照）。

粒形はオオムギについては下表に示すごとくであり、その平均値は現在の栽培品種とくらべてほぼ等しいものであった。米粒は現在の栽培品種とくらべて短かく、丸形であった。これは日本型稲と判断される。

表１．出土穀類の大きさ測定値（mm）

穀粒（炭化）	粒長	粒幅	粒厚
オオムギ平均	5.8	2.8	2.5
米	3.7	2.7	2.1

（編集者註）　編集者が星川教授に鑑定依頼した当時は、建物跡の時期について上記のように考えていたが、その後の分析の結果、近世頃の建物跡と結論づけた。ここに訂正する。

Ⅲ章　考　　察

(1)　奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構には竪穴住居跡１軒と掘立柱建物跡があるが、ここでは、出土資料の多い竪穴住居跡の遺物の年代決定を中心として若干の検討を行ない、整理する。

住居跡出土の遺物としては、土師器坏・埦・甕、須恵器坏・甕・瓿？がある。これらの遺物の大部分（約80％）は２層下部の床面直上から出土したものである。床面出土のものは少ないが、堆積層の状況や土器の特徴から、住居廃絶後から埋没終了までには大きな時期差は無いと考えられ、住居跡の時期決定に有効な共伴資料として捉えることが可能である。

出土量の多い土師器坏をみると、(1)ロクロ不使用　(2)丸底のものと丸底風の平底のものがある　(3)底部から口縁部にかけて屈曲がなく、スムーズに丸味をもって立ち上がる（１のみ屈曲する）　(4)体部に段・沈線のあるものとないものがある　(5)外面はヘラケズリ後ヘラミガキ（94％）で、内面はヘラミガキ・黒色処理であるという特徴をもっている。このような土師器坏は国分寺下層式[註1)]に比定され、奈良時代－８世紀代に位置付けられている。

仙台市内で、本住居跡の国分寺下層式と同様の特徴をもつ坏は、本遺跡１次調査第１号住居跡[註2)]、六反田遺跡６次調査第７号住居跡[註3)]にみられる。また、土師器甕については、本住居跡のもので図示できたものはないが、破片は全てヘラナデであり、刷毛目は認められない。この甕外面の特徴も二者と同様であり、ほぼ同一時期であることを示唆している。

次に、実年代の決定のために須恵器坏をみると、本住居跡のものは底部だけであるが、底径8.8cmと大きく、回転糸切り、無調整であるのに対して、前二者のものは平底で、体部下端に丸味をもち、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリの施されているものである。本住居跡のものと同様の須恵器坏を出土している窯跡としては、松山町次橋窯跡[註4)]、利府町硯沢窯跡[註5)]がある。次橋１号窯では計10点出土しており、底径の平均値8.5m(7.5～10.4cm)、硯沢窯跡ではＢ２窯３点、Ｂ15窯１点、Ｂ２～４灰原１点の計５点出土しており、底径の平均値8.2cm(7.7～8.8cm)であり、本住居跡のものの底径に近似している。この坏は、両方の窯跡とも共伴する他の坏群を含めた総体として、８世紀中葉の年代を与えている。このことから、本住居跡の坏も、同様の年代を与えることが妥当であり、１次調査第１号住居跡出土の回転ヘラケズリの坏の年代として８世紀中葉の年代を与えていることと矛盾しない[註6)]。以上のことから、本住居跡は奈良時代中頃、８世紀中葉の住居跡であると考えられる。

註1)　氏家和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』

註2)　佐藤・柳沢・工藤（1983）：「下ノ内浦遺跡」『仙台市文化財調査報告書第59集』

註3)　佐藤　洋（1987）：「六反田遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書第102集』

註4）古窯跡研究会（1983）：「次橋須恵器窯跡発掘調査報告」『松山町文化財調査報告書第１集』

註5）真山・佐藤（1987）：「硯沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書第116集』

註6）註３報文中では、７号住居跡出土土器を、８世紀前半に位置付けている。これは、六反田遺跡での７号住居跡出土土器の年代観であり、同様の特徴をもつ土師器群の存続時期を規定するものではなく、本遺跡での年代と矛盾するものではない。

⑵ 縄文早期の遺構と遺物

遺物の取り扱い

縄文早期の遺物は、Ⅻ・Ⅻ層から出土している。各層の上面からは遺構が検出されており、二時期にわたる生活面があったことは明らかである。しかし、層中の遺物のうち受熱資料の出土状況に注目すると、Ⅻ層、Ⅻ層とも同一石材と考えられる資料が同一地点に集中している。また、土器も無文土器片が上下層とも分布している。これらのことから両層の遺物については混在している可能性が強いと考えたい。

土器について

文様によりⅠ～Ⅳ類に分けた。それぞれについて従来の編年にあてはめてみる。Ⅰ類は押型文が施文されており、日計式にあたる。貝殻沈線文土器以前の縄文早期前葉とされている。日計式の土器は下ノ内浦２次調査の際にも、19ａ～22層から出土している。但し、今回のものとは文様モチーフは異なり、重層菱形文（矢羽根状文もある可能性あり）のものである。Ⅱ類は１点のみであるが、早期中葉の沈線文系土器かもしれない。Ⅲ類は早期後葉の条痕文土器である。型式としては槻木Ⅰ式、素山Ⅱａ式が設定されているが、いずれとも決め難い。ただし、表面の沈線文が押し引き手法でない点から考え、素山Ⅱａ以前のものであろう[註)]。Ⅳ類は無文土器である。編年位置は不明だが、条痕文以前の可能性を考えたい。口唇部形態には尖るもの丸みをもつもの、外削ぎ状のものの３種がある。

註）相原淳一氏より、野島式併行期のものではないか、とのご教示を得た。また、太い沈線を引く例として、東北北部のムシリ式があげられる

石器について

石鏃

石鏃はⅫ層より12点、Ⅻ層より７点。計19点が出土している。それらのうち、完形品及び図上復元可能なものの長幅関係を図示した（第66図）。Ⅰ類は長幅比1.5付近に分布する。Ⅱ類は例が少ないが幅に差がみられる。素材面を残すものは13点、残さないものは５点である。

長幅分布を富沢遺跡15次（早期末葉～前期初頭）、28次（早期後葉槻木Ⅰ式）の資料と比較する（第67図）。28次資料は全体に長軸比が小さくなる。15次資料は当資料に比べ小ぶりのものが多い。

石器組成

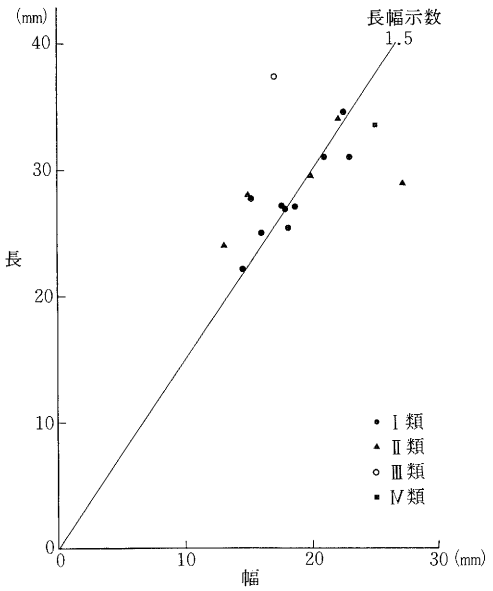
剝片石器のなかで定形石器と不定形石器・二次加工ある剝片・不明石器の比率は、22.3%対77.7%となる。不定形石器の中では、ＩＣ類とした一～二側縁に片面加工を施すものが主体を占めている。礫石器には磨石、磨凹石、凹石がある。磨石には、礫の平坦面に磨面をもつものの他に、稜に磨面をもつ、いわゆる「特殊磨石」が含まれる。

石材について

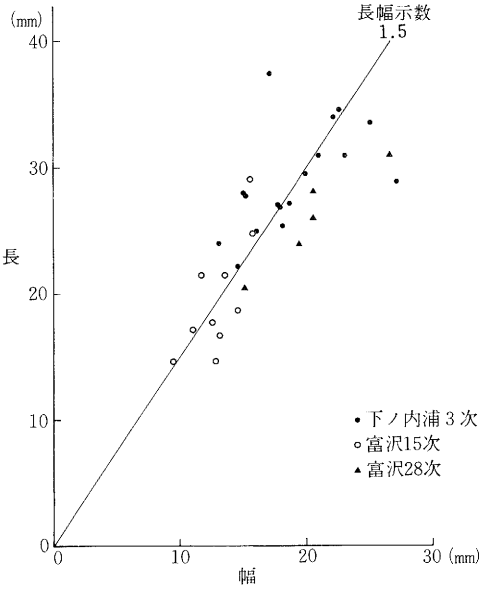
剝片石器では、珪質頁岩、チャート、石英安山岩、シルト岩、珪質シルト岩、凝灰岩、珪質凝灰岩、黒曜石の８種類がある。微細剝離痕もつものも含めた129点中120点が珪質頁岩であり、93%を占める。石核には、珪質頁岩４点、緑色凝灰岩・砂岩各１点が用いられる。ただし緑色凝灰岩・砂岩は石器として使われていない。礫石器では、安山岩、玢岩、緑色凝灰岩が用いられ、安山岩が多い。

受熱資料について

受熱資料は石器・剝片に見られるが、特に剝片に多い。剝片における受熱資料は点数で59.5%、重量比で67.9%を占める。その多くはＣ３グリッドから出土しており、当グリッドの剝片・チッ



第66図　石鏃長幅関係図



第67図　他遺跡との比較

第14表　石器組成表 (1)

層位＼器種	石鏃	尖頭器	石匙	不定形石器 Ⅰ類 A	B	C	D	E	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	二次加工ある剝片	不明	微細剝離痕ある剝片	礫石器	小計	剝片	石核	小計	合計
L Ⅶ	12		1	2	1	18	2	2	1			18	5	24	1	87	211	3	214	301
L Ⅷ	7	1				10				1	1	7	3	13	1	44	137	2	139	183
集石															5	5		1	1	6
計	19	1	1	2	1	28	2	2	1	1	1	25	8	37	7	136	348	6	354	490

数字は点数を示す

第15表　石器組成表 (2)

分類 ＼ 層位		L Ⅻ	L ⅩⅢ	合計
剝片	定形	13(21.0)	8(26.7)	21(22.3)
石器	不定形・二次加工・不明	49(79.0)	22(73.3)	71(77.7)
合計		62	30	94

（ ）内は層ごとの百分比

第16表　剝片・チップにおける受熱資料

	数量（点）			重量（g）		
	正常	受熱	合計	正常	受熱	合計
L Ⅻ	88	123	211	122.35	290.3	412.65
	(41.7)	(58.3)		(29.6)	(70.4)	
L ⅩⅢ	53	84	137	92.8	164.25	257.05
	(38.7)	(61.3)		(36.1)	(63.9)	
合計	141	207	348	215.15	454.55	669.7
	(40.5)	(59.5)		(32.1)	(67.9)	

（ ）内は層ごとの百分比

プ・破片の96.4%が受熱している。受熱資料はＣ３・Ｄ３グリッドを中心にⅫ・ⅩⅢ層にわたり分布するが、その集中部分はⅩⅢ層上面礫の集中部と重なる。このことから、ⅩⅢ層上面集石の場で、火を用いた行為が行われた可能性は高いと考えられる。

土坑について

Ⅻ層上面で９基、ⅩⅢ層上面で２基、合計11基の土坑が検出されている。いずれも平面形は長楕円形で、壁が急で深く、底面にピットをもつものである。このような形態は従来より陥穴と呼ばれる土坑に類似している。

分類

底面の長軸、短軸、深さの関係から四大別される（第68図）。

Ａ類　21・22号土坑。ⅩⅢ層上面検出のもの。底面形は長楕円形で、深さは70cm以上。長軸方向は北西。

Ｂ類　12・14・15・16・18号土坑。Ⅻ層上面検出。底面形は長方形で、深さは32～55cm。長軸方向は北西。

Ｃ類　13・17号土坑。Ⅻ層上面検出。底面形は長方形で、深さ70cm以上。長軸方向は北西。

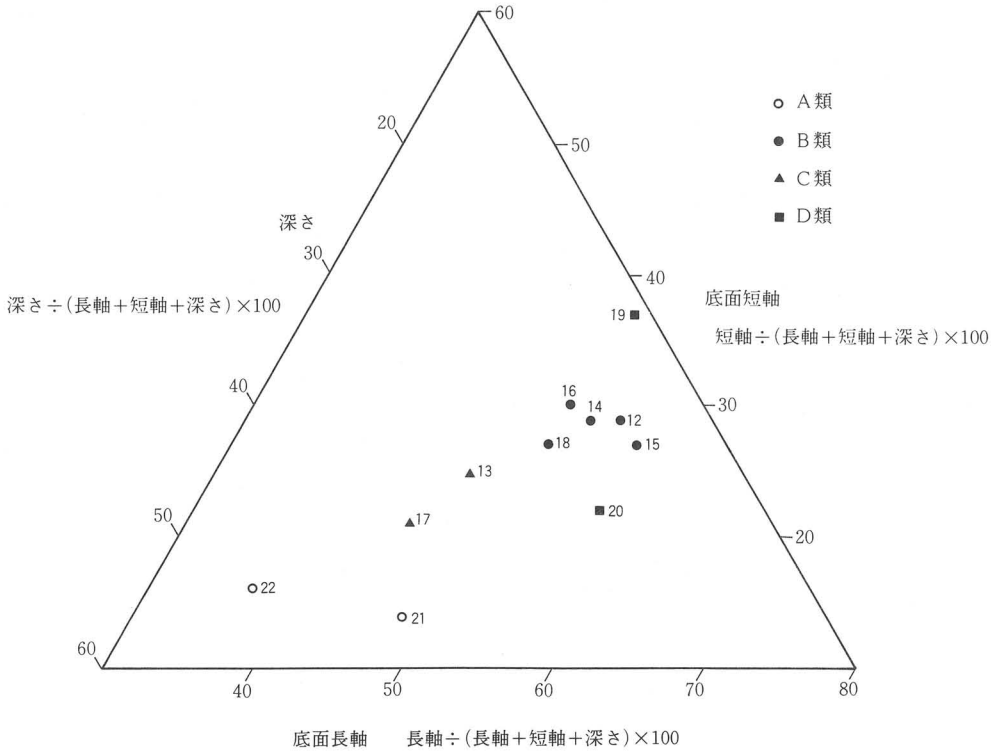
Ｄ類　19・20号土坑。Ⅻ層上面検出。底面形は長方形で、深さ27cmと38cm。長軸方向は19号が北西、20号が北東。

配置

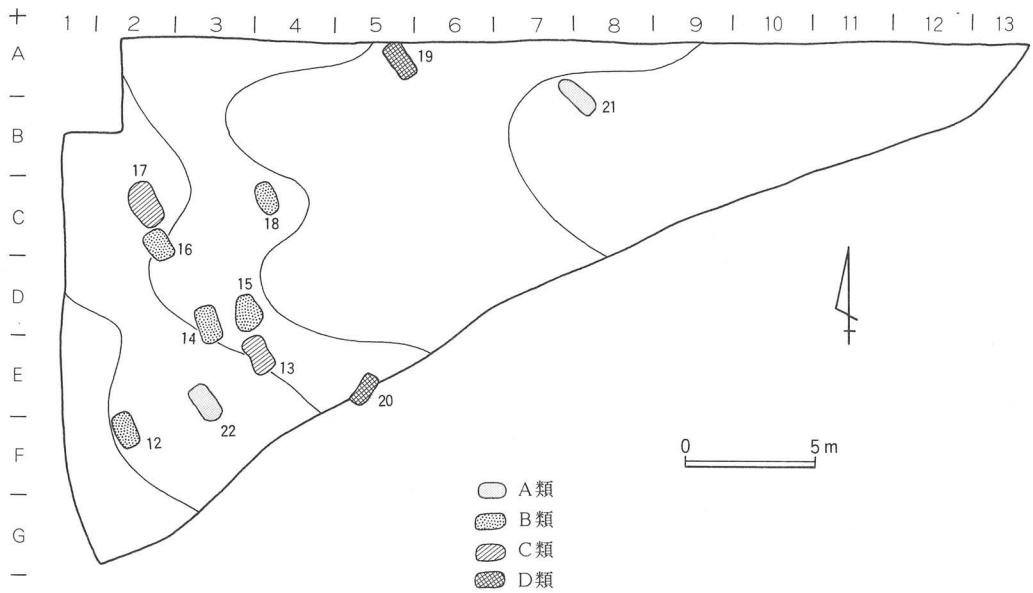
土坑は主に西側に集中する。13・15号土坑と16・17号土坑は特に近接する。長軸方向は20号土坑以外は北西方向であるが、これは等高線に沿っている。陥穴とされる土坑は、数ｍの間隔をおいて列状に並ぶ例が紹介されるが、ここでは狭い範囲のため判断できない。

底面施設

全ての土坑の底部中央にはピットが認められ、截ち割りの結果棒状痕跡であるものが大部分であった。そのなかで、13・22号土坑以外の９基の棒状痕跡には掘り方が認められた。このことより、底面に穴を掘り、数本の棒状のものを埋め込んだものと考えられる。棒状のものについては、「棒や綱によって動物の足を拘束して外へ出られないようにする仕掛けの一部」[註1]とか、「逆茂木」[註2]という解釈が出され、実際に木杭が出土した例[註3]もある。今回の土坑群においても杭状のものが立てられていたと考えられる。



第68図　土坑群の長軸・短軸・深さの関係



第69図　土坑群の分類

註1）今村啓爾「霧ケ丘遺跡の土壙群に関する考察」『霧ケ丘』P.131～159　1973

註2）菊地実「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題――大原Ⅱ遺跡・村主遺跡検出の陥し穴群分析から――」『研究紀要』4㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団 P.15～28　1987

註3）北海道東野幌4遺跡17号ピット、福島県郡山市赤沼遺跡1号陥し穴状土坑

土坑群の時期

土坑群の検出されたⅫ・Ⅲ層は縄文早期前葉～後葉の遺物が混在していることから、土坑群は早期後葉もしくはそれ以降の時期のものと考えられる。但し、Ⅲ層上面のA類土坑は早期前葉～後葉の巾の中に位置づけられよう。

参考文献

赤星直忠（1948）「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』第一冊　東京考古学会

相原淳一（1982）「概説　日計式土器群の成立と解体」『赤い本』創刊号

相原淳一（1985）「縄文条痕土器群の諸段階について」『赤い本～片倉信光氏追悼論文集』

伊東信雄（1940）『宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告』奥羽史料調査部研究報告第二

伊東信雄（1952）「古代史」『宮城県史』第1巻

伊東・須藤（1977）『瀬野遺跡－青森県下北郡脇野沢村瀬野遺跡の研究』東北考古学会

今村啓爾（1983）「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究』2

氏家和典（1957）「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

岡田・一条他（1984）「売場遺跡発掘調査報告書（第1次・第2次・第3次・第4次調査）」『売場遺跡発掘調査報告書　大タルミ遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集

霧ケ丘遺跡調査団（1973）『霧ケ丘』

後藤勝彦（1968）「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚〔Ⅰ〕」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会編

佐藤・斎野（1983）『茂庭』仙台市文化財調査報告書第45集

白鳥良一（1980）「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡研究所研究紀要』Ⅶ

鈴木雄三（1987）『赤沼遺跡』郡山東部ニュータウン関連発掘調査報告書1　郡山市教育委員会

芹沢・林（1965）「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』第7号

東京国立博物館（1978）『日本出土の中国陶磁』

土岐山　武（1982）「松田遺跡」宮城県文化財調査報告書第88集

東北歴史資料館（1984）『里浜貝塚－宮城県鳴瀬町宮戸島貝塚西畑地点の調査・研究Ⅲ－』東北歴史資料館資料集9

丹羽　茂（1973）「松田遺跡」宮城県文化財調査報告書第25集

林　謙作（1965）「縄文文化の発展と地域性－東北」『日本の考古学』Ⅱ　河出書房新社

藤沼邦彦（1977）「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要』第3巻

藤沼邦彦（1978）「中世陶器の紹介」『東北歴史資料館研究紀要』第4巻

宮城県史編纂委員会（1981）『宮城県史』第34巻（資料編11）

盛岡市教育委員会（1983）『大館遺跡群　大新町遺跡－昭和57年度発掘調査概報－』

横田・森田（1978）「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4

工藤哲司（1986）『柳生　土地区画整理事業に伴う柳生地区の遺跡分布調査と、松木遺跡の発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第95集

佐藤・兼田（1985）『宮城県仙台市後河原遺跡』埋蔵文化財調査研究所報告書第1集

ま と め

下ノ内浦遺跡第３次調査においては、縄文時代から近世に及ぶ遺構と遺物が発見された。各時代の遺構と遺物から、調査地点の歴史的変遷をたどりたい。

1．縄文時代早期と考えられる土坑が発見された。陥し穴とみられるものであり、西方の２次調査区で発見された早期の土坑に類似する。２次調査区・３次調査区を含めた範囲は、狩猟域だった可能性がある。

2．縄文時代後期前葉の遺物包含層が発見された。遺物は小破片が主で、遺構も伴わないことから、西方にある２次調査区が主な活動拠点で、それらの遺物が３次調査区に流入しているものと考えられる。

3．弥生時代～奈良時代に機能していたとみられる溝跡が発見された。

4．奈良時代の住居跡が１軒発見された。北側の１次調査区でもほぼ同時期のものが１軒発見されており、西方の２次調査区でも５軒発見されている。また、笊川を挟んだ下ノ内遺跡・六反田遺跡でも該期の住居跡が発見されており、この周辺に集落が形成されていたと考えられる。

5．平安時代の蔵骨器が発見された。蔵骨器内には火葬骨片が存在した。また、平安時代後半以降と考えられる火葬施設も発見された。

6．近世頃の建物跡が３棟発見され、この時期は居住域だったと考えられる。

7．調査では、上記の遺構・遺物の他に、縄文時代と平安～中世末頃の河川跡が発見された。現在も調査区の南側に笊川が流れており、古くから現在に至るまで河川との関わりが深い場所だったことが分かる。

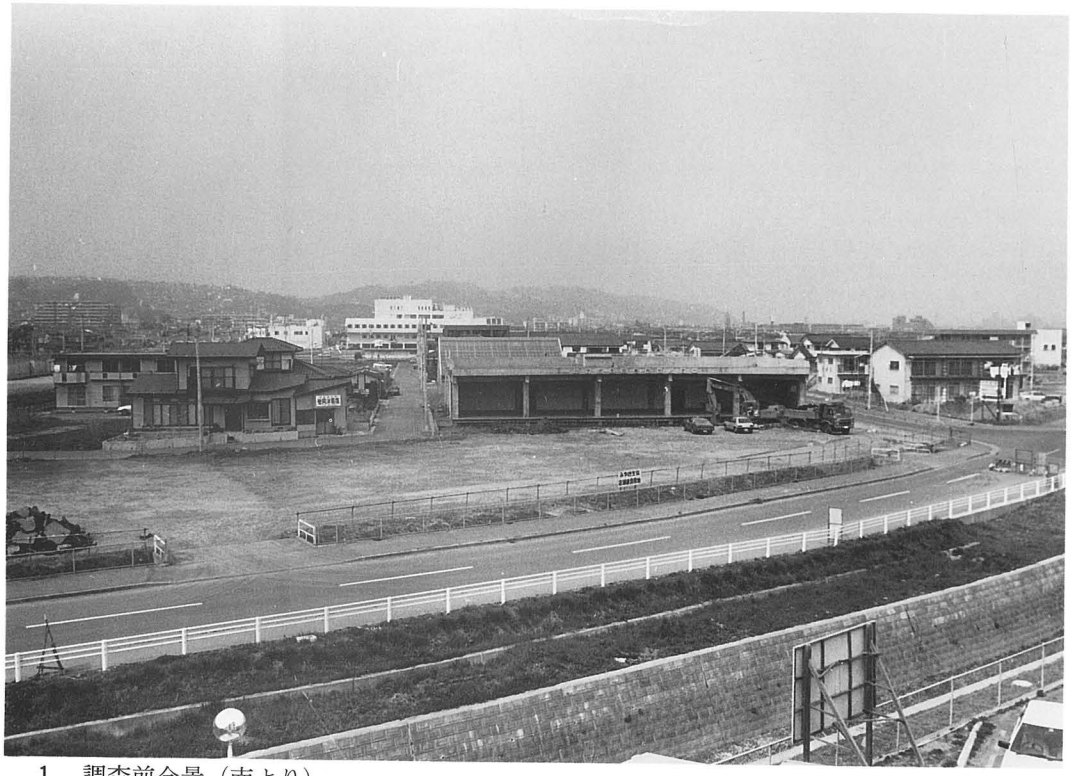
縄文時代早期には陥し穴がつくられ、狩りの場として使われていた。その場で石器も作っていたようである。その後、土砂の堆積が進んだ後、河川の流路となった。やがて河道が移動し、その跡が埋没し終わったのは縄文時代後期前葉頃である。それ以後、比較的安定した地面上に断続的に人間活動の痕跡が残され、奈良時代には集落が営まれた。しかし、平安時代の初め頃には再び河川の流路となり、地面が大きく削られた。その後、流路の移動につれ河道は埋まり始めた。堆積層中には埋没過程を理解する鍵となる灰白色火山灰がみとめられる。この頃には、一部、葬送に関連する場所として使用されたようである。そして、この河川は中世末頃にはすっかり埋まりきってしまった。平坦になった地面には数棟の建物が建てられ、再び生活の場として利用され、現在に至っている。

今後、周辺の調査成果を積み重ねることによって、この地域の歴史的景観の変遷を、より詳しく推定復元していくことができるであろう。

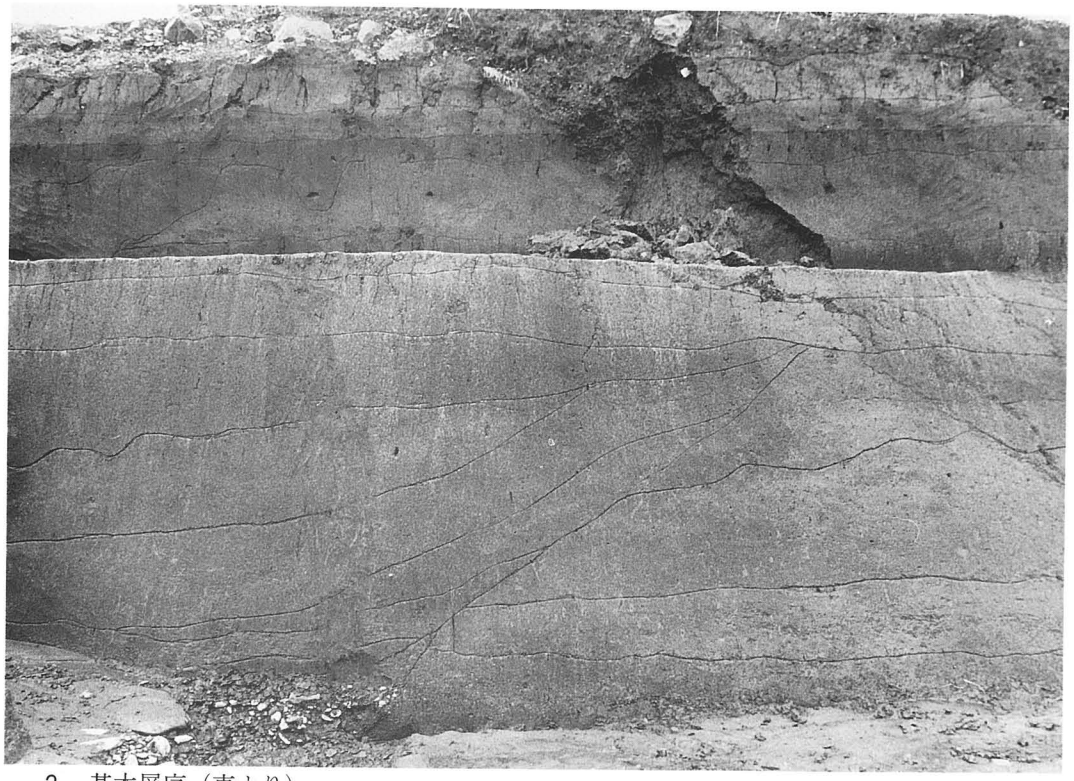
写　真　図　版

写真図版目次

1．調査前全景（南より）……95
2．基本層序（東より）……95
3．1号河川跡（南西より）……96
4．1号河川跡（北東より）……96
5．1号河川跡断面（北東より）……96
6．1号河川跡遺物出土状況（北より）……97
7．2号土坑（北より）……97
8．蔵骨器出土状況（南より）……97
9．2号溝跡（南東より）……97
10．Ⅲ層上面建物群（北より）……98
11．2・3号建物跡（北より）……98
12．1号建物跡（北より）……98
13．三筋壺出土状況……98
14．1号住居跡……99
15．Ⅴ層上面建物跡……100
16．3～11号土坑（東より）……100
17．1号土坑（南より）……100
18．1号溝跡（北より）……100
19．3号溝跡（南西より）……101
20．4号溝跡（北より）……101
21．5号溝跡……101
22．6号溝跡……101
23．Ⅻ層上面検出土坑群（北より）……102
24．Ⅻ層上面検出土坑群（北東より）……102
25．Ⅻ層上面検出土坑群（南より）……103
26．土坑(1)……103
27．土坑(2)……104
28．土坑(3)……105
29．土坑(4)……106
30．遺物出土状況……107
31．調査風景……107
32．1号河川跡出土遺物(1)……108
33．1号河川跡出土遺物(2)……109
34．1号河川跡出土遺物(3)……110
35．2号河川跡・建物跡・溝跡・蔵骨器……111
36．1号住居跡・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層出土遺物……112
37．Ⅴ・Ⅵ層出土遺物……113
38．Ⅵ・Ⅶ層出土遺物……114
39．Ⅻ層出土土器……115
40．Ⅻ・ⅩⅢ層出土土器……116
41．Ⅻ層出土剝片石器(1)……117
42．Ⅻ層出土剝片石器(2)……118
43．ⅩⅢ層出土剝片石器……119
44．Ⅻ・ⅩⅢ層出土石核・礫石器……120
45．土偶……121
46．炭化穀粒……121
47．火葬骨・2号土坑出土骨片……122



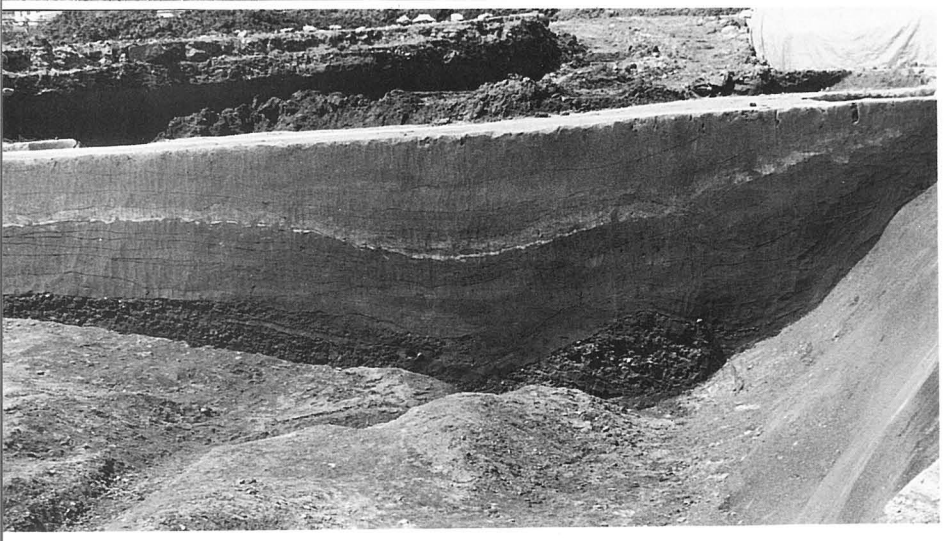
1　調査前全景（南より）



2　基本層序（東より）

3　1号河川跡
（南西より）

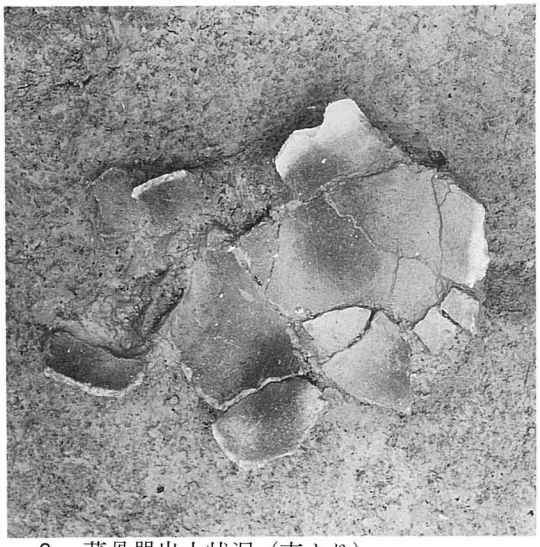
4　1号河川跡
（北東より）



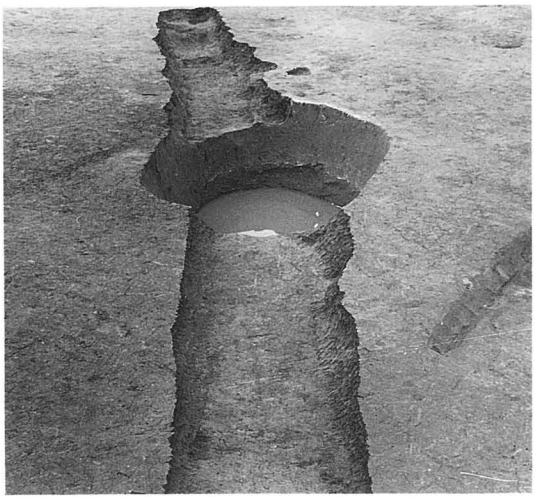
5　1号河川跡断面
（北東より）

6　1号河川跡遺物出土状況（北より）

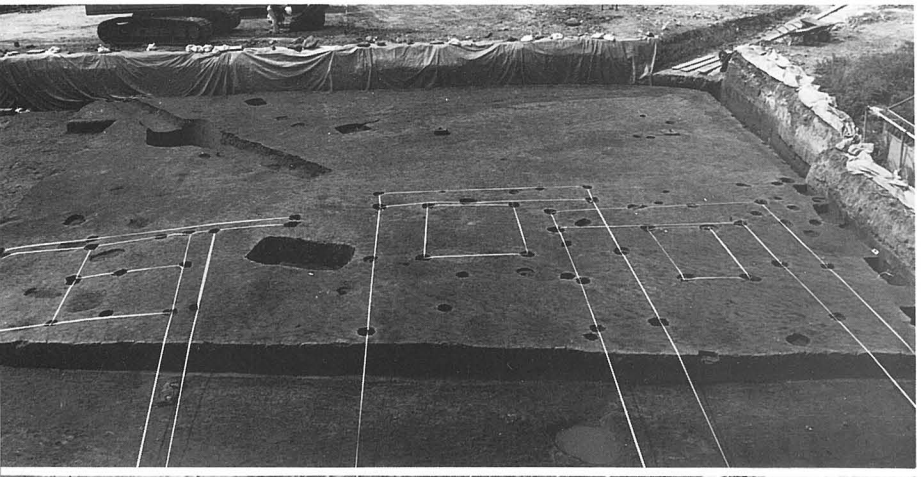
7　2号土坑（北より）



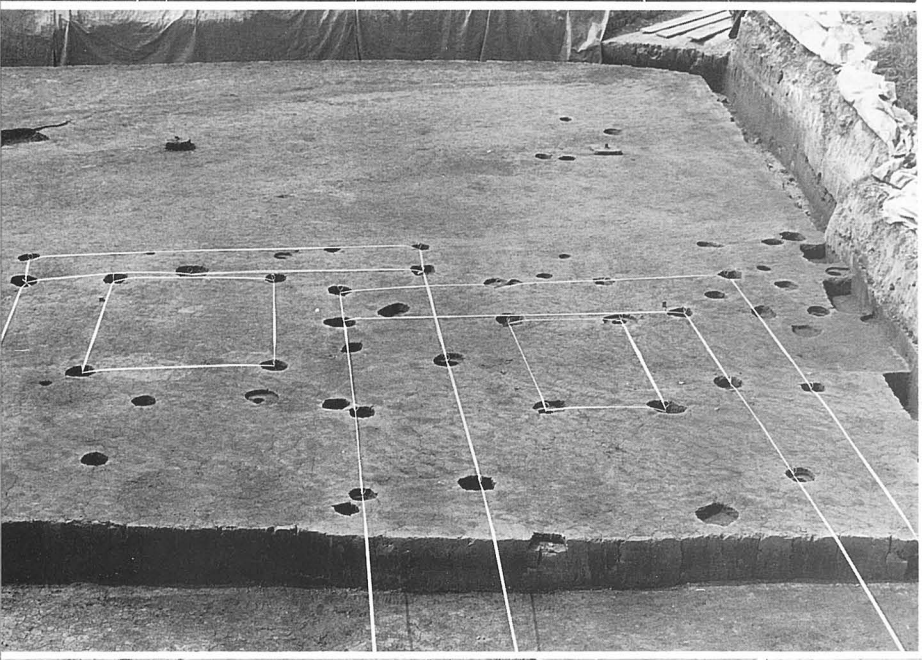
8　蔵骨器出土状況（南より）



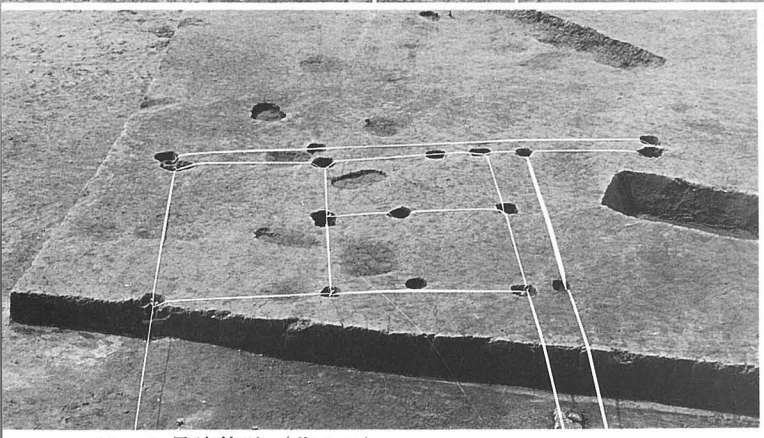
9　2号溝跡（南東より）



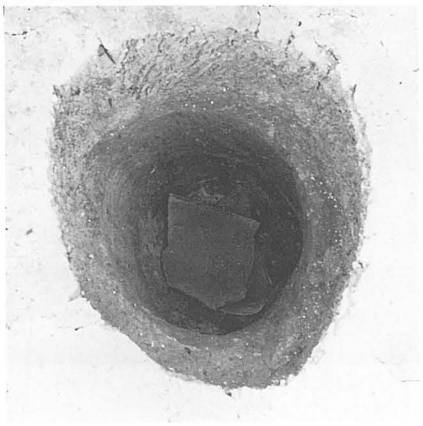
10　Ⅲ層上面建物群
（北より）



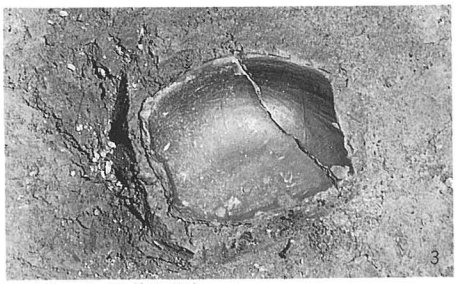
11　2・3号建物跡
（北より）

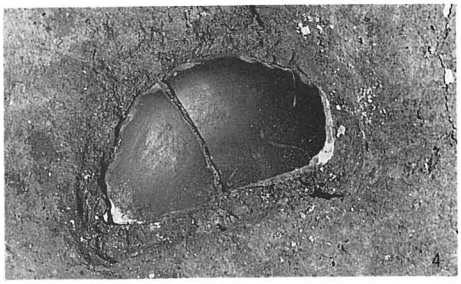


12　1号建物跡（北より）



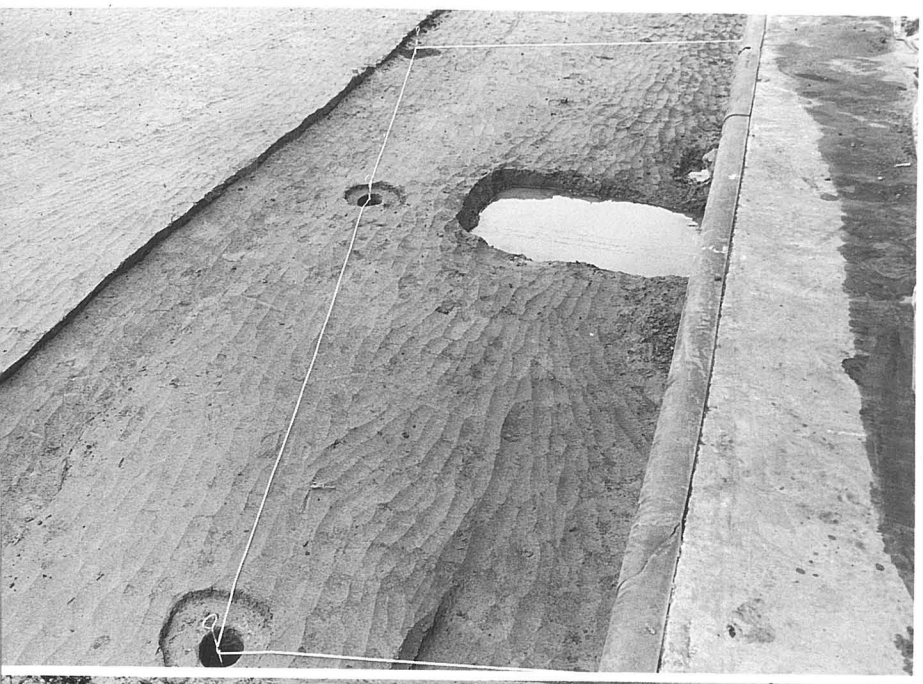
13　三筋壺出土状況





14　1号住居跡

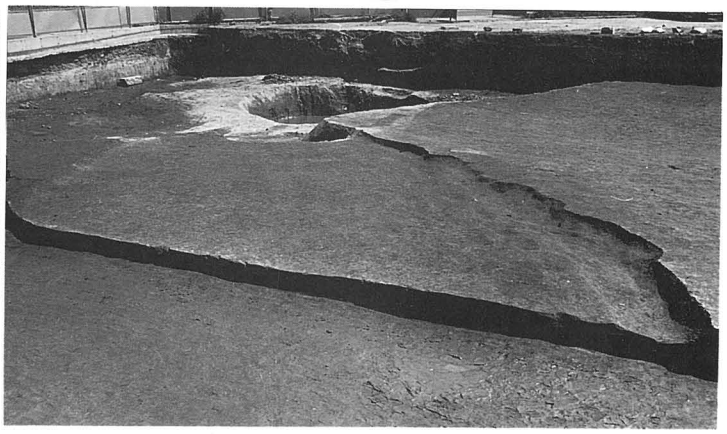
1．床面検出状況（西より）
2．掘り方完掘状況（北より）
3．遺物出土状況
4．遺物出土状況



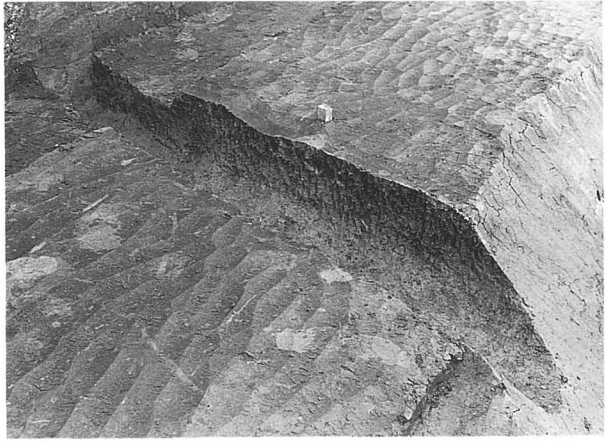
15　Ⅴ層上面建物跡
（北東より）

16　3～11号土坑
（東より）

17　1号土坑（南より）

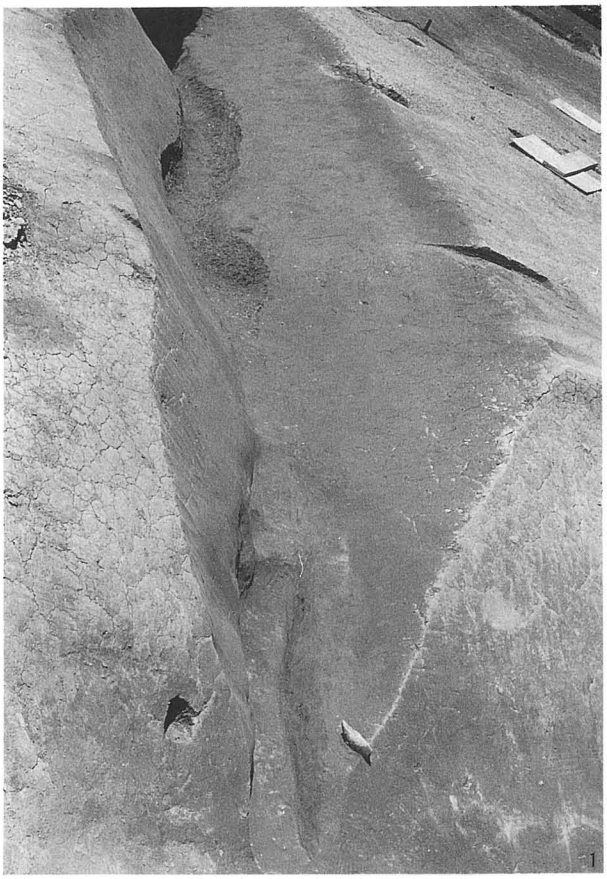


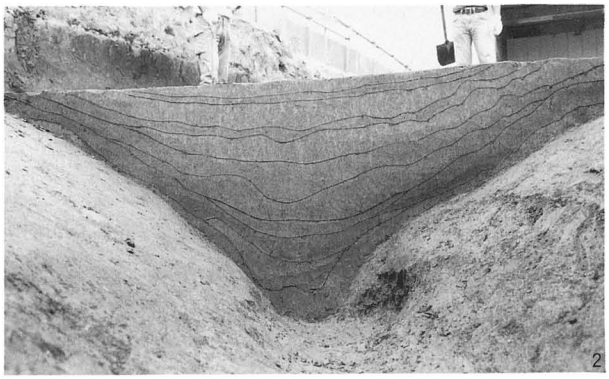
18　1号溝跡（北より）



19　3号溝跡（南西より）

20　4号溝跡（北より）





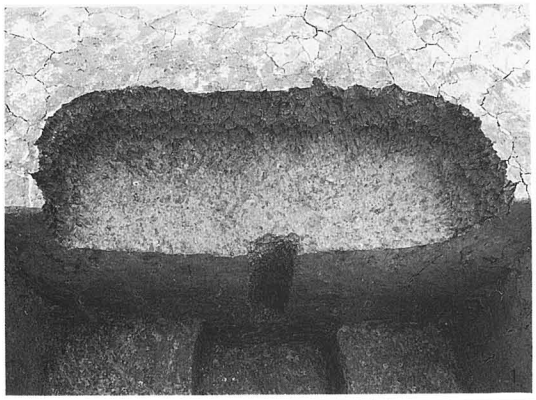
21　5号溝跡　1．全景（南東より）
　　2．断面（南東より）

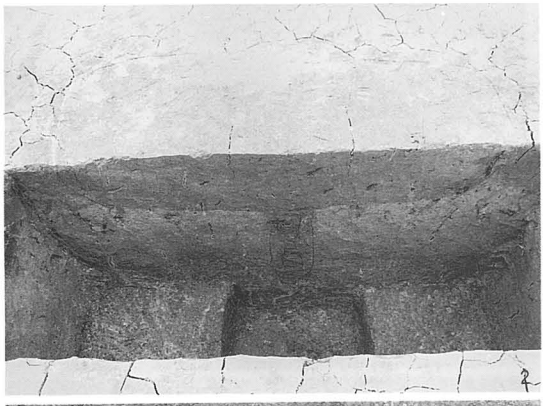
22　6号溝跡　3．全景（南より）
　　4．全景（南東より）

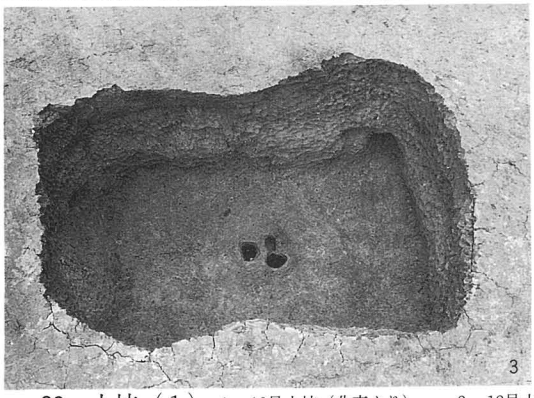
23　Ⅻ層上面検出土坑群（北より）

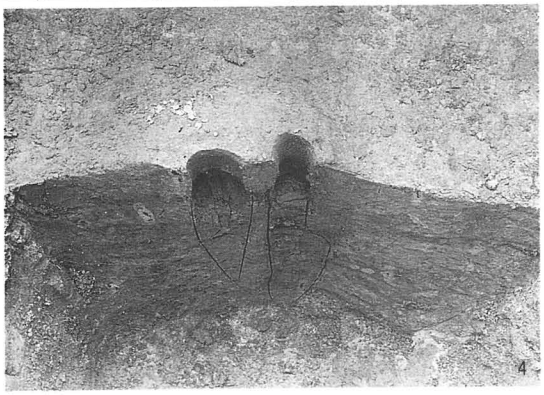
24　Ⅻ層上面検出土坑群（北東より）

25　XII層上面検出土坑群（南より）

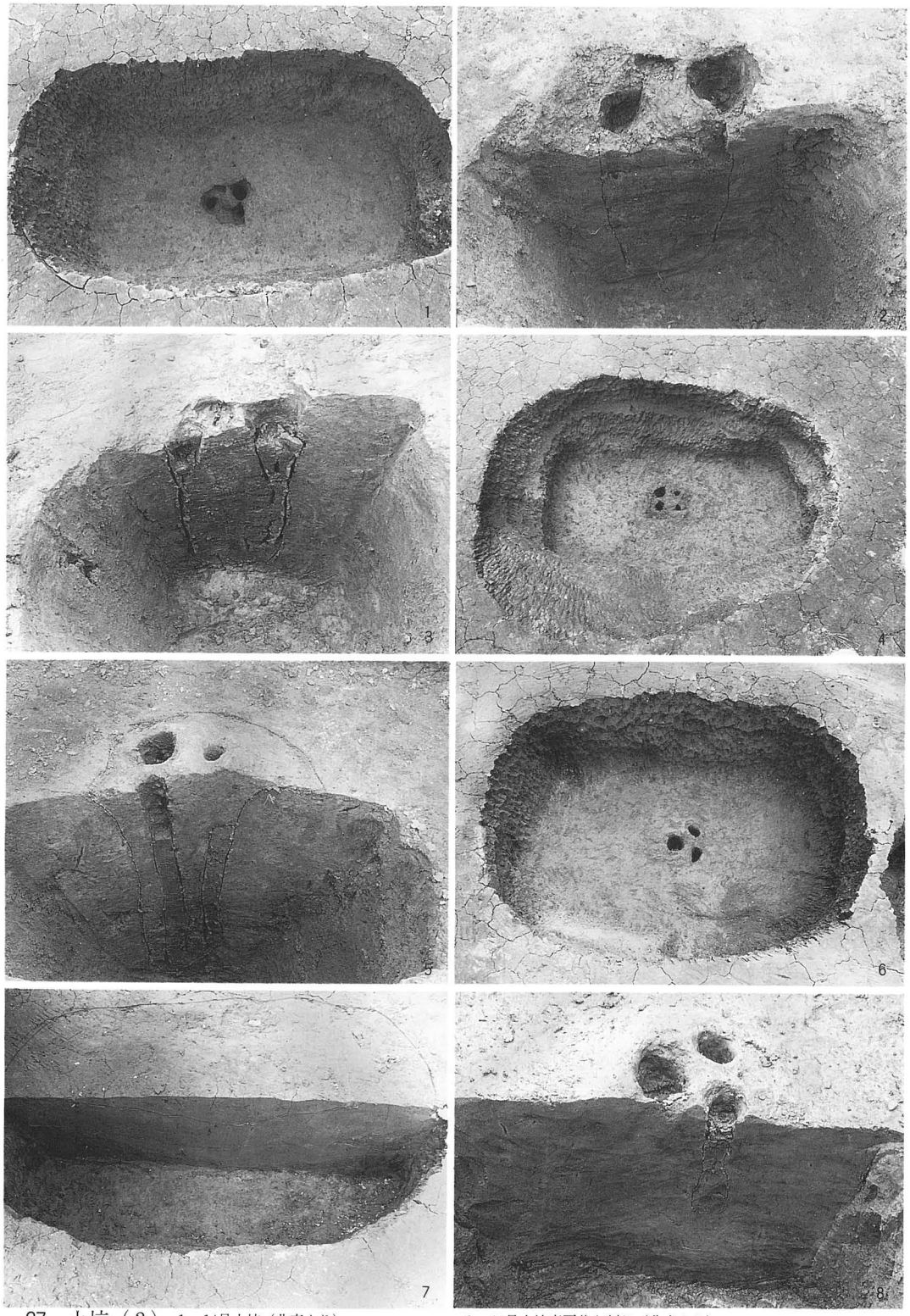




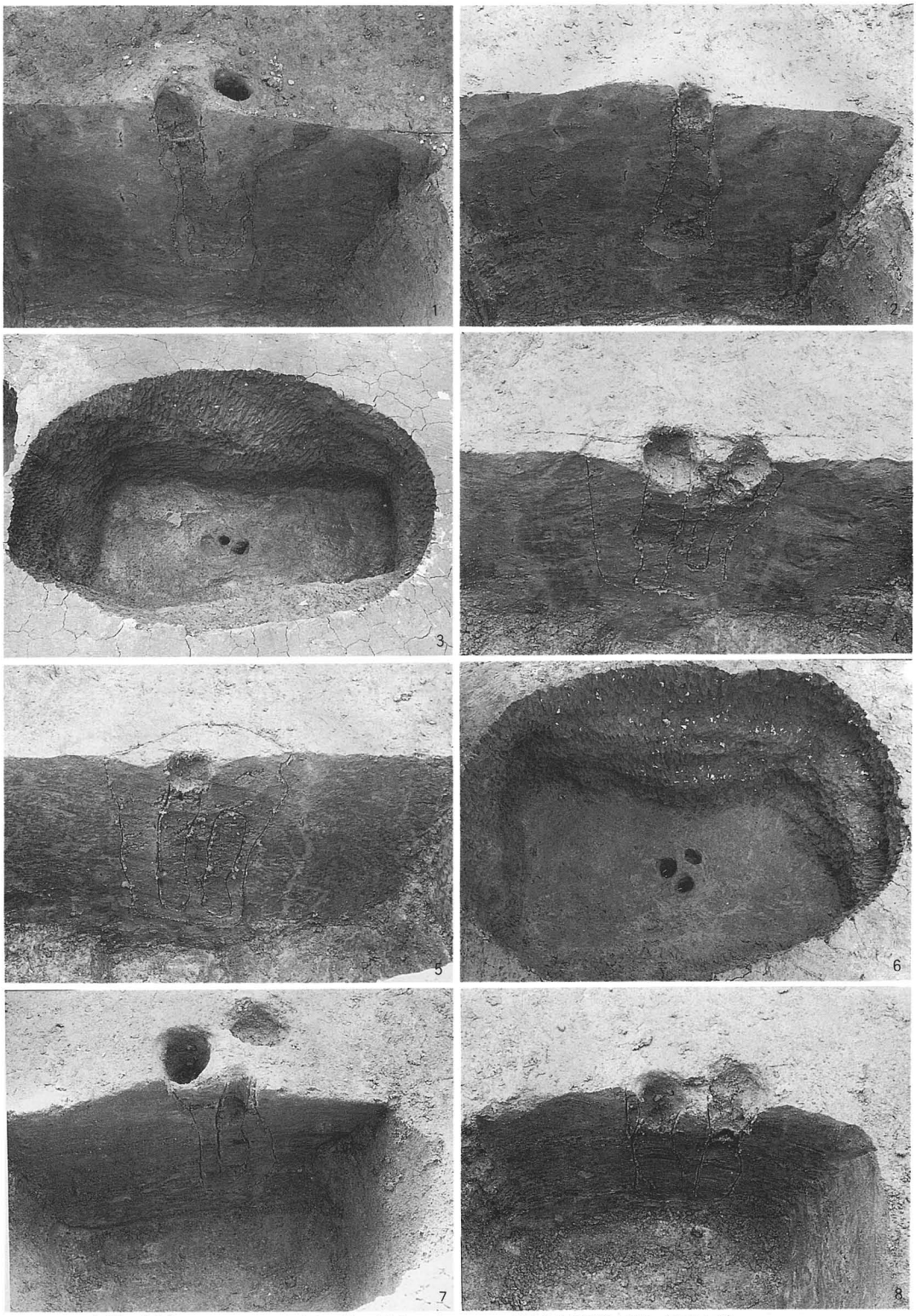




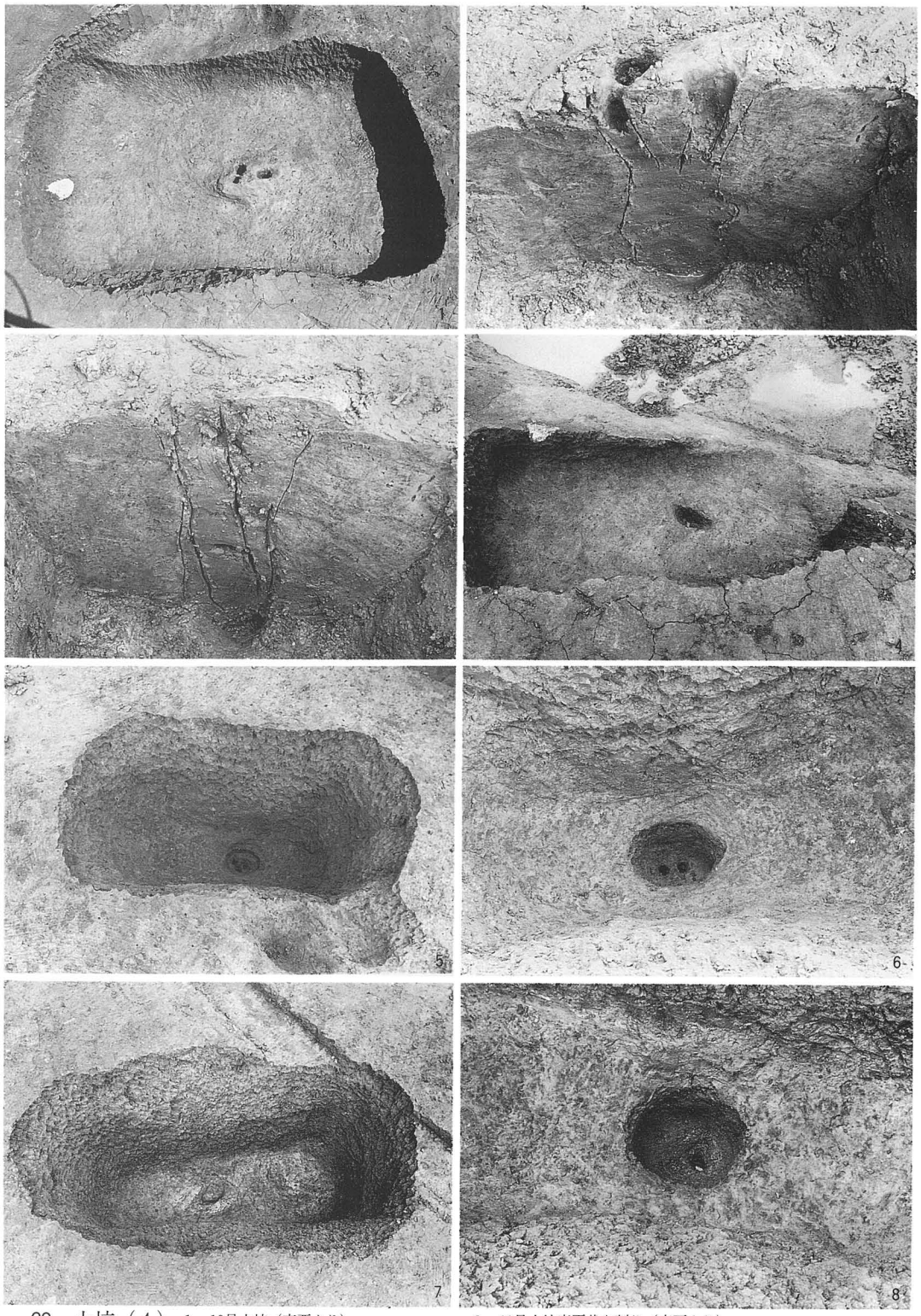
26　土坑（1）　1．12号土坑（北東より）　2．12号土坑断面（北東より）
3．13号土坑（北東より）　4．13号土坑底面截ち割り（北東より）



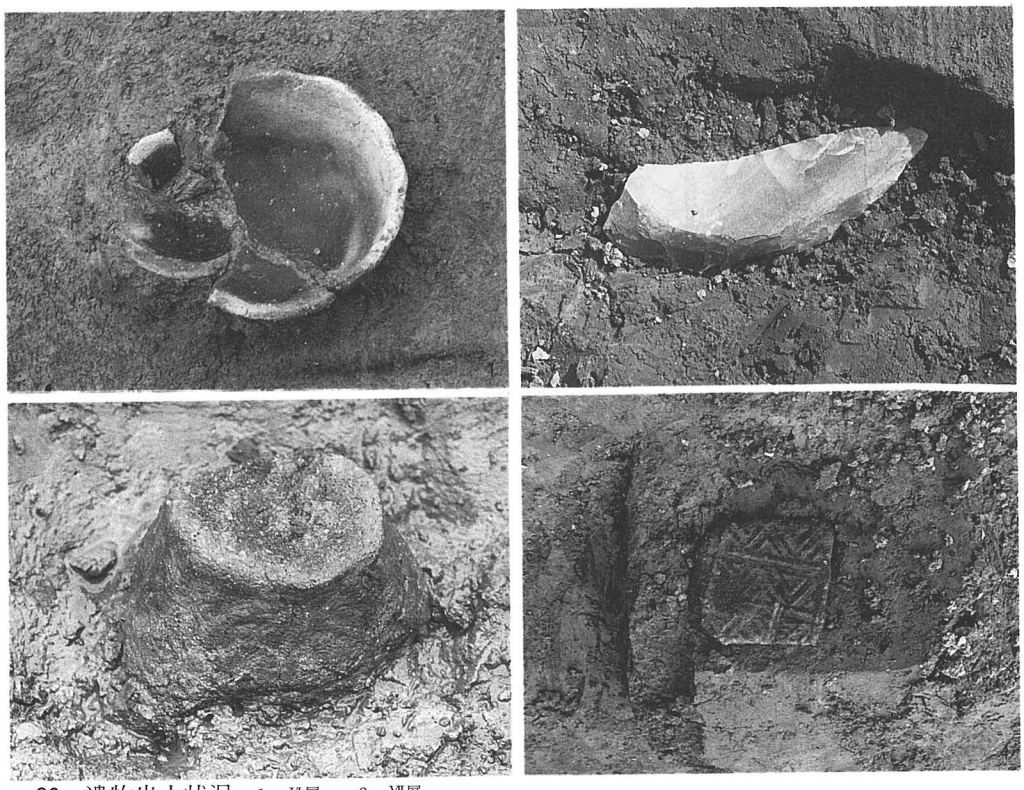
27　土坑（2）　1．14号土坑（北東より）　2．14号土坑底面截ち割り（北東より）
3．14号土坑底面截ち割り（北東より）　4．15号土坑（北東より）
5．15号土坑底面截ち割り（北東より）　6．16号土坑（北東より）
7．16号土坑断面（北東より）　8．16号土坑底面截ち割り（北東より）



28　土坑（3）　1．16号土坑底面截ち割り（北東より）　2．16号土坑底面截ち割り（北東より）
3．17号土坑（北東より）　4．17号土坑底面截ち割り（北東より）
5．17号土坑底面截ち割り（北東より）　6．18号土坑（北東より）
7．18号土坑底面截ち割り（北東より）　8．18号土坑底面截ち割り（北東より）

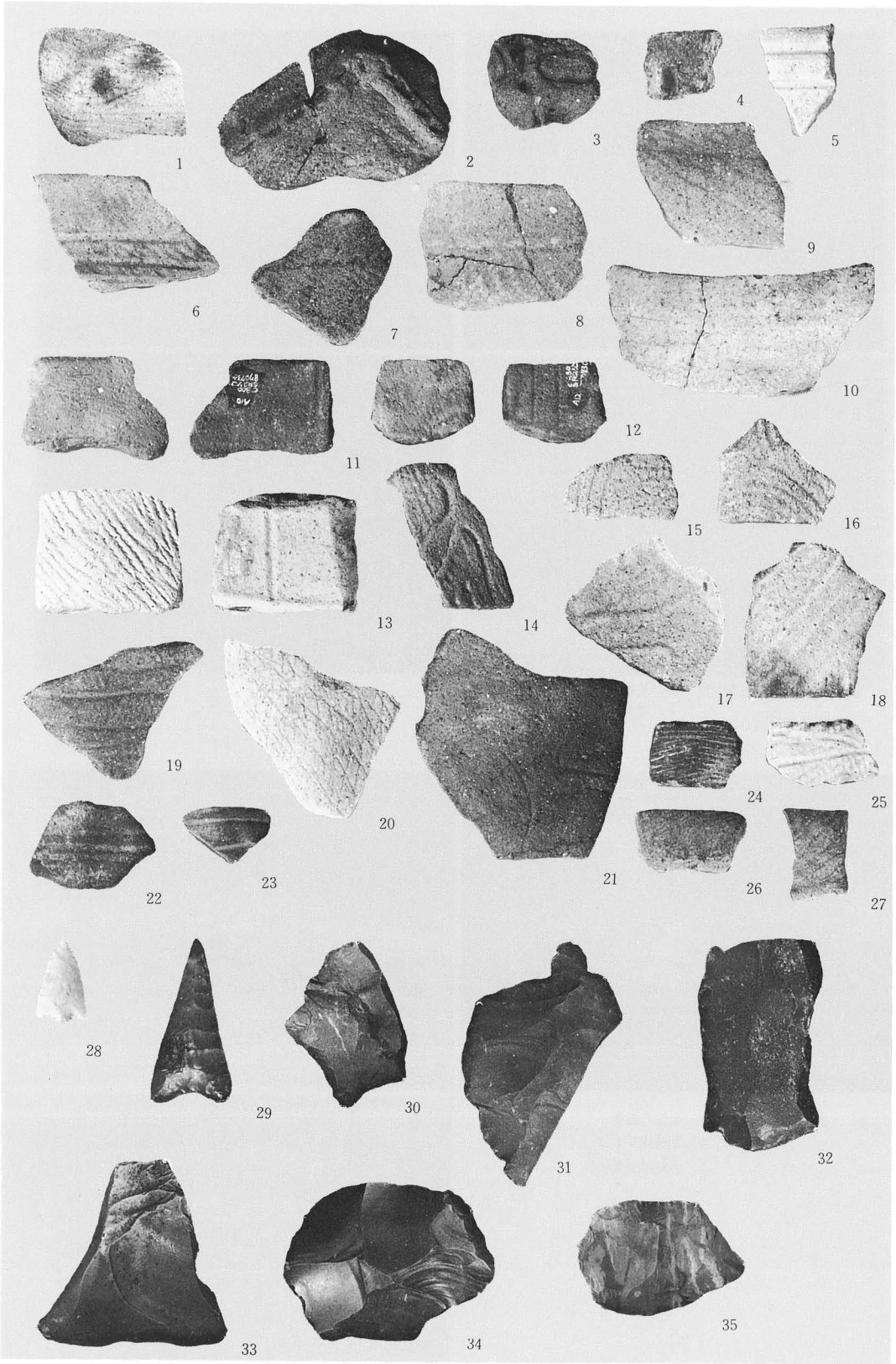


29　土坑（4）　1．19号土坑（南西より）　2．19号土坑底面截ち割り（南西より）
3．19号土坑底面截ち割り（南西より）　4．20号土坑（北西より）
5．21号土坑（北東より）　6．21号土坑底面（北東より）
7．22号土坑（北東より）　8．22号土坑底面（北東より）

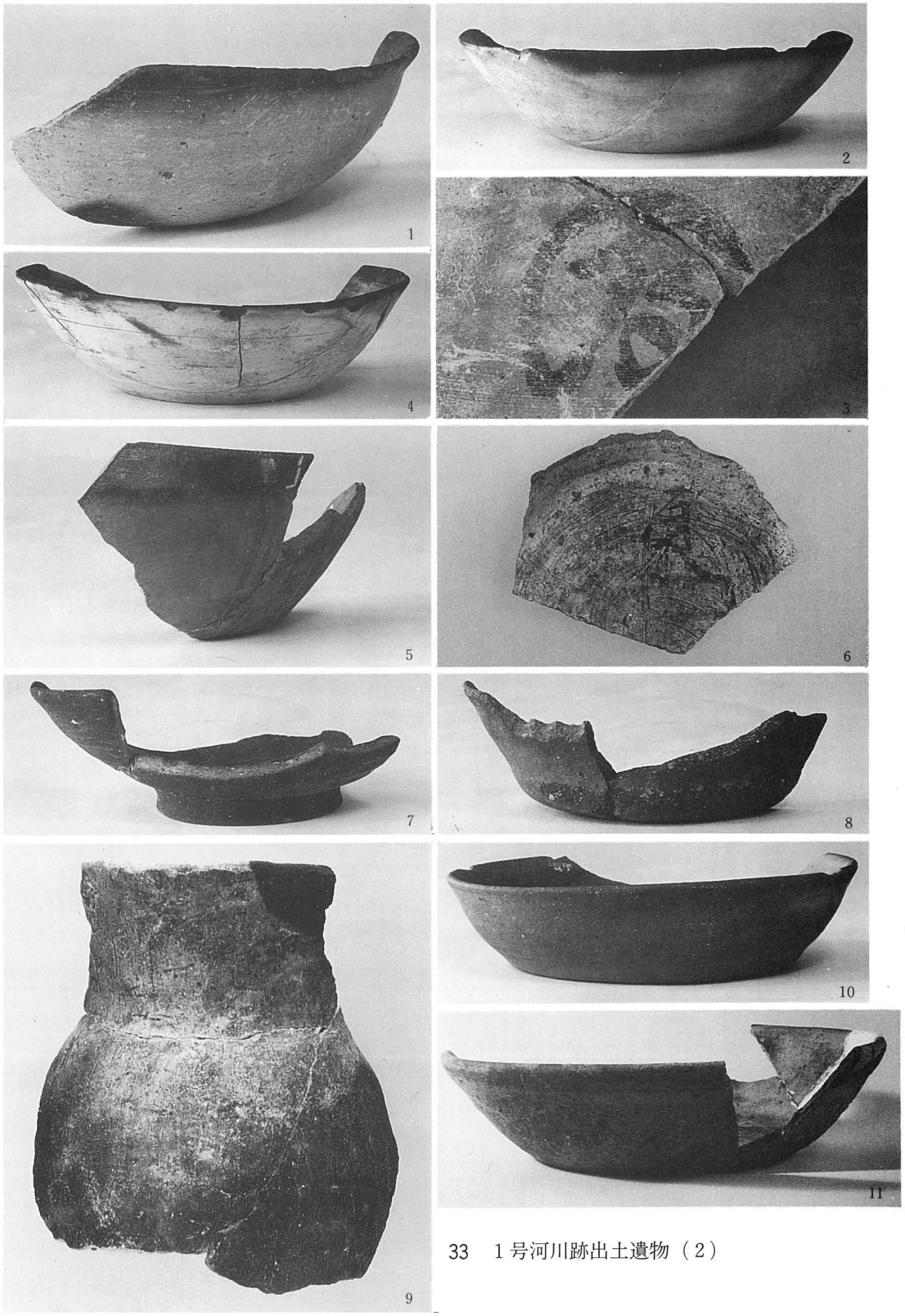


30　遺物出土状況　1．Ⅵ層　2．Ⅻ層
3．Ⅻ層　4．ⅩⅢ層

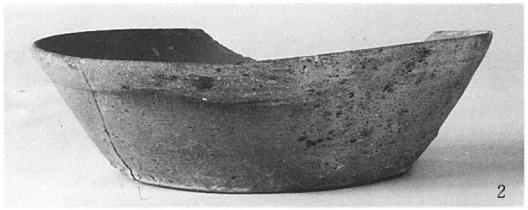
31　調査風景　1．土坑の調査
2．Ⅻ層掘り下げ
3．大野田小見学会

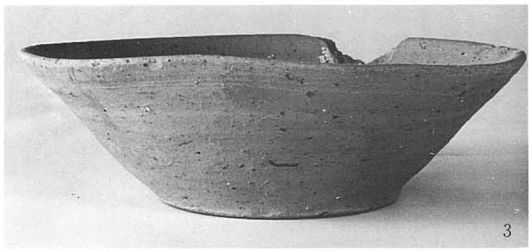


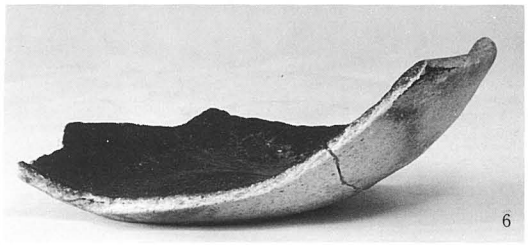
32　1号河川跡出土遺物（1）

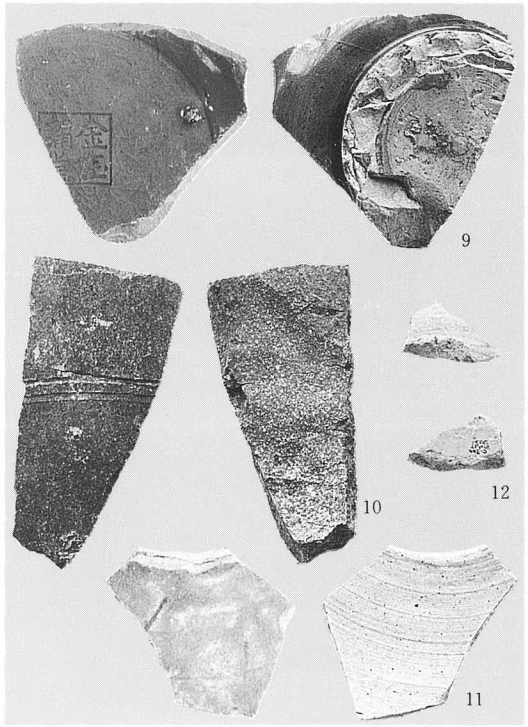


33　1号河川跡出土遺物（2）



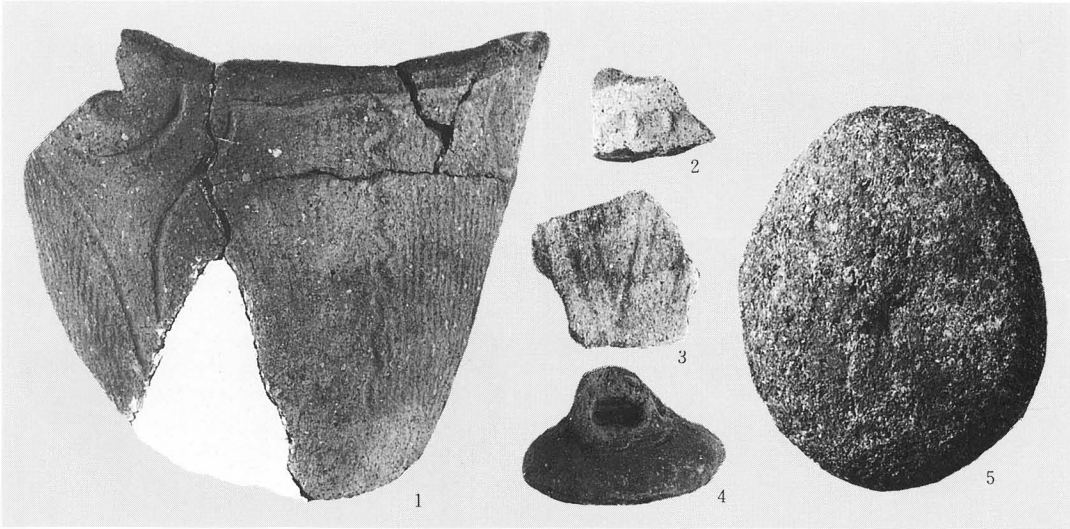


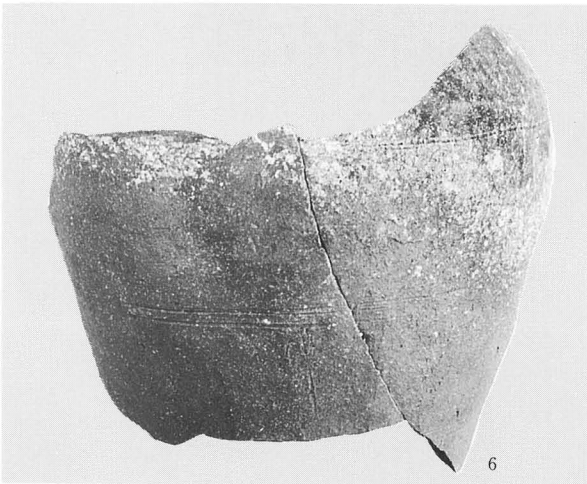


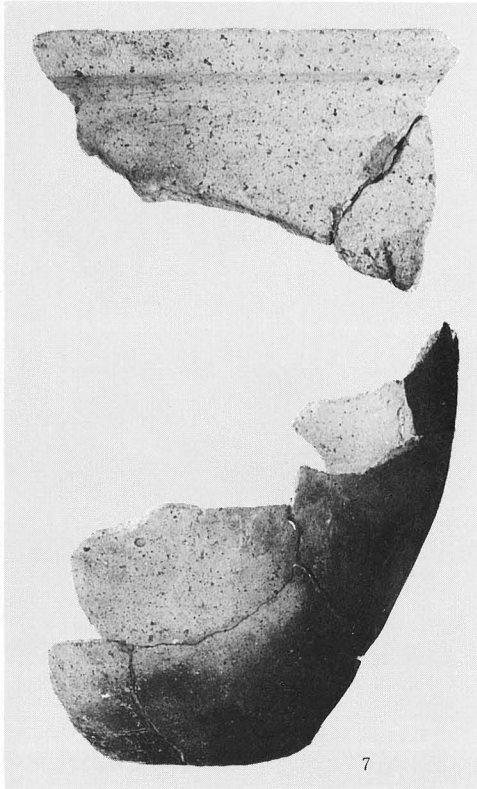


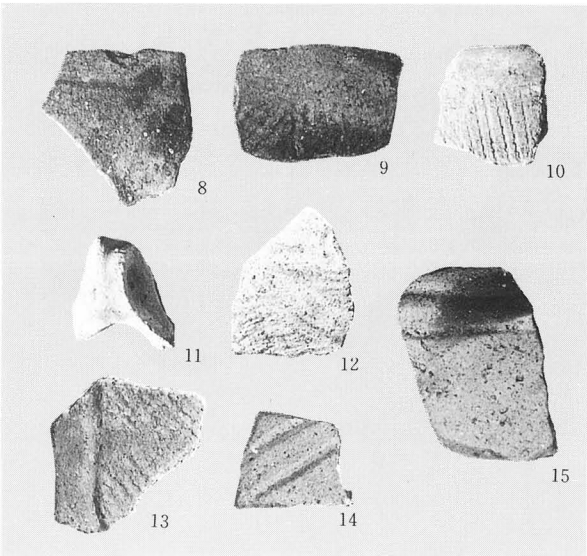
34　1号河川跡出土遺物（3）

11. 瀬戸　12. 志野

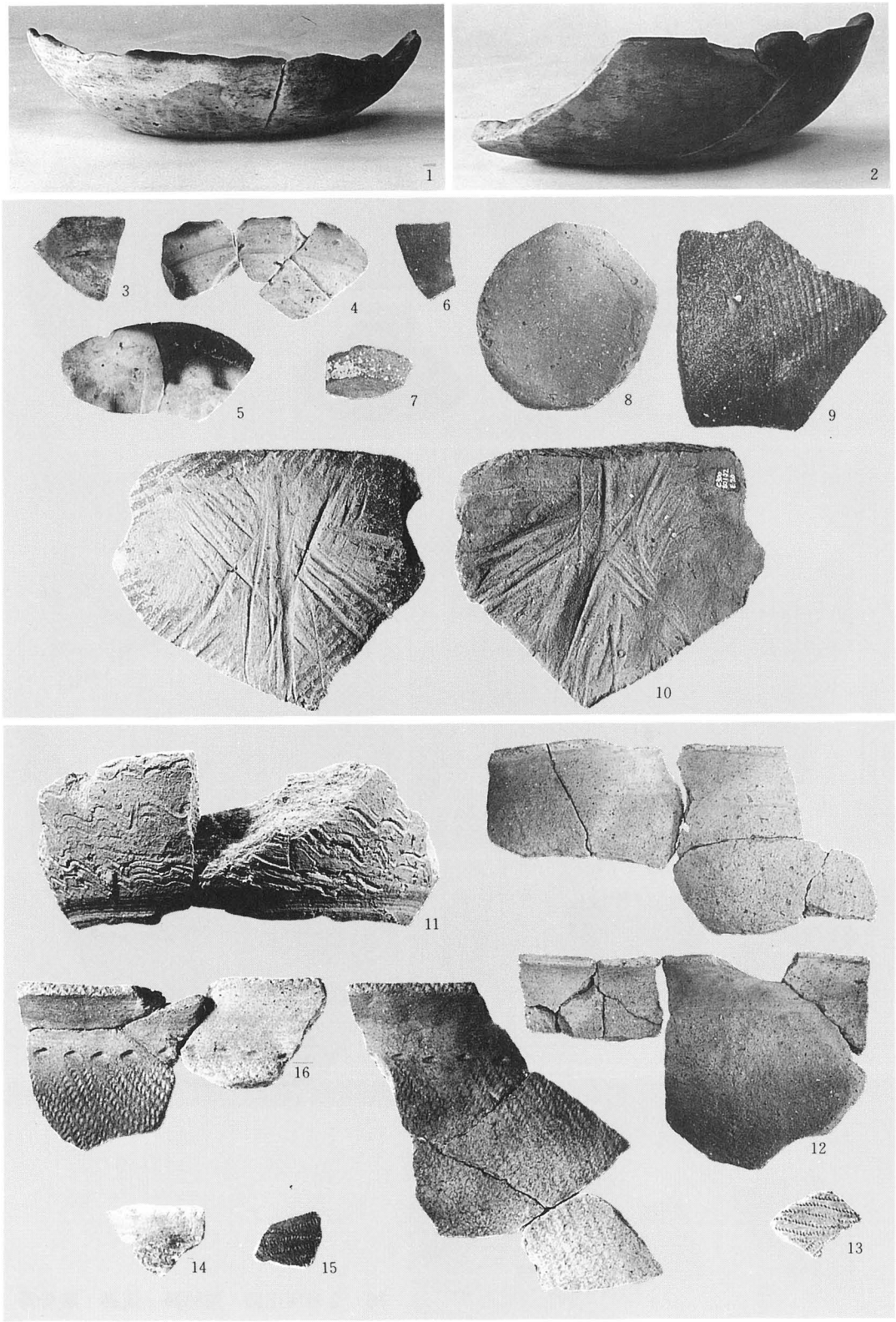




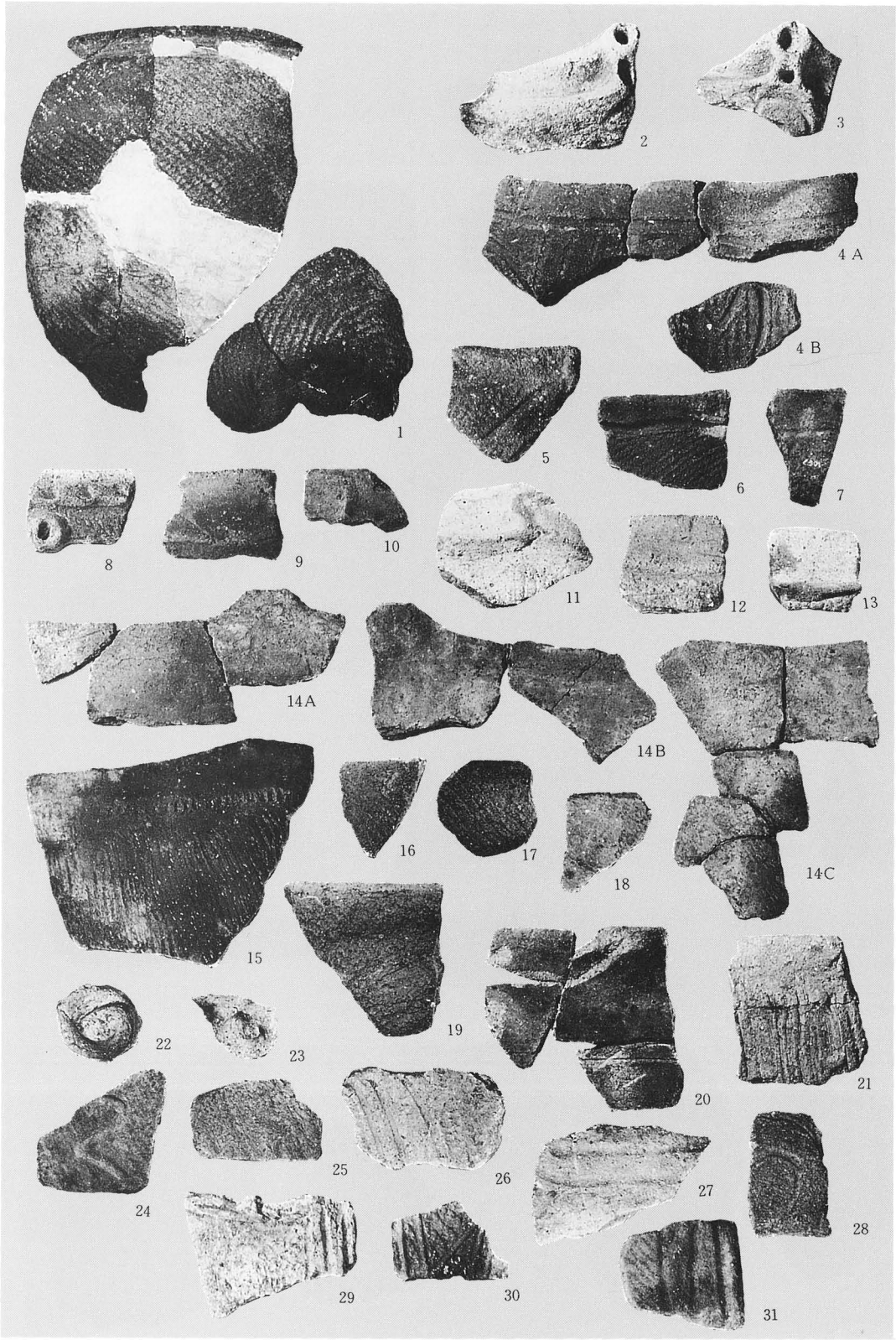




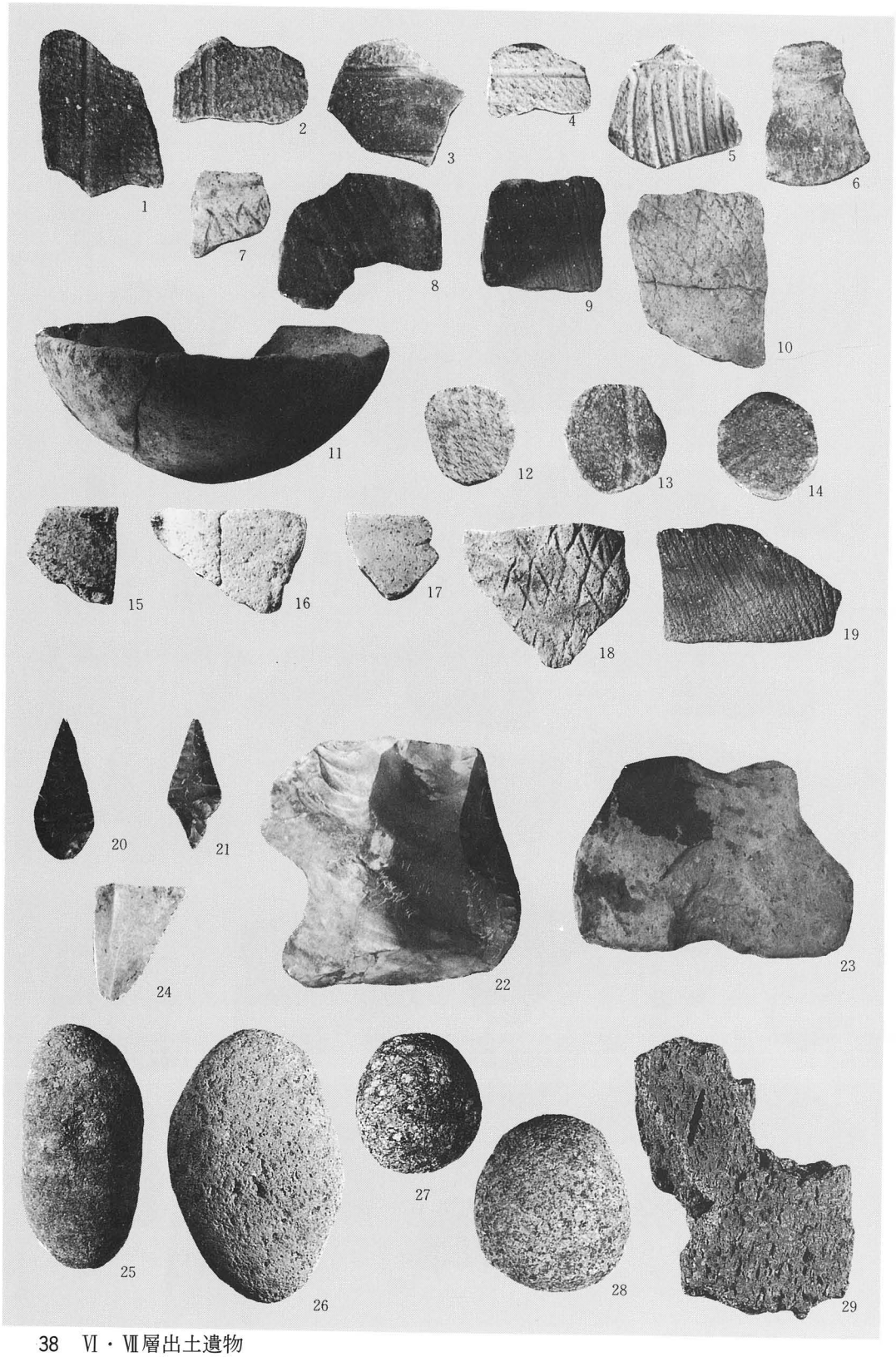
35　2号河川跡・建物跡・溝跡・蔵骨器



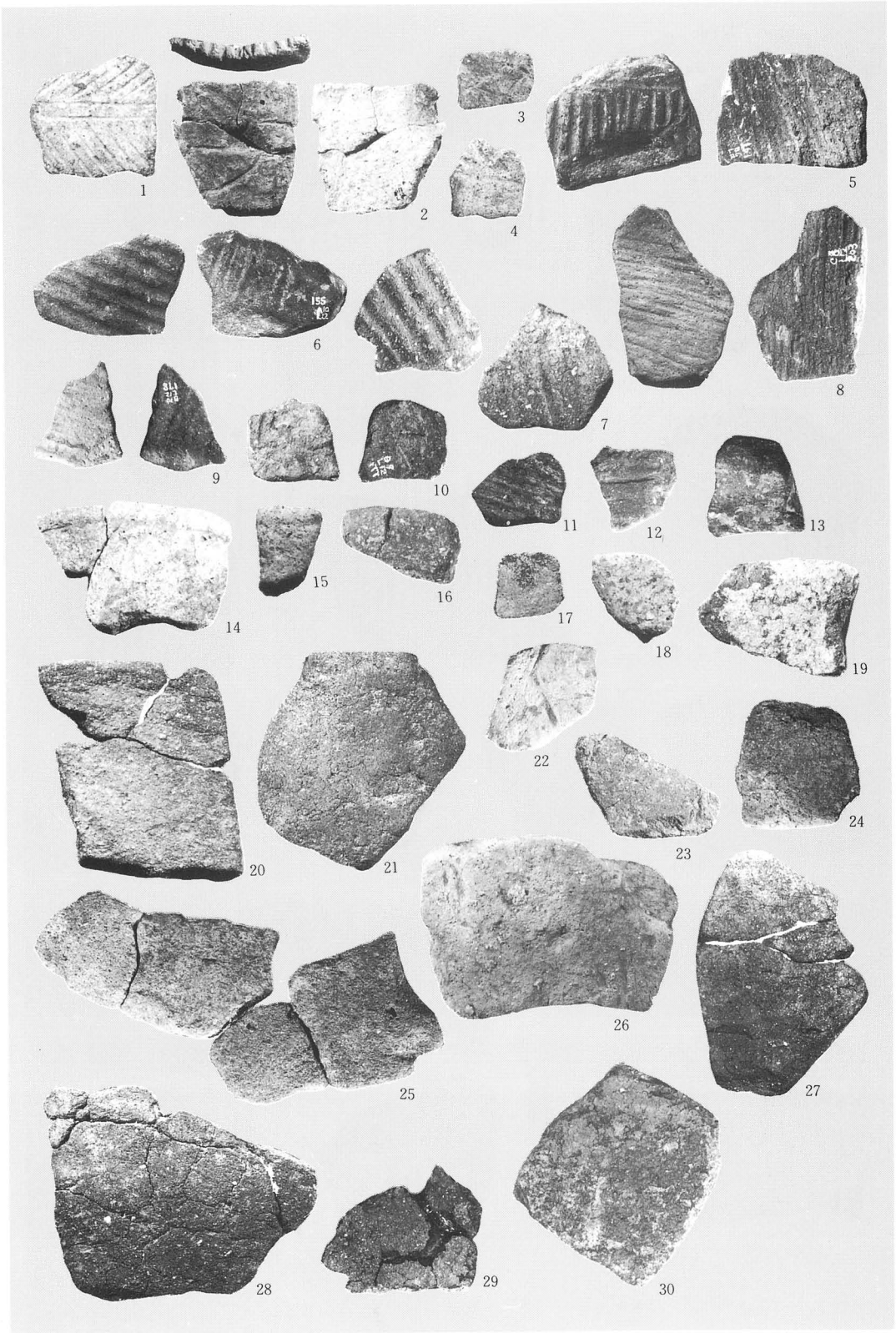
36　1号住居跡・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層出土遺物


1
2
3
4 A
4 B
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14A
14B
14C
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

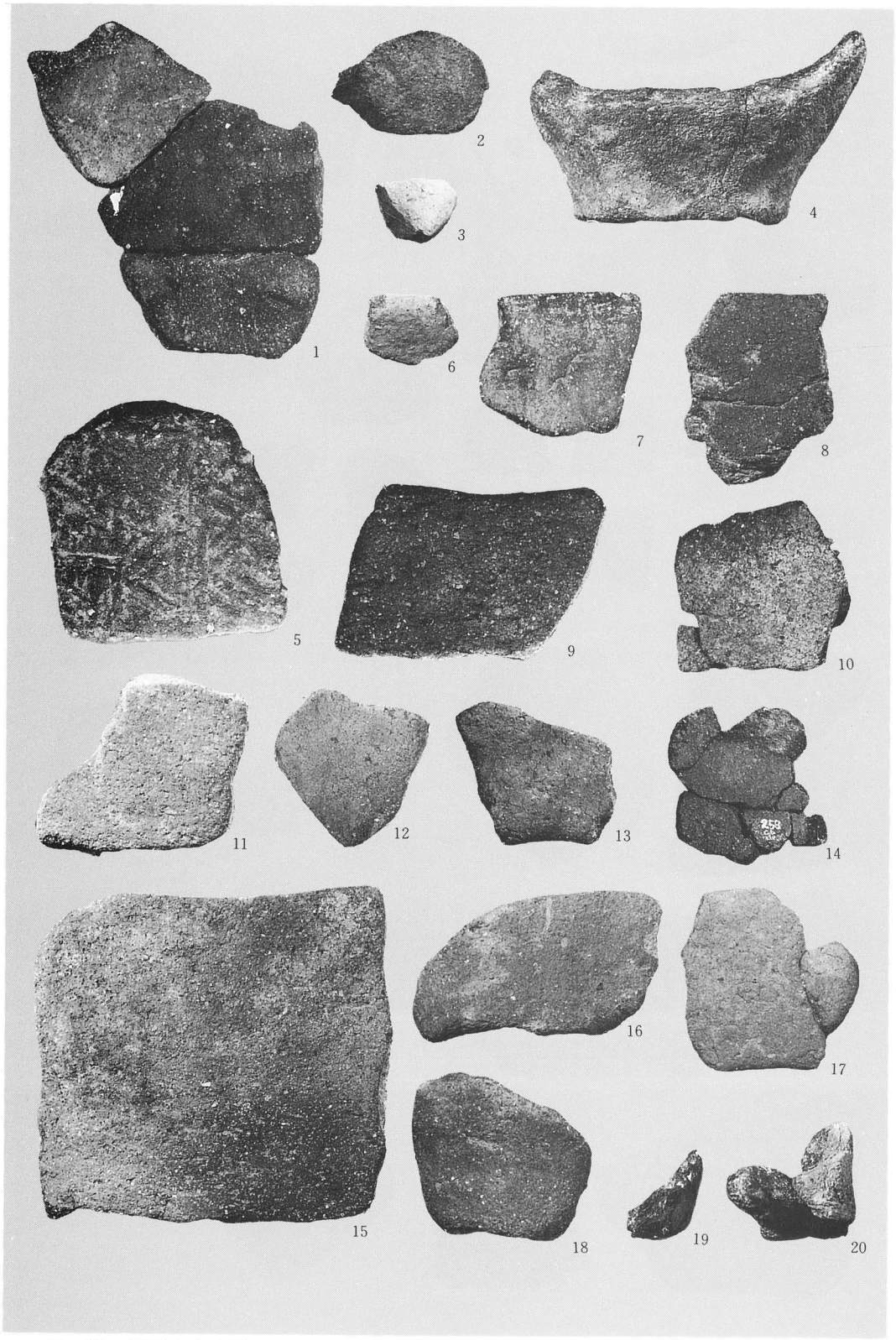
37　Ⅴ・Ⅵ層出土遺物



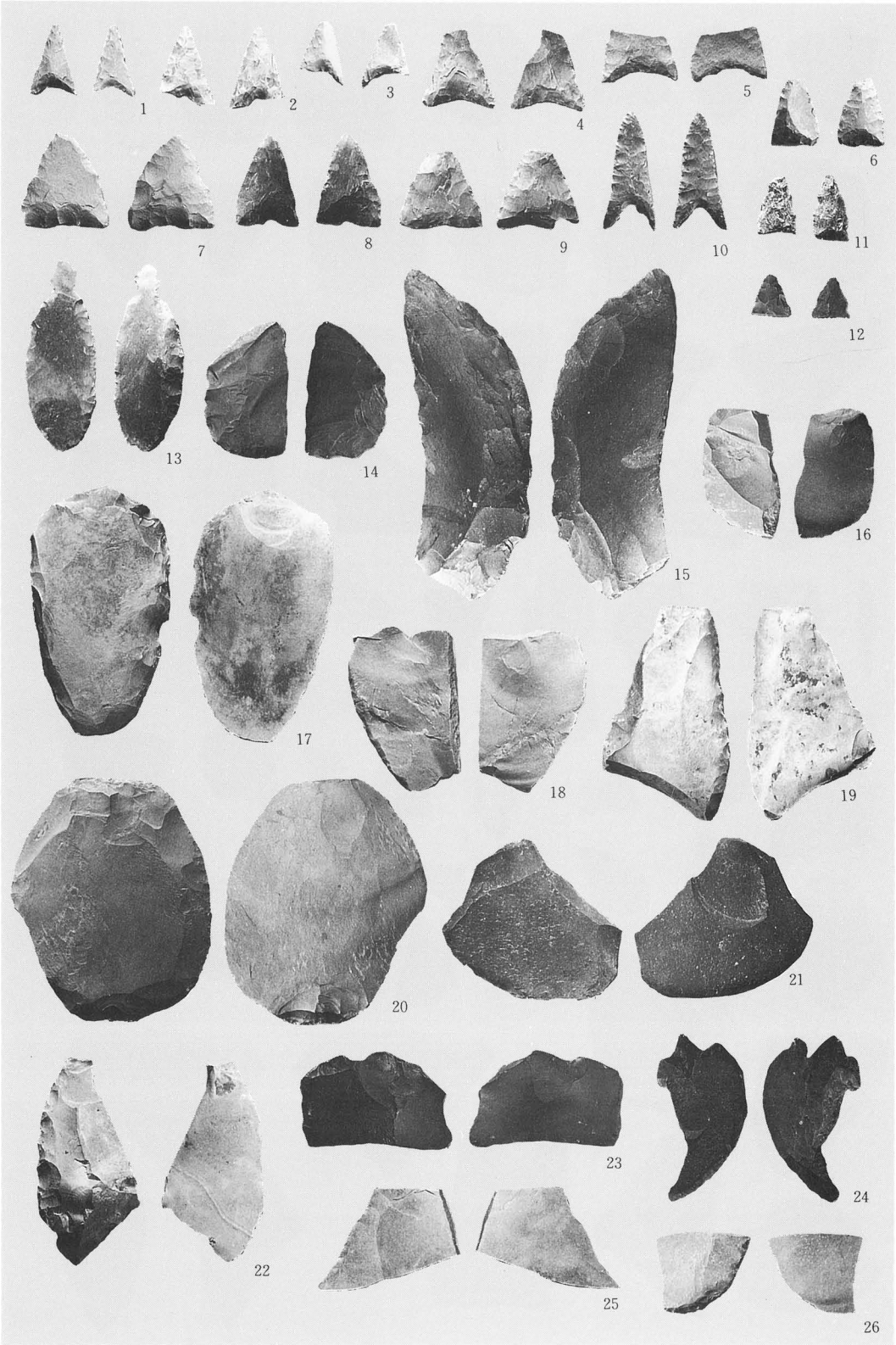
38　Ⅵ・Ⅶ層出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

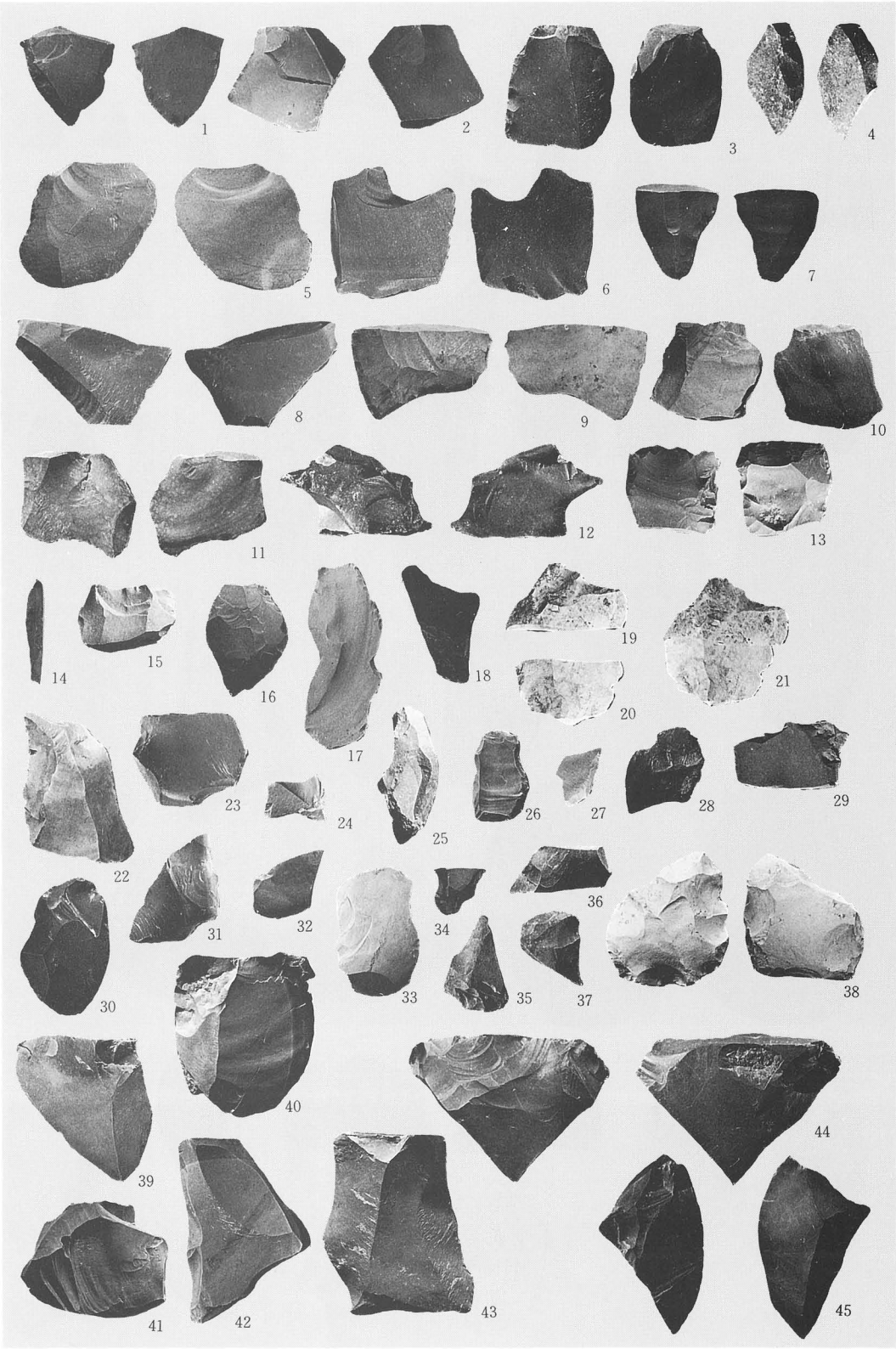
39　XII層出土土器



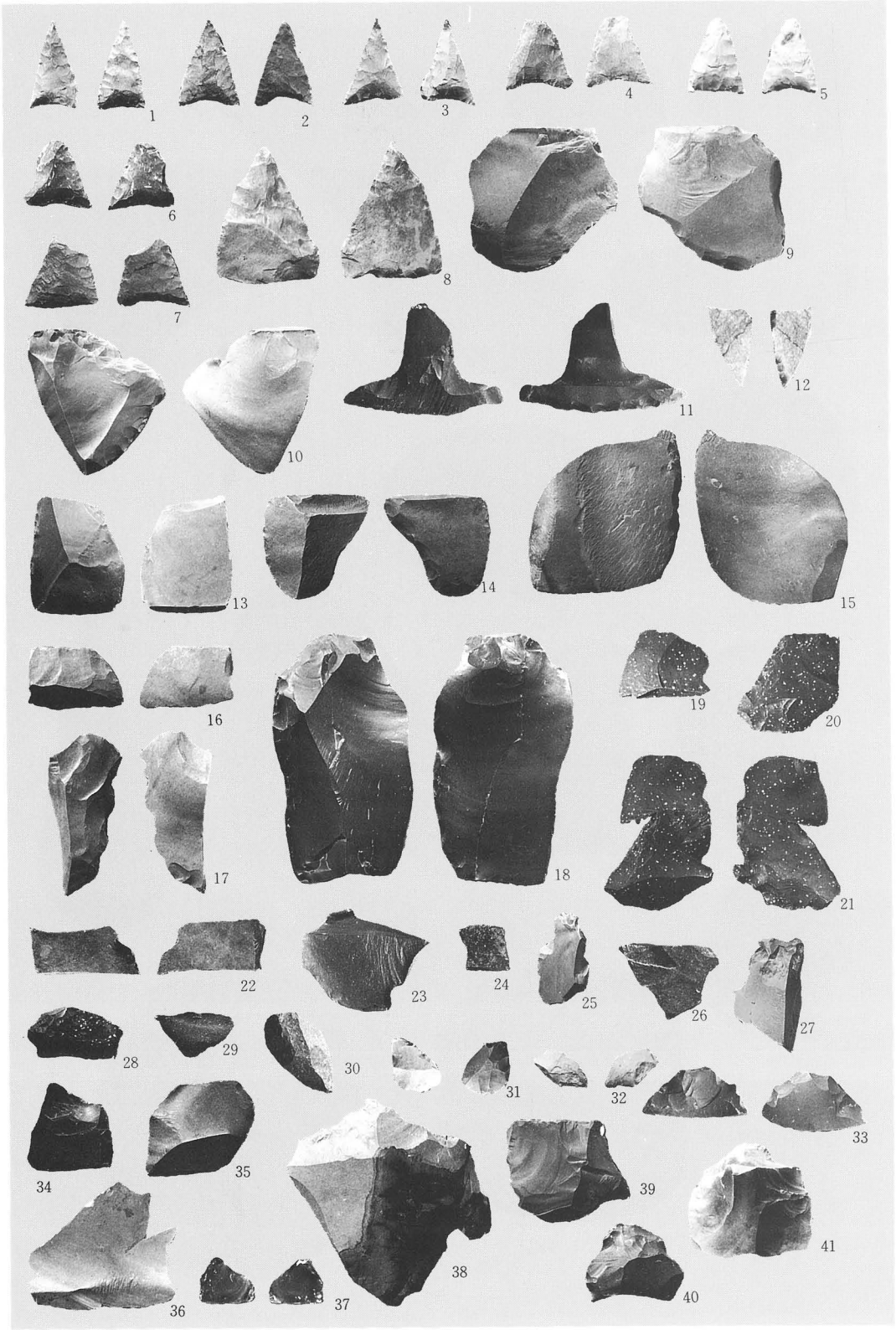
40　XII・XIII層出土土器



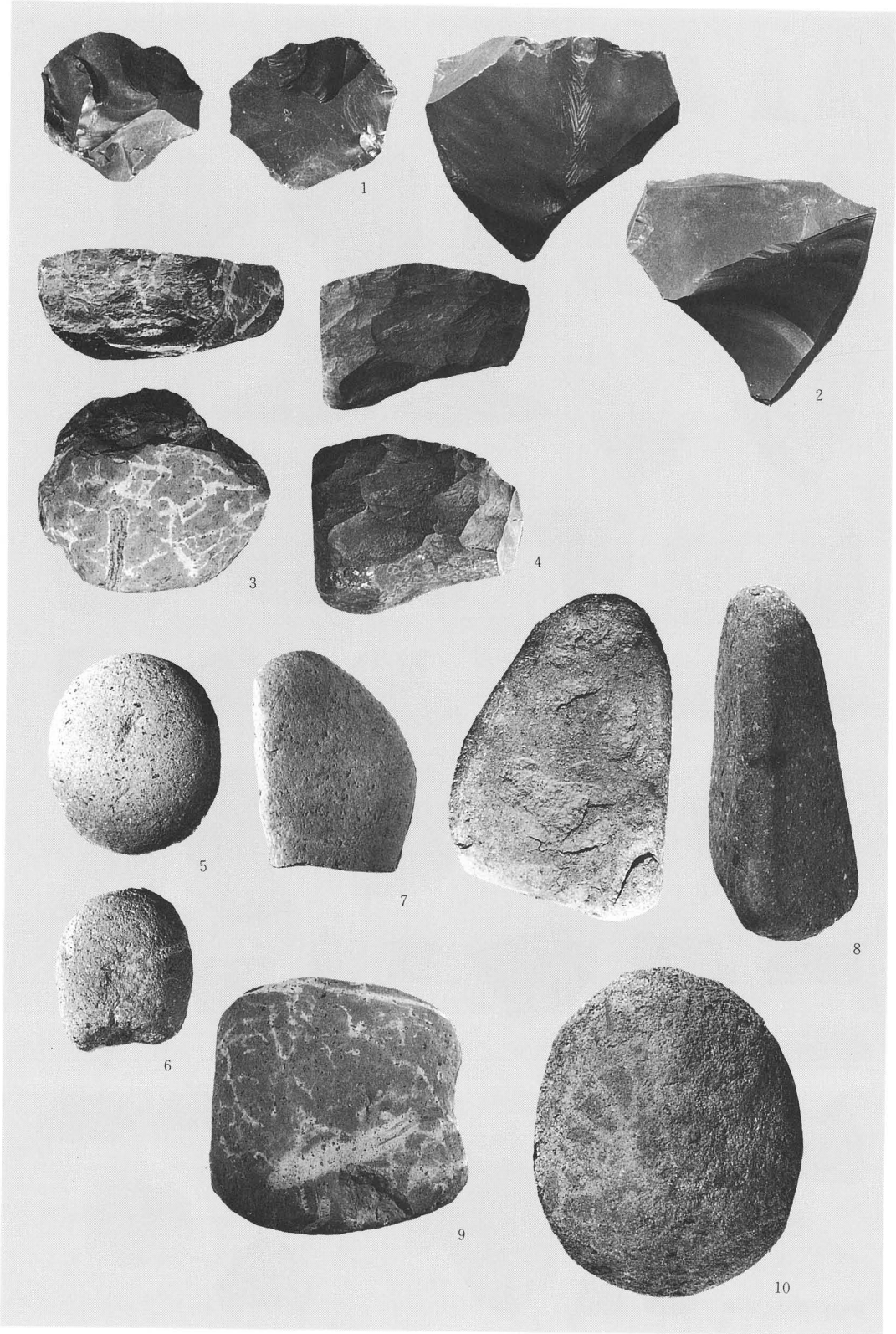
41　XII層出土剝片石器（1）



42　Ⅻ層出土剝片石器（2）



43　XIII層出土剥片石器



44　XII・XIII層出土石核・礫石器

45　土偶頭部

46　炭化穀粒
（P.85星川報告参照）

写真1
出土した炭化穀類

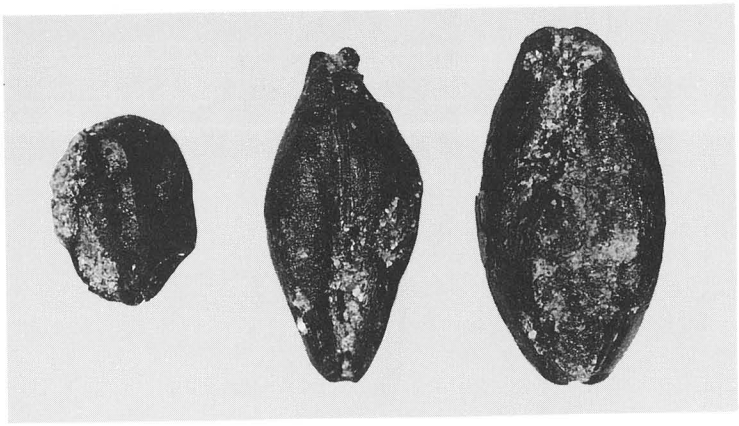
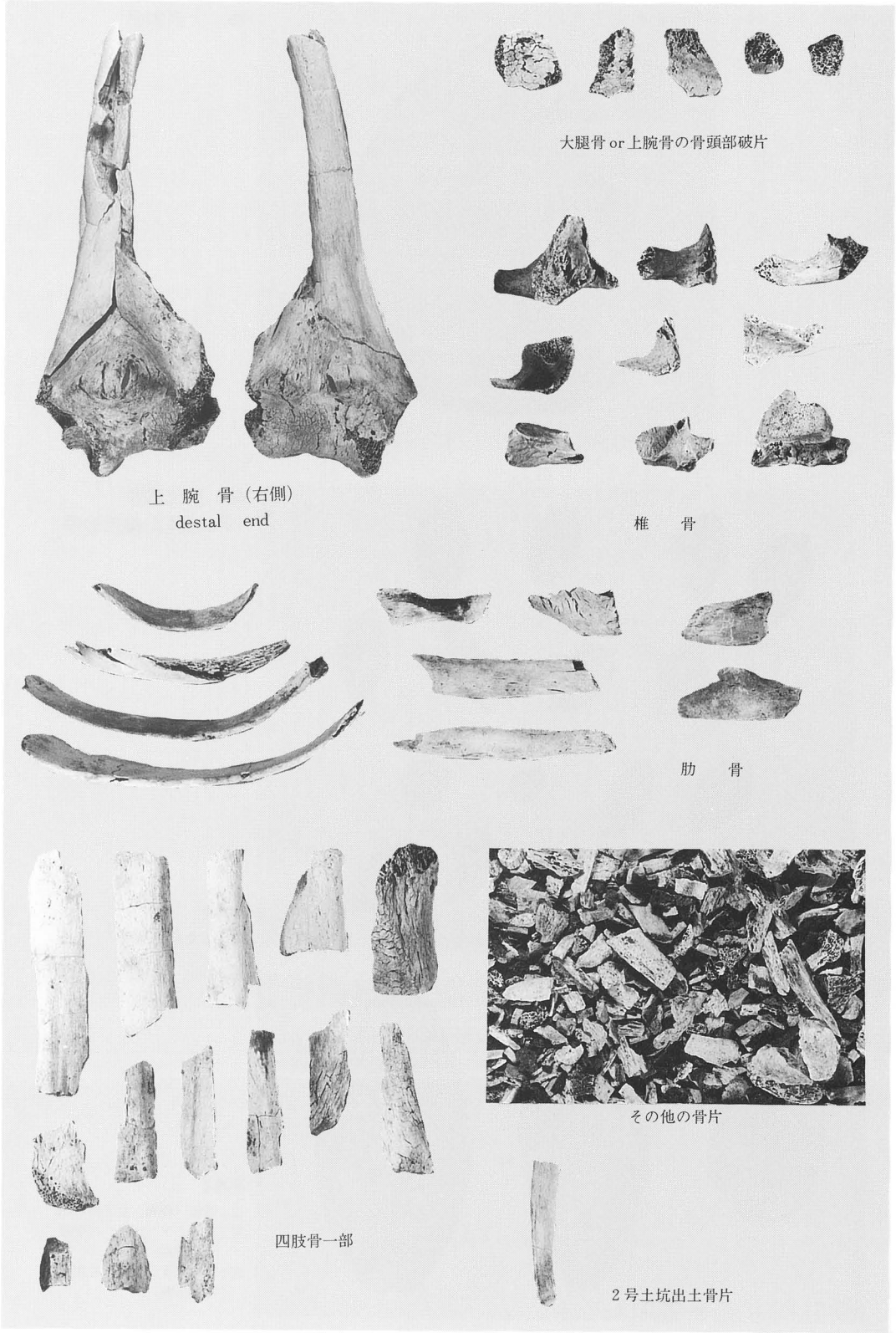


写真2
左：米粒（側面、左下部が胚）
中：オオムギ（皮麦）の背面
（縦溝面）
右：オオムギ（皮麦）の腹面、
下端が胚



47　火葬骨・2号土坑出土骨片

仙台市文化財調査報告書第115集

下ノ内浦遺跡

１９８８年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント
仙台市立町24-24　TEL　263-1166